

【更新凍結】 アリス転生 —in— りりなの

たこ焼き食べたいタコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【更新凍結】

まことに申し訳ありません。途中で何書いているのか、自身でもわからなくなってきました。また、何かの機会に別の形で書きたいとは思いますが、どうなるかわかりません。

一話10000〜20000字。

死んだ男が東方Projectのアリス・マーガトロイドに生まれ変わって、『魔法少女リリカルなのは』の世界で生きる。そんな話です。

ノープロットなので、矛盾とか違和感とか多いと思います。それでもいいよって方は読んでください。

至らない点が多いと思いますが、最後まで読んでいただけたら、幸いです。

目次

第一章第一節 古代ベルカーガリア地域篇

プロローグ	神様転生	1
第一話	起床	3
第二話	ガリア	5
第三話	ベルカ戦争	7
第四話	能力	9
第五話	リンカーコア	12
第六話	魔法	14
第七話	聖王家	17
第八話	屋敷	19
第九話	イクスヴェリア	21
第十話	領民	23
第11話	人形	25
第12話	ローザミステイカ	27
第13話	黄金鍊成	29
第14話	人間	32
第15話	捕虜	34
第16話	強襲	36
第17話	戦闘	38
第18話	夢	40
第19話	ガレア	42
第20話	これからのことを考えて	45
第一章第二節 古代ベルカーガレア王国篇	—甲—	
プロローグ	人形師アリス	47

第一話	水銀燈	49
第二話	転生特典	52
第三話	理由	54
第四話	訓練	57
第五話	兵器	59
第六話	国境	62
第七話	転生者	64
第八話	逃走	66
第九話	急行	68
第十話	追跡	70
第11話	潜入	72
第12話	狂気	74
第13話	弾幕ごっこ	76
第14話	逃さない	78
第15話	作戦会議	80
第16話	修復	82
第17話	勝算	84
第18話	レーヴァテイン	86
第19話	弱点	88
第20話	勝敗	90
第一章第三節 古代ベルカーガレア王国篇 —乙—		
プロローグ	金糸雀	92
第一話	剣	94
第二話	原作	96
第三話	久しぶりの	98

第四話	個性	100
第五話	弱き者の味方	102
第六話	行方	104
第七話	演技	106
第八話	日本刀	108
第九話	斬撃	110
第十話	会議	112
第11話	提案	115
第12話	一対一	117
第13話	古明地こいし	119
第14話	クラップスタナー	121
第15話	事情	124
第16話	人体実験	126
第17話	和解	128
第18話	戦略兵器	130
第19話	別れ	132
第20話	集まり	134
第一章第四節 古代ベルカーガレア王国篇 ―丙―		
プロローグ 雪華綺晶		
第一話	ガレア魔法図書	136
第二話	人体複製	141
第三話	ジエイル・スカリエツティ	144
第四話	仲直り	146
第五話	救援要請	148
第六話	アリス同行の謎	150

第七話	シユトウラ	152
第八話	戦場へ	154
第九話	戦場で	156
第十話	戦場から	158
第11話	原型	160
第12話	謝罪	162
第13話	帰国	164
第14話	宰相	166
第15話	書斎	168
第16話	改造	170
第17話	破滅への道	172
第18話	友人	174
第19話	研究メモ	177
第20話	お礼	179
第一章第五節 古代ベルカーガレア王国篇 —丁—		
プロローグ	翠星石	181
第一話	噂	183
第二話	前世	185
第三話	選別	187
第四話	考察	189
第五話	直訴	192
第六話	考察Ⅱ	194
第七話	考察Ⅲ	196
第八話	南部	198
第九話	マリアージュ	200

第十話	徹夜	202
第11話	敵襲	204
第12話	ヴォルケンリッター	206
第13話	人形遣いアリス	208
第14話	囧	210
第15話	裏切り	212
第16話	境界	214
第17話	交渉	216
第18話	決裂	218
第19話	知る権利	220
第20話	覚醒	222
第一章第六節 古代ベルカーガレア滅亡篇 — 前 —		
プロローグ 破滅		
第一話	別離	226
第二話	亡命	228
第三話	修復の見込み	230
第四話	本拠地	232
第五話	寒村	234
第六話	同居人	236
第七話	再会	238
第八話	事情	240
第九話	協力	242
第十話	方向	244
第11話	道中	246
第12話	闇の書	248

第13話	神殺しの計画	250
第14話	秦こころ	252
第15話	古代禁忌遺産	254
第16話	くだらない話	256
第17話	妖怪の賢者	258
第18話	接戦	260
第19話	身代わり人形	262
第20話	埋葬	264
エピソード	質問	267
第一章第七節 古代ベルカ―ガレア滅亡篇 ―後―		
プロローグ	大軍	269
第一話	要塞	272
第二話	失念	274
第三話	作戦	276
第四話	昨日の敵	278
第五話	戦術	280
第六話	非殺傷設定	282
第七話	デバイス	284
第八話	切り替え	286
第九話	役割分担	288
第十話	前線	290
第11話	詠唱	292
第12話	古明地こいしは裏切者なのか？	294
第13話	洗脳	296
第14話	時間稼ぎ	298

第15話	勧誘	300
第16話	処遇	302
第17話	対話	304
第18話	親友	307
第19話	人形 vs 人形	309
第20話	冬景色	311
エピローグ	八雲紫	313
第一章第八節	古代ベルカ―ベルカ滅亡篇―上―	
プロローグ	聖王同盟	315

第一章第一節 古代ベルカーガリア地域篇 プロローグ 神様転生

「というわけで、転生していただくのです」

神は彼にそんなことを言った。彼は納得しなかったが、拒否権がないことも理解していた。

「まあ、こちらの事情で転生してもらうのですから、やはり転生特典なるものを3つ授けようと思うのです」

神は言った。彼は何かを言いたかったが、言葉を発することができない。神の言いたい放題だ。

「一つは東方Projectのアリス・マーガトロイドの容姿と能力」
転生特典も神が決めるらしい。

「二つ目はローゼンメイデンのローゼンの能力」
勝手に決めていく神。

「そして、最後は……『戦姫絶唱シンフォギア』のキャラル・マールス・ディーンハイムの能力、でいいや、なのです」

最後、トンデモナイモノを選んだ神。世界を滅ぼそうとしたやつ
の能力とかチート。

「それじゃ、行ってらっしゃい。転生する世界はこちらで決めておく
ね、なのです。それと、転生特典は転生する世界に合わせて細かいと
ころは適用されるからそのところもよろしく、なのです」

そうして、彼の意識は途切れた。

目覚めれば森の中。近くに『グリモワール・オブ・アリス』という
題の本。立ち上がって服装を見れば水色吊りスカート。
(アリスはアリスでも、ロリスの方でしたあゝ……)

とりあえず、本を拾って適当に歩く。状況整理の前に落ち着ける場
所に行く必要がある。前世の日本でも森はクマが出る。安全とは言
い難い。

そんなことを思っていると、草むらからかき分ける音。戦闘態勢。

唯一の武器、本。それを構える。まるで滑稽。しかし真剣。

臨戦態勢にも関わらず、出てきたのは一人の女の子。その少女が言う。

助けて、と。

その言葉とともに、三人の黒影。得物を持っている。その刃は少女へと向かった。

アリスは動いた。少女を突き飛ばす。三つの刃物がアリスを貫く。転がるアリス。黒影は油断なく見据える。少女と奴らの間にアリスはいた。

熱い、痛い。肺がやられたのか、苦しい。アリスは何もできない。痛さで思考が止まる。地面に伏せたまま。

呻くアリスを確認して、黒影が動く。狙いは少女。

(あ、そう言えば……)

アリスは、ふと思い出した。キャロルの能力を。思い出を力に変える錬金術。

「……っ！ 黄金錬成!!」

迫る黒影。アリスは叫ぶ。一面は黄金色に輝く。影は色を失い消える。強烈なエネルギー。アリスの後ろの少女はただ、啞然として見ていることしかできなかった。

光が収まる。辺りの風景が一変していた。木も草も地面も、黒影だったものも、全て黄金に変化していた。アリスを境に別世界が広がっていた。

アリスはそれを確認する前に、気絶した。後ろの少女のみがその威力を知ることになる。

第一話 起床

アリスが目を覚ますと、見知らぬ天井が見えた。石造りの天井で重厚感がある。少なくとも、現代日本でお目にかかれるようなものではなかった。

体を起こす。部屋は広い。学校の教室くらいは余裕であるだろう。寝ていたベッドも5人以上も入れるだろう大きさのふかふか。特に子供の身体になってしまったアリスにとってはなおさら大きいふかふか。

ベッド側の壁に大きなガラス窓。ベッドと反対側に大きな扉。窓の外は曇り。いやむしろ、空が仄かに赤く、汚らしい。決して夕日や朝日に染まっているとは言えない。青空は決して見えない。

ここはどこか、とアリスは思った。あの少女の家なのだろうか。そこでアリスは決定的なことを、ものすごく大事なことを忘れているのに気がついた。

アリスは、やり直すことにした。アリスはベッドに仰向けに寝た。そして、目を閉じ、再び目を開ける。

「……………見知らぬ、天井だ」

テンプレも終わったところで、アリスは早速現状を確認した。

身体は少女、神様転生をした、元男。神様からもらった能力、俗に言う転生特典は三つ。①『東方Project』のアリス・マーガトロイドの容姿と能力。②『ローゼンメイデン』の人形師ローゼンの能力。③『戦姫絶唱シンフォギア』のキャロル・マールス・デインハイムの能力。

そこで、ふと前世のことを思い出そうとしたが、思い出せない。冷や汗が出た。まさか、気絶する前に使った”黄金鍊成”のエネルギ―を”記憶の消却”で補ったのか。それで記憶がなくなった。ゾツとする話だ。下手をすればすべての記憶がなくなっていたかもしれない。

震える身体を押さえ、思考する。今は怖がっている暇はない。あの

黒影がその例だ。現代日本のような平和な世界ではないとわかつている。

とりあえず、疑問点を考えるアリス。

①この建物は何なのか？ これはあとでわかるだろう。こんな豪勢な部屋に寝かされていたのだ。この住人がこの部屋に訪れると考えられる。少なくとも命の危険がある場所ではない。命を奪うのなら寝ている間にするだろう。

②この世界はどこなのか？ あの黒影を見るに、殺伐とはしていない。でも、これも、ここの住人に訊けばいい。

③失った記憶はまだあるのか？ これも今は考えても仕方がないし、下手すると検証すらできない。失った記憶を調べるのに、記憶を使うしかないからだ。

④転生特典は具体的に何ができるのか？ この世界が殺伐としてるのは確定していいだろう。なら、早めに戦える手段を理解しておかないといけない。

⑤……これが一番重要だが……、女の子の体って、どうすればいいの?? お手洗いとかお風呂とか!!

アリスが頭を抱えていると、扉がノックされた。

第二話 ガリア

部屋に入ってきたのは、護衛二人と侍女一人を連れ、あの少女だった。

「お目覚めになりましたか？」

少女が口を開く。アリスはどう答えていいかわからず、うなずくだけにした。アリスの反応に、少女は笑顔になる。

「私は、イクスヴェリアと申します。イクス、とお呼びください。この度は、私の命を助けていただき、ありがとうございます」

そう言っ、お辞儀をするイクス。アリスは慌てて、居住まいを直し、同じくお辞儀をして、アリス、と言った。

「アリスさんですね？ よく眠れましたか？ 寝苦しくはありませんでしたか？」

「だ、大丈夫……よ」

アリスは迷っていた。口調をどうしようか、と。前は男だったのだ。でも、アリスの容姿で男口調は違和感がある。でも、アリス本人としては、女言葉は違和感でしかない。それでも、アリスというキャラをリスペクトするのなら、やはりアリスっぽい口調をしたほうが良いのではないのだろうか、と傍か見れば下らない事を考えていた。

「どうかしたんですか？」

突然黙ったアリスに、イクスは怪訝な表情をする。アリスは慌てて、なんでもないと口調に言っ。口調に関しては、今は保留にしよう。そもそも男口調も女口調も、ジェンダーと個性の問題だ。結論は出ないだろう。

「そうですか？ なら、お腹は空いていませんか？ ちょうどお昼時なので、準備はできていますよ」

そう指摘されて、アリスのお腹が鳴る。イクスが微笑む。アリスは赤面して、うなづいた。

アリスは緊張した。護衛がこちらを見ている。見られながらの食事というのは、なかなか落ち着かない。

広いダイニング。先程の寝室より広い。長テーブルの端と端にイクスとアリスは座っていた。

イクス、イクスヴェリア。アリスと同身長、背中まで流した淡い金髪、幼い顔、優しい雰囲気。ここから、この世界の情報を探らなければならぬ。神様転生によくあるパターンで、転生先がアニメとか漫画の世界であるというのは、お決まりだ。完全な、それこそ、オリジナルとも言うのか、の異世界だった場合はアウトである。

神が何の目的でここに転生させたのか、アリスは完全に忘れていた。忘れていなければ、この世界が『魔法少女リリカルなのは』の世界で、目の前の人物が冥府の炎王、イクスヴェリアだとこの時点で気がついていただろう。

食事が一段落すると、アリスは早速聞き込みをした。

「えっと、イクス。いくつか質問してもいいかしら？」

「あ、はい、どうぞ。……問題はありません」

「？ えっと、私、記憶喪失らしくて、それでここがどこかわからないの。ここってなんていうのかしら？」

必殺、記憶喪失。何か質問するには、うってつけの方法。但し、バレたときはお察し。アリスはそれを速攻で切った。

イクスは目をぱちくりさせ、記憶喪失ですか、と意味深につぶやいた。

「わかりました。お教えしましょう。ここはガリア。ベルカの古き土地。そして、この屋敷はガリアの領主が住む場所です」

第三話 ベルカ戦争

アリスは気がついた。ベルカという世界。イクスヴェリアという少女。この二つから、アリスはここが『魔法少女リリカルなのは』の世界だと、推定した。確信ではない。その証拠に、イクスヴェリアが治めていたのはガレア王国で、ガリアという土地の領主ではなかったからだ。それに、「ベルカ」や「イクスヴェリア」という言葉が前世のアリスが知らないだけで、他の作品にも使われている可能性はあった。そもそもここが何かしらの作品世界と同じである証拠もなかった。

それにも関わらず、アリスはここが『魔法少女リリカルなのは』世界であることを前提としたほうが良いのではないかという勘があった。根拠はない。前世でも勘は宛にはならなかった。それでも、怖ろしいくらいに確信めいた第六感があった。

「ここガリアは、どういったところ？」

アリスは情報収集を続けた。

「……痩せた土地です。それ以外は、領民と軍事的な拠点であるこの屋敷だけがある……そんな場所です。歴史的に誇れるものは何もない。あるとしたら、代々ここで暮らす領民くらいでしょう」

イクスは悲しい目をしていた。

「領民は穏やかで賢く、領主である私を敬ってくれています。しかし、私は、それに応えることができている。ベルカ聖王家の命令とはいえ、このまま軍費に税を使えば、領民が飢えます。そうすれば、敵国によってガリアは死の土地になるでしょう。今は領民の知恵と勇氣に助けられている限りです」

そこまで言つて、ハツとなるイクス。

「すみません。こんなこと、出会ったばかりのあなたに言うべきではありませんでしたね」

言うべきではなかった。それは、アリスのことを思いやってのことか、それとも政治的軍事的な観点からだろうか。アリスにはわからなかった。アリスは首を振った。

「ついでに、どこで戦争しているの？」

アリスが訊く。イクスがまばたきをした。

「そう言えば、記憶を失っているのでしたね。はい、聖王家が今現在戦っている相手は、シュトウラという国です」

聖王家もシュトウラも『魔法少女リリカルなのはVIVID』に出てきた国だ。この世界・この時代では互いに対立しているようだ。

「ベルカには、いくつの国があるのか、聞かせてもらえるかしら？ 戦況がよく頭に入っていないの」

イクスは少し戸惑った様子を示した。記憶喪失の少女が急に自国の戦況を訊いてきたのだ。戸惑うのも、わかる気がする。しかし、情報は貴重だ。早く自分のこれからの行動を決めるために、この世界の情報が必要なのだ。

迷った末、イクスは説明した。

今、ベルカは乱世。諸国が勝手に独立し、互いの利益のために戦っている。本来ベルカ王国の中心は、ベルカ聖王家。その権威が落ちてしまったため、シュトウラを含め独立する国が続々と出てきている。今のベルカ世界の状況を正しく理解できている者はいないだろう、とのことだった。

アリスは、考えるように、左手を右肘に、右手を顎に添えた。アリスは、ベルカについておおよその理解を示した。

第四話 能力

アリスは部屋に戻った。イクスには、屋敷内なら自由にして良いと言われた。アリスは疲れたと断って、ベッドへ戻った。

仰向けに、ベッドに転がるアリス。アリスは、先程のイクスの話を考えていた。

『ベルカは乱世です。この世界は今、力ある者が力なき者に酷い仕打ちをして、弱き者にとって住みにくいものになっています。……あなたは、私を助けてくれました。私を助ける力があります。どうか、私に力を貸してはいただけませんか？』

そう言って、イクスはお辞儀をした。周りの家来が動揺しなかったところを見ると、アリスが眠っている間に、そういう話をするのは決まっていたのだろう。

立ち去る際、力を貸していただけなくてもここに住んでいい、とイクスは言った。優しい人物である。こんな身元が曖昧な人物に、食事と住居を与えてくれた。敵国に渡るくらいなら、という考えかもしれない。それが、ガリアの利益になると考えたとしても、いささかお人好しと言えるかもしれない。殺す選択肢だってあったはずなのだから。

さて、アリスは、単純に考えて二つの選択肢がある。

一つは、手伝わない。前世の平和な現代日本とは違う。危険。苦痛を伴うはず。危ないことはしないほうが良い。イクスも別に良いと言っている。

一つは、手伝う。戦う術は転生特典。タダ飯は食べたくない。他の人が危ない目に合っているのに、比較的安全な場所で寝食をするのは、どうも座りが悪い。

これを考えるには、一番重要なことがある。

能力。転生特典。それが三つもあるアリス自身のことだ。

転生特典は三つ。

- ① 『東方Project』のアリス・マーガトロイドの容姿と能力
- ② 『ローゼンメイデン』のローゼンの能力

③ 『戦姫絶唱シンフォギア』のキャロル・マールス・デインハイムの能力

神は言った。特典はその世界の法則に適した形になる、と。ここが『魔法少女リリカルなのは』の世界だと、自信がある。なら、リンカーコアという魔力生成器官が体のどこかにあるはずだ。それはあとで考えよう。

アリスはまず、転生特典についてある程度頭の中で整理しておこうと考えた。

①についての考察。容姿はアリス・マーガトロイドというより、旧作のアリスもといロリなアリスでロリス。水色吊りスカートというのがまさしくそうだ。この世界に来たとき一緒に本も……そう言え、あの本はどこだ？

アリスは部屋を探した。ない。あの場所に落としたのでだろうか。とりあえず、後回しにした。騒いでもどうしようもない。

①の考察。容姿は……まあ、ロリスでもアリスに違いないので、よしとする。名前もアリスで良いだろう。成長してマーガトロイドをつけても良いし、そこらへんはどうでも良い。

能力についてだ。アリス・マーガトロイドは魔法使いの人形遣い。魔法の糸でもって人形を操る程度の能力を持っている。これも、リンカーコアがわからなければ使えないだろう。あとで考える。

②の考察。ローゼンの能力って何だ？ ローザミステイカを作り出すことか？ ちょっとわからない。でも、それ以外というと、人形を作る能力？ 果たして検証が必要だ。ローザミステイカはこの世界で言うと、人工リンカーコアみたいなものだろう（と勝手に考えておく）。すると、リンカーコアを作り出せる能力とも捉えられる。この世界、ヴォルケンリツターのように人工リンカーコアらしいものや融合騎なんてデバイスもある。不可能ではないだろう。

……ということは、ローゼンメイデンを作り出すことも可能？ 要検証。

③の考察。こっちに来たときに、記憶の焼却と、黄金錬成という錬金術を使ったことで実証済み。この世界に錬金術があるかどうかは

わからないが、きつと魔法で置き換えられる現象なのだろう。そうすると、実質的に、上の能力二つも今すぐに使える見込みはある。ただ、記憶の焼却はやりたくない。

まずはリンカーコアだ。普通の魔法を使えば、錬金術に頼らなくても良くなる。そこから、色々と、判断もできるといふものだ。

アリスは、魔法が使える広い場所を探そうと思った。できるだけ誰にも邪魔されず、誰にも危害を加えないようなところ。

アリスはイクスに魔法を使える場所を訊こうと、ベッドから立ち上がった。

第五話 リンカーコア

イクスは、普段書齋にいると言っていた。廊下を歩くメイドに場所を訊いて訪れたアリス。イクスは書齋に、いた。

「どうかされましたか、アリスさん？」

「魔法の練習をしたいの。どこかできる場所はないかしら？」

アリス口調が難しい、とアリスは内心で愚痴った。イクスはそんなアリスの内面など知りようもなく、快く従者にアリスを中庭へ案内させた。従者は立ち去った。

普通は、監視として従者にアリスを見張らせるものだと思うが、ここではそんなことをしないのだろうか。信用されているのか、どうなのか、アリスにはわからない。まあ、今はいいだろう。

まず、リンカーコアの有無。

リンカーコアは、魔道士の源、魔力の発生器官。これがちゃんとあるかどうか、また起動するかどうかで魔法が使えるかどうかが決まる。

さて、アリスは早速問題にぶち当たった。リンカーコアとは、どのように確認すればいいものなのだろうか。

とりあえず、胸に手を当てる。心臓の鼓動が伝わる。それ以外に何か違うことはない。

胸の中に意識を集中させる。想像の中で、胸の中に入っていくイメージ。心臓の鼓動が手以外からでもわかる。胸を中心に全体へ血液が流れていく感覚がする。それ以外に何かしらの違和感はない。

心を澄ませる。胸に集中する。平べったい胸だ。アリス・マーガトロイドは、もう少し胸があった気がする。二次創作のイラストでは、主にそうだった。原作でどうかはアリスは知らない。

思考が、逸れた。もう一度集中する。

神が勝手につけた転生特典だ。この世界に適した形で付与されるというのなら、魔法で、魔法が使えるというのなら、リンカーコアがある、はず。キャロルの能力を使ったから活性はしていると推測できるが……………。

かれこれ何時間経ったのか。未だに見つからない。少なくとも空には赤黒い雲が覆っていて、日が暮れているかどうかはわかりづらい。

間違ったことをやっているのかどうか、もう少し時間をかければよいのかどうか、それすらわからない。けれど、アリスは根拠のない自信があった。

集中する。胸の中だ。胸の奥。何か、こう、アニメだと、光っていた。光っているものを探す。光っている感覚とはなんだ。わからない。それなら、振動。心臓の鼓動以外の振動はないのか。それを探すアリス。

些細な変化でも見逃さないような集中力。前世のアリスでは、想像もつかないようなほどの、集中をアリスは行っていた。そのことには流石に気がついていないようだったが……。

……キラツと光った。胸の奥で光った。それを感じ取ると、心臓の鼓動以外で胸の奥から湧き出るリズムを感じる。鼓動。魔力が流れ出る鼓動。これこそがリンカーコア、なのだろう。

アリスは、自らのリンカーコアを見つけ出した。思ったよりも、簡単に見つけられた、とアリスはホツとした。

第六話 魔法

リンカーコアを認識すると、アリスは体中を流れる魔力を感じるこ
とができるようになった。温かい、優しい光。

試しに、手のひらを上に向け、腕を前に出す。魔力で作られた球を
想像した。それだけで、いとも簡単に魔力球が出来上がる。

問題はその色が七色だったことだ。七色、つまり虹色だ。

おそらくアリス・マーガトロイドの二つ名、“七色の人形遣い”か
ら神が決定したのだろう。それとも偶然か。

これがどうして問題かという点、『魔法少女リリカルなのは』の世界
で、虹色の魔力色は珍しい。その中で代表的な虹色の魔力を持つ
のが、聖王家である。この国の王家だ。

アリスは思う。もしかしたら、この身体は聖王家と血縁関係にある
のではないかと。そうすると、政治的ないざこざに巻き込まれる恐
れがなきにしもあらず。面倒だ。

とりあえず、今考えても仕方ないことだ。巻き込まれるときは巻き
込まれる。時の流れには逆らえない。それならば、その時のために力
をつけておくべきだ。

アリスは、次の実験をすることにした。

アリス・マーガトロイドは人形遣いだ。人形遣いということとは、魔
力か何かで、人形を操る糸を作ることができるのではないのか。

早速試してみた。

糸は簡単にできた。リンカーコアを探すのに比べたら、明らかに簡
単だった。虹色に光る細い魔力。これを遠くのものへと繋げば、それ
を操作できるのか。

中庭の小石を手取る。それに糸を通した。手を放す。小石は宙
に浮かんだ。

これを人形に通せば、人形が操作できるはず。もちろんもっと多く
の糸でもっと複雑に絡めなければいけないとは思いますが、少なくともこ
の糸はアリスの意思で自由に伸び縮みができる。

人形遣いへの道を一歩進んだ。

小石を手を取って、遠くへ投げる。それと同時に糸を伸ばす。そして、屋敷に届く前に止めた。小石は宙に浮いたまま。

今度はそれを糸を縮めて、こちらへと引き寄せる。

あれ？ とアリスは思った。長いのを縮めるのは少し難しい。

ふー、と深呼吸。そして、糸に集中するアリス。

縮め！ と念じる。糸が縮む。小石が近づく。やった、と思って、意識が緩む。小石は止まらず、アリスのおでこに勢いよくぶつかった。

あ、と思ったときは、アリスは衝撃で転び、頭を打ち、意識を失った。

アリスが目覚めると、どこかで見知った石の天井が見えた。はどこだっけ、と考えていると、お目覚めですか？ と横から声がかかった。

アリスが起き上がると、イクスが椅子に座ってこちらを見ていた。そこで、ここがアリスに与えられた部屋だと思い至った。

「えっと、私はどうして……」

「覚えていませんか？ 中庭で倒れていたんですよ」

アリスは、中庭で魔法と能力の検証を行っていたことを思い出す。最後に、糸を通した石に頭をぶつけて意識を失った。

アリスはおでこを触る。血は出ていない。たんこぶもできていない。あの速度であたったから怪我の一つでもしていると思ったのだが、なんともなかった。

「もしかして、治療をしてくれたの？」

アリスはイクスに訊く。この世界には魔法で怪我を治す方法があるから、それで治したのだろうか。

イクスは首を振った。

「もともと怪我をしていませんでしたよ」

そう言えば、イクスを助けたときもアリスは黒影から攻撃を受けて怪我をした気がしたが、起きてみると、怪我も痛みもなかった。これはどうしてだろうか。転生特典にそんな能力を持っているキャラク

ターはいなかったはずだ。

また一つ、自分のことで謎ができた、とアリスは深いため息をついた。

第七話 聖王家

アリスがベッドの上で考え事をしていると、イクスが口を開いた。「ところで、アリスさん。アリスさんの魔力光は、虹色なんですね」「うん、そうよ……………え?」

イクスを見る。少し冷や汗をかいていた。

「すいませんでした!! まさか聖王家の方とは思わず、失礼をいたしました!!」

と、頭を下げるイクス。アリスは慌てた。

「いやいや! 違う違う!! これは偶然偶然! 聖王家とは関係ないから!!」

あ、と思つたときには遅く、前世のときの口調で喋っていた。イクスが、顔を上げた。

「ほ、ほんとうですか?」

どうやらイクスは気がついていないらしい。アリスは首をコクコクと頷き、本当よ、とアリス口調でイクスを安心させた。

イクスは、ホツとした様子を見せた。どうやら、イクスはアリスが中庭で魔法を使っているところを見ていたらしい。

「ですが、珍しいですね。虹色の魔力光。聖王家の方々以外では見たことがありませんでした」

「そこまで、珍しいの?」

アリスの質問にイクスは頷く。

「そもそも、聖王家は人工的に魔力光を虹色にしています」

そこでイクスが述べたことは、『魔法少女リリカルなのは』でも言っていたことだ。聖王のゆりかご、聖王の鎧、そのためゆりかご内で子供を産ませる。どうやら、ゆりかご内で子供を産むと、その子供はゆりかごの魔力と共鳴して、DNAや遺伝子に作用し、虹色の魔力光を持つ子供が産まれるらしい。

「数は少ないですが、ゆりかご外で産まれた者で、虹色の魔力光を宿した王もいました。重要なのは聖王の血を引いているということですよ。ゆりかごはただ聖王の素質を引き出すための道具です」

「なら、私はそうなのかもしれないわ。聖王の隠し子、だとか？」

イクスは困った顔をした。それもそうだ。アリスがとんでもない爆弾である可能性が出てきたからだ。

アリスは微笑んで、冗談だ、と言った。イクスは何とも言えない顔をした。

アリスは考えなくてはいけないことが増えた、と思った。自分のこともそうだが、聖王のゆりかごだ。確か、質量破壊兵器だったという話が『魔法少女リリカルなのは』で出てきた。イクスの話ではそうだったことは一切出てこない。試しに、「聖王のゆりかごって、質量兵器なの？」と訊いたが、そんなことは聞いたことがない、と返された。今はまだ兵器として完成されていないのか、それとも聖王家が隠しているのか。謎は深まるばかりだ。

イクスが部屋を出ていったあと、アリスは疲れを覚えた。

身体が子供になっているのだ。起きてからいろいろなことを今日中にやってしまった。疲れて当たり前だ。外も暗くなっている。夜だとわかる。

汚らしい雲に覆われていても、異世界であっても、日はここでも昇るのか、と思い、アリスは眠りについた。

第八話 屋敷

次の日。異世界に飛ばされてから三日目。アリスは早く起きた。まだ外は暗い。空は相変わらず薄汚れた赤黒い色をしていた。星も月も太陽でさえ見えない。この異世界のそれが、どのくらいの数があり、どのような形をして、どの色で瞬いているのか、一切がわからない。

地上を見る。荒れ果てた地面が見えるだけで、街も人も建物も見えない。これ以上の情報は得られそうにない。

窓から目を放し、ベッドとカーペットと窓と扉しかない、豪華な部屋を見渡した。よくよく見ると、天井や壁にヒビが入っている。意匠の凝った模様はかつての威厳を見せず、放つたらかし。これが客を泊める部屋なのか。歓迎されていないのか、他の部屋はもっと酷いのか。初日では気づかなかったことが、一晩寝た頭では鮮明に写る。

疲れていたのか、とつぶやくアリス。ベッドから起き、部屋を出る。イクスから屋敷内は自由に移動していい、と言われているから、遠慮なくさまよう。

と言っても、目的がなければ行く場所も限られてくる。朝食の時間はいつだろうか、食堂に行っていればいいのだろうか。イクスは起きているだろうか、書斎に行けば会えるだろうか。

アリスは、考えて、イクスの書斎へ向かった。廊下は誰もいない。人の気配もない。寂しい。

書斎につくと、ノックした。返事はない。扉を取っ手をガチャガチャさせた。鍵がかかっている。イクスは、まだいないらしい。寝室だろうか。寝室の場所までは知らない。そもそも知っていたとしても訪れるのは失礼か。

そんなことを考えていると、振動が襲った。アリスは突然のことで座り込んだ。どういうことだ。周りは一切動いていない。壁も床も廊下の端に置かれた花瓶も動かない。ただ空間が揺れている感覚。これはアリスは既知の感覚だった。

リンカーコア。魔力。それを感じたときと似ている。ただその量や力が強いだけ。

発生源はどこか。リンカーコアを探したときのように周りに意識を集中させる。振動の、魔力の波動の強い方へと意識を向けると、書斎の扉へたどり着く。扉の奥から魔力が湧き出ている。

アリスはためらった。そして、魔力の糸を作り出す。その糸を扉の鍵穴へ通し、糸を操作して、扉を開けた。

扉を開ける。イクスはいない。前に訪れたときと同じく壁に本棚が並んでいる。振動は続いていた。その本棚の一つ、それだけが動かされていた。近づくとは階段。地下へ続く秘密の通路があった。そこの下から、魔力が感じられる。アリスは迷わず下へ降りた。

階段が終わると、広い部屋に出た。うめき声がある。人の大ききさくらしいのガラスシリンダーが壁に並んでいる。その中には緑に光る液体と、裸の人、人、人。

奥のシリンダーが割れている。人がうずくまっている。うめき声はそこから。膨大な魔力の発生源もそこから。見たことのある薄い金色の髪。イクスヴェリア。イクスであった。

アリスは駆け寄る。

「イクス！ 何があつたの!?! 大丈夫なの!?!」

イクスがこちらを向く。苦しそうだ。濡れた身体に、濡れた髪。幼き身体は、痩せ細っていた。

アリスさん、とイクスがアリスを認識した。イクスは何かを話そうとした。が、そのまま意識を失ってしまった。魔力の波動も、トンツとなくなるように消えた。

アリスはイクスの名前を呼び続けた。

第九話 イクスヴェエリア

冥府の炎王”イクスヴェエリア”。その能力は、マリアージュという死体兵士のコアを無限に生産すること。『魔法少女リリカルなのは』のサウンドステージXで述べられた内容。これは人工的に付与された能力で、つまりイクスは人造人間ということになる。

イクスを寝室に連れて寝かしたあと、ベッドの側でイクスの寝顔を見ながら、アリスは考えた。

あのあと、イクスの従者が来て、慌てる従者を叱責し、アリスは彼に寝室まで案内させた。従者は何も説明せずに、退席した。今は護衛二人がアリスを監視している。

こんな幼い娘でさえ、この時代では力を求める。いや、幼いからこそ、強さを求めるのかもしれない。理不尽に抗うため、弱者を護るため、その身を犠牲にして。その精神性に時代は関係ないのかもしれない。戦争は犠牲を強いるが。

「……ここは……？ アリス……さん？」

イクスが目を覚ました。アリスは事の経緯を話した。イクスは横になったまま聞く。

「そうですか……見られてしまったのですね」

「どうということなのか、説明はしてもらえるのよね？」

イクスは頷く。

イクスの説明は、アリスが予想していた内容と同じだった。戦争で生き残るため、人体実験を繰り返していること。イクス本人も人造人間になったこと。今は調節が上手く行っておらず、時々魔力暴走が起きること。まだ能力は使えないこと。色々と。

「ガリアに住む領民を護るため、戦争を生き残るため、こうするしかありませんでした……」

「辛さは……ないの？」

「辛いです。ですが、何もできずに死んでいく、罪なき人々を護るためには、致し方ありません」

「私に力を求めたのは？」

「はい。私の他に力のある者がいれば、それだけで民を救えます。アリスさんには、こちらの事情に巻き込まれる形になってしまいました。申し訳ありません」

「まあ、私もあそこで迷っていたわけだから、あのままだと飢え死にしていたわ。それに、この世界にいる限り、戦いには巻き込まれていた。あまり変わらないわね。逆に、あなたに会えて良かったと思っているわ。こちらが感謝こそすれ、あなたに謝られる必要を感じない」

アリスがそう言うと、イクスは不思議そうな顔をした。そして、笑顔になった。

「アリスさんって、優しいんですね」

「はあ!? な、何よそれ!? 私は事実を言っただけだよ!!」

イクスは笑って、そういう事にしておきます、と言った。アリスは釈然としなかった。

アリスは咳払いをした。

「一つ、あなたにお願いがあるわ」

イクスが、はい、と答える。

「明日、あなたの護るべき領民のところへ、案内してくれないかしら？」

第十話 領民

アリスは、想像していたよりも、街が綺麗なことに驚いた。イクスと街を歩く。領主であるイクスに気さくに声をかける人、敬う人、色々いたが、皆がイクスを大事に思っていることが伝わった。

イクスに頼んだ次の日。異世界に来て四日目。アリスとイクスは街に来ていた。初めて屋敷の外観を見たが、城壁のようであった。敵側に塀や堀を設け、街側には行き来しやすい道が作られていた。アリスの部屋は街から見えないが、敵側にも面してもいなかった。

街は綺麗だった。土むき出しの道、家は石造り、中世の街と村を2で割ったような場所。

住人はクタクタのヨレヨレな服を着ている。裕福とは言えない。中には真つ黒に汚れた子供もいた。それでも皆、一様に笑顔を見せていた。強要のない信頼からくる笑顔。これはイチ側面にすぎないとはいえ、イクスの人柄がわかる。

イクスは会う人会う人の名前と顔を覚えていて、なにになにはどうでしたか、や、この間はありがとうございました、など親しく話をする。イクスの護りたいものが、領民だと、はつきりわかった。

アリスは暗い顔になった。『魔法少女リリカルなのは』での未来を知っていからこそ、イクスの護りたいものは、イクスの能力で、コントロールのできないマリアーージュによって、壊滅する。それは、避けることができのだろうか。アリスが手伝ったとして、それを阻止できるのだろうか。アリスには判断のつかないことであった。

「アリスさん、どうかなさいましたか？」

イクスがアリスの暗い顔を見て、心配する。具合でも悪くなったと思っただろう。アリスは首を振って、大丈夫よ、と言った。イクスは首を傾げるだけで、街の子供達に引つ張られて、一緒に遊ぶ羽目になってしまった。アリスはそれを悲しい微笑みをして、見ることにできなかつた。

結局、決まらなかつた。ガリア領民を見ることで、イクスの護りた

いものを見ることで、イクスに協力するかどうか、決まるのではないのか。そう、アリスは思っていた。その予想は外れた。なぜ外れたのか、それはアリスには見当がつかない。あの人達に、助かってほしい、とは思う。戦争も終わればいいと思う。しかし、自分がそれを助けよう、戦争を終わらせよう、等々、そんな想いは、湧かなかった。

自分は薄情なのかもしれない、とアリスは思った。

「アリスさん、どうでしたか？ 街は」

屋敷に戻って、夕食時、イクスに訊かれた。

「笑顔……だったわね」

「ええ、あの笑顔を私は護りたいのです」

「……イクスになら、できるわ」

アリスの言葉を聞いたイクスは残念そうな顔をした。

「力は、貸していただけないのですか？」

「そもそも、私自身、どれほどの力が自分にあるのか把握してないわ。その状態で、戦場に出ても、意味はない。逆に味方に迷惑がかかるわ」

記憶喪失だから、と添えた。イクスは納得してくれた。アリスは自分の言葉に納得しなかった。

その日は、そのまま暮れていった。

第1話 人形

アリスは魔力で作った糸、魔力糸まりよくしと名付けた、を出しながら、どういったことができるか、試していた。

異世界に来て、五日目。

糸はアリスの意思で伸び縮みでき、アリスの意思で動き、アリスの意思で物に貼り付く。硬さも軟さも自由自在。指一本で、何十本と糸を出しても、アリスは疲れない。これが転生特典のアリス・マーガトロイドの能力か、と思った。

空中に糸で文字を作れるし、あやとりも指一本でできる。東京タワー、とか作れる。又、糸の粘着でスパイダーマンごっこもできた。ただし、糸はアリスから離れると消えてしまう。端だけでもアリスに触れていけば消えることはないが、糸をどこかに設置する、ということとはできなさそうである。

うーん、とアリスは背筋を伸ばした。

アリス・マーガトロイドと言えば、人形遣いである。人形を操る魔力糸はできた。今度は人形でも作って見るべきだろう。前世のことはほとんどの覚えていないが、転生特典でローゼンの能力を持っているので、きつと人形作りも上手いはずである。

そう思っ、イクスの書齋へ向かう。イクスに針と糸を借りるためだ。

「はい、どうぞ」

イクスは快く糸と針と布を与えてくれた。早速人形作りに取り掛かる。最初は道具も限られているため、ビスクドールのようなものは作れない。せいぜいぬいぐるみが精一杯だろう。それでも作ることに意味がある。

布と糸を通した針。それを睨むアリス。イクスは興味深そうにアリスを覗いている。

アリスは言葉を失った。まさかのまさかで、人形の作り方が全くわからない。転生特典でどうにかなると思っていたが、全く以って何も

思いつきも、手を動かすこともできない。何をしたいのか、知識がないからだ。

唾然とするアリス。イクスが声をかけた。

「えっと、アリスさんは何を作りたいんですか？」

イクスが針を動かす。それに合わせて、アリスも見様見真似で布に針を通す。アリスはイクスに人形作りを教わっていた。

「助かったわ、イクス。あなたが裁縫が得意で」

「得意というわけではありませんが、簡単なものならできます。ほらここは、こっちに通して」

「はい、先生……」

小一時間ほどで簡単な人型の人形が二体できた。イクスのは、アリスを模していて、水色の吊りスカート、腰と頭のリボン、金色の髪。アリスはイクスのマネをしていたため、自分の人形を作っていた。それも初めて作ったため形が歪で、顔の配置が不安定、手も足も長さで配置がズレている。

「まあ、何度も続けていけば、上手くできるようになりますよ」

「それって、下手くそってことよね」

イクスは微妙な笑みを作って黙った。

第12話 ローザミステイカ

アリスはやつとのこととで違和感に気がついた。異世界に来て、七日目。人形を作りながら、思いついたことだった。

この身体になってからというもの、排泄行為や衛生面で困ったことがない。尿意もお通じも一切なく、汗をかかず、同じ服を着ているというのに、不潔感や不快感は訪れなかった。

食欲と睡眠欲はまだある。しかし、それもだんだんと薄れてきている。もちろん人間のとときの習慣で食事と睡眠はとっているが、人が毎日の生活で欠かさずしていることをしなくて良い、というのは有り難い。アリスは、前世は男であったから、そこところが不安であったが、解消した。

アリス・マーガトロイドの能力だろう、とアリスは考える。捨食と捨虫。魔法使いが修行を経て使える能力。捨食が食事を摂らなくて良くて、捨虫が老化を防ぐ。便利な能力だが、人間をやめている。

アリス・マーガトロイドは捨食を習得しているはずだが、食事をしているし、睡眠もとっているのは、人間としての自分を忘れないためであったかもしれない。確認のしようがないけれども……。

人形作りは順調だった。最初こそ下手くそだったが、二日間ぶつ通しで練習すれば、形になってくれた。やはりアリス・マーガトロイドやローゼンの能力の影響があったのだろう。もしくはアリス本来の才能かもしれない。

アリス・マーガトロイドの能力はおおよそ検証した。魔法使いとして、人形遣いとして。

次は『ローゼンメイデン』のローゼンの能力。

ローゼンの能力はローザミステイカという、おそらく人工リンカーコアを作り出す能力だと思う。これを人形に入れば、半自動、もしくは完全自動に動く人形が作れるのかもしれない。

アリス・マーガトロイドは半自動の人形を操作して戦いをしていった。人形を使わなければもっと強い魔法を使えると聞いたことがあるが、具体的に何ができるのか不明なので、アリスは真似ができない。

さらに、半自動の人形も仕組みがわからないから、本来なら人形を使つての戦いもできない。

しかし、ローゼンの能力を使えば、それも解決するのではないのか、と考える。半自動化、試して見る価値はある。

心を澄ませる。アリスは、想像した。『魔法少女リリカルなのは』の魔法は想像力によって具現化できる。細かいところを省ける。なら、具体的に想像すれば魔法を創造できる。

想像するのは、自らのリンカーコア、と似た器官。手のひらに意識を集中させる。魔力球ではなく、魔力を生成する器官。魔力を放出する器官。

……形になっていくのがわかる。先程までは霧のような魔力だけだったのが、今では液体、スライムのようにまとまりだしてきた。不思議な感覚である。魔力を振動や鼓動で感じるアリスは、振動をこねてまとめている感覚という実際に経験しないとわからないような作業を行っている。集中力が少しでも乱れればは、魔力の波動は霧散しだす。意識を再び集中させるアリス。

かなりの時間を有した。果たして、ローザミステイカは、完成した。パチンコ玉より小さい、柔らかく温かい、魔力を発する、珠たまが、そこにはあった。

アリスは、疲れて、意識を失った。

第13話 黄金鍊成

異世界転生してから、はや二週間。その間人形作りに励んでいたアリスは、十体目を作り終えた段階で、とうとう飽きた。

ローザミステイカも不完全ながら作り上げ、十体の人形に入れた。ただのぬいぐるみが魔力系を通すだけで、簡単な命令で細かい動きができるようになった。詳しい原理は不明だが、できたものではできただ、アリスは深く考えなかった。考えなければいけないときに考えればいい。今はこれで十分だ。

さて、暇になったアリス。今はイクスの書斎にいる。イクスは何かものを書いてるようで、忙しそうにしている。アリスはここでも暇を持て余していた。十体の人形を同時に扱っていた。暇つぶしに。「えっと、アリスさん。ここについても何もすることは無いと思いますよ?。」

アリスのせいで集中力を切らしたイクスが、控えめに出て行けと言った。もちろんそんなことを思っているかどうかはアリスには、不明だが、自分がうっとおしいのは理解していた。

「ごめんなさいね。中庭でも行ってくるわ」

そう言つて立ち去ろうとアリスが立ち上がった。イクスはホツとした様子を見せた。

「あ、そういえばアリスさん。これを見てください」

イクスは、忘れるところだった、とでも言うように、抽斗を開け、一つの黄金を取り出した。アリスには見覚えがない。

「? これがなに?。」

「これはアリスさんが私を助けてくれたときに使ってくれた魔法でできた金です」

黄金鍊成。手のひらサイズのそれは、しかし違和感があった。

「他の金は?。」

「これだけです。他の黄金色に輝くのは、黄金に似た違う物質でした」
「イクスを襲った奴らは……どうなったの?。」

「今は地下牢にいます」

「生きていくということ？」

「はい」

これはアリスさんのです、と言って、イクスはアリスに黄金を渡した。ずっしりとした重さが腕に伝わった。アリスはその場で考え込んでしまう。

黄金錬成。『戦姫絶唱シンフォギア』でのそれは、莫大な魔力量に物を言わせて、核融合反応を起こし、黄金を錬成する錬金術の技。多くの魔力と、大きなエネルギーを必要としながら、出てくる金の量は、今アリスが手にしている手のひらサイズが限界。ここまでは原作と同じだ。

しかし、『戦姫絶唱シンフォギア』の黄金錬成は、大爆発を要求する。そもそも核融合反応の原理から言えば大量のエネルギーを放出するのが当たり前だ。

核融合。軽い物質と軽い物質から重い物質を作り出す技術。現代日本でも、研究が進められていて、実験レベルでは成功している。ここで重要なのが、軽い物質同士の単なる合計ではないことだ。わかりやすく言うと、10の重さの物質を作るのに8の重さの物質を二つ核融合させないといけない。なら、 $8 + 8 = 10$ で残りの6はどこに行くのか。エネルギーになる。このエネルギーは余った質量が1グラムなら、光速の二乗ほど、計算を省いて約90兆ジュールの熱量が発生する。

具体例として日本広島原爆が約60兆ジュール。その約1.5倍。または、黒鉛4千万トンが一気に蒸発する。約4千万トンという原油タンカー400隻ぐらいの重さ。

こんな例えは意味がない。果てしなく桁が多いから、人間の感覚では想像もできない。桁が大きいと例えることに価値が生じない。

結局何が言いたいかというと、黄金錬成を使用したのに、それも直撃したのに、生きていくというのは、明らかに矛盾している。この原因が黄金錬成それ自体にあるのか、生き残った捕虜にあるのか、はたまたアリス本人にあるのか、今の段階ではわからない。

捕虜と現場を調べる必要がある。
アリスはイクスに、二人の出会いの場所へ行きたい、ということ
を伝えた。

第14話 人間

そこはありったけの黄金色をしていた。木々も地面もなんの変化もなく、放射状に黄金色へと風景が塗り替えられたようであった。

郊外。敵国シユトウラとベルカ王国の境界。そもそもガリアが境界上にあることを考えると、この森は最も危険な場所であった。

アリスが行く、とわがままを言ってから次の日。イクスやその家臣が止めるのを聞かず一人で行こうとしたアリスにイクスは折れた。イクスとアリスは護衛を連れて、黄金の地に着いていた。この黄金はすべて偽物と魔法でわかっているらしい。

アリスは、黄金錬成で死人が出なかったのは捕虜のせいではないと思った。捕虜が黄金錬成のあのエネルギーを避けたとしたらかなりの強者ということになるが、気を失って牢にぶち込まれていることを考えるとその線は薄そうである。

やはり、黄金錬成それ自体が、アリスに原因があるのか。その二つだろうと、睨んでいる。

「ここに、今捕まえている捕虜がいました」

イクスが説明する。そこには、人型の空洞ができた、黄金色の物体の山があつた。おそらくこの黄金が捕虜を包み込んだのだろう。

周りの景色を見る。少し木々が折れ、開けた空間ができていく。空は汚らしい赤黒い色。魔法の威力で空間ができたと考えられる。本来の黄金錬成の威力だと、辺りは焼け野原というより溶岩地帯になっていたはずである。

アリスは二つの仮説を考えた。

一つ目、『戦姫絶唱シンフォギア』の黄金錬成が『魔法少女リリカルなのは』の世界に適用した魔法になったため、威力が原作と違った。

二つ目、『魔法少女リリカルなのは』での魔法で非殺傷設定という純粹魔力攻撃モードの魔法があり、今回の黄金錬成は無意識に非殺傷設定へ変更して魔法を使った。

一つ目なら、有り余った力を持て余すことはないが、いざというときに決定打に欠ける。二つ目なら、いざというときの必殺技になる

が、間違えれば人を殺す可能性が出てくる。

確かめる方法は簡単だ。原作と同じ威力が出せるかどうか、実践してみれば良い。意識すれば、殺傷設定にできる。意識しても威力が弱ければ一つ目の仮設が正しいことになる。

ここで、アリスは、大きく息を吐いた。

人を殺す。現代日本ではあまり意識しなかったこと。殺せる。それを意識すれば、アリスも例外なく、怯える、と思っていたが、アリスに震えはなかった。

アリスは前世の記憶をほとんど忘れている。覚えていることは書籍（参考書小説漫画 e t c）や生活での知識情報（インターネット新聞 T V e t c）。おそらくこの世界に来た最初に使った黄金鍊成、それを行使するための記憶の消却。それが原因だろう。

だから、アリスは今の自分の精神性が前世からのものか、転生してからのものか、判断がつかない。自分が自分である証拠・根拠の消滅。少なくともだんだんと”人”ではなくなっていく感覚。

そのことに怖れはするが、怯えはない。このことに、アリスは人間本来の感覚の喪失を自覚した。人であることを、忘れては危ない。なるべく人間らしく生きることが意識しよう、と心に誓うのであった。

第15話 捕虜

「それにしても、辺鄙な場所ね」

馬車での帰り。アリスがイクスに言った。護衛の騎士が周りを囲っている。

「どうして、あのときイクスはあの森にいたの？」

「それは……まあ、色々とありまして……」

イクスは言い淀む。アリスはジツとイクスを見つめた。その視線に目をそらすイクス。それでもジツと見つめるアリス。イクスは根負けした。

「シュトウラから和睦の申し出があったんです」

イクスが説明する。敵国シュトウラから和睦の話が持ち上がり、その中間役にガリアの領主であるイクスヴェリアが選ばれた。詳しい協議を行うためシュトウラへ赴く途中、襲撃を受け、護衛とはぐれ、アリスと出会った。

「つまり、シュトウラが裏切った、ということ？」

「わかりません。が、その可能性が高いです。シュトウラに抗議をしたのですが、そもそも和睦の話すら知らないと突っぱねられました。今は捕虜を拷問して話を聞き出そうとしていますが……なかなか口を割りません」

変な話である。和睦を提案しておいて、それを取り消すどころかなかったことにする。アリスは政治に疎い。現代日本でも興味がなく、一応の権利として無記名投票だけしていた程度だ。それでも、今回のシュトウラの対応は誠実でない気がする。『魔法少女リリカルなのはVIVID』でのシュトウラ王国は霸王イングヴァルトという誠実な人が治めていイメージであったが、その先祖がこういう戦い方をするとは思わなかった。政治や戦争というのは果たして難しいものである。

「そう言えば、捕虜は私の魔法を受けても生きていたのよね？ どういった状態で連れて帰ったの？ 五体満足？ 怪我は？」

「無傷でした。纯粹魔力による意識混濁のような症状はありません」

が、それ以外は至って健康でした。今は意識もすっかりしています」
やはり純粹魔力でノックダウンしたのか、とアリスは思った。どちらの仮説があっているかわからないが、捕虜が無事ということの可能性の一つとして考えていた。

アリスは目を閉じる。馬車は進む。地面は荒れており、馬車はひどく揺れ、アリスは正直おしりが痛いと思った。

その時、伝令！ 伝令！ と声がした。馬車が止まった。縦に一つ大きい揺れ。アリスはおしりを座席に打ち付けた。アリスははからずも涙目になる。

「なにごとですか!？」

イクスが外の護衛に訊く。どうやら屋敷からの伝令らしい。念話が使えない。妨害の魔法がガリアー帯に使われているとのこと。

伝令が来た。急ぐ内容。シュトウラが屋敷を強襲した。アリス達のいる森は北。今回シュトウラは西から回り込んできたと言う。

「わかりました、すぐに向かいます。ベルカ王都へ救援の連絡をしてください」

それが、と言い淀む伝令。イクスは落ち着いて言った。

「なんですか？ ことは急を要します。重要な情報は早く言ってください」

伝令は意を決して、口を開く。

ベルカ軍はすでにこちらへ向かっております。周辺のガリアの村を襲いながら！

第16話 強襲

イクスは言葉を失った。アリスは、あごに手を当て考える。

「イクス。とりあえず、進んだほうがいいわ」

アリスに言われ、イクスは我に返り、馬車を進める。先程よりも早く馬車は進む。飛んでいけばいいのだが、イクスは魔力が安定しておらず、アリスはそもそも飛び方を知らない。

イクスは俯いて黙ったまま。アリスは語りだした。

「私の考えを言うわ、イクス。事実としてベルカはガリアを裏切ったわ。なぜ裏切ったのか理由は不明。けれど、ガリアの民を襲っているということは、ベルカはガリアの敵。次に、シウトウラが西、ベルカが東から攻めてきている。挟み撃ちね。このままだとガリアは、……滅ぶわ」

沈黙が馬車内に広がった。相変わらず、馬車は縦に横に揺れる。手すりがついてなければ二人は床に転げ落ちていただろう。馬車の窓から空を見上げる。相変わらず、薄汚れた赤黒い雲が覆っていた。「なぜ……」

イクスが俯いたまま、こぼす。

「わからないわ。私はこの世界の政治も戦争もわからない。だけれども、一般論は言えるわ」

イクスは顔を、少し上げる。悲壮な顔をしていた。アリスは続ける。

「理由は三つ考えられるわ。一つ、ベルカはガリアが邪魔だった。二つ、ベルカはガリアを捨てた。三つ、ベルカはガリアを恐れている。そのどれか、または複数」

「恐れて……いる……?」

ええ、と言って、アリスは区切る。咳払い。喉の調子を整えて、アリスは続ける。

「イクスの力を恐れている。ガリアの研究を恐れている。今私が予想できるのは、ここまで」

二人は黙った。

おそらくイクスが人造人間になったことで、その力を怖れる奴が王に進言したとか、そんなところだろう。正直な話、今は理由よりもどうやってガリアを守るのが重要だ。

「シュトウラに助けを求めましょう」

「シュトウラは敵国ですよ！ それに今現在攻撃を受けています！」

イクスが叫ぶ。取り乱したイクスをアリスは初めて見た。大人しい子でもこんな顔ができるのか、と場違いにも感心した。

「シュトウラはベルカに騙されていると思うわ。おそらく、ベルカは戦争の責任をガリアに押し付けたと思う。シュトウラは誠実な国だと聞いた。そして、正義感に強いとも。そのシュトウラが、悪いのはガリアだ、と聞いたら？ 実際にガリアは人体実験をしている。そこからガリアが全面的に悪いということにベルカが工作したと考えられる」

アリスが一通り自説を唱えた。正直な話、穴がある考察だと思う。それでもアリスは根拠のない自信があった。

アリスは続ける。

「ベルカはシュトウラとの戦争に利益がなくなつたのだと予想できるわ。しかし、和睦をするには戦争をしすぎた。だから、ガリアを、悪者にした」

原作知識と前世での歴史の知識をフル活用した仮説は、イクスに顔をあげさせた。

「シュトウラに行きます」

第17話 戦闘

イクスとアリスはわかれた。イクスはシュトウラへ、アリスはベルカ軍のところへ。

今アリスは護衛の騎士の背中に乗って飛んでいる。自分一人で飛べないのが、情けない。それでも、これが一番早いので、わがままは言えない。

戦場が見えた。火が上っている。逃げる人と襲う人がちまちまに見える。

さて、アリスは一つ試したいことがあった。

『グリモワール・オブ・アリス』は一体どこに消えたのだろうか。森の中にはなかった。アリスの周りにもなかった。しかし、アリスは直感的に、本がどこにあるのかわかった。すぐそばにある。この直感はもしかしたら神が転生特典を滞りなく使えるようにするため、備えたのかも知れない。または別の理由があるのかもしれない。しかし、それを考えても答えは出ないだろう。なら、迷わずその直感に従うだけ。

「さて、来なさい！」 Grimoire of Alice!!」
空中に手を伸ばす。本が現れた。表紙には「Grimoire of Alice」の文字。

「インチキミみたいな魔法だけど、リズムに乗って避けなさいよ!!」
本を開く。内容がわかる。アリスは本の通りに、魔法を行使した。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色の魔法。東方怪綺談でのアリスは五色しか使えなかったが、アリスはアリス・マーガトロイドであった。敵を蹴散らす。味方を逃がす。壁のような弾幕、レーザーのような砲撃、異次元からの魔法。どれも相手方にとっては初めての魔法らしい。なら、徹底的に潰すだけ。

突然の襲撃に、ベルカ軍はなすすべもなく、蹴散らされていく。弱い弱い弱い。アリスは高揚する気持ちを耐えながら、魔法をばらまく。

血が出る。地が抉れる。木々が倒れる。ああ、人を殺している。

大規模魔法の行使に頭がぐるぐる回る。護衛の騎士の背中にいなければ、落ちていただろう。それでも、意識を保つ。

魔法はベルカ軍を殲滅するまで、続いた。

アリスは、吐いた。木の後ろで吐いた。

人を殺したからか、大規模魔法に酔ったか、飛行機酔いならず空飛ぶ護衛騎士の背中酔いなのか。それはアリスにはわからなかった。けれども、戦いには勝った。ガリアは挟み撃ちをされずにすんだ。屋敷の方は持ちこたえてくれたのだろうか。イクスはシユトウラ王を説得できただろうか。それもアリスにはわからなかった。

地面に降りたアリス。護衛の騎士は近くにガリア領兵の駐屯地があつて、そこへ行つていた。アリスは一人であつた。

眠りがアリスを襲った。心地の悪い眠り。

第18話 夢

アリスは、眠っていた。夢を見た。

「はい、起きてくださいなのです」

叩き起こされた。夢の中で。

アリスは、何が起こったのかわからない。周りを見渡す。目の前を見ると、神がいた。あの神だ。アリスがアリスになった所以を作った元凶。

「まったく、記憶を失ってなににしに転生したか忘れるなんて、言語道断なのです。それに私と通信できる唯一の道具である”Grimoire of Alice”をどこかになくすなんて、本当にありえないのです」

「ちよ、ちよつと待つてよ！ 本はあれは私のもとにあつたんじやないの?！」

「違うのです。あれは、呼べば持ち主のところに戻る仕組みになつてた、なのです」

アリスの勘は外れていた。なんとも恥ずかしい。

「まったく今回はあなたの根拠のない自信のおかげで、なんとか通信ができるようになったのですが、もう二度と忘れないでください、なのです。あと、なくさないでください、なのです」

アリスは、この神の喋り方が気に入らなかつた。しかし、反論できる要素がない気がして話を戻すことにした。

「それで？ 私をこの世界に送つた理由は？ それとここどこ？ それから私はもとの世界に帰れるの?！」

「一気に質問するな、なのです。とりあえず、前世のあなたは死んだので、もとの世界には戻れません、なのです。この世界で生きてください、なのです」

神が続ける。

「それと、ここは夢の世界です。神が干渉できるのは、夢なのですが、特に神由来の品物を持っている奴のみの夢に干渉できるのです。だから、グリモアがなければ通信ができませんでした、なのです」

一方的に喋る神。今回は口がきけるアリスであったが、怒涛のように続ける神の話に口を挟めなかった。神が続ける。

「それと、あなたをこの世界『魔法少女リリカルなのは』の世界に送ったのは、端的に言えばこの世界のあるものを破壊してほしいのです」「あるもの?」

ええ、と神はアリスを見据えた。

「それは一振りの剣です。全てを断つ剣です。神すらも斬る剣です。それを壊す力はあなた達に付与させていただきました、なのです」

「ん? あなた達?」

「他にも、転生者がいるという意味です。それぐらい察しろ、なのです」

「なんで、私達に? 自分でやればいいじゃない?」

「神は世界に干渉できないのです。干渉できるのは夢だけ、なのです」

「そもそもなんでそんな剣が、この世界にあるの?」

「知るか、なのです。神にもわからないことはあるのです」

「使えねーな」

前世での言葉遣いで神を責める。神は素知らぬ様子。どうでもいいのだろう。アリスの挑発なんて。

「その剣のどこが危険なんだ?」

「危険なのは神を殺せるという点だけなのです。私達にとって最大の脅威なのです。その他は他人の精神を乗っ取って、殺戮を続ける点が面倒くさいですね、なのです」

「で? その剣の名前は?」

「それも知らないのです。頑張って探してください」

「使えない……」

「そろそろ夢が覚めるのです。さらば、なのです」

「ちよ! まだ質問したことが!!」

神が、消えた。アリスの意識もブラックアウトしていった。

第19話 ガレア

目が覚めると、これまた見知った天井が見えた。横を見ると、赤黒い空が見える窓。屋敷のアリスの部屋だ。

ベッドの脇でくぐもった声がする。窓と反対側のベッドの脇を見ると、イクスが椅子に座って、寝ていた。ベッドの傍らで両腕を枕に寝ていた。可愛い寝息が聞こえる。こうやって見ていると、イクスは女の子だということがひしひしと伝わってくる。

アリスが上体を起こすと、イクスが起きた。眠そうな目をこすりながら、アリスを見る。まだ寝ぼけているようだ。

「イクス、おはよう」

「っ！ アリスさん！ 大丈夫ですか!? どこか悪いところとかないですか!？」

大丈夫よ、と言ってアリスはイクスを落ち着かせる。アリスもイクスに聞きたいことがあったからだ。

「私はどのくらい寝ていたの?」

「三日ですよ。死んだように眠っていました」

「戦いは? シュトウラとの戦闘はどうなったの?」

「あ、はい……えっと、アリスさんの言ったとおり、シュトウラ王は誠実な方で、私の話を最後まで聞いていただき、攻撃を止めてもらいました」

イクスが続ける。

「ベルカに関しては、完全に敵対してしまいました。修復は……無理でしょう」

「どうやらシュトウラの和睦の件も、イクスを暗殺するための嘘であつたらしい。捕虜が自白した。敵対するのは避けられなかっただろう。」

「ガリアは……どうするの?」

アリスが訊く。イクスのはっきりと頷く。

「独立することにしました。ベルカ王国にはいられませんし、シュトウラもあまり豊かと言えない国なので、ガリアの瘦せた土地を抱え

させるのは恩を仇で返す行いです。なので、ガリアは、ガリアで生きていこうと、考えました」

「あなたの民は、どう思っているの?」

「民は、……こんな私についていく、と言ってくださいました」

「これから大変ね」

「ええ、そこで提案があるのですが」

提案? と聞き返すアリス。イクスは少し緊張した面持ちで座り直す。

「アリスさん。アリスさんが良ければ、ガリアの力になってくれませんか?」

「いいよ」

「そうですね、やっぱり無理ですよ。断られるとは……あれ?」

アリスは、笑った。

「いいよって言ったの」

「い、いいんですか!」

「逆に私なんかでいいの?? こんな森であつた身元不明の不思議魔法を使う輩を仲間に引き入れて」

イクスは笑った。

「何を言っているんですか? たしかに最初は怪しみました。私を助けたのも何か裏があるんじゃないか、と思いましたが。家臣達もです。ですが、ガリアの民を助けてくださいました。あれほど強力な魔法をガリアの民を避けて、ベルカの軍人のみに当てた。別にガリアの民に攻撃を当てても言い訳はできたはず。それをしなかった。一人もあなたは民に手を出さず、一人も逃さずベルカを殲滅した。誰もあなたを疑いはしないでしよう」

アリスは、なんとも言えない顔をした。アリスは、話を変えた。

「わかったわ。私はガリアのために戦うわ。国の名前は決まっているの?」

「はい! ガレア王国、というのはどうでしょうか?」

「意味は?」

「実はガリアもガレアもガロアという古語の変化形なんです。ガロア

は”栄光なる”という現在形。ガリアは過去形で”かつてなる”。
そして、ガレアは未来形で”きたる”、です」
「栄光が、くる、国」

アリスは、未来を思っ、目を閉じた。

第20話 これからのことを考えて

これからのことを考えて、アリスは人形を作ることにした。街に行って人形師のもとに弟子入りした。精巧なビスクドールを作るために。

”Grimoire of Alice”は強い。しかし、同時に弱点もあった。まず魔法酔いすること。強力な魔法故に気持ち悪くなって、意識を保つのが困難であった。次に気分が高揚すること。人を殺しても、いや人を殺せば殺すほど狂気に侵されそうになった。最後、魔法の威力を落とせない。調節ができなければ、被害が広がる。今回はたまたまガリア側に被害が出なかったが、次の保証はできない。

黄金鍊成も記憶を失う。”Grimoire of Alice”もだめ。そうなると戦える方法は、限られてくる。

アリス・マーガトロイドの人形を使った戦い方、ローゼンメイデンのような完全自律のドール、そして、キャロル・マールス・デーリンハイムの自律人形オートスコアラーとファウストローブ。

これらがアリスの戦いの基本になってくるはずだ。この中で投資して最もリターンの多いものは、人形作り。

アリスは、街の人形師に弟子入りしたのだが、わずか一年の間に人形作りをマスターしてしまった。やはり人形師の転生特典が影響しているのだろう。

「アリスさんの才能はすごいですね。まさか一年で人形作りができるようになるなんて……」

「イクス」

アリスは、人形のための服を作りながら、イクスに言った。ここはイクスの書斎。イクスは執務をしている。

「前から言っているけど、イクスは王様になったのよ。なら、私にさん付けは良くないわ。アリスと呼んで」

「ええっと……わかりました、あ、アリス」

「それから、これから人を呼び捨てで呼ぶこと。王様だから相手になめられないようにしないといけないわ」

「わ、わかりました」

イクスが縮こまる。アリスは、ふふふと笑った。イクスがまるで子供のようにだったからだ。

子供のようにだったから、というのも不思議な理由だ。イクスは、見た目子供なのだから。でも、正確には50歳をこえている。人造人間だからだ。

アリスは人形の服を完成させた。上海人形の服。今はアリス・マーガトロイドの操っていた人形を作っている。青色の服。蓬萊人形の服は赤いのを考えている。同じ顔の色違い。この子達は本来幻想郷にいたはず。この世界でどう活躍するのか、アリスは瞑目した。

目を開ける。窓を見る。相変わらず、不吉な赤黒い雲が厚く覆われている。原作でイクスは青空が見たいと言った。結局イクスは故郷の空を見ることができなかつたが。

アリスはイクスに青空を見せてあげたい、と思った。

第一章第二節 古代ベルカーガレア王国篇 — 甲 — プロローグ 人形師アリス

アリスは人形作りが日課になっていた。イクスにお願いすれば、屋敷の中に工房を作ってくれた。戦力拡充のためとはいえ、立派な工房を作ってくれたことにアリスは感謝した。

ガレア王国が独立して、早三年。その間色々あった。ガリアが前から研究していた、不毛な土地でも育つ農作物。品種改良や遺伝子操作を続けて、完成した。イクスや人体実験の成果であるのが闇が深い気がするが、アリスは気にしないことにした。

アリスが人形師に弟子入りしたのも、シウトウラと同盟を結んだのも、ベルカと国境紛争が起きたのも、アリスがガレアの顧問官にイクスの補佐官に任命されたのも、アリスがアリス・マーガトロイドのトルコカラーの衣装を作ったのも、この時期である。アリスは原作『東方妖々夢』以降のアリス・マーガトロイドの格好になった。背丈は口リスのままであつたが。

神の言っていた剣は、全く手がかりすらつかめなかった。
忙しい毎日であつた。

その間にできた人形。アリスの渾身の出来、二種類の人形。上海人形と蓬莱人形。青い服が上海で赤い服が蓬莱。半自律に動く人形でアリスが魔力系を通せば動き出す。簡単な命令で細かい作業をしてくれる。その原理は簡易的な人工リンカーコアを人形に埋め込むことによつて成り立っている。ぬいぐるみのときと違うのはその強度。ぬいぐるみは全部糸と布で出来ていたが、上海と蓬莱は服と髪以外は陶器で出来ている。これが各十体で合計20体ある。アリスはこれらを同時に自由に操ることができる。

努力すれば転生特典の範囲内であれば、簡単にマスターできるので便利である。やりがいがあるかどうかというと、特に感じない。そこにやりがいを求めているアリスは、人形は戦力という認識しかない。そこがアリス・マーガトロイドとアリスの違いであつた。

「ありがとうございます。上海」

上海が空になったカップに紅茶を注ぎ、イクスが礼を言う。アリスは、不思議に思った。

「イクス。その娘は私の命令で半自動的に動いているのよ。お礼は言わなくていいわ」

「アリスはわかっていますね」

イクスは呆れた。アリスは呆れられる理由がわからず困惑した。

「人形には魂が宿ります。良い心で接すれば、優しい魂が、悪い心で接すれば、悪戯な魂が。これは古くからの教えですよ。……それに」

「それに？」

「してもらったら、お礼を言うのは当たり前です。それが作られたものとはいえ、半分はこの娘の意思ならば、特に」

アリスは黙った。イクスがとても優しい顔をしていたからだ。アリスは最近心が冷たいと自覚していた。人間の心を忘れかけているような感覚。

蓬萊がアリスのカップを覗いた。空だった。蓬萊はポットを持って、アリスのカップに注いだ。アリスは、イクスを真似て、お礼を言った。

第一話 水銀燈

それは完成する間近であった。鳥の羽のようなゴシック服。白銀にきらめく長い髪。大きさは赤子のように腕の中にすっぽりと入るが、体のバランスは嫁入り前の娘のような完璧さ。それが机の上に再現されている。

水銀燈^{スイギントウ}。ローゼンメイデン第一ドールにして、最強のドール。それが、アリスの手で完成しようとしていた。

今まで作ってきたローザミステイカ、もとい人工リンカーコアは、半自律の人形を作るため、あまり大きなものは作ってこなかった。おそらく完全自立の人形を作るには、それこそ拳大ほどのリンカーコアが必要になると、アリスは考える。

人間なら歩く、持つ、考える、そういった行動はすべて生物的な器官が行う。完全自立の人形はそれらをすべて魔法に頼らなければならぬ。それはつまり、大量の魔力が必要になるということ。

もちろん、ローザミステイカとリンカーコアは、正確には異なる。リンカーコアはただの魔力生成器官であり、それ以上でもそれ以下でもない。人形を動かす能力はない。ローザミステイカにはそれができる。上海と蓬莱で確認済みだ。おそらくローザミステイカはリンカーコアと、人形を魔力で動かすための魔法が組み込まれていると予測できる。が、細かいところはアリスにはわからないので、保留にしている。

普段より意識を集中する。工房に籠もることはすでにイクスには言っている。長い時間になるとも。工房は内側から鍵をかけている。誰にも邪魔をされないように。

作るのはより厳格なイメージ。アニメのローザミステイカ。そして、動く水銀燈。ローゼンはなぜ彼女たちを作ったのか、その理由。

永い瞑想。アリスは目を開ける。目の前には、人形。原作と同じ服。瞳は赤。それが机の上に置いてある。

その胸に手を当てる。両手を。人形は動かない冷たい。そこに生命の息吹を注ぎ込む、ような想像。この世界の魔法は、想像で創造する。そうやってやってきた。これまでも、そして、これからも。細かい原理原則はある。条件や禁止事項もある。だが、主人公・高町なのはが才能があるとはいえ、ああも簡単に魔法が使えたのだ。神様印の転生特典がある自分^{アリス}が、できないはずがない。そうアリスは言い聞かせた。

それがどれほどの時間、かかるかはわからないが……。

一週間。一ヶ月。いや、それ以上。アリスの時間感覚がなくなるまで、続いた。

「……」

まだ話すことができない。まだ歩くこともできない。それは口の動かし方を、足の動かし方を知らないから。

しかし、わずかに、身じろぎした。震えるような、わずかな動きだったが、動いた。ローザミスティカはたしかに、人形に入った。
水銀燈の誕生だった。

第二話 転生特典

中庭にいた。水銀燈スイギントウが、上海と蓬萊に連れられて、よちよち歩きをしている。アリスとイクスはそれを暖かく見守りながら紅茶を飲んでいる。

「早いですね。二日で、もうあそこまで歩けるようになりましたよ」

「そうね。魔法での調節が早い具合に体に馴染んできているのかもね」

イクスは、ため息をついた。

「違いますよ。水銀燈の努力の成果です」

「……そうね。失念していたわ。……イクス、ありがとう」

イクスは微笑んで応える。水銀燈は目標の地点まで歩いた。こちらを向く。バランスを取りながら、アリスに手を振った。アリスも手を振り返す。

「……最近、怖いわ。どんどん人の気持ちを忘れていっているような気がして」

イクスは、アリスの声に耳を傾ける。アリスは吐露する。

「最初は、記憶を失ったからだと思っていただけ、それだけでは説明できないわ」

「……あの、話ですか？」

イクスの質問にアリスは頷く。

イクスには、神の話をした。もちろん、全てではない。細かいところは全部夢のせいにした。転生したことや、前世でのことは一切話していない。この世界の未来の話に関わることだ。そう簡単には言えない。

「もしかして、神の加護……私の能力が、人間らしさを奪っているのかもしれない」

転生特典は、神の加護。転生者については、神の使徒と説明している。

転生特典。これらは各キャラクターが段階を追って身につけたもの。キャラクターの必死の努力で手に入れたもの。それを簡単に手

に入れたものは少なからず何かしらの影響が出る、とアリスは考えている。現に、感情というか、人の心というか、精神性が変わっているのを自覚している。

「心配しなくて大丈夫ですよ」

イクスが言う。アリスはイクスの顔を見た。そこに憂いも同情もなかった。

「もし、アリスが人間の心を忘れても、私は忘れません。私が覚えているのなら、何度だってアリスに、人間の心を思い出させてあげますよ」
そう言つて、イクスは微笑んだ。それに、とイクスはアリスから目を離す。アリスは、イクスの視線を追う。その先には水銀燈が上海と蓬萊と一緒に、よちよちとこちらへ歩いて来ていた。

「私がいなくても、あの娘達がいいます。これから誕生する娘達もいます。あなたは一人ではないんですよ。もし、不安なら、周りを宛にするのも、いい考えです」

アリスは、この世界の未来について考えた。イクスとはしばらく会えなくなるだろう。それを阻止できるかどうかは、アリスにはわからなかった。自信もなかった。

それでもイクスは、アリスに思い出させる、と言った。この娘達もいる、と。

アリスは、肩にかかった恐怖が和らいだ、そんな気がした。

第三話 理由

「いい？ 水銀燈^{スイギントウ}。これから私はあなたの妹達を作らなければなら
いわ。だから、当分の間、会うことができないけど、甘えてはいけな
いわ。だって、あなたはお姉さんになるんですから」

「はい！ わかりましたわ、お母様！」

工房の扉の前。アリスは、膝をついて、水銀燈に視線を合わせる。
大人アリスだったら、きつと見下ろす形になつていただろうが、子供
アリスもといロリスである現在、視線の高さはそこまで変わらない。
アリスは、水銀燈の元気な声を聞いて、ホッと微笑んで、立ち上がっ
た。

「それじゃあね、水銀燈。なるべく早く終わらせるからね」

そう言つて、アリスは工房の奥へと進み、扉は閉められた。

人形自体はすでに六体できている。あとはローザミステイカを作
り、それを人形に、いや彼女達の中に宿さなくてはならない。水銀燈
のときは、二ヶ月かかった。十分集中できたというのもある。今度も
その間に完成させれる保証はない。それでも、戦力拡充には必要だ。

ここで、アリスは不思議に思った。なぜ私はローゼンメイデンを作
ろうと思ったのか。それは戦力拡充のため。なぜ戦力拡充をしよう
と思ったのか。ガレア王国を助けるため。なぜガレアに力を貸すの
か。イクスのため。なぜイクスのために戦おうとするのか。イクス
は、イクスは、イクスは……。

アリスはそこまで思い至つて、笑つた。

なんだ、人間らしい部分はまだまだ残っているじゃないか。

アリスは、作業を始めた。最初は金糸雀^{カナリヤ}から。また深い永い集中の
波に浸かり始めた。

アリスは、一息ついた。金糸雀だけでもう何ヶ月も外に出ていない。そもそも今はあれからどれくらい経ったのか。

机の上には、金糸雀。わずかに震えるだけの、まだまだ弱い生き物。この子だけでも外に出してあげたほうがいいだろう。アリス自身もだいぶ疲れた。

アリスは、ここらで休憩することに決めた。

金糸雀を抱え、工房の扉を開ける。ハツとなる。水銀燈が向かいの壁に寄りかかって、寝ていた。

どうして、とアリスが思っていると、足音が近づいてくる。見ると、イクスが毛布を持って、こちらに来ていた。

「！アリス。おかえりなさい」

「た、ただいま？」

イクスは水銀燈を見る。アリスも見た。規則正しい寝息を立てている。イクスは水銀燈に毛布をかけた。

「えっと……これは？」

「待っていました、ずっとあなたを」

「ずっと？」

「ええ、朝昼晩。ずっとです」

アリスは、言葉を失った。イクスがアリスの腕の中の娘に気がつく。

「その娘が新しい娘ですか？」

アリスは頷いて、金糸雀、と言う。イクスは、そうですか、と微笑む。

「はじめまして、金糸雀。私はイクスと言います。アリスの、あなたの

お母様の友達です」

イクスは、そう言つて、さあ、とアリスを水銀燈へ向けさせた。

「アリス。金糸雀に水銀燈を紹介してあげたら？」

アリスは、啞然としていたが、目を閉じ、微笑んで、そうね、と言つた。アリスは水銀燈に近づく。膝をつく。できる限り金糸雀に水銀燈を見やすいようにした。

「金糸雀、この娘が水銀燈。あなたのお姉さんよ」

第四話 訓練

アリスは新たに、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキのローザミステイカを作った。二人の場合は、原作でも双子のドールとして描かれていた。アリスも二人を同時に作ろうと思いい、想像と創造を行った。それが良かったのか、水銀燈スイギントウよりも二人一緒のほうが、出来上がりが早かった。これが一番時間がかかったのは金糸雀カナリヤのままであった。

「金糸雀、いつまですねているの？」

「だってお母様！ 水銀燈が！ 水銀燈が！」

「まったくあれだけで怒るなんて、金糸雀はトロいくせに短気ねえ」

「ああ！ またトロイって言ったかしら!!」

再燃する喧嘩。金糸雀は普段からよくコケたり、ドジを踏んだりする。それを水銀燈がトロイと揶揄しているのだ。

翠星石と蒼星石は上海と蓬萊に支えられながら、歩行練習。イクスは、書齋で仕事。いつもの午後。中庭から見上げる空はいつも通り赤黒い。

金糸雀は、何かを思い出したように、ニヤリ、と笑って、水銀燈を見る。水銀燈は嫌な予感がしたのか、なによ、と言って構える。

「カナは、水銀燈と違って我慢強いから、トロイとか短気だとか言われども全然問題ないかしら」

「あら、まるで私が我慢強くないみたいに聞こえるんだけど？」

「その通りかしら！ だって、お母様が工房に籠もっているとき、寝ぼけて、お母様！ お母様！ って、屋敷を彷徨っていた寂しがり屋の水銀燈とは違うかしら」

「ちよ！ なんて、あなたがそれを知っているわけ!？」

「イクス様に聞きました」

「黙って言って言ったのに!!」

アリスは懐中時計を見た。

「はいはい、二人ともそこらへんにしなさい。そろそろ訓練をするわ」

はい、と答えて、椅子から降りる二人。上海と蓬萊が翠星石と蒼星石を代わりに座らせる。

「それじゃ、いつも通りね」

いつもこの時間は戦闘訓練だ。水銀燈と金糸雀を戦えるようにするということもあるが、アリス自身の戦闘経験も稼ぎたいためだ。

魔法で20体あまりの人形を召喚する。アリスはすでに原作のアリス・マーガトロイドの技のある程度習得していた。

水銀燈と金糸雀は目の色を変えた。

「それじゃあ、始めるわ。『リトルレギオン』?2」

武装した12体の人形が水銀燈と金糸雀に襲いかかる。水銀燈と金糸雀は左右に分かれる。金糸雀はバイオリンを取り出して、音波の攻撃。水銀燈は背中から黒い翼をはやして、羽根を飛ばす。

レギオンが盾で、武器で攻撃を受ける。アリスは魔力糸を張り巡らす。

訓練は晩ごはんまで続いた。

第五話 兵器

「ちよつと！ 金糸雀^{カナリア}！ 待ちなさい!!」

「待ってって言われて待つ鳥はいないかしら!!」

水銀燈^{スイギントウ}が金糸雀を追いかけている。金糸雀が水銀燈に何かしたのだろう。いつもの光景だ。最近覚えた飛行魔法を駆使しながら、屋敷内を駆け巡っている。

アリスは、怪我はしないように、と言う。はい、と二人は元気よく応え、廊下を飛んでいく。呆れるアリス。本当に人間のような振る舞いだ。一応危ないことをしないか、蓬萊に見張るように命令した。蓬萊は水銀燈達を追って飛んで行った。

アリスはイクスの書斎に来た。後ろに控えていた上海が前に出て、ノックしてくれた。上海に、ありがとう、と言うのと、中から、どうぞ、と聞こえるのは同時だった。

アリスは扉を開けた。

「アリス、待っていました」

「ごめんなさい。待たせたかしら？」

「あ、いえ。そういうわけではありません。大丈夫ですよ」

アリスがイクスに差し出された椅子に座る。上海が紅茶の用意をしに行く。イクスが机につく。紅茶が届くまで、二人は黙っていた。アリスは今日話す内容を知っている。

「私が、翠星石^{スイセイセイキ}と蒼星石^{ソウセイセイキ}を作っているときのことよね」

紅茶が用意されて、アリスが言った。イクスは、頷く。

「それで、イクスは、どうするの？」

「抗議文はすでに送りました」

「返事は？」

「ありません」

アリスはため息をついた。

「それは前回もでしょ。このままなめられたまま放っておくと、領土

を实效支配されるわ」

現在、ガレア王国はベルカ王国と敵対関係。シュトウラとは同盟関係。その他の国々とは静観状態。ガレアの隣国はベルカ、シュトウラ、そして、ダールグリウン家が建国した帝国。東から南をベルカ、北から西をシュトウラ、帝国とは西で国境を接している。

そのダールグリウン家が統治している帝国。からこれまで十数回越境行為が近くのカレア住民によって確認されている。静観状態と思っただけに、ここ最近の行動は謎だ。

「目撃情報は具体的にどんな内容だったの？」

「悪魔のような人物が、国境付近にいた、ということらしいです。それ以上の情報はないですね」

帝国はシュトウラよりも早い時期からベルカと袂を分かっている。今でもベルカを毛嫌いしている。理由はわからないが、ベルカの差し金とは考えられない。

意図が読めないだけに、一度ここで本格的に調査する必要がある。た。 ” 悪魔 ” というのも、気になる。

「ベルカと敵対している以上、帝国とは仲良くしたいのですが……」

「敵の敵は味方……とは限らないわ」

「それを確かめるためにも、探る必要があります」

「問題は、誰を送るか……よね」

イクスは、頷いた。アリスは一拍おいて紅茶に口をつける。

今までにも帝国国境に偵察隊を送ったが、誰一人として帰ってきていない。無事で良ければよいが……。

「金糸雀を向かわせるわ。人員は少ない方が偵察には向いているでしょう。それに私はもしものときのためにここを離れられない。他の兵士では役不足」

「ですが、金糸雀はまだ産まれてまだ一ヶ月です」

「あの娘達は生まれながらに兵器よ。そのために作ったのだから。これはあの娘達にも言っているわ。兵士達との模擬戦も優秀。大丈夫、偵察任務だけで戦闘はないわ。任務失敗を気にしているのなら、水銀燈も同行させる。問題はないでしょ？」

イクスは、黙った。アリスも喋らず、紅茶を飲む。上海は宙に浮いて、待機している。

窓から見える景色は荒れた土地と赤黒い空。ベルカ世界は未だ戦禍にあった。

第六話 国境

水銀燈スイギントウと金糸雀カナリアは、国境の空を飛んでいた。汚らしい赤黒い空、怪しげな木々が大地を覆っている。二人は数回程度だが、屋敷の近場には出たことがある。遠出は初めてだ。アリスもいない。初めての任務。

「大丈夫かしら……」

「どうかしたのお？ 金糸雀」

金糸雀は不安そうな声をこぼし、水銀燈は面倒臭そうな表情をした。

「どうかしたのお？ じゃないかしら！ カナ達、初任務なのよ！

なんで、水銀燈は不安にならないのかしら!」

怒鳴る金糸雀。呆れる水銀燈。

「別に、不安じゃないわけではないわよお」

え、と金糸雀。水銀燈はあくびでも出しそなほど眠そうな顔をしながら言う。

「ただ、今更喚いたところでえ、どうしようもないんじゃない？ そりゃ、あなたは一ヶ月ポツチしか生きてないわけだけとお、お母様を選んだのよ。本当はあなた一人で行かせるつもりだったらしいわあ」

「工工エエ！ カナが!?! なんで!?!」

「そりゃあ、私はどちらかというど戦闘向きだし、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキはまだ産まれたばかりよお。偵察向きはあなただけ。そんなことわからなかったの？ このおバカさん」

「ちよー！ 最後の一言は必要ないかしら!!」

それでも金糸雀は水銀燈ののんびりとした姿勢にホツとするのであった。やはり第一ドール、長女、お姉ちゃんだけある。

「そろそろ目的の場所よ」

水銀燈が速度を緩める。金糸雀も続く。二人はそのまま森の中へと降りていく。

森は不気味な木々の集合体であった。根はせり出し、幹は曲がり、枝々は空を縛り上げている。生物の声は聞こえない。声を潜めてい
るだけなのか。そもそもいないだけなのか。それは判断のしようが
なかった。

金糸雀はビクビクして、出そうになる心臓を手で戻している。心臓
があればの話だが。

「ここね。魔力の残滓があるわあ。それも強い」

水銀燈の目が細められる。金糸雀は水銀燈の横顔を見て、ドキツと
する。笑っていたからだ。

「お母様には、『戦闘より生きて帰りなさい』って言われたけどお、ど
うも私は戦闘狂な部分があるらしわねえ。まああ、そのようにお母様
が作ったんですものねえ。仕方ないかしら」

「す、水銀燈？」

金糸雀が水銀燈の様子におびえる。水銀燈ははつきりと前を向い
て言った。

「そこにいるんでしょお？ 出てきたら？」

金糸雀が驚き、水銀燈の視線を追う。木々の間。果たしてそこから
出てくるのだろうか。

「ごめんなさい。後ろから出てきてしまいました」

少女が水銀燈達の後ろから現れた。つば広の帽子を被った少女。
水銀燈はほほを赤くする。金糸雀はほほを膨らませ、笑いをこらえ
た。

微妙な空気が流れた。

第七話 転生者

「あなた、だあれえ？」

あ、なかつたことにした、と金糸雀カナリアは思った。

「今、なかつたことにしませんでしたか？」

敵の少女もそんなことを言った。水銀燈スイギントウはプルプル震えている。

「もういいじゃない！ とにかく、あなたよ！ あ・な・た!!」

「私？ 私は……」

そう言つて、水銀燈と金糸雀を、なめるように観察する少女。金糸雀はヴァイオリンを構えた。水銀燈は黒い翼を向ける。

「おっと、私は敵じゃないですよ。ゆっくり話し合いますよ？ お人形さん方」

「敵じゃないって、証拠でもあるのかしら？」

金糸雀が訊く。戦闘準備は整っている。いつでも始められる。対して少女はなんの構えすらとっていない。自然体とでも言うような態度。

「とりあえず、私はいいし。古明地こめいじはいいし」

「で、なんでここにいるのかしらあ？ ここは国境近くよお。怪しいにもほどがあるわあ」

こいしが真剣な顔をして、実は、と言う。二人は構えたまま警戒を怠らない。

「信じてもらえるかはわからないですけど、私はこう見えて、迷子、です!! 迷子になりました！ 助けてください!!」

え……、とその場は白けた。

話を聞くと、神と名乗るものに、無理矢理ここに連れてかれた、と言う。"神"。それはアリスをこの世界に遣わしたものの名前。水銀燈と金糸雀はそれに合点して、この古明地こいしなるものが神の使者だと推定した。

「どうするかしら？ 水銀燈」

「うーん、そうねえ」

水銀燈はこいしを見る。土をイジイジして、出てきた石で地面に絵を描いている。マイペースにもほどがある。

「とりあえず、お母様に紹介するしかないわねえ」

「でも、任務は？」

「この際、任務は後回しでもいいんじゃないかしらあ。イレギュラーすぎるもの。お母様もイクス様も許してくれるわ」

「ねえねえ、何話しているんですか？」

こいしが尋ねる。水銀燈は呆れて、口を開こうとして、こいしのはるか後方、木々の間に、人がいた。赤い服、へんてこな帽子、金髪赤目の少女。その少女がこちらに気がついた。そして、ニヤリと笑った。

「っ！ 逃げるわよ！」

水銀燈は、本能的に察した。あれとは戦ってはいけない。水銀燈はこいしと金糸雀を掴んで、飛ぶ。

「ちよつと！ 水銀燈！ どうしたのかしら!？」

「敵よ！ 敵！」

「どこに行こうというの？」

上から声。水銀燈を見た。宝石のようなきれいな骨だけの翼。赤い瞳はこちらを獲物と見ている。

水銀燈は黒い羽根を飛ばす。数百数千の羽根。少女に全弾命中。結果を見ずに、飛ぶ。

「待って」

水銀燈を衝撃が襲う。気がついたときには三人一緒に地面に叩きつけられていた。

痛いかしら、と言う金糸雀を無視して、空を見る。赤い少女が無傷で飛んでいた。

「逃さないわよ」

少女は笑って、そう言った。

第八話 逃走

水銀燈は金糸雀を見た。金糸雀は敵の少女を見て、強張っている。水銀燈は、自分はどうにかしないといけない、と思った。

古明地こいしが叫ぶ。

「あなた、フランドール・スカーレットですか？」

敵の少女が舞い降りてくる。宝石の羽がきらびやかに光る。

「そうよ、私はフランドール・スカーレット。悪魔の妹よ」

そう言つて、三人を見る。金糸雀、こいし、そして、水銀燈で視線を止める。ニヤリと笑った。

「それじゃ、戦いましょ。狂うほどに！ 『スターボウブレイク！』」
色とりどりの散弾が舞い上がる。そして、急行落下。水銀燈を襲う。水銀燈は避ける。冷静に一つずつ目で追いながら。しかし、避けるのが精一杯だった。

「金糸雀！ こいしと一緒に逃げなさい！！」

金糸雀が我に返る。

「で、でも、水銀燈は?!」

「私はこいつを抑えるわ！ あなたはお母様に連絡して！ 援軍を！」

大丈夫、それまで持ちこたえて見せるから!!」

金糸雀がまだぐずぐずしている。早く！ と水銀燈が叫ぶ。金糸雀は決心がついた。

「すぐにお母様を呼んでくるかしら！ それまで頑張つて！」

そう言つて、こいしの袖をつかむ。

「行くかしら！」

「あら？ どこに行くの？ 遊ぼうよ」

飛ぼうとした金糸雀は吹っ飛んだ。木にぶつかる。散弾にあたったのだ。

「まったくもう。ここに来た人たちはみんなすぐ逃げるんだから。」

『カゴメカゴメ』

格子状に並べられる魔力弾。水銀燈、金糸雀、こいしは檻の中に閉じ込められた。

「さてと…逃がさないよ」

巨大な魔力弾。それが金糸雀へ向かう。檻の散弾は金糸雀の動きを制限し、金糸雀は避けられない。

「あ、」

と、もれる声。そして、金糸雀と魔力弾の間に入る影。金糸雀を水銀燈が庇った。水銀燈は弾かれ、魔力弾も消える。水銀燈はおもちやのようにはねて、地面を転がった。

「すいぎんとう…？…？」

水銀燈は動かない。いつの間にかフランドールの攻撃は止んでいた。

「水銀燈！」

金糸雀が駆け寄る。が、

「次はあなたよ。『禁じられた遊び』」

フランが水銀燈と金糸雀の間に入る。十字になった光弾が襲う。走っていて勢いが止まらない。当たる。

そのとき足に引つかかるものがあり、金糸雀はこけた。光弾は頭の上を通り過ぎた。

「よかったよ。私も能力を扱えるように」

どこから現れたのか、こいしがそう言つて、金糸雀を抱える。フランは突然消えた金糸雀を探すようにあたりをきよろきよろと動かす。

「ちよつと、どこ行つたの！」

「とりあえず、逃げよっか」

フランの叫びに、くわばらくわばら、としながらこいしは戦場から離れる。

「ちよ、ちよつと待つてかしら！ 水銀燈が！ 水銀燈が！」

「残念だけど、流石にフランちゃんの近くは光弾がすごいことになつてるから、行けないよ。残念だけど」

こいしは戦場を離れた。金糸雀は水銀燈に手を伸ばす。それはどんどんと遠ざかっていくだけ。

「水銀燈！ 水銀燈！ ……お姉様！」

金糸雀の声は森に消えた。

第九話 急行

アリスがその知らせを聞いたのは、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキの歩行がある程度様になってきた時だった。もちろん中庭にいた。イクスも休憩中であつた。上海と蓬萊がアリスとイクスの分の紅茶を用意してくれていた。

「……………ありがとう。金糸雀カナリア」

泣きじゃくる金糸雀にアリスはできるだけ優しく言つた。金糸雀は我慢の糸が切れたのか、アリスに縋りつき大声で泣いた。アリスは金糸雀の頭を撫でた。

「それで、あなたが……………」

アリスは古明地こめいじこいしに目を向けた。

「はい、私は転生者です。アリス・マーガトロイドさん」

少し演技の入つた様子でそう答えたこいし。アリスはうさん臭く思つた。

「ごめんなさい。ちよつと込み合つてて。すぐにうちの娘を取り返しに行かないといけないから」

金糸雀はが見上げる。

「でも、水銀燈スイギントウは！ 水銀燈は！」

「大丈夫よ。私がいれば、水銀燈は元通りになるわ。だから、金糸雀。戦闘があつた場所まで案内して」

「それなら、私が覚えていきますよ」

こいしが口を挟む。アリスは、しかし、と言う。

「別に遠慮しないでください。金糸雀さんは私を連れてくるのにだいぶ消耗しているでしょうし。なにより、二人だけで話したいこともあります」

「……………わかつたわ。それじゃ、行きましょ」

アリスは金糸雀を優しく引き剥がす。金糸雀は抵抗せず離れた。

抱えてイクスに渡すアリス。

「イクス、金糸雀達をお願い。行つてくるわ」

「はい、気を付けてくださいね」

イクスはアリスから金糸雀を受け取り、不安そうな顔をしていた。アリスとこいしは屋敷を後にした。

「なるほど、そう言うわけで、ローゼンメイデンがいたわけですね」

こいしはアリスに抱えられながら、頷く。アリスはこいしに今までの経緯を話した。ここが『魔法少女リリカルなのは』の世界であること、自分の能力のこと、今回のダールグリユン家とのいざこざのこと。それよりも、アリスは気になることがあった。

「その敬語やめて。こいし口調にしてもらえない？ 違和感がすごいわ」

「そ、そういわれましても、前世ではこういった口調でしたので……」アリスは諦めた。強要することに意味はない。言っても、すぐにもとの口調に戻るだろう。

こいしが、ここです、と言った。アリスは降りる。降りた森は、地面がえぐれ、悲惨なことになっている。フランも水銀燈もない。魔力の残滓を感じる。間違いなくここが戦場だったと思われる。

「間に合わなかったようね」

アリスが目を鋭くさせ言う。かなり早くついたが、一時間くらいは経ってしまった。金糸雀が逃げてきたのも入れると、もつと時間がかかっている。

「敵は、フランドールって言ったわよね」

「はい、おそらく彼女も転生者でしょう」

空はいつもより暑い雲で覆われていた。雨が降りそうだ。アリスは、早めに帰りたい、と思った。

アリスが森の奥を見る。そこには金色の魔力の残滓が残っていた。

第十話 追跡

アリスと古明地こめいじこいしは魔力の残滓を追った。まるで、こつちだ付いて来い、とでも言われているような魔力の残り香。アリスは警戒しながら、森の中を進む。

「フランドールってことは、能力が厄介ね」

『『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』ですネ』

全てのものには、”目”と呼ばれるその一点を突けばものが壊れてしまうという急所がある。フランの能力は、その”目”を自分の手の平に、移動させて、握りつぶすというもの。握りつぶされた”目”は消え、”目”を失ったものは破壊される。人間も例外ではない。

「転生者、という話だけど、性格は見てどうだった？」

「原作通り？ いや、それ以上に厄介かもしれないです」

こいしが語るには、原作のフランは引きこもりだが理知的な会話をする。対して、ここにいるフランはそもそも話をしようとしなかった。積極的に攻撃を仕掛けてきた。逃さないような戦いをしてきた。「他にも人を襲っているような発言をしていました。あまりいい性格とは思えません」

最悪の場合、水銀燈スイギントウはローザミスティカすら壊されている可能性がある。流石のアリスでも全く同じローザミスティカを作り出すのは至難の業。例えできたとしても、今まで過ごした記憶は失われているだろう。

アリスは歯を食いしばった。

「こつちね……」

かなり奥に進んだ。森が深まった。ダールグリユン家領には入っているだろう。国境侵犯は向こうが先だから大目に見てほしい。そもそもフランがダールグリユン家の刺客という可能性が高い。ダールグリユン家と戦争になるかもしれない。そうなったら、イクスの、帝国と仲良くする、という願いは叶えられそうにない。

「ん？」

アリスは止まる。こいしが首をかしげる。アリスが指差す。その

先には、大きな城があった。

「どうやら、あそこに通じているようね」

「えっと、あの城は？」

「ダールグリウン家のものだったと思うわ」

「じゃあ、やっぱり……」

アリスは、深く息を吐いた。これからの行動は戦争の引き金を引く可能性がある。用心して行くべきだ。

「あなた、能力が使えるのよね？」

「そうですが……まさか」

「そのまさかよ。もしかして、その可能性は考えなかったわけ？」

「いや、その時は事情を知らなかったですし、というか、他の人にも私の能力って適応できるんですかね？」

「できなかったら、できなかった時を考えるわ」

アリスは進む。こいしは慌ててついていく。二人は城へと向かった。

第11話 潜入

城の扉は開いていた。

「不用心ですね」

古明地こいしは言う。アリスも不思議に思った。ガレアを敵国と見ないまでも、同盟国であったとしても、門ぐらいは締めるだろう。この時代ならば防衛のために締める。それが開放されている。

「……とにかく、入りましょ。能力お願いね」

原作『東方 project』の古明地こいしの能力は『無意識を操る程度の能力』。相手の無意識下に自分を置き、相手に自分を認識させない能力のことだ。おそらくこれは他人にも適用できると、アリスは考えている。

こいしがアリスの手を握る。

「これでオツケー」

「肩にして。手だと戦闘になったとき、邪魔だわ」

こいしは残念そうに肩に手を置く。せつかくかわいい娘と手がつなげると思いましたのに、と聞こえたが無視した。

城の中は、兵士の死体ばかりであった。形が歪だったり、形をなしていたりしていなかった。

「これは……いったい」

こいしは気持ち悪そうな顔をしている。死体を見るのは初めてなのだろう。

アリスは考える。ここの兵はダールグリユン家の鎧を着ている。ここがダールグリユン家の城というのは間違いないと思う。そのダールグリユン家の兵がダールグリユン家の城の中で大量に死んでいる。どこかの国に攻められたなら、その国がここを占拠しているはず。

そこから考えると、ここは今イレギュラーが起きている、と考えられる。

イレギュラー。転生者。フラン。

「とにかく、まだ魔力残滓があるわ。従いましょう」

アリスはいつでも戦闘ができるように、二体の人形を召喚した。

「おおー。上海と蓬莱ですね。どうやって出したんですか？」

『魔法少女リリカルなのは』って、召喚魔法あるでしょ？ 正確には転送魔法だけど、それを使ったまでよ」

キャロル・ルシエやルーテシア・アルピーノが使う魔法である。複雑な幾何模様の魔法陣を使う魔法。

アリスは二体を先行させた。アリスは二体の目の情報をマルチタスクで共有できる。斥候をさせている。

「なんだかワクワクしますね。まるでRPGゲームをしているようです」

「しつかりしてよ。ここは現実。下手すると死ぬわよ」

「え？ そんなことありませんよ」

アリスは立ち止まって、どうということ？ とこいしを見た。

「あれ？ 神様に聞きませんでしたか？」

「聞いてないわ。なんのこと？」

「私達はですね……」

そこで、アリスの人形は人の影を見た。シツ、とこいしを黙らせる。アリスは人形を操る。より鮮明に見るために。

人形が見ているのは一つの部屋。大きく広い部屋。死体が積み重ねていて、その上に金髪の少女が座っている。その横には水銀燈がいた。

アリスは胸をなでおろした。見たところ、ローザミスティカは無事であった。

第12話 狂気

「あの格好は間違いなく、フランドール・スカーレットね」

「いましたか……」

アリスは古明地こめいじこいしと向かい合う。

「いい？ 今回の目標は水銀燈スイギントウを救出すること。フランドールと戦うことではないわ」

「そうですね。原作通りの強さなら、戦いたくない相手ですもんね」

「それをあなたが言う？」

「私は地霊殿はクリアしましたがけど、紅魔郷はEXだけクリアできてないんです。フランちゃん苦手」

アリスは無視してが続ける。

「私がフランドールの気を引くわ。その間にあなたは水銀燈を連れて城の外へ。門で待ってて。私はその後で追いつくわ」

「連絡は？」

こいしが訊くと、アリスはぬいぐるみを渡した。遠隔通信用のアリスが作った人形だ。これに向かって声を出せば、アリスに通じる。

「上手く行きますかね」

「上手くやるのよ」

そう言って、アリスは物陰から出て、フランのいる部屋へと入った。

「ごきげんよう、フランドール」

ん、とフランがアリスに気がつく。アリスは続ける。上海と蓬萊は後方に控えている。

「私はアリス。転生者よ」

フランは興味深そうにアリスを見ている。

「あなたが脇に置いている娘。その娘は私の大事な娘むすめなの。……返してもらえるかしら？」

フランはアリスをじっと見ている。その間、アリスは全く動かない。

「あなた、ベルカの軍隊を一瞬で蹴散らした人？」

アリスは眉をひそめた。おそらく一年前のことをフランは言っているのだろう。なぜ彼女がそんなことを訊くのか不明だが、アリスは頷いた。

「ええ、そうよ。ベルカはガリアを裏切ったわ。私はガリアを救うために、戦った。私はそのための力があつたから」

「つまり、お姉さんは、強い？ あ、それともお兄さん？」

アリスは嫌な予感がした。

「私が強いかどうかは、わからないわ。戦うための手段があつて、それを行っただけなもの。それと、今はアリスよ」

「でも、ベルカ軍を一瞬で殲滅した。違う？」

「……………何が言いたいのか？」

フランが首を鳴らした。瞳は狂気の赤色で光っている。獲物を狩る肉食獣のようだ。

「察しが悪いよ。つまり、」

フランが立ち上がる。アリスは構える。フランの纏う魔力が膨れる。来る！

「私は戦いたいの、強い転生者とおっ！」

一瞬で距離を詰められた。アリスは横へ飛ぶ。上海と蓬菜を引き寄せる。アリスが立っていた場所は陥没した。フランがへんてこな形の武器で、潰したのだ。

「どうして襲うの!? あなたも転生者でしょ!？」

フランは面倒くさそうに言う。

「転生者とかさー、使命だとかさー、私は興味ないの。ただ、戦いたい。それだけよ! 『クランベリートラップ』!」

四つの魔法陣がフランから離れ、縦横無尽に駆け巡る。魔法陣の中心からアリスへ散弾がばらまかれる。

戦いが始まった。

第13話 弾幕ごっこ

『マリオネットパラオ』!』

アリスが魔術コマンドを叫ぶ。大玉がフランへ向かい、割れる。フランへ散弾が降り注ぐ。目くらましにはなっただろう。その間、アリスは、12体の人形を召喚した。

『ドールズウオー』!』

各人形が動く。己の職務を理解して、敵へ突っ込む。煙が晴れた。無傷のフラン。笑っている。

あ、と思ったときには、人形を通り過ぎ、アリスの目の前へ。

「っ! 『首吊り蓬菜人形』!』

蓬菜が間に入る。大きな魔力弾がフランを襲う。フランは、笑顔で、離れる。そこへ先程の人形軍がフランを襲う。

「ハッ! 『スターボウブレイク』!』

人形達は弾幕を避ける。フランは人形達から距離を取る。アリスは人形達を手元へ引き寄せる。

「なんで最初の攻撃は無傷だったのかしら」

「弾いたからよ。『そして誰もいなくなるか?』」

フランが消える。弾幕のみが現れる。アリスは飛んで避ける。弾幕はアリスを追ってくる。

(こいしはまだなの!?)

アリスは古明地こめいじこいしが水銀燈スイギントウを連れ出すのを待っている。

こいしは水銀燈の近くにいた。アリスとフランが会話している間に、回り込んだのだ。今は絶賛弾幕のせいで動けないでいる。物理破壊設定での戦闘。互いを殺せる魔法の応酬。まさしくリアル弾幕ごっこ、であった。

(匍匐前進で移動するしかないですね……はあ)

そう思い、匍匐前進する。死体の山は気持ちが悪い。水銀燈の下へ

来た。水銀燈は未だに意識を失っている。まるで眠り姫のようだった。

(ホント、人形とは思えませんね。服装と喋り方が違ったらわかんなかったです)

こいしは最初に会ったときのことを思い出しながら、水銀燈を抱える。再び死体の山を下りる。足元がふにやふにやして、進みづらい。

山を降りたところで、どうしようか、と思う。あの弾幕の中を突っ切る勇気はない。壁伝いに遠回りして、外に出るべきか。

こいしの能力はアリスと同じく神から三つ与えられた。その内の『東方Project』古明地こいしの容姿と能力で、姿を認識されないようにしている。この能力は、検証途中だが、おそらく触れたものも認識できなくできると考えている。実際に、フランもアリスもこいしを認識できていない。

とりあえず、壁の方へ走る。水銀燈を抱えて。

「QED『495年の波動』！」

フランの魔法コマンドが聞こえる。こいしは、ハッと振り向いた。このスペルカードは範囲攻撃みたいなやつだったと記憶がくすぶった。弾幕が目の前に迫っていた。

「ふぎゅっー！」

こいしは被弾し、弾かれ、水銀燈はこいしの下から離れた。

第14話 逃さない

フランは何もないところから、水銀燈スイギントウが現れたのを見た。死体の山の頂を見る。いるはずのところには水銀燈はいない。自力で動いたわけでもない。明らかにまだ気を失っている。フランは、古明地こめいじこいしの顔を思い出した。再び水銀燈が現れたところを見ると、水銀燈は消えていた。

「あいつか！ 逃さない！」

「こいし！ 走りなさい!!」

アリスの声。アリスが何かしらのスペルを使う。フランはかまわず、叫ぶ。

『『レーヴァテイン』!』

炎の、災厄の杖は天井へ向かう。炎の剣は扉上の天井にぶち当たる。城全体が揺れた。天井が崩壊する。瓦礫が雪崩を起こす。扉が瓦礫で埋まる。逃げ場を塞いだ。天井は大穴が開いたが、こいしは飛べない。

「これで逃げられないでしょ?」

フランが笑う。アリスは目を細め、フランを見上げる。

『『乙女文楽』』

大玉が弾け、散弾。上海、蓬莱から、砲撃魔法。フランはギリギリのところを避ける。

『『ストロードールカミカゼ』』

アリスは、何十体もの藁人形を召喚する。それらがフラン目指して突撃する。黄色い光弾を引きながら進む。フランはわずかな動きで全て避ける。藁人形と魔力球が横切る。フランは、狂気的な笑みを浮かべた。

「これでおわっ!」

目の前にアリスがいた。藁人形の陰になっていてフランからは見えなかったのだ。

『『蓬莱人形』』

至近距離での砲撃魔法。フランは、避けられない。シールド魔法で防

ぐ。砲撃の勢いで後ろへ。壁に激突。

砲撃が止む。フランは煙を掻き分けた。アリスはいない。あたりを見回すがいない。逃げた。入り口は塞がれている。フランは天井を見た。大穴。フランはそこに飛び込む。しかし、アリスの姿は見えなかった。

「逃げられた!!」

「こいし、ありがとう」

「いえいえ、私のもう一つ的能力が作動して良かったですよ」

二人は城の外、門の側の森にいた。こいしはアリスに水銀燈と通信用の人形を返す。アリスは水銀燈の寝息を聞いて、ホッとした。

こいしはアリスと同じく三つ能力がある。その内、『東京ESP』の主人公、漆葉リンカ的能力“物理透過”を持っていた。飛べないこいしが入り口を瓦礫で塞がれて、どうやって逃げれたかの理由である。フランはそれを知らない。上手く騙されてくれると、良いのだが。

「とりあえず、帰りましょう。ここに長居は危険だわ」

こいしは頷く。アリスはこいしを上海と蓬莱に運ばせ、水銀燈を腕の中にして、飛んだ。フランが追ってこないことを願いながら。

第15話 作戦会議

アリス達は屋敷に帰り着いた。イクスと金糸雀カナリアが迎えに来た。

「お母様！ 水銀燈スイギントウは!?」

金糸雀の呼びかけに、アリスは腕の中の水銀燈を見せた。金糸雀は涙ぐみながら、ホツとした様子を見せる。

「来るときに軽く見たけど、それほどひどくはないわ。部品交換だけで済みそう」

「お疲れ様です、アリス。それと、こいしも」

アリスはイクスに向き直り、真面目な顔をした。

「イクス、ダールグリユン家からは？」

イクスは首を振る。アリスは目を細めて、金糸雀へ向く。

「金糸雀。水銀燈を工房に連れて行って。私はイクスと大事な話をするわ」

金糸雀は元気良い返事をし、水銀燈を受け取った。アリスは金糸雀を見送った。

「イクス。それと、こいし。情報の整理と作戦会議をするわ」

イクスの書斎。上海が紅茶を準備している。三人は紅茶ができるのを待たずに、話しだした。

「今回の件、おそらくダールグリユン家は何もしていないわ」

アリスは城での話をした。城の兵士が死んでいたこと、転生者がいたこと、戦闘になったこと。

「おそらくガレアから派遣した兵士はすでに死んでいると思うわ。フランドールに殺されて」

イクスは瞠目する。少し長い瞠目だった。アリスも古明地こめいじこいしも黙っていた。人形達の動きしか聞こえない。紅茶はまだできない。

「それで、そのフランドール・スカーレットが、今回の元凶だと言うことですね？」

イクスは目を閉じたまま言う。アリスは頷く。

「おそらくダールグリユン家は、何も知らないわ。兵を派遣したかもしれないけど、フランドールにやられたと見るべきね。目撃情報の”悪魔みたいな”というのは、まったくそのとおりだわ」

イクスは目を開け、アリスを見る。

「そのフランドールがこちらに来る、と?」

「ええ、フランドールは、私と戦いたがっているようだったわ。理由まではわからないけど、その思いが強ければここまで追ってくるわ」

「それをどうやって迎え撃つか……アリスは戦ってみて、勝てると思いましたが?」

「わからないわ。全力は出していない様子だったわ。私も奥の手は控えているけど、勝てるかどうか……」

「アリスがフランドールを拘束して、ガレア軍の総攻撃ではどうでしょう?」

こいしが手を上げた。

「それはそもそも無理です」

アリスとイクスが疑問を浮かべた。こいしが付け加える。

「転生者は転生者でないと、殺すことができません。怪我を負っても転生者以外からのはずぐに治ります。神様が言っていました……知らなかったんですか?」

アリスは渋面を作った。こいしは転生したばかりだ。戦えるとは思えない。

アリスは一人でフランと戦わなければならない。

第16話 修復

アリスは工房にいた。水銀燈スイギントウの腕を治している。金糸雀カナリリアが感動しながら横で見ている。アリスはそれを微笑ましく思った。

「お母様、ごめんなさい」

水銀燈が言った。

「あら？　なんで謝るの？」

「お母様にいただいた、この体に傷を入れてしまつて……」

アリスは水銀燈の顔を見た。横になっている水銀燈は落ち込んでいた。アリスは、どう返事をすればよいか、考える。

「まあ、やんちゃなのは女の子としてどうか、とは思うけど」

アリスは区切つて、水銀燈を見た。水銀燈は責められると思つているのか、身を固くしている。怒られる前の子供みたいだ、とアリスは思った。

「でもね、私は好きよ。こうやつて、あなた達を治すの」

水銀燈と金糸雀がアリスを見た。アリスは微笑んで続ける。

「そもそも今回は任務よ。私が命令したの。だから、あなたが怪我をしたのは私のせいよ」

「そんな！　お母様が悪い訳ありませんわ！」

「そうよ！　悪いのはあの悪魔だけかしら！」

アリスは優しい笑いが口からこぼれてしまう。水銀燈と金糸雀は、なぜ、という顔を作った。

「真面目な話ね。私は命令したから、それなりの責任があるの。たとえ創造主と被造物という関係でも、私は責任が生まれると思うわ。だから、水銀燈が怪我をしたのは、誰が水銀燈を怪我させたにかかわらず私の責任よ。だって、その可能性があつたのは想像できたはずだから」

そんな、と金糸雀がこぼす。水銀燈は自らの力不足を悔いていそうである。アリスは続ける。

「でもね、私はあなた達のことと責任を負いたいの。私はあなた達を作つたあと、あなた達に何もしてあげられないわ。だって、私はあな

た達を愛玩のために作ったわけではないのだから。私が主人で、あなた達が従者。従者が主人に尽くすのは当たり前。主人はそれに見合った報酬を従者に与える。でも、私はあなた達に、何を与えられているかわからないわ。だから、せめて、責任だけでも、と、ね」

「……………お母様は」

水銀燈が口を開く。アリスは首を傾げた。

「お母様は、私達に与えてくださってますわ」

水銀燈はアリスの目を見る。金糸雀も見る。アリスは戸惑った。

「お母様は、私達に優しさを与えてくださってますわ」

水銀燈はそう言い切った。金糸雀も頷く。アリスは呆気に取られた。まさか、そう思われているとは思わなかったのだ。

イクスのおかげかもしれない。記憶を失って、感情を失いかけて、人間らしさを失いかけている。そんな状態のアリスをイクスは人間に押しとどめる努力をしてくれている。彼女たちが、このセリフが言えるのも、イクスのおかげだろう。アリス一人では、このような結果にはならなかっただろう。

アリスはイクスに感謝した。

第17話 勝算

アリスは、待っていた。ダールグリユン家の国境の城、そこからガレアの屋敷まで一直線の間地点。辺りは何も無い。誰も被害に合わないだろう。

アリスに勝算は、はつきりしなかった。フランドール・スカーレットの能力だけでも十分脅威なのに、その他不明な能力が二つ。その能力によっては、勝てるし、勝てないかもしれない。ただし、それはフランも同じだ。フランはアリスの他の転生特典を知らない。

アリスの”Grimoire of Alice”もしくは黄金錬成。二つとも強力な魔法。前者は自動追尾で敵を屠る。後者は範囲攻撃で逃さない。一撃で仕留めることが可能だ。

ただデメリットがある。”Grimoire of Alice”は魔力酔いをしてしまう。何発も撃てない。その間に避けられまは耐えられ、攻撃を仕掛けられたら勝ち目はない。黄金錬成は記憶を失う。何発も撃てるが、撃てば撃つほど記憶を失くす。

今回の戦いは、どちらが先に能力を出すかで勝負が決まる。”Grimoire of Alice”を出したあとに、それを避ける術がフランにあったとき。黄金錬成を使ったあとで、それを耐えられる術がフランにあったとき。アリスは勝てない。逆に、先に相手の能力がわかれば対策ができるかもしれない。

それに、フランにはそもそも弱点がある。そこを突ければ有利になる。それは楽観的か。アリスはため息をつく。

イクス達にはその辺の事情を話してある。デメリットも。勝算の話も。記憶を失うかもしれない、という話も。

アリスは、目を閉じた。そして、目を開ける。はるか先、点ほどの大きさ、フランが見えた。

「やっぱりこっちにいたのね」

フランは嬉しそうだ。アリスは嬉しくない、と思った。

「それじゃ、早速戦いましょう」

「その前に」

アリスがフランの言葉を制した。フランは不機嫌そうにアリスを見る。

「その前に、ここから先は行かないでほしい」

「? どうして?」

「ここから先は私の大事なものがあるの。あなたとの戦いは……諦めるわ。けれど、私の大事なものに手は出さないでほしい」

フランは、そんなこと、と吐き出す。

「いいわよ。だって、ここいらで強い、あなたぐらいなもの。弱いやつに興味はないわ。もちろん、撃ってくるのなら、弱くても殺すけどね」

言質はとった、とばかりに、アリスは人形を召喚しだす。

12体の人形と、上海人形、蓬莱人形。フランは満面の笑み。

「それじゃ今度こそ」

「ええ、今度こそ始めましょ。『上海人形』!」

砲撃。光線がフランへ伸びる。フランは、笑い、軽く避ける。急降下。アリスに肉薄する。

アリスは魔力糸を操る。12体の人形が躍り出る。

『『ドールズウォー』』

武装した人形達が回転。近づくフランへ切り込む。フラン、歪な杖で、弾く。そのままアリスに突撃。アリス、蓬莱を前に出し『首吊り蓬莱人形』。大玉が全面に展開される。弾けては散弾、弾けては散弾。フランに襲いかかる。フランは、意に介さない。アリスは眉をひそめ、後退。上海の砲撃。フランは避けて笑った。

『『レーヴァテイン』!』

アリスは炎に巻き込まれた。

第18話 レーヴァアティン

アリスは炎を掻き分け、フランから距離を取る。防御魔法で被害は軽微。袖が少し焼けたくらい。

なるほど、とアリスは思った。

「あなた、転生してからまだ日が浅いわね」

フランは、首を傾げる。

「どうしてそんなことがわかるの？」

「レーヴァアティンの威力よ」

フランは、合点したようだ。

前回の戦闘時のレーヴァアティンと今回のレーヴァアティンの威力、明らかに今回の方が弱い。前は天井を簡単に壊したが、今回はアリスのシールドで防げた。

本来のレーヴァアティンの威力がどれほどのものか、具体的な原作表記はない。北欧神話から名前を採っていることから強いイメージがある。『魔法少女リリカルなのは』世界では、魔法は想像力と魔力量に依る。フランが出すレーヴァアティンが弱いはずがない。もちろん手加減をするような性格とも思えない。

なら何か。経験だ。どのくらいの威力を出すのにどのくらいの魔力を使えばいいかわからないのだ。使いすぎると、ロスの部分が多くすぐにガス欠する。少ないとまた威力が出ない。大規模な魔法になればなるほど、魔力量のコントロールが困難になる。

フランは金糸雀カナリアが産まれたあと、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキが産まれる前に転生していると考えられる。一ヶ月かそこらだ。その間に魔力調節ができるようになるには、特にレーヴァアティンのような大規模な魔法をコントロールするのは至難の業。この世界の主人公のような天才でもなければだが。おそらくだが、古明地こめいじこいしはこの分類だろう。アリスは努力型だ。

レーヴァアティンだけではない。水銀燈スイギントウの怪我の具合を見ると、他の魔法でも魔力量のコントロールができていないのかもしれない。バラバラになっていないのがその証拠だ。

「あなたでは、勝ち目はないわ。死にたくないのなら、逃げてもいいのよ」

アリスはあからさまな挑発をした。これでフランが他の能力をバラしてくれたら、万々歳だ。

「ふふっ♪」

フランは笑った。声を大にして笑い出した。アリスは目を細めた。「はははっ！ ハハッ！ あ、ははっ、ご、ごめんなさい。あなた、挑発が苦手みたいね」

アリスは頬を引くつかせた。逆に、挑発された。

「でも、ね。私は、フランドール・スカーレットよ？ 魔法以外でも戦う方法が、あるわ！」

フランは翼を広げた。黒い骨の翼に宝石の羽根。あ、とアリスが思ったときには、フランは手の届くところにいた。

「とりあえず、一発」

杖でぶっ飛ばされた。アリスは反応できなかつた。地面に叩きつけられた。肺の空気がぬける。

「吸血鬼の身体能力。これもフランドールの能力よ」

第19話 弱点

アリスは起き上がろうとするが、全身の痛みで力が入らない。フランが見下ろしている。

「どう？ お姉さん。痛い？ あ、それとも、お兄さん？」

アリスは返事ができない。フランは笑う。

アリスは人形を呼び寄せた。人形に身体を支えられながら、やっと起きる。フランは、ニヤリと笑顔。

「お姉さんに勝ち目はないわ。降参したら、楽に殺してあげるけど？」
「……………最後に」

アリスが訊く。

「最後に、訊きたいわ。あなたがなぜ強い人と戦いたがる理由を」

フランは、つまらなさそうな顔をした。

「別に、どうだっていいじゃない。私の理由なんて……………それに強いやつじゃないわ。強い転生者よ」

「いえ、私は、知りたいわ。知らないまま、死ぬのは嫌よ。あなたがなぜ強い転生者と戦いたいのかの理由」

フランは黙る。ため息一つ。口を開いた。

「いいわ。と言つても、大したことじゃないわ」

それでもいい、とアリス。フランは続ける。

「私は、神って言うのが嫌いな。あの傲慢な態度もそうだし、偉そうに私達に命令してきたのもそう。……………お母さんやお父さんを救ってくれもしなかったし、私を助けてもくれなかったわ」

フランは空を見上げる。睨んでいるように見える。そして、アリスを見た。

「転生者と戦うっていうのは、あいつの邪魔をしたいだけ。もちろん戦うのが楽しいって言うのもあるけど、強い転生者の方が、あいつが言っていた剣？ を壊せるだろうと思つてね」

フランはアリスの反応を待つ。アリスは空を見る。

「そう……………ありがとう。時間稼ぎに付き合ってくれて？」

ポツ、と空から何か落ちる音がした。フランは空を見上げる。フランの頬にそれが落ちた。そこから細い煙をあげる。

「っ！ 雨！」

フランが頬を押しさえる。雨粒は数を増やす。幾筋もの煙が上がっていく。アリスは人形に支えられながらフランを見た。

『それでも世界は美しい』

「!？」

「漫画のタイトルよ」

アリスが言う。

「主人公はニケ・ルメルシエ。雨の公国の第4公女。能力は……天候操作よ」

古明地こめいじこいしの最後の能力、『それでも世界は美しい』の主人公ニケ・ルメルシエの能力。「アメフラシの歌」を歌うことで、大気をコントロールし、鍛錬を積みめば、雨を降らせることができる。

雨が少しずつ強くなっていく。フランの身体から煙が増えてきた。吸血鬼の弱点、流れる水、そして雨。アリス側の切り札。

正直な話、アリスはできるとは思っていなかった。この能力、特に主人公のニケ・ルメルシエは努力でコントロールできるようになった。転生したばかりのこいしが雨を降らせれるとは思えなかった。

今回は奇跡だった。

第20話 勝敗

フランは苦しみだした。痛みをこらえている顔。アリスも人形に支えられ立っているのがやつと。服は濡れていく。雨が強くなった。空は黒い。赤さも薄つすらあるが、雨雲で緩和されている。悲しいことにこの雨が上がっても、晴れが見えないだろう。

フランは膝をつく。アリスは傍観。この雨も古明地こめいじこいしという転生者の”攻撃”だ。フランを殺すことができる。そもそもアリスは身体が動かせない。魔法使いのアリスの身体能力までもらわなくても良かったのに、と神を恨む。フランの例を見ても身体能力は容姿のキャラクターと同じになるらしい。

「なんで、よ」

フランがこぼす。アリスはフランを見ている。雨が強い。風はない。フランとアリスと雨。それ以外余計なものはない。

「なんで、動かないのよ……」

地に伏せていくフラン。先程とは逆の立場となった。雨は勢いを増すばかり。

「また、死ぬの？ またこんな死にかた、なの？」

呻くようなフラン。雨は酷い。土砂降りと言っても良いぐらいに強くなった。フランの声が聞き取りにくい。

「あなたは……なんで私を壊さなかったの？」

フランドール・スカーレットの能力”ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”。それを使えば、アリスに勝ち目はなかった。

激しい雨の中、フランに伝わることもない。アリスの言葉は消えた。フランの反応とともに消えた。アリスはそこに自分の姿を写した。

フランは体中から煙が出ていた。灰になっているのだろう。羽根は、翼は、夏の飴細工のように溶けていく。雨に濡れ、灰は泥に、泥は地面に、消えていく。服だけが無事だ。

そのまま、フランが消えるまで、アリスはその場に立つたまま、何もしなかった。服がずぶ濡れだ。帰ったら着替えよう。雨の日に服

が濡れない魔法も開発したい。できる、ならば。

「お母様」

雨が上がった。地面にはフランの服だけが残った。ずぶ濡れの服。そこに人型の生物がいたとは、わからない。アリスは知っていた。その少女はきつと未来の自分であると。フランは、人を殺した。アリスも人を殺した。理由があれば許されるということは、慰めにもならない。きつとアリスもこうなる。惨めに死ぬ。

「お母様ー」

アリスは顔を上げた。金糸雀カナリヤがいた。金糸雀が呼んでいた。脇にはアリスを支えている上海と蓬菜スイギントウがいた。帰れば、イクスがいる、水銀燈スイギントウがいる、産まれたばかりの翠星石スイセイセイキと蒼星石ソウセイセイキもいる。前世の記憶はなくなったまま、戻ることはない。この世界がアリスの故郷だ。この国がアリスの母国だ。

アリスはフランの服を拾った。血のような赤い服。哀しいほどその持ち主はいない。アリスは金糸雀の下へ向かう。上海と蓬菜に支えられ、アリスは家へと帰る。

空は相変わらず汚らしい色をしていた。

第一章第三節 古代ベルカーガレア王国篇 ―乙― プロローグ 金糸雀

金糸雀カナリアは迷っていた。イクスとアリスの誕生日プレゼントを何にしようか、と。

フランが消えてから、約十年。ガレア王国は平和が続いていた。ベルカ聖王家とは休戦協定を、ダールグリユン家とは同盟を結んだ。イクスの人体実験もなりを潜め、健全な政治と言える。太陽光を必要としない麦が赤黒い空の下、風に揺れ、痩せて見捨てられていたガリアの土地は、豊かさを広げていた。

ローゼンメイデンが全員揃い、屋敷の中も賑わいを見せている。そんな中で、アリスが提案したのが誕生日というイベント。

誕生日。産まれた日を祝う行事。アリスはローゼンメイデンが産まれた日を記録していたため、思いついたのだろう。この世界に誕生日というものではなく、産まれた日も記録するということがない。アリスは記憶がない。イクスとアリスは、年が明けた日を誕生日としていたため、二人同時に祝うことになっている。金糸雀は一ヶ月後に控えたその準備をしようと考えた。

前回イクスとアリスの誕生日プレゼントは、水銀燈スイギントウが書きやすい自作の羽根ペン、金糸雀が貴重な魔力を帯びた石、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキが光なしで育つ花、真紅シンクがダールグリユン家から取り寄せた紅茶の茶葉、雛苺ヒナイチゴが森で採った野いちご、雪華綺晶キラキシヨウが二人の趣味の裁縫用針。

金糸雀は考える。前回と被ってはいけない。それと同時に他のメンバーとも被ってはいけない。金糸雀は悩む。

捜査の結果、一ヶ月後の誕生日で、水銀燈はインク、翠星石と蒼星石は庭に合う木、真紅はティーカップ、雛苺は森で見つけたもの、雪華綺晶は服用布地、である可能性が高い。

薔薇乙女ローゼンメイデンイチの頭脳派な金糸雀はどうすればいいのか、悩んでいた。みんな個性的なものを考えている。それに対して、金糸雀の個性とは、と悩んでいた。

金糸雀は気がついた。自分は個性がないのだろうか、と。

みんなは決まっている。それはみんなに個性があるからで、金糸雀にはないから決められないのではないかと。前回も金糸雀が決めるのが一番遅かった。これではお母様であるアリスはおろかよく話しをするイクスにまで呆れられる。金糸雀は考えすぎて目が回りそうになっている。

「金糸雀、どうかしましたか？」

廊下で頭を抱えていた金糸雀に、通りがかったイクスが声をかける。金糸雀は驚き、飛び上がる。イクスは目を丸くする。

「い、いや……な、なんでもないかしら」

挙動の金糸雀。イクスは首を傾げる。そうだと金糸雀は良い考えを思いついた。誕生日プレゼント、渡す本人に訊けばいいのでは、と。

「あ、あの。イクス様は、誕生日プレゼント、何がいいかしら？」

イクスは、誕生日プレゼントですか、と聞き返し、考え、笑顔になって、言った。

「金糸雀らしい贈り物がいいですね」

金糸雀は個性の問題にぶち当たった。

第一話 剣

神が言っていた剣は、見つからない。そもそもベルカにはないのかもしれない。『魔法少女リリカルなのは』の世界という意味で、ベルカ世界にはない可能性もある。

あれから神と連絡が取れていない。神は、”Grimoire of Alice”を持っていれば夢の中で会えると言っていたが、夢を見なかった場合は会えないらしい。アリスは、どうやって夢を見ようかと、悩んでいた。寝たら、朝なのだ。その間、一切の夢もない。夢は浅い眠りのときに見ると聞かすが、どうなのだろうか。

扉がノックされた。アリスは、自室にいた。新しく与えられた部屋。内装はサンプルで、置物は人形や魔法の研究の資料・器具ばかり。そこそこ広く、寝台もある。

どうぞ、という扉が開く。水銀燈スイギントウが見えた。

「お母様、こいし様がお見えになられましたわ」

「もう！ 呼び捨てでいいって言ってるのに！」

砕けた口調の古明地こめいじこいしが水銀燈の横から部屋に入ってくる。アリスは微笑んだ。

「こいし、久しぶり」

こいしは、はい、と頷く。

こいしには、神の言っていた剣を探してもらっている。こいしは神具を持っていない。どうやらアリスだけが神と通信できるらしい。フランはどうだったかわからないが、少なくともこいしは神と通信ができない。

「飲み物は何がいいかしら？」

水銀燈を下がらせながら訊く。

「シュトゥラ産の白茶！」

「あなた、それ好きね」

上海と蓬萊に準備させながら、こいしに向き直る。こいしはアリスの向かいの席に座った。

「結果は？」

「前回と同じですね」

見つからなかった。こいしは残念そうに報告する。アリスは難敵に溜息をついた。

「今回はミッドチルダまで行きましたよ」

こいしは前世の影響で敬語になる。説明するときには特に。最近はこちらのことを信用してきたのか、砕けた言葉を使うことも出てきたが、説明時、初対面、など状況によって敬語になりやすい。

そこらへんは妥協している。

「どうだったの？ ミッドは？」

「辺境の田舎ですね。原作のような近未来的な世界ではなかったです。魔術師がいくらかいました。細々とやっている感じですね」

「他はどこに行ったの？」

「ヴァイゼン、カルナログ、スプールス。その他は名前がありませんでした」

「地球は？」

地球。それは『魔法少女リリカルなのは』にもある世界。それと同じに、アリス、こいしの前世の世界の名前でもある。

アリスは世界を渡る魔法を探し、こいしに託して、剣と地球を探させた。

こいしの回答は、首を振るだけだった。

第二話 原作

地球は見つからなかった。古明地こめいじこいしの報告を聞いて、アリスは深い息を吐いた。

興味がないは嘘になる。原作としての地球もそうだが、前世の故郷と同名の地球。それが同じ名前で、似た地形、似た文明、似た歴史を持つとうが、違う地球だとわかっている。違う地球だと理解しても、興味がないと言えるかどうかは、別問題。悲しいほどに、別問題だ。

「アリスさんは、原作介入は考えていないのですよね？」

こいしが言う。敬語、と注意するアリス。こいしは口を押さえる。アリスは苦笑。こいしも手をのけて舌を出す。上海が白茶を入れてくれた。アリスは白茶に口をつけた。部屋は静かになった。

「原作介入とか、原作遵守とか、私は上から目線で好きではないわ」アリスが口を開いたのは、こいしが白茶を飲み始めたタイミングだった。こいしは目をぱちくりして、それは仕方ありませんよ、と言った。

「私達は、神の使者？ であることは違いがありません。意識無意識関わらず、その前提が態度に出ます。それに、原作知識は未来予知とは違います」

「趣味ね」

「そうです。原作知識は未来予知の一種ですが、その前提に現実感の喪失、つまり趣味的な、わかりやすく言うゲームをやっている感覚で、現実を見ています。でも、それって前世でもそういう人はいましたよ。逆にそういう人こそ、リスクを恐れず成功する可能性を秘めています」

「それは……あなたの言いたいことはわかるわ。けど、その人達はゲームを真剣に取り組んでいるわ。軽い気持ちなんて、一切ない」

こいしは合点がいった。

「つまり、アリスさんは原作介入とか原作遵守とかを言う人は現実を軽く見ている人だと思っっているんですか？」

アリスは黙った。こいしは見つめる。アリスは白茶を飲んだ。こ

いしも飲んだ。カップとソーサーが鳴った。

「思っではないわ。原作を中心にこの現実を考える人が好きではないだけ。言葉を使うくらいで軽い軽くないは、言えないわ。判断の基準が原作なのが好きではないだけ」

「この世界が現実だと知る人が？」

「そう。この世界が現実だと知る私達が」

沈黙。上海が空のカップに白茶を注ぐ。液体の安らぎの音がした。

「やめましようか。この話は」

こいしが言った。アリスも頷いた。

「益がないわ。生きる上でどうでもいいことだも。私は私のやりたいことをするわ。イクスを助けたいからイクスを助けた。原作介入したいからイクスを助けたわけじゃない」

「なるほど、それだけわかれば十分ですね」

二人は白茶を飲んだ。

第三話 久しぶりの

アリスと古明地こめいじこいしは、部屋から出た。一階の廊下を歩く。窓から見える景色は相変わらぬ赤黒い曇り空。

「それで？ あれはできたんですか？」

こいしが訊く。アリスは頷いた。

「イクスの書斎にあるわ」

こいしは歓喜の声をあげる。アリスが微笑ましそうにこいしを見る。

「久しぶりだなく。こっちに転生してからだいぶ無沙汰だったからね」

「苦労したわよ。代用できるもの。こっちの世界に、影も形もないんだもの」

「まあ、戦争ばかりだとね。そういう余裕もないのかもだしね」
外に出る。中庭が見える。ここも緑が増えて、様になってきた。

「一応言っておくけど、前世の話はこの際だからしてもいいけど……」
「わかってるって。原作とかの話はしないよ。この世界が物語になっているって知ったら混乱するだろうしね」

あれ、とアリスがごぼす。こいしは首を傾げた。金糸雀カナリアとイクスが中庭を挟んだ向こう側の廊下にいた。金糸雀の表情は暗い。イクスがあたりをうかがっている。

「どうかしたのかしら？」

「さあ？」

アリスとこいしは顔を見合わせ、足を向けた。

「どうかしたの？ イクス、金糸雀」

アリスが訊く。イクスが安心したようにこちらを向く。

「アリス！ それと、こいしまで！ その……」

金糸雀がこちらを向く。お母様、とつぶやいて、うつむいた。アリスは首を傾げる。こいしが前へ出る。

「金糸雀ちゃん！ おひさ！ 今日もキレイなおでこしてるね♪」
と言つて、金糸雀のおでこを叩く。痛つ、とおでこを押さえる金糸雀。

「ちよつと！ カナのおでこは叩くためのものじゃないって、何度言えばいいのかしら!?!」

噛み付いた、と思つたら、溜息を吐く金糸雀。アリスは訝しむ。

「どうかしたのかしら、金糸雀。何か悩み事？」

「お母様……いえ！ この問題はカナが一人で解決します！ イクス様、聞いていただいてありがとうございます！ それでは失礼しますかしら」

そう言つて、立ち去ろうとする金糸雀。

「ああああ、このあと、イクスちゃんの部屋で、美味しいもの、食べる予定だったのになくく」

金糸雀は止まった。耳がこちらを向いている。こいしは続ける。

「あと少しでなくなるらしいし、金糸雀ちゃんにも食べてもらいたかつたけど、失礼するのなら、しようがないかあ」

金糸雀がチラリとこちらを見る。

「そ、それって、あの、甘いものかしら?」

こいしは満面の笑みで頷く。金糸雀はUターンして、戻ってきた。イクスとアリスは微笑む。一緒に書斎へ向かつた。

「美味しいいよっ!!」

机の上にあるものは、茶色い固形物。こいしは感動していた。アリスとこいしの前世で言つと、チョコレート。こいしが求めていたものは、甘み・デザート、つまり砂糖。この世界にはないもの。

「名前はチェック。甘いのは、なめると甘い鉱物を削つて入れてるの」「鉱物ねく。まあ、美味しければよし!!」

三時のおやつという時間。四人は甘みを食べて、和む。

第四話 個性

「それで？ 金糸雀カナリヤはなんで落ち込んでいたのかしら？」

今となつてはすっかりご機嫌になつて、チエクを頬張っている金糸雀にアリスは言った。金糸雀は、決まりが悪そうにアリスとイクスを見た。アリスも古明地こめいじこいしも首を傾げる。イクスは微笑む。

「金糸雀は、自分が他の姉妹と比べて、個性がないと思つているんです」

「そんなことないでしょ？ そのおでこが証拠だよ♪」

「だから、おでこはよけいかしら！」

こいしの茶々に怒る金糸雀。笑うアリスとイクス。金糸雀は頬をふくらませる。

「でも、こいしの言うとおり、金糸雀は個性的だと思います」

「どういったところがかしら？」

イクスは言い淀む。金糸雀はそっぽを向いた。アリスは、そうね、と言つて、金糸雀を見つめる。アリスは、ふつ、と微笑む。

「金糸雀は姉妹の中でも情報収集が得意ね」

アリスの回答に金糸雀は前を向いた。

「水銀燈スイギントウは戦闘、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキは後方支援、真紅シンクと雛苺ヒナイチゴは護衛、雪華綺晶クラキシヨウは尋問、そして、金糸雀は情報収集」

「それって……私達の役割かしら。個性ではないかしら」

「……強敵ね」

でも、とアリスは続ける。

「そういった性格をしているから、その役割を与えたのよ。水銀燈は隠しているけど、戦闘が好き。金糸雀は冷静で分析が得意ね。翠星石は優しい心を持つているし、蒼星石は落ち着いているから周りを安心させる。真紅は正義感とプライドが高いわ。雛苺は元気だから一緒にいて楽しくなる。雪華綺晶は嗜虐心が強いわ」

「冷静で分析が得意……」

金糸雀が考える。その間、こいしもイクスもアリスに感心していた。

「流石アリスね！ 子供の特徴をしっかりと把握しているね」

「雪華綺晶つて、嗜虐心が高かったんですね……」

アリスは照れて、頬を掻く。

「まあ、よく見ているから……」

「わかったかしら!!」

金糸雀が椅子の上で立ち上がる。みな見上げる。

「カナはカナ！ それで良かったかしら！ 何も悩む心配もなかったかしらー！」

「そうね。そのとおりよ」

「これで一件落着だね」

アリスが頷き、こいしが言う。金糸雀は満足して、席に座って、チエクを頬張る。幸せそうな顔をした。

書斎のドアがノックされた。イクスが応える。扉が開くと、真紅と雛苺が入ってきた。

「イクス様。それと、お母様、こちらにいらしたんですね」

「真紅、雛苺、おかえりなさい。街はどうだった？」

「お母様！」

雛苺がアリスの胸に飛び込む。アリスは受け止める。

「こら、雛苺！ イクス様やこいし様の前かしら！」

金糸雀が叱る。こいしがなだめる。イクスも、別にいいですよ、と許す。

「それより真紅も雛苺も、お菓子があります。一緒にどうですか？」

「ありがとうございます、イクス様。ですが、先にご報告したいことがあるのかわ」

真紅が言う。興奮を抑えたような態度がアリスにはわかった。アリス達は首を傾げた。

第五話 弱き者の味方

アリスと真紅^{シンク}は街の大通りを歩いていった。

ガリアがガレア王国になったため、今では首都となったこの街。アリスがこの世界に来た当初とは変わって、中世の街並みのような外観を作っていた。

大通りは2階、3階の建物ばかりで、空ばかりだった寂しい風景も安心感のある木造の景色となった。地面も重厚感のある石畳。誇りあるものになった。

「それで、真紅^{シンク}。その”弱き者の味方”って、最近現れだしたのよね」
「そうなのだわ」

真紅は頷く。アリスは考えた。前回真紅と雛苺^{ヒナイチゴ}が街に出たとき聞いた噂。”弱き者の味方”。どうも困った人を助けて回る人格者らしく、助けたあとは報酬一つもらわない。街の暴力者も一撃で倒し、いじめられていた人を助けたり、迷子を見つけては親のもとに返したり、色々をやっているらしい。目立っている割には、どこの誰かどこから来たのか、とんと検討がつかない。不審者と言っても差し支えないだろう。

「最近現れて、目立っているのに、その人物の情報は少ない。……他国から来た可能性があるわね」

問者。スパイ。その可能性が捨てられない。国内の情報が集まる首都。その首都の情報屋も知らないということは、国内出身であるというのは、考えにくい。

同盟国出身ならいいのだが、敵国ベルカ聖王家なら対処しないといけない。国交断絶中の国から人が来るのは警戒したほうがいいだろう。何をされるかわからない。戦争中は疑いすぎるのが、ちようどよい。

「真紅はどう思う？」

「正義感のある方だとは思うのだわ。行動も民を助ける動き。ガレアの民だと思ふのが普通でしょう」

筋は通っている。そもそも問者なら目立つ行動を避ける。聖王家

の差し金とは考えにくい。もちろん間者である可能性もある。

「そう思うのなら、なんで真紅は報告してくれたの？」

アリスの質問に言い淀む真紅。アリスは首を傾げた。真紅は恥ずかしそうに小さい声で言った。アリスには聞こえなかった。

「ごめんなさい。聞こえなかったわ。もう一度言ってくれるかしら？」

「うう……会ってみたいと思ったのだわ……」

アリスはまばたきをした。そして、微笑んだ。

「な、なんで笑うのかしら？」

「いえ、かわいいな、と思ってね」

真紅が不服そうにそっぽを向いた。

真紅は正義感が強い。だからか、正義の味方に憧れを持つ。”弱き者の味方”はまさしく真紅の中のヒーローと合致したのだろう。

アリスは目を閉じる。もし”弱き者の味方”が正義の味方でもなんでもなかった場合、真紅はどんな顔をするのだろうか。

目を開け、アリスは空を見上げた。相変わらず汚らしい空だった。ここ十年間、この赤黒い色が変わることはなかった。それでも、うまくやっつてこれた。

その時はその時だ。真紅は弱くはない。自分で折り合いをつけられるだろう。折れそうなきは支えてあげればいい。

アリスは前を向いて、真紅と並んで歩くのだった。

第六話 行方

「それで、そっちはどうだったかしら？」

アリスは訊く。別行動だった古明地こいしと金糸雀カナリアは顔を見合わせたあと、首を振った。アリスと真紅シンクは一つ息を吐いた。

休憩のため街の大通りに面したお店で紅茶をたのむ。最近は作り出された遺伝子改良種の茶葉だった。民間まで技術提供をした結果がここまで早く影響があるとは驚きだった。

「そっちも見つからなかったみたいだね」

ええ、と真紅。アリスは一応どこを探したかを四人で共有した。

「一応、あと探していないのは、東側かしら？」

「そうみたいね。でも、たまたま見つからなかったという可能性もあるのだけ」

「そもそも情報が少なすぎるよ！ 他に何か情報ないの!？」

「見かけは、二本の剣を腰に佩いているということ。それと頭に黒いリボン、緑の服。スカート。髪は白色、瞳は緑色」

アリスは首を傾げた。

「そうよ。なんで服装がわかっていないのに、見つからないのかしら？ それってつまり着替えている可能性があるってことじゃないの？

もしくはマントで隠しているとか」

四人はがっくりした。

「バカだわ。私達は馬鹿じゃないのかしら？ そんなことにも気が付かないなんて……」

「これじゃ、探しようがないね〜」

金糸雀とこいしが呆れる。真紅は紅茶を飲む。アリスは考える。

「……服を変える。つまり、服を変える必要がある。もしくは、隠す必要がある」

アリスの言葉にその場が真面目なものになった。こいしがアリスに続ける。

「敵って言うことですね」

「それは早計だわ。まだ、決まっていはいないわ」

真紅が否定。金糸雀は、でも、と続ける。

「やましいことがなければ、隠す必要性はないかしら。それにこの街では剣の所持は緊急時以外はご法度かしら」

治安を考えた結果の提言。これをイクスが快く承諾した。宰相や大臣は渋面したが。

「っ！でもー！」

真紅が反論する。金糸雀がそれを抑える。

「もちろん、なぜ人を助けて回るのか、そこはわからないかしら。その理由がわからない限り、敵だと決めつけるのは、まだ早いかしら」

金糸雀がウインクをする。真紅はホツとした様子を見せる。アリスは微笑み、目を閉じる。

「そうね。積極的に疑う理由もないものね。他国の間者だったとしても、取られて心配な情報はガレアの研究成果くらいね」

人体実験の成果。今は行われていない。イクスの身体やガリアの人々の死体。死者を冒瀆する行いは現代日本では異常だが、こちらの世界では普通。それでも前世の常識がまだ残っているアリスは、せめてガレアの発展へと捧げようと思うのだった。生前の彼らが願ったように。

この実験結果はガレアのみに使われるべき。他の国、特にベルカが使っているものではない。奴らが殺したのだから。と、アリスは自分に呆れながら思うのだった。

「そうだわー！カナにいい考えがあるかしら!!」

金糸雀が立ち上がって言う。

「いい考えって?」

こいしが訊く。金糸雀は、フフン、と得意げな様子。

”弱き者の味方”を引きずり出す方法かしらー！」

第七話 演技

夜の帳。空は赤黒いが、この時ばかりは前世と変わらない暗闇。街は静まり返って、人の姿は見えない。

「本当にこれで釣られるのかしら？」

暗い路地裏を歩くアリス。腕に抱えた真紅シメツクに小声で訊く。

「わからないわ。金糸雀カナリヤを信じるしかないのだから」

作戦としてはこうだ。夜道、一人の女性、そこを暴漢が襲う、そこへ”弱き者の味方”が勘違い、助けに入る。

アリスが夜道を歩く女性役。身体魔法で大人の女性になっている。暴漢役として古明地こめいじこいしが、怪しい格好で出てくると言っていた。金糸雀は全体を俯瞰して見ている。

果たして、このような単純な作戦で”弱き者の味方”は出てくるのだろうか。はなはだ怪しい。

こいしは来ない。襲うタイミングはこいしに一任されている。それまでアリスは人影のない道をウロウロとする。

ザザツ、と足音。こいしが来たか、とアリスはホツとした。このまま一人で歩くのは、精神的な疲れが出る。

「お嬢さん、こんな夜更けに一人で外出は危ないですよ？」

知らない若い声。声変わりがまだの若い男のような、性別のわかりにくい声。さつと振り向くアリス。全身フードとマントの小柄な人が立っていた。そして、傍らには、フヨフヨと白いのが浮いている。

(服装を隠している……)

アリスは一応警戒をした。

「ご心配には及びません。家はすぐ近くですので……」

アリスがそう言うが、相手はひかない。

「いえ、女性が一人でこんな道を歩くのは危険です。私が家まで送りましょう」

「……そう言うあなたが、悪い人の場合は、どうするんですか？」

警戒を込めて言う。相手は戸惑った様子。

「いや、そう言われたら、どうしようもありません。信用してくれるし

か、こちらにできることはありませんね……」

少し落ち込んだような声で言う。心からの善意で声掛けしたのだろう。アリスは申し訳なく思った。

「すみません。意地悪をしてしまったようですね。家まで送ってもらえませんか？」

フードの人が、ホッとするのが感じられた。

その時、

「やあやあ！ これはかわいいお嬢さんだことだ！」

こいしの声。フードの人が振り向く。アリスもそつとフードの人の陰から見る。こいしがピエロのような格好をしていた。顔にはお面。気持ち悪いピエロのお面。

怪しい格好で行く、とは言っていたが、これは不審者というより変態だ。

フードが警戒をする。

「何奴ー！」

「ん？ 私か？ 私はその女性を連れ去りに来た、悪いやつだ！」

悪いやつは自分で、悪いやつ、とは言わない。しかし、フードはますます警戒を込めて警告する。

「怪しいものめ！ 成敗してやるー！」

そう言つてフードの中から出てきたのは、抜けば玉散る氷の刃。前世でもあまり見なかった日本刀。フードをかぶったまま、こいしへ斬りかかる。

問答無用すぎる。どこか既視感がある。と、アリスは止めに入るのだった。

第八話 日本刀

「これは大変失礼をしました!!」

フードの小柄な人が土下座して謝る。土下座で謝る文化はこの世界ベルカにはない。日本の文化だ。アリスは、この人も転生者である、と推測した。

「まさか、知り合いの方とは思わず、本当に申し開きもございません!

この度は切腹をしてお詫びを!」

「いやいや! そこまでしてもらわないから!?! 変な格好の人を不審者と思うのは普通よ」

「え? 変だった?」

古明地こめいじこいしはわかっていない。美的センスに難ありだった。この十年間でアリスは初めて知った。そもそも変な格好をすと言ったのはこいしだ。その質問は、ない、とアリスは思う。

金糸雀カナリアが飛んできて、報告する。

「他に人はいなかったかしら」

「そう」

アリスは頷く。真紅シンクは残念そうだった。フードが驚く。

「え! に人形が飛んで喋って動いてる!?!」

これはややこしいとアリスは説明を始めた。

「なるほど、つまり、その”弱き者の味方”を探し出そうとしているわけですね」

正座で聞くフード。奥の表情が見えない。アリスは必要な情報だけをフードの人に教えた。フードは腕を組みながら、ウンウンして、考え事をしているようだ。周りをフヨフヨとした白いものが浮かん

でいる。

アリスは訊く。

「何か知ってることはないかしら？」

「えへえ!? わ私ですか!? いえ、知りませんよお！」

怪しい。慌てようがいかにもである。

「下手をしたら、敵国のスパイかもしれないかしら! その場合、イクス様に知らせないといけないかしら!」

イクスの名前が出たとき、フードの人の反応が変わった。

「イクス……というと、この国の王ですよ。知り合いですか？」

警戒の色。アリスは目を細めた。こいしが頷く。

「そうだよ、私達は、イクスちゃんの直属の部下で、古明地こいし、そっちがアリスさんで、真紅ちゃんと金糸雀ちゃん」

フードが懐から引き抜く。きらめく刃。日本刀。問答無用の斬撃。

その場四人へ伸びる。アリスは避けた。こいしのお面が割れた。四人はフードから距離をとった。

「あなた方が、大罪人イクスの家来ですか……」

そう言つて、フードがマントを剥ぎ取る。緑の服、白い髪、緑の瞳、そして腰には二振りの日本刀の鞘。間違いなく「弱き者の味方」、そのものだった。

アリスは納得した。

「その格好……東方 project の魂魄妖夢ね」

「なるほど、……あなた達も、転生者でしたか……」

アリスを守るように金糸雀と真紅が前に出る。アリスが言う。

「イクスは大罪人でもなければ、私達が襲われる謂われもないわ」

アリスは人形の召喚陣を出す。少し怒ったように言う。させない、と斬り込む妖夢。真紅が薔薇の花びらで攪乱。金糸雀がヴァイオリンを出し、音響攻撃。

それを突つ切る妖夢。アリスの目の前に出る。驚愕のアリス。魔法陣は未完成。日本刀が舞う。アリスは避けられない。

アリスの身体を日本刀が通過した。

第九話 斬撃

日本刀は確かにアリスの身体を横斬った。それでもアリスの胴は繋がれたまま。魂魄妖夢こんぱくようむは眉をひそめる。その隙に真紅シンクの蹴り。妖夢は刀で受ける。真紅が退き、金糸雀カナリヤの音の攻撃。妖夢は後ろへ跳んだ。アリスとは距離が開いた。アリスは武装した上海と蓬莱、計12体を召喚し終わっていた。その横には古明地こめいじこいしがいた。

こいしの転生特典の一つ、『東京ESP』漆葉リンカの”物理透過”。触れた人もこの能力の恩恵にあずかれる。これがアリスの胴が繋がっている理由だ。

「1対4プラスの12。あなたに勝ち目はないかしら」

金糸雀がアリスの後方、家の屋根まで飛び、ヴァイオリンを構える。妖夢は目を細め、刀を鞘に納める。あまりの素直さに金糸雀と真紅が戸惑った。アリスとこいしは、居合の構えとわかった。

「来るわよ！」

『現世斬』！

高速の居合。アリスは人形達に魔力盾をプラスさせ、壁にした。妖夢が迫る。

12体全ての人形は真つ二つ。アリスは瞠目した。防具の隙間を縫うように斬られていた。真紅は避け、アリスはこいしの能力で事なきを得る。

アリスはこいしとともに空へ飛ぶ。妖夢が追随。

『妖童餓鬼の断食』！

弾幕を伴った斬撃。こいしの能力では魔力を透過できない。アリスは人形がない。

『イドの解放』！

こいしの弾幕。四方八方へハートの弾。妖夢の弾幕と対消滅。妖夢には当たらない。余波で妖夢が下がる。

地面へと降りる妖夢。アリスとこいしは屋根の上。金糸雀が駆け寄る。

「お母様、大丈夫ですか!？」

「心配ないわ。こいしのおかげよ」

「もつと褒めてもいいんだよ?」

こいしは相手を睨んだまま、そう言う。妖夢は見上げている。真紅がアリスの下へ合流した。

「お母様、どうなさいます?」

「逃げるわ。ここは街。周りに被害が出るとも限らないわ」

「それじゃー!」

そう言つて、こいしが全員を腕で囲う。東方project古明地こいしの能力”無意識を操る程度の能力”で妖夢はこちらを認識できなはず。目配せし、アリス達はその場をあとにした。

しかし、それで終わらなかつた。妖夢は焦らず、目を閉じる。

「……っ! そこ! 『待宵反射衛星斬』!」

「お母様!」

アリスは押し飛ばされた。こいしとアリスは転げ落ち、地面へ。

「金糸雀!」

金糸雀だ。金糸雀が押したのだ。見上げる。金糸雀は胴が真っ二つ。アリスは目を見開く。転がる金糸雀。真紅は金糸雀の身体を支える。

「金糸雀! 金糸雀! しつかりするのだわ!」

真紅の叫び声。妖夢は残心の構え。いつの間にか屋根の上。そして、アリスを見下ろす。

「本命は逃しましたか。ですが、次こそ当てます!」

「……どうしてわかつたんですか?」

驚くこいしの質問に、妖夢は刀を構える。

「敵に言うとも? 『未来永劫斬』!」

アリスが前が出る。

”Grimoire of Alice!”

アリスの手に本が現れた。アリスに迫る妖夢。アリスは二つになつた金糸雀を見た。そして、本を開いた。

「終わりよ」

第十話 会議

アリスは目が覚めた。知っている天井。アリスの部屋。ああ久しぶりの感覚、と思いながら、起き上がる。目眩がする。そのまま崩れるようにベッドに倒れた。

”Grimoire of Alice”を使うと、五感がひどくなる。酩酊とも狂気とも悪寒とも捉えられない、吐き気目眩無気力感。それらを感じる。嫌な感覚だ。

ドアがノックされる。ドアが開く。アリスは重い頭を動かし、顔を向ける。

「お母様！」

翠星石と蒼星石が駆け寄る。ホツとした感じだった。

「良かったですう〜！ お母様がこのまま起きなかつたら、どうなるかと思ったですう〜！」

翠星石は抱きついて涙を浮かべる。

「翠星石、お母様は起きたばかりなんだから、無理をさせちゃだめだよ」

蒼星石に言われ、名残惜しそうに翠星石はアリスから離れた。

「二人とも、心配させてごめんなさい。状況が知りたいわ。今はあれから何日後で状況はどうなっているの？」

翠星石と蒼星石は顔を見合わせ、説明しだした。

魂魄妖夢が襲いかかって、八日。アリスはその間眠っていた。アリスの”Grimoire of Alice”で妖夢を戦闘不能にしたが、意識は奪えず、古明地こいしの判断で、アリスと金糸雀カナリヤを抱え、屋敷に帰ってきたと言う。妖夢の行方は不明。移動できるまで回復した後、どこかに逃げたと予測できる。

アリスはイクス達に会いに行くため立ち上がった。身体がよろける。

「お母様！」

翠星石と蒼星石が支える。床に転がることは避けられた。

「大丈夫よ。イクス達のところに行きたいわ。手伝って」

「それなら、私達がイクス様を呼びます！ イクス様からもそう頼まれているんですう！」

「そうだよ。お母様は体調が良くないんだ。安静にしとくべきだ！」

二人に押し返され、ベッドに戻るアリス。でも、と言おうとすると、睨まれた。アリスは大人しく従うことにした。

「アリス、また無理したんですね」

イクスとこいし、真紅シンクまで来た。水銀燈スイギントウは二つになった金糸雀を運んできた。雪華綺晶キラキシヨウと雛苺ヒナイチゴは屋敷の警備をしている。

「金糸雀……しばらくは戦えないわね」

金糸雀は何か喋ろうとするが顎が壊れているのか、うまく喋れない。アリスは金糸雀の頭を撫でた。金糸雀は黙った。

「さて、妖夢だけど、おそらく今まではこの屋敷の警備を観察していたと思いますね」

こいしが説明し出す。水銀燈は金糸雀を作業台へ運ぶ。イクスが頷く。

「そうとしか考えられません。それから屋敷の警備、アリスとこいし、そして雪華綺晶が張った罫をどうくぐり抜けるか考えていたのでしょう。ですが、十日前にアリス達と会ってしまった」

「好機と思ったのかもしれないわね。私達を倒す」

「動転したんじゃないかしらあ？ それで襲いかかったとかあ」
「それにしても、剣戟に迷いがなかったのだけわ」

真紅が暗い表情で言った。出会う前は真紅は「弱き者の味方」に憧れを抱いていた。アリスは笑顔を作る。アリスが、真紅を呼んだ。真紅が顔を上げる。

「きつと、妖夢は勘違いをしているのよ。説得すれば、きつと誤解も解けるわ」

「っ！ べ別に心配してないのだけわ」

そう言つて真紅はそっぽを向いた。口が、ありがとう、と動いた気がする。アリスの勘違いかもしれない。こいしが言う。

「とりあえず、相手がどう来るかを予想しないといけません。この八日間何もしてこなかったところを見ると、怪我がひどいのか、屋敷の警備が頑丈なのか……」

沈黙。誰もいい案が出ない。時間だけが過ぎていく。

第11話 提案

「私に、いい案があるのだわ」

真紅^{シungk}が、言う。

「言つてください、真紅」

イクスが先を促す。真紅は頷いて続ける。

「妖夢さんは困っている人を助けるような人だわ。なので、こちらから呼びかければ、応えてくれると思うの」

「応えるって何かしらあ？ まさか降伏でも勧告するの？」

水銀燈^{スイギントウ}が目を細めて言う。真紅は首を振った。

「正々堂々の一騎打ち。それ以外は手をくたさない。負けた方は勝つた方の言うことを聞く。これなら、相手も応じてくれるのだわ」

「バカバカしいわ！ お母様がグリモアを使われたのよ？ それで、倒せなかった相手に、一騎打ちで勝てるの？」

「そうですね！ そもそも多対一で引き分けだったんですよ？ 勝てるわけないですよ！」

「それにそもそも相手がそれに応じてくれるかわからない。真紅。君の案はいいとは考えられないよ」

水銀燈^{スイセイセキ}、翠星石^{ソウセイセキ}、蒼星石^{ソウセイセキ}が真紅の意見を否定した。真紅は言った。「私はこの考えに自信があるわ。妖夢さんは正々堂々が好きだと思うのだわ」

「真紅」

イクスが言う。

「妖夢は困っている人を助けたと言いますが、それが何かしら彼女にとって利するものかということとは考えられませんか？」

真紅は黙った。周りは真紅の答えを待つ。

「わからない……のだわ」

真紅がうつむいて言う。しかし、と続けた。

「私は信じているわ。妖夢さんが”正義の味方”だと言うことを！」

イクスは目を閉じた。眉を寄せている。アリスは真紅からイクスへ視線を変える。イクスの返答を待った。イクスは目を開けて、微笑

む。

「わかりました。一騎打ちを条件に、相手の要望を聞きましょう」

「そんな！ イクス様、考え直してください！」

「水銀燈、あなたも姉なら、妹の言うことくらい信じてあげなさい」

イクスが水銀燈の要望をはたいた。

「で、でも、一騎打ちは、誰が出るですか？ お母様は消耗されているですよ？」

翠星石の言葉にイクスは古明地こめいじこいしを見た。

「こいし。お願いできますか？」

「ん？ いいよー」

軽い感じで返答した。水銀燈は目をむいた。

「ちよつと待つてください！ こいし様は、確かに強くなられたかもしれません。しかし、それでもグリモアが効かなかった相手に、勝てるわけが」

「水銀燈」

アリスがピシヤリと言う。

「戦い方は、力ではないわ。相手との相性よ。そういった点では、こいしは適任だわ」

水銀燈は納得していない様子だった。こいしの戦いをあまり見たことがなかったからだろう。

アリスは、含み笑いをした。

第12話 一対一

屋敷の中庭。広大な広場。芝生は緑色をしており、端には木々が空に向かっていている。空は赤黒いが、その場だけは日の光があるように思われた。

そこに二人の少女。古明地こいしと魂魄妖夢こんぱくようむが向き合っていた。アリスとイクス達は端で見守る。

「本当にここでよろしいんですね」

妖夢が確認する。こいしは準備体操をしている。掛け声をかけながら丁寧に行っている。妖夢には、答えない。

妖夢がアリスの方を見た。アリスは頷く。

「ええ、いいわよ。その娘と戦って、負けた方が勝った方の言うことを聞く。こいしが負けたら私達が負けたことになるわ。もちろん私達もあなたの言うことを聞く。あなたが負けたら、聞いてほしいことがあるわ。以上よ」

妖夢はなんとも言えない顔でこいしに向き直った。こいしは、よし、と言って準備体操を終わる。両者、向かい合う。

「一応言っておきますが、あなたの能力は二つとも私には効きませんよ。気配遮断も物理透過も」

こいしの能力は妖夢にバレていた。前回の戦いで見破られていたのだ。

「残りの一つはわかりませんが、それも私に効果的でない。効果的ならすでにあのとき使っていたでしょう」

こいしはひょうひょうとして言った。

「私もあなたの能力、わかっていますよ」

妖夢が目を細める。

「一つは魂魄妖夢の容姿と能力。これは簡単にわかりますね。二つ目は視界に写ったものを斬れる能力。アリスの人形12体一瞬にして真つ二つにしました。剣が届かない範囲の子達も一緒に同時に斬られていました。三つ目は千里眼とかそんなところでしょ？ 私の無意識を操る能力を看破したんです。位置が特定できる何かしらの能力

「ですよ？」

「……」

こいしの説明に妖夢は黙る。

「凶星、ということでもいいですか？」

「……いえ、どうでしょう？ それは戦って確認してはどうですか？ 『現世妄執』！」

刀を掲げる。幾筋もの光が網目のように張り巡らされる。光の柱に光弾がまとわりつく。妖夢が刀を振り下ろした。光弾がこいしへ向かう。

こいしは一つ一つを冷静に見ながら避ける。弾幕自体の速度は遅いが密度が濃い。妖夢はその間に刀を下段に構える。

『楼観から弾をも断つ心の眼』

妖夢が消えた。白い人魂のようなものが現れる。人魂から弾幕。虚空から剣戟。見える弾幕、見えない剣戟。こいしはこれ以上は避けられない。

『枕元に御先祖総立ち』！

光の槍が人魂へ向かう。妖夢の弾幕と相殺する。爆風が埃を巻き上げ、あたりが見えなくなる。

第13話 古明地こいし

煙が晴れる前に、古明地こいしは能力を使った。これで誰もがこいしを認識できないはず。

転生特典のいいところは、古明地こいし本人になるのではなく、その能力を使えるかどうか。能力のオンオフができるということ。

東方Projectの古明地こいしは能力が常に発動していて、周りに認識されない。寂しい暮らしをしていた。そのリスクがないことに、こいしはホツとするのであった。それで能力自体の威力が弱まったとしても悔しくはない。

煙が晴れた。認識できないはずのこいしへ、妖夢は一直線に飛び込んでくる。

『『現世斬』!』

こいしは帽子を押さえながら、後方へ。妖夢が続く。連撃の剣戟をこいしは避け続ける。妖夢にはこいしが完全に認識できているようだ。

(見えているんだ。きつと)

こいしは妖夢が千里眼系能力を持っていると予測している。千里眼は見えないはずのものも見えるようにすることができる。古明地こいしの能力は認識障害で見えないものではない。それでも転生特典はその世界に適応される。原作とは違う攻略方法があるのかもしれない。

そのための対策もこいしは用意している。

こいしは能力をオフにする。姿が現れた。妖夢が顔をしかめる。

『『弹幕パラノイア』!』

妖夢の周りをクナイ型の弹幕が囲む。こいしは自らを隠すように光弾を撒き散らした。妖夢はクナイを切り落としていくが、こいしを見失う。こいしは妖夢の後ろへ回り込んだのだ。

「私、メリーさん」

近づくこいし。妖夢は気づかない。

「今あなたの」

真後ろへとたどり着く。こいしは持っていたナイフを取り出す。そして、

「そこー！ 『現世斬』！」

こいしは目を見開く。こいしは斬られた。後ろへ飛ぶ。血は出ていない。胸元が大きく斬られ肌が露出する。

「おいしいー！」

妖夢が叫ぶ。こいしの弾幕が消える。妖夢が構える。こいしは胸を押さえた。妖夢を見る。胸元を隠すようにした。

「……えつち」

「え？ あつー！ いやー！ そんなつもりはなく!!」

動揺する妖夢。こいしは意地悪な顔をした。

「もしかして、レズビアン？」

「違います！ もともと男なんです！」

「えへへ、うぶな反応だね〜。もつと見てもいいんだよ」

そう言って裂けた胸の部分を見せびらかすようにヒラヒラさせる。

妖夢は顔を真っ赤にさせた。

「まあ、からかうのはここまでにして……そういうことだったのね♪

『妖怪ポリグラフ』♪」

レーザーが伸びる。妖夢は避ける。それと同時にこいしは無意識を操る。レーザーは妖夢を追う。妖夢は目を閉じる。こいしと妖夢が向かい合うような配置になった。妖夢は構えた。

『『西行春風斬』！』

スペルの発動。言葉に意味はない。コマンドとしての魔法の発動キー。妖夢がこいしの眼前に迫る。こいしは、待ってました、とばかりに両手を伸ばす。

パンッ

こいしは妖夢へ猫騙しをした。

第14話 クラップスタナー

妖夢は剣を取り落とした。膝をつく妖夢。こいしはそれを見下ろす。

「そっちだったんですね。よかった」

こいしが言う。妖夢はこいしを見上げる。耳を押さえている。そのまま、取り落とした剣を拾い、後ろへ跳んだ。

こいしが妖夢へ迫る。妖夢の腹へ蹴りを入れた。うつ、と呻き、妖夢は中庭の木にぶつかると。妖夢は力が抜けるように剣を落とした。

「もう戦闘できないでしょ？ って聞こえているともわからないけれども……」

妖夢は震えながら、立ち上がる。もう一振りを鞘から抜いた。フラフラしている。こいしは諦めのため息をついた。

「さて、トドメといきますか……『ブランブリーローズガーデン』」

妖夢はこいしのラストスペルで沈黙した。こいしは勝利の荒ぶるグリコのポーズ。アリスは呆れた。

「で、どうやって倒したのかしら？ 見ていてよくわからなかったわ」

アリスが妖夢を拘束するように水銀燈達スイギントウに命じながら、こいしに訊いた。こいしはポーズしたままアリスを見た。

「あ、うん。妖夢のもう一つの能力が五感強化だったってこと」

こいしが説明する。五感強化。自分の五感を強化することによって、こいしを見つけていたのだ。それを逆手に取って、クラップスタナー、つまり猫騙しで大きな音を立て耳に強烈な衝撃を与えた。強化され敏感になっていた聴覚には効果的だったのだ。

「でも、あなたは認識阻害の能力があるのに、どうやって五感で捉えたの？」

「私自身じゃなくて、私が動くことで、動くものや風の流れ、風の音、つまり空間の変化から場所を把握したんじゃないかな？ 触覚と聴覚で。私を直接は捉えず、その周りのものから情報を得ていたんだよ。そうすれば、原理的には私を見つけることができる」

「それって、簡単にできることなの？」

「いや、できないんじゃないかな？ めちゃくちゃ努力しないと無理だと思う。それも私達以上に」

「なるほどね。つまり、妖夢は私達よりも早い段階で転生していたってこと、かしら？」

こいしが頷く。グリコポーズのまま。アリスは無視して、妖夢を見る。武器は取り上げ、簀巻きになった姿。それでも歴戦の猛者とでも言うべきほど強かった。前に戦ったフランドール・スカレットは未熟だった上、アリスをなめていた。いや、それを含めた何かしらの理由で全力を出していなかった。それでアリスは勝った。

今回の勝ちはこちらの勝利だ。こいしが味方で良かったとアリスは思った。

妖夢は二、三日起きなかった。治療を済ませ、拘束はしたままだったが、寝かせて、戦いから三日経った。それでも起きない。

「どちらかと言うと、アリスの”Grimoire of Alice”のダメージが残っていたようですね。少し卑怯だったでしょうか？」

「なるほど、それで勝てたって言うわけか……って、ダメージありながら戦ったって強すぎだよ」

イクスの説明。こいしの驚愕。アリスは目を閉じた。とりあえず、妖夢との戦いは終わったのだ。

扉がノックされる。水銀燈が入ってきた。

「お母様、妖夢様がお目覚めになりました」

第15話 事情

「目が覚めましたか、妖夢さん」

扉を開けて、イクスが尋ねた。部屋には古明地こめいじこいしとアリスが入る。魂魄妖夢こんぱくようむは黙ったままで、チラツとこちらを向いただけで動きという動きも見せなかった。

「さて、戦う前の約束は、覚えていますか？」

「……………はい」

妖夢が答える。妖夢はこいしを見た。

「ですが、こいしさんの話しか聞きません」

「いいでしょう。こいし、お願いします」

「うーんとねー。とりあえず、服脱いで」

「っ！ わ、わかりました！ これも敗者ゆえの辱め！ 慎んで承ります!!」

「やめなさい」

本当に脱ごうとした妖夢をアリスは止める。こいしのほっぺをつねった。

「こいし、あなた中身男でしょ？」

「えー、こいしちゃんは一、中身いー、女の子だよー」

目を細めたアリス。こいしは首を引っ込めた。

「わかったよおー……………えっと、今のナシね。私が尋ねた内容全てに嘘偽りなく話してくれるだけでいいから」

妖夢は目をパチクリとさせた。

「それだけでいいのですか？」

ほう？ とこいしが笑った。

「結構エグいこと訊くけどいいの？ 経験した数とか、自分でした数とか」

「こいし」

「……………はーい」

こいしは諦めた顔をした。咳払いをして、話題を戻す。

「えっと、訊きたいこととありますのは、あなたがどうして私達を襲っ

たのか、イクスちゃんを悪く言うのか、それとついでにあなたの能力も訊いておきたいですね」

「理由……ですか」

妖夢はつぶやく。

「とりあえず、能力についてはおそらくあなた達がすでに知っていることだと思えます」

妖夢の転生特典は、①東方Projectの魂魄妖夢の容姿と能力と武器”楼観剣”、白楼剣”、②プロジェクト・クオリディアの凜堂ほたるの能力で視線内に認識したものの複数に同時接触（武器での接触も可）できるというもの、③『探偵オペラミルキィホームズ』コーデリア・グラウカの能力、トイズ五感強化ハイパーセンシティブの三つだった。

こいしが、大正解、とバンザイをします。イクスが、スゴイです、と拍手する。アリスはこいしを無視して、妖夢に先を促す。妖夢はムツとした。

「私はこいしさんの話しか訊かないと言いました！」

アリスは面倒臭く感じながら、こいしを睨む。こいしはさすがごと妖夢へと向いた。

「えっと、私達を襲った理由は？」

「ベルカの聖王家が指名手配をしていました。なんでも、生きたままの人間で人体実験を行い、ベルカに対抗する兵器を作ったという罪です」

その場の空気が凍った。イクスはショックを受けた顔、こいしは眉をひそめ、アリスは怒りを抑えるために目を閉じた。

第16話 人体実験

「イクスは、大罪人ではないわ」

アリスが目を閉じたまま、言った。魂魄妖夢は訝しげな顔をした。「それは、どういうことですか？ 罪を認めない、ということですか？」

「生きてたまま？ そんな事実はないわ。死ぬ前に許可はとつてある。科学の発展のために、人体実験をさせてもらっている」

「それでも、人体実験をしたことには違いはないわけですよね？」

「だから何？ この世界では常識よ。ベルカだって、ダールグリユンだって、シユトウラだって、やっているわよ……」

「じよ、常識なんですか？」

妖夢がこいしに訊く。こいしは難しい顔をした。

「えっと、全て調べたわけじゃないから、なんとも言えないけど、少なくともベルカはやっているよ。それは調べた」

「いえ、どこもやっているわ。そうでなければ、この時代は厳しい。今でこそ太陽光を必要としない植物が誕生したけど、それも遺伝子操作技術の成果よ。人体実験を繰り返したおかげ」

「人でやる必要はあったんですか！」

「人以外に何がいるというのよ!? こんな太陽も見えなくなった世界で人間以外にどんな生き物がいたというのよ!？」

「植物は前からありました！ そもそも植物を遺伝子改良したのでしょ!？ それなら植物で実験するのが理にかなっています！」

「植物は……試したわ……でも、だめだったのよ」

アリスは壁に手をついた。妖夢はアリスを睨んでいる。

「だめだった理由は？」

「魔力……ここら一体の植物は魔力を出すの。切り取ったあとも魔力を出すの。その魔力が遺伝子操作の魔法と作用して、予想外の反応を起こす。だから、死んだあと、魔力を発しなくなった人間を使わないと、うまく実験ができなかったのよ」

アリスは説明した。この世界に来る前にガリアで行われていた実

験の全てを、アリスは調べていた。自分にできることを探すために、アリスは実験・研究を率先してやった。その過程で、この世界のこの時代というのが生きるのに難しい時代だと知った。

人が人を殺さないと、生きていけない。その切っ掛けを一つの兵器が作った。遙か昔の話だ。その兵器による空を覆う雲。兵器は今現在使われていないらしいが、それでも空は赤黒いままである。空に太陽がなければ、作物が育たない。作物が育たないなら、動物を食べるしかない。動物が食べられたら、動物がいなくなる。動物がいなければ、……。そうやって人は生きてきた。

その中で、ガリアで太陽光でなく、魔力で育つ植物が発見された。最初は植物を研究していたが、アリスが説明したように限界があった。技術の向上が必要になった。技術の発達で魔力で育つ作物が誕生した。それは人体実験の成果だ。

「ですが、生きたままやるというのは……」

「イクスが領主になってから、それは禁止されたわ。それ以前は許可なくやっていたらしいけど、許可を取らなくてはならなくなった。それでも、拒否する人は少なかったわ。自分の身体が将来のためになるならと言って……」

イクスは頷いて、俯いた。妖夢は黙った。アリスも黙った。こいしは難しい顔をしていた。

第17話 和解

「今では、人体実験は？」

魂魄妖夢こんぱくようむは訊く。

「今はやっていません。私が禁止しました」

イクスが答えた。アリスが勧めた内容だ。妖夢は沈黙した。

アリスはイクスに人体実験をやめさせた。理由は、人道的なものもあつたが、何より原作でのイクスの未来を知っているからだ。原作でのイクスはマリアージュという殺戮兵器を生み出す人造人間だ。そして、マリアージュは制御できない。それが多くの人を殺したのは想像にかたくない。イクスを助けたい。助けられるなら、原作知識も使う。

今現在のイクスは未完成。マリアージュを生み出すことすらできない。原作通りの未来にはならない。

「と言うことは、ベルカは嘘をついている？」

「まあ、そういうことになるよね」

妖夢はイクスを見た。

「イクスヴェリアさん、この度は申し訳ありませんでした」

妖夢は頭を下げた。ベッドに拘束されているため、寝ながらの謝罪であつたが、自分が間違えていた、ということが伝わる謝罪をした。イクスは首を振った。

「いえ、私も結局は人体実験の恩恵にあずかっています。そのため、領主として国王として、人体実験を行いました。責められこそすれ、謝られていいような人間ではありません」

「……ですが、私が言うのもなんですが、それでも人体実験はやめられたんですよね？ それなら私があなたを罪人だと言う理由はもうありません。申し訳ありませんでした」

妖夢が頭を下げ、目を閉じた。

「とりあえず、尋問も終わったし、妖夢ちゃん、解放してもいいよね？」
こいしが訊く。アリスはイクスを見る。イクスは笑顔で頷いた。
妖夢は目を見開いた。

「え？ いいんですか？ 命を狙おうとしていた輩ですよ？」

「いいんです。私が許します。誤解も解けたようなので」

イクスが言う。こいしが妖夢の拘束を解く。妖夢は自由になった。

「今から水銀燈スイギントウに言つて、刀を持ってこさせるわね」

アリスが扉を叩く。水銀燈が入ってきた。

「お母様、どうかなさいましたか？」

「妖夢の刀を持ってきて。あ、それと、お茶の準備も」

上海と蓬菜がお茶の準備をする。妖夢は人形を目で追った。

「あの、アリスさん」

妖夢が隣のアリスへ向く。さん付けになっているのが、和解した証拠だ。アリスは、どうしたの、と訊く。

「その、すみませんでした！ 人形を斬ってしまつて……」

「ああ、気にしないで。あのときは互いに必死だったからね」

人形は妖夢が眠っていた三日間で直した。もちろん金糸雀カナリヤも直した。

「そう言えば、気になることがありますか、訊いてもいいですか？」

妖夢が訊く。いいわよ、とアリス。

「この世界の空。空をあのようにした原因の兵器について訊きたいのです」

第18話 戦略兵器

空を覆う雲。その原因を作った兵器。それが今は使われていない。魂魄妖夢は兵器についての疑問を持っていた。

「その兵器は、一体何なんですか？」

「その質問は、戦略兵器の正体を訊いているのよね」

アリスの確認に、妖夢は首肯した。紅茶が出される。食器のなる音を聴きながら、アリスはカップをとって一口だけ啜った。

「わからないわ」

アリスはそう言って、紅茶を飲み始めた。アリスの正面の古明地こいしは出されたお菓子を頬張る。イクスも紅茶を飲みながら二人の話に耳を傾けている。

「わからない………」

「ええ、証拠が一切ないわ。不思議なほどに」

「消されたんですか？」

「消されたのよ。おそらくベルカに」

根拠は？ と訊く妖夢。アリスは呆れた。

「その前に紅茶を召し上がれ。冷めるわ」

妖夢は慌ててカップを持つ。飲む。おいしい、と驚く。アリスはその様子に微笑ましく思った。

「聖王のゆりかごは、知っているかしら？」

「は、はい！」

妖夢が答える。アリスはカップを置いて、手を組む。紅茶の中は空だった。

「私達はあれがその兵器だと考えているわ。それはあの中で遺伝子操作が行われていることも関係がある」

アリスは説明する。聖王のゆりかご。聖王の血筋の子をここで誕生させる。そうすれば虹色の魔力光を持つ子供が産まれる。ここまでは一般に広まっている聖王のゆりかごの知識。

ガレア独自の調査によると、中で行われていることは、人工的な聖王の誕生。産まれる子供に聖王の因子を埋め込むことで、過去の聖王

と同じ能力を持たせている。後天的な遺伝子改良。

どうしてこんなことをするのか。それは不明。魔力的に強い王族が誕生するというだけで、肉体的には弱く、最悪欠損した子供が誕生する。このようなりスクを負ってまで、聖王と同じ人間を誕生させる理由がわかっていない。

「で、その理由が、ベルカ世界をこんなにした元凶である兵器を動かせるのが聖王だけ、だと私達は考えている」

「……つまり、聖王家はその兵器を動かせように、遺伝子操作をしていると?」

「そう。そして、わざわざ聖王のゆりかごでそれを行うということは、聖王のゆりかごがその兵器で、聖王の因子を持つ子供に反応するかどうかを見るため、だと見ているわ」

妖夢は絶句していた。何も言えない。こいしは気楽に菓子を食べている。人形は紅茶の空になったカップに注ぐ。アリスは増えた紅茶を飲む。イクスは静かに話の行方を見守っていた。

第19話 別れ

「妖夢さんは、このあとはどうするのですか？」

お茶会も終わりに近づき、魂魄妖夢にイクスが訊いた。結局用意していたお菓子は全部古明地こいしが食べた。アリスは妖夢に持たせるお菓子の包みを上海に用意させていた。

「私は一度ベルカに戻ります。やり残したことがあるので……」

そうですか、とイクスは残念そうな顔をする。アリスが首を傾げる。

「やり残したこと？」

「今回依頼でこちらに来ました。普段は向こうでなんでも屋みたいなことをしていきまして、そこでできた友人に安否を知らせないといけません。世話になったので心配させたままでは気の毒だと思いますので」

「なるほどね、向こうで生活はできているわけね」

はい、頷く妖夢。アリスは納得した。イクスが言う。

「時間ができたら、またこちらにいらしてくださいね」

「はい、それはもう。アリスさん達とは、剣の話での情報交換もしたいです」

アリスは頷いた。妖夢も神が言っていた剣の手掛かりすら見つけられていなかった。日本刀を持っているからと期待をしていたのだが、仕方がない。神との連絡もつかない現在、打つ手が全くない。神は本当に剣を壊してほしいのだろうか。ここまで私達に手掛かりがないと、そう思いたくなる。

それでは、と立ち上がる妖夢。アリスもイクスもこいしも立ち上がった。

扉を開けると、水銀燈と金糸雀が話をしていた。イクスとアリスを

見ると、話をやめてこちらを見た。

「二人とも、私達は妖夢を見送ってくるわ。留守番は任せていいかしら？」

「はい、お母様」

水銀燈が応える。妖夢が金糸雀に目を留めた。金糸雀は首を傾げる。妖夢が金糸雀の前で膝を付き、頭を垂れた。

「金糸雀さん、すいませんでした。体を斬ってしまつて。今は大丈夫ですか？」

金糸雀はオロオロする。水銀燈を見て、アリスを見た。水銀燈は妖夢を睨んでいる。アリスは微笑んで頷く。

「あ、えっと、カナは大丈夫かしら。斬られたときは怖かったけど、今はお母様が元通り直してくれたから、どこも悪いところはないかしら」

そうですか、と妖夢はホツとした様子であった。

アリスは廊下の窓を見た。相変わらず汚らしい赤黒い空が広がっていた。

妖夢は立ち上がる。それでは、と言って金糸雀に言って立ち去る。水銀燈は妖夢を睨んだまま目を離さなかった。アリスは苦笑いをした。

廊下を歩く。水銀燈達が見えなくなつて、アリスは妖夢に侘びた。

「ごめんなさいね。うちの娘が睨んじやつて」

「いえ、皆さん、仲が良さそうですね」

妖夢が笑顔で答えた。アリスは目を閉じ頷く。

「そうね。自慢の娘達よ」

第20話 集まり

魂魄妖夢こんぱくようむが去って、一ヶ月。その間、ベルカ聖王家との間で、停戦合意が結ばれた。妖夢が教えてくれた指名手配の話も議論されて問題になったが、ガレアの最先端の遺伝子操作技術が交渉の要だったため、指名手配は取り下げられた。

この一ヶ月は、イクスにとっても、アリスにとっても忙しい日々であった。交渉、書類、それを上の方から下の方まで計46回。難航する場面も、スムーズに行く場面もあって、イクスもアリスも疲れた。アリスにとっては、喜ばしいことだった。イクスはマリアージュを作ることもできず、ガレアは聖王家と和解した。原作とは違う流れ。いい流れであった。これに慢心せず、より良い世界にする。それがイクスを助けることになる。

「アリスさん！ イクスちゃん！ こっち来て!!」

古明地こめいじこいしの緊迫した顔。イクスとアリスは廊下を走る。緊急事態が発生したらしい。アリスは何がなんだかわからないままこいしに続く。

廊下の先を曲がる。突き当りの壁。扉を開ける。中に入ると、

「「「お誕生日、おめでどう!」「「「かしら」

薔薇乙女ローゼンメイデンが、前世で言うところのクラツカーを鳴らした。七つの音は迫力があつた、とアリスは思った。

「なるほど、サプライズね」

そうかしら! と元気に言うのは、サプライズパーティーを企画した金糸雀カナリヤだった。

金糸雀は誕生日プレゼントとしてサプライズを思いついたのだ。こいしも巻き込んで、クラツカーや飾り付けの情報を実践した。本日のMVPは金糸雀だ、とアリスは微笑んだ。イクスもお礼を言う。金糸雀ははにかんだ。

水銀燈スイギントウが金糸雀の脇をつつく。金糸雀は思い出したように慌てた。

「そ、それと……これもかしら!」

金糸雀はアリスとイクスに小袋を渡した。

「開けてもいいですか?」

イクスが訊く。アリスも金糸雀を見る。金糸雀は頷く。開けると、ペアの髪留めが入っていた。

「これは?」

アリスが訊く。

「個別のプレゼントとは別に、みんなで作った、みんなからのプレゼントかしら」

それぞれが自分のイメージにあったものを飾り付けた髪留め。水銀燈は小さい黒い羽根の絵、金糸雀は音符の絵、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキはベースになつている翠と蒼が混じつた石、真紅シンクは紅い薔薇の絵、雛苺ヒナイチゴは苺の絵、雪華綺晶キラキシヨウは白い薔薇の絵。ごちゃごちゃしている気もするが、アリスはみんなの想いがこもったそれを大事に胸に抱いた。

「……ありがとう」

窓の外は相変わらず、汚らしい赤黒い雲が覆っていた。広がる景色はその先が見えない闇。それでも、アリスはこの空が晴れると、信じていた。

第一章第四節 古代ベルカーガレア王国篇 ―丙― プロローグ 雪華綺晶

雪華綺晶キラキシヨウは頬を膨らませていた。後で食べるために取っておいたチエクというお菓子を雛苺ヒナイチヨが食べてしまっていたのだ。

これに猛抗議した雪華綺晶だが、雛苺が泣き出して真紅シンクと金糸雀カナリアの間に入って、雪華綺晶が悪いみたいな空気が出来上がってしまった。今思い返せば、雪華綺晶も強い言葉を使いすぎたかもしれない。反省すべき点は思いつく。それでも、泣くのは卑怯だ。

そう思いながら、雪華綺晶が屋敷の廊下を歩いていると、先の曲がり角からアリスが出てきた。雪華綺晶は表情を明るくさせた。

「お母様！」

飛んでアリスの元へ。アリスも気が付き、微笑んで、雪華綺晶を胸で受け止める。

「お母様。お母様はどちらへ行かれるのですか？」

「私は今から図書室へ行くわ」

「一緒に行っても、よろしいですか？」

アリスは微笑んで了承。雪華綺晶を腕に抱えて、図書室へと向かう。雪華綺晶はさつきまでの不機嫌が嘘のようにニコニコしていた。

図書室は、屋敷々地内の教会から地下へ下りたところにある。教会と言っても今は使われていない。ガリア聖王信仰の中心だったが、独立してからは玉座の間として作り替えている。

祭壇のあった場所、その壁のステンドグラスは幾何学模様で、昔からあるものだ。神秘的な場を形成していた。

「ふふっ、呵呵、好きだわ」

アリスが言う。ステンドグラスの色とりどりの光がアリスと雪華綺晶の影を映す。外からの光は弱々しいが、仄かな影が可愛らしい。

雪華綺晶は首を傾げた。

「お母様は、ここの何が好きなのですか？」

「そうね。仄かな光、はつきりしていないけど、確かな光。私はそう
いったのに感動を覚えるのよ」

雪華綺晶は、そうなのですか、と訊く。アリスは、そうよ、と返す。

「それに、この光、あなた達にそっくりですもの」

「私達に？」

「ええ。全体的に黒っぽいのが水銀燈^{スイギントウ}、金色に輝くのが金糸雀、隣り
合った翠と蒼が散らばっているのが翠星石^{スイセイセキ}と蒼星石^{ソウセイセキ}、アクセントの紅
が真紅、和むピンクが雛苺、そして、合間合間にある白が、あなたよ」

雪華綺晶は、雛苺の名を聞いて、ブスつとした。その様子に、アリスは気がつく。

「どうかしたの、雪華綺晶？」

「なんで、雛苺お姉様が、お姉様なんですか？ 私をなんで先に作ってくれなかったんですか？」

「……………何があったの？ 教えてくれる？」

雪華綺晶は先程の件を話した。雪華綺晶のチエクを雛苺が食べたこと、それを抗議したこと、雛苺が泣いたこと、間に真紅と金糸雀が入ったこと、雪華綺晶が悪者になったこと。

「なんで、姉である雛苺お姉様が、私のお菓子を食べたのに、妹である私が責められないといけないのですか？ 納得できませんわ！」

雪華綺晶は頬を膨らませて、不満を吐き出した。アリスは灯りを持ち図書室へと続く地下階段を下りながら、雪華綺晶の話を聞いた。

「そうね。それは泣いた雛苺が悪いわね。雛苺はお姉さんなんだから。でもね、許してあげて。あの子は中身があなたほど大人ではないわ」

「それは……………わかっていますけど」

ふふふ、とアリス。なぜ笑うんですの？ と雪華綺晶。

「いえ、あなたの愚痴を聞くのは初めてと思ってね。嬉しいのよ」

雪華綺晶は赤面した。大人気ないことをアリスに言ってしまった。それに気がついたのだ。

「ご、ごめんなさい、お母様」

「あら？ 別にいいのよ？ 私はあなたと、あなた達と話せるのが一番好きなのだから」

灯りに映るアリスの顔。その顔が優しいもので、雪華綺晶は嬉しくなった。

「それと、雛苺は反省していると思うわ。つい泣いてしまつて感情的になつちやつたのかもしれないけど、落ち着いたら謝りに来るわよ」
アリスがそう言つて、図書室に着いた。

第一話 ガレア魔法図書館

扉を開けると、埃と黴の、古い書籍の匂いがした。アリスは灯りの火を壁の松明に移す。そこから火は壁の溝に沿って光を伝い、空間全体の松明に火を灯した。

広大な空間。円形で地下へと続き、本棚の樹海が細長く生えている。まるで伸びた剣山が落とし穴に設置されているような光景。

書籍は多くない。アリスは思う。原作での無限書庫と比べると、と条件が付くが。

アリスは雪華^{キラキシヨウ}綺晶に目を配る。二人は飛行魔法を使って、本棚へと向かう。

「お母様は、何をお探しになるのですか？」

「アルハザードの文献よ。特に死者に関するもの」

ただの知的好奇心だ。

原作での話。『魔法少女リリカルなのは』無印。そこでアルハザードの秘術を求めたプレシア・テスタロッサ。アリシア・テスタロッサを蘇らせる秘術。それがどのくらいの信憑性のある話なのかの検証。

原作でアリシアを蘇らせる気は、アリスにはない。何かの役に立つかもしれないという程度のもの。それに自分の転生特典である『戦姫絶唱シンフォギア』のキャロル・マールス・デインハイムが行っていたホムンクロス。その手があるかもしれない。

ベルカ聖王家と和睦して、十年。アリスは身体が成長しなかった。神がそうさせたのかもしれない。不老不死の身体。それでも、転生者同士では殺せる。いざというとき殺されても、複製が作れるのなら、作ったほうが良いだろう。アリスの目的は、神のお願い、剣の破壊。それと、イクスを手伝うこと。目的の途中でリタイアはしたくない。

不老不死だからといって、いつも背が低いままではいられない。イクスの手伝い、公務する上で大人の格好の方が便利。子供が政治をするのを快く思わない輩もいるため、身体強化魔法で大人になっているアリス。ほぼ常に大人である。薔薇^{ローゼンメイデン}乙女からは好評。古明地^{こめいじ}こいしからは不評。こいしはロリコンだと、アリスは思っ^て警戒している。

「昨日はこっちの本棚を探したの。今日はこの本棚を探すわ。雪華綺晶はアルハザードに関する書籍を持ってきてほしいの」

「わかりましたわ!」

そう言っつて、下りていく雪華綺晶。アリスも上の方から探すことにして、10体の上海と蓬萊を召喚した。

「なかなか見つからないわね」

時間もだいぶ過ぎた。そろそろ食事の時間だ。

「そろそろ上に戻りますか?」

雪華綺晶が訊く。アリスは考える。

「そうね。戻りましょう。せつかく持ってきてくれたのにごめんなさい。もとの場所にもと場所に戻ってきてくれる」

雪華綺晶達にアリスは言う。雪華綺晶は元気よく、はい、と言っつて本を抱える。あ、と一冊の本が雪華綺晶の手から落ちる。上海が拾つた。本はあるページを開いて、上海の腕に乗った。

「ごめんなさい、上海お姉様」

上海はにつこり笑っつて、本を閉じようとする。アリスはその本の中身を見た。

「っ! 上海! その本そのままこっちに渡して。その開いたページのまゝ」

アリスが上海に近づく。上海と雪華綺晶は首を傾げた。上海はアリスに本を開いたまゝ渡した。

アリスがその本を読むと、《人体複製》という文字があつた。

第二話 人体複製

人体複製。つまりは、クローン技術。ただし、魔法と科学の融合で作りに上げた、完全に同じ人を作り上げる技術。記憶、癖、魔力光、利き腕利き足利き目。全て同じな人間。

その実態は、『戦姫絶唱シンフォギア』のキャロル・マールス・ディーンハイムのやっていた方法とあまり変わりはない。大量のクローン人間を作り、その中から適した個体だけを選択。その個体に記憶を転写する。そうすれば、見た目全く同じ人間が出来上がる。なんの違和感もない同じ人間ができる。

本の概要を読んで、アリスは本を閉じた。雪華綺晶キラキシヨウに向いた。

「上に戻りましょう」

アリスはアリスの部屋に戻った。雪華綺晶は着いてきた。右目の白薔薇の眼帯を外す。原作の『ローゼンメイデン』では、眼孔から直接薔薇が生えてきていたが、そこは変えた。

アリスは本を開く。精子卵子のいらぬ受精卵の作り方や、細胞分裂の過程で外部から魔力を注ぐと魔力光が変わるとか、利き腕や利き足は偶発的なもので確率に依るといふことが具体的に書かれている。明らかな専門書。アルハザードでは、この技術が当たり前に使われていたことを示す。

最後の章では、どのくらいの確率で元となる個体と身体的に同じ個体になるのかが書かれている。身体的に同じ個体、つまり適した個体ができたとの記憶転写については、他の本に書いてあるらしく、この本では触りだけを書いてある。その本はまた別に探す必要があるだろう。

アリスは速読したあと、もう一度気になったところを読み直した。特に本の空白にメモされた直筆の文字。そこに書かれている注釈を

読んだ。

ある注釈でアリスは手を止めた。

人体複製におけるデメリット、の項目。その脇に《ジェイル・スカリエツテイ》の文字。アリスは深いため息とともに、この本の持ち主に出会った。細かい注釈は彼が歩んだ実験過程なのだろう。この本の著者の欄を見たが、共同著書になっている。ジェイル・スカリエツテイの名があった。

アリスは戻って、人体複製におけるデメリット、を読み始めた。

部屋の扉がノックされた。水銀燈スイギントウが入ってきた。

「お母様、昼食の準備ができましたが……」

アリスが本から顔を上げる。時計を見るとそんな時間か。雪華綺晶は寝ていた。

「そうね……………今日はいらないわ」

水銀燈は目を丸くする。

「そう、ですか。珍しいですわね。何か面白い本でも見つかりましたか？」

「えっと、そうね。ちょっと考えることができたの……。ごめんなさいね」

アリスは食事を取らなくても生きていける。食事を取るのは、人間であったことを忘れないためだ。

水銀燈は雪華綺晶を見た。

「この娘はどうしますか？」

「箱の中に戻しておいて。起こさないように」

はい、と言って水銀燈は部屋の奥へ進み、雪華綺晶をお姫様抱っこした。雪華綺晶は起きない。

それでは、と水銀燈は言って、部屋を出た。

アリスは本を前に、腕を組んだ。

第三話 ジェイル・スカリエッツィ

ジェイル・スカリエッツィ。『魔法少女リリカルなのはStrike』の悪役でマッドサイエンティスト。最高評議会が作り出した過去の天才研究者。ここでお目にかかるのは、アリスは思っていない。

デメリット①コストがかかる

デメリット②大規模施設の管理

デメリット③精神崩壊のリスク

以上が本に書かれていた人体複製におけるデメリット。①はクローン体を大量に作らないといけない。それ以外にも実験施設の建造と管理にもコストがかかる。②は長期間施設を管理するのにコスト以外のデメリットがあること。施設の破壊は死を意味する。③は……よくある話だ。

そして、ジェイル・スカリエッツィが書いたと思われる欄外のメモは、③についての話。

”私、ジェイル・スカリエッツィは、この問題を非常に憂慮している。この問題は生き返るたびに、99.9%の確率で発生する。精神崩壊の基準はアルハザードで度々取り上げられる基準で、理にかなったものだ。人格崩壊・精神崩壊は結局肉体的な死よりも本人を死に至らしめるもので、この問題が解決しない限り、不老不死とは言えない。私はこの問題を解決する最も有益な方法のアイデアがある。それはこの余白では到底書けるものではない。”

この文章から、ジェイルは不老不死を実現したとも思える。原作でそんな表記はなかった。そもそもこんな文書はなかった。もしこのメモが本当なら原作のジェイル・スカリエッツィは不老不死ということになる。死しても新たな肉体が誕生してジェイル・スカリエッツィを名乗る。

アリスは目を閉じた。そして、首を振る。

もしこのメモが本当なら今まさにジェイル・スカリエッツィは生きていることになる。しかし、原作ではそんな描写はなく、最高評議会

がクローン技術で蘇らしたということだった。つまり、ジェイル・スカリエツティが二人いることになる。そのことに原作のジェイル・スカリエツティが気が付かないはずがない。

娘達の胎内に自分由来の受精卵を埋め込んで、自分という個体が死しても復活できるようにしていた。自分が死ぬことを想定していたとしか思えない。他に自分がいることを想定していない。このことからこの記述の信憑性は低い。

しかし、とアリスは思う。

全てジェイル・スカリエツティは想定していて、娘達の胎内に受精卵を入れたのは保険だったとしたら……。ジェイル・スカリエツティは今この時代にいることになる。

仮説の域を出ないが、その可能性があることに、アリスは警戒した。

第四話 仲直り

水銀燈スイギントウが寝ている雪華綺晶キラキシヨウを工房へ運んでいた。飛行魔法で廊下を進む。途中で雪華綺晶が起きた。

「ん？ ーんは？」

「あら？ 起こしたかしら？」

水銀燈の腕の中で目をこする雪華綺晶。猫のようだ。水銀燈は空中で止まる。あら、と気づく。

「雪華綺晶、右目の眼帯は？」

「え？ あ、ない」

雪華綺晶は眼帯をアリスの部屋に置いてきたらしい。黄金色の両目が眠そうにしている。水銀燈は悩む。床へと降りる。雪華綺晶を立たせながら、アリスの部屋に取りに帰ってもいいだろうか、と考えた。

(お母様なら、許してくれますわよね)

水銀燈は元来た道に戻ることにした。

「あ、雪華綺晶かしら！」

水銀燈と雪華綺晶が廊下の途中で立ち止まっていると、金糸雀カナリアが廊下の角から出てきた。

その後を真紅シンクと雛苺ヒナイチゴがついてきていた。雛苺と雪華綺晶と目が合う。互いに居心地が悪そうに表情を曇らせた。

「雛苺、ほら」

真紅が言う。雛苺がおずおずと雪華綺晶の前に出てきた。雪華綺晶は首を傾げる。

「えっと、お菓子、勝手に食べてしまって、ごめんなさいの！」

頭を垂れる雛苺。え、と雪華綺晶。真紅と金糸雀も雛苺の隣に並んで、謝る。

「ごめんなさいかしら！ 泣いているからって、雪華綺晶を悪者にしちゃったかしら！」

「ごめんなさい。あなたの話を聞いてあげなくて、本当に申し訳ないわ」

雪華綺晶は呆気にとられ、しばらくして意味を理解してから、あわあわとした。

「え、えっと、私も言いすぎてごめんなさい！ 雛苺お姉様。そ、その、もう気にしていませんから、お姉様方、顔を上げてください！」

雪華綺晶は言う。三人は伏し目がちに雪華綺晶の顔を覗く。

「ほんとうっ？」

雛苺が雪華綺晶に尋ねる。雪華綺晶もこくこくと首を動かす。それでも雛苺達は申し訳なさそうな顔をしていた。水銀燈がため息をつく。

「はいはい、この話はおしまいよお。雪華綺晶がもういいって言うてるのだから、そんな顔をしない！」

「で、でもーなの」

雛苺が泣き出しそうな顔をした。水銀燈は呆れた。

「雛苺、自分を責めるのはやめなさい。許してくれた雪華綺晶に失礼よ」

ピシヤリと言われ、うぐ、目に涙をためる雛苺。水銀燈は、泣き虫ねえく、とため息をついて、雛苺の頭を撫でた。

「許してもらったら、ありがとうございます、って言いなさい。それで今回の件は終わりよ」

水銀燈が優しい顔で頭を撫でる。撫でられた雛苺の涙が引いていく。

水銀燈が頭を撫で終わり、雛苺を雪華綺晶の前に出した。

「え、えっと……雪華綺晶……ありがとうございます」

雛苺はおずおずと言った。雪華綺晶は微笑んで、返す。

「こちらこそ、こちらから謝っていたら、わだかまりがなくなりましたわ。ありがとうございます。雛苺お姉様」

第五話 救援要請

アリスが目元を押さえていると、扉がノックされた。返事をし、扉を見ると、水銀燈スイギントウが部屋に入ってきた。その後ろから他の娘たちも控えていた。

「どうかしたの？ 水銀燈」

「はい、雪華綺晶キラキシヨウが眼帯をここに忘れたらしいので、取りに来ました」

アリスは水銀燈の後ろの雪華綺晶を見る。眼帯がない。雪華綺晶が寝ていたベッドへ視線を動かすと、眼帯があった。

「いいわよ。取りに入っても」

アリスの許可を聞き、雪華綺晶はお辞儀してベッドの眼帯へ向かう。

「あれ？ みんなどうかしたのかい？」

扉から蒼星石ソウセイセイキの声が聞こえる。話す声が聞こえる。ノック音。開いている扉の間から蒼星石が顔を出した。

「お母様、イクス様がお呼びです」

「あら、イクスが？」

蒼星石が頷く。アリスはあごに手を置き、考える。雪華綺晶は眼帯をはめた。

「わかったわ。今行くわ。雪華綺晶達はもういいのよね」

雪華綺晶が頷く。アリスは水銀燈達と一緒に部屋を出た。

イクスの書齋へ着くと、先客がいた。この国の宰相。アリスは名前を忘れていた。最近新しい宰相になったと言う。アリスは政治に疎いため、それが正当なものだったのか判断がつかないでいた。そもそもアリスは内政にあまり関わっていない。ガレア顧問と言っても、イクスの友人程度なのが関の山だ。それでも、農業に力を入れるよう進言したり、不要な人体実験を控えさせたり、できることはしている。

突然やってきた人物がここまで関わられるというのもイクスの恩恵であらう。

宰相は書斎から出る。アリスに軽いお辞儀をして立ち去った。アリスは宰相に嫌なものを感じたが、気のせいだと無視した。

「それで？ 何かあったの？」

アリスが席につき、イクスに訊く。いつも通り上海と蓬萊が紅茶の準備をする。イクスが頷く。

「シュトウラからの救援要請が来ました」

現在ガレアはシュトウラとダールグリユン家と三国軍事同盟、ベルカ聖王家とは協商を結んでいる。友好的だ。ただし、その周りの国とはあまり良い関係とは言えない。それはベルカ聖王家に原因がある。ガレアを含めた多くの国々が聖王家に嫌気がさして独立した。そのため、元々反ベルカの国が多い。ガレアの場合はイクスが戦争を終わらせたい願いとガレアの遺伝子操作技術に目をつけた聖王家との間で利害が一致したため、協商関係が築かれた。シュトウラやダールグリユン家と、ベルカ聖王家との間では、まだ嫌悪感が残っている。「それで、軍を送るのよね？」

シュトウラとの軍事同盟で兵を送ったのはこれが初めてではない。何度かある。基本的に自国の防衛は自国が行う事になっているが、不安が残る場合は同盟国に要請できる。もちろん断ることもできるのだが、断り続けるといざというときに助けを呼んでも来ない場合がある。だから、ガレアは援軍を送ることにしている。そもそもガレアの主な援助方法は食物や武器の提供だ。戦力はあまり期待されていない。

しかし、イクスは言いづらそうな顔をした。アリスは首を傾げた。

「実は、シュトウラ側から希望がありました」

「希望？」

ええ、とイクスが続ける。

「アリスを援軍にほしい、ということでした」

第六話 アリス同行の謎

「私が？　なぜかしら？」

アリスは瞠目して、訊く。イクスは首を振った。

「わかりません。ガレア王国顧問のアリス・マーガトロイドを援軍に同行させてほしい、とだけで、理由までは……」

アリスはあごに手を置き考える。

同盟国シウトウラがアリスを同行させてほしい。その理由として考えられるのは、二つ。

一つは研究者として。アリスは遺伝子操作の技術を研究している。とは言っても、本職の研究者ほど詳しくはない。基本原理と今ガレアで行われている研究の論文を理解できる程度。それでも十分研究者としての才能はあるが、それで呼ばれるほどではない。この可能性は低い。

もう一つは戦力として。15年前、ガレアが聖王家の軍隊をアリスたった一人で殲滅した話はベルカ全土に広まっている。その実力を見ておきたいというのは、あるかもしれない。

そこまでイクスに話して、アリスは上海が用意した紅茶を口に含んだ。

「私は、それ以外だと思いません」

イクスが言う。アリスは首を傾げた。イクスはイクスの前に紅茶を置いた蓬菜にお礼を言った。蓬菜はお辞儀をした。

「私は、シウトウラが望んでいるのが薔薇乙女達だと思うのです」
ローゼンメイデン

アリスはそれもあるのか、と指摘されてその可能性に思い至った。

薔薇乙女は自動人形、そして戦闘ができる。兵力が増えるだけでなく、農作物の採れにくいシウトウラの寒さでは軍に割ける食料が少ない。薔薇乙女は食料を必要としない。時々メンテナンスさえすれば、ローザミステイカは永遠にエネルギーとしての魔力を供給する。『魔法少女リリカルなのは』には永遠結晶エグザミアというのがあるが、それと同じようなものだ。違いはエグザミアは大量の魔力を放出できるが、ローザミステイカは身体が動かせるプラスアルファの少量し

か魔力を放出できない。

アリスは言う。

「もしくはそれら全部が理由かもしれないわね」

イクスは頷く。

「アリスはあの娘達を渡せ、と言われたら、どうしますか？」

「そうね……」

アリスは紅茶のカップを持つ。考えながら、紅茶を啜る。そして、ニヤリ、と笑った。

「あの娘達は、渡せないわね」

イクスはホツとした顔をした。一番にアリス達のことを考えてくれている証拠だった。アリスは嬉しくなった。しかし、それでシュトウラとの仲が悪くなることもある。もちろんシュトウラはそんなことで仲を悪くするような国だと思わないが、いざということもある。それに、シュトウラではなく、ベルカ聖王家が言うとも限らない。聖王家とは微妙な関係であることは違いない。

アリスは言う。

「どうしても渡さないといけない場合は、新しいのを作るわ」

イクスは暗い顔をした。

第七話 シュトウラ

アリスは、寒暖を判別することができない。それは東方 project のアリス・マーガトロイドの能力である。温度で不快感を感じないのだ。それでも、馬車の中から覗く外の景色は氷雪。視覚が寒さを感じた。

シュトウラは雪原の国だ。この時期は雪が積もる。行軍も寒いだろう。

雪の中を何かが走った。

「あれは何かしら?」

カナリア カナリア が訊く。水銀燈も窓を覗く。

今回の同伴は金糸雀と水銀燈の二人だけ。ガレアに残した戦力は翠星石 スイセイセキ と蒼星石 ソウセイセキ、真紅 シンク に雛苺 ヒナイチゴ、雪華綺晶 キラクキシヨウ の五人。古明地 こめいじ こいしは神の言っていた剣を探しに異世界旅行。魂魄妖夢 こんぱくようむ はそもそもベルカ聖王家領で暮らす身だ。

金糸雀の質問に、アリスは答える。

「おそらく雪原豹ね。シュトウラで有名な動物よ」

車内は和やかな雰囲気であった。ガレアの部隊は雪原を進む。

シュトウラ王との面会はつつがなく終わった。イクスの予想通りというか、シュトウラ王は水銀燈と金糸雀に興味を持っていた。

明日戦地へ向かう。今日はシュトウラの王城で休息。支援物資を届けたら帰っていいと言われたのは予想外であったが、快く領いた。初対面ではあったが、シュトウラ王は噂に違わず裏表のなさそうな人だった。その周りは、どうかは知らないが……。

案内された部屋に入ると、アリスは深い息を吐いた。

「お疲れ様です、お母様。お茶を入れましょうか」

「ええ、……お願いね、水銀燈」

王城では戦闘用の魔法を使つてはいけない。召喚魔法も含まれるらしい。今回上海と蓬莱はお休みだ。

アリスがソファアに座る。金糸雀がアリスの後ろにまわった。肩を揉む。アリスは礼を言う。

「お母様、お疲れかしら？」

「そうね、敬語は苦手だわ。気を使うのも」

アリスは苦笑い。金糸雀は笑う。アリスは金糸雀が上機嫌なのに気がついた。それを訊くと、金糸雀ははにかむ。

「だって、お母様と旅行なんて初めてでしょ？ 嬉しいに決まってるじゃない！」

ああ、とアリスは思った。そういえばこの娘達は、ガレアの外に出たことはなかったわね、と。アリスは申し訳なく思った。世界がもう少し平和になったら、世界中を見せてあげたい。この娘達が生まれたこの世界を崩壊させはしない。

水銀燈が紅茶を持ってきた。

「上海お姉様や蓬萊お姉様みたいに、上手に入れられたかは自信がありませんわ」

そう言う割には、紅茶は美味しかった。美味しいことを伝えると水銀燈は喜び、金糸雀は、次はカナが入れるかしら、と張り合う。

部屋の窓は二重になっている。アリスにはあまり関係はないが、おもてなしは感じられた。窓の外は、汚らしい赤黒い空と、綺麗な純白の地面。世紀末な雰囲気を感じる。その雪原の先に、戦場はある。

第八話 戦場へ

「さて、目的地に着く前に、あなた達に言うべきことがあるわ」

移動の馬車でアリスが言う。目の前の水銀燈スイギントウと金糸雀カナリヤが頷く。アリスは二人の顔を見た。

「今日、あなた達は初めて……人を殺すわ」

アリスの言葉に、二人は頷く。アリスは馬車の窓に目を移す。外は雪が降っていた。重く遅い雪。空は相変わらず、汚らしい赤黒い色をしていた。

「敵はそこまで強いわけじゃないわ。こいしや妖夢、私のような者はいないでしょう。だからと言って、敵は敵。相手を殺そうと思うのなら、殺される覚悟も持つておかなければならない」

アリスが視線を二人に戻す。二人はアリスをまっすぐに見ている。アリスは目を細めた。

「本当なら、ここに来る前、ガレアにいるときにその覚悟を訊いておくべきなのが、普通だったわ。けど、私はそうしなかった。理由はわかるかしら？」

水銀燈と金糸雀は顔を合わせた。そして、困ったような顔を作った。水銀燈が言う。

「えっと、私達の覚悟がなかった場合でも、戦いをさせるためですか？」

「いえ、あなた達が戦いたくないのなら、私は戦わせないわ。中途半端な覚悟では、邪魔になるだけだからよ」

しゅんとする水銀燈。アリスは微笑む。

「大丈夫よ。あなた達二人は覚悟ができていると思っっているわ。そこは心配していないわ」

水銀燈はホツとする。アリスが金糸雀へ視線を移した。金糸雀が言う。

「それじゃ、イクス様に配慮してかしら？ イクス様は私達が戦うのを悲しく思われているかしら」

アリスは首を振る。

「いえ。たとえイクスが嫌がっても、必要なことであれば隠したりはしないわ。それはイクスも願っていることよ」

二人を見るアリス。二人は黙る。回答は出ない。アリスは目を閉じ、一つ息を吐いて、目を開ける。

「あなた達の妹達に、あなた達が選ぶところを見せたくなかったからよ」

二人は首をひねる。アリスは続ける。

「あなた達は率先して人を殺さなくてはならない。妹達に先んじて、手本にならなくてはならない。けれども、妹達の中には、戦いを好まない娘もいるわ。その娘が、戦いは選べると知ったら、きつと戦わない方を選ぶ。それは、この乱世では愚かだわ。この乱世で生きていくためには、不可能な選択よ」

一度区切るアリス。二人は続きを待つ。

「その覚悟を、あの娘達にも、させたかったの」

そう言っつて、アリスは、黙った。車内は静かになった。雪の降る音と、車が前へ進む音、それらしか聴こえない。

「お母様は」

水銀燈が口を開く。

「お母様は、優しすぎますわ」

アリスは、キョトンとした。

「そうかしら？」

「ええ、そうですね。だって、私達のことを思っつて色々と考えてくださっているのですから」

金糸雀も頷く。

「そうかしら。普通なら、そこまで考えて判断しないかしら」

アリスには、普通というのがわからなくなった。前世では平和な世界で生きていた。覚悟が決まっつていないのは、アリスのほうかもしれない。

アリスは自分の言葉が虚しく聞こえた。彼女達を騙す、詐欺師の言葉だと、思われた。外は雪の音ばかり聞こえた。

第九話 戦場で

血の匂いは鉄の匂い、と言うが、アリスにはもっと複雑な匂いに感じられた。例えるなら、海の香り。それに近い。

ここは戦場の海原。踏み荒らされた雪、死傷兵の血、海のような濃淡のある匂い。血は黒く見え、雪は白波程度にしか見えない。

一時休戦として、双方互いに睨み合っている。その間をシュトゥラ側からアリス、水銀燈、スイギントウ金糸雀は、カナリア歩む。赤に染まった雪を踏み分け、進む。

止まったのは、シュトゥラと敵の野営地の中間地点。

「さて、ここが戦場よ」

と、アリスは言った。もうすぐ約束の休戦時刻が過ぎる。互いの陣営から赤い魔力光が上がったら、それがのろしの合図として、戦闘が再開する。

「そう言えば、新しいお菓子を作りたいたいと思うの」

アリスが手を合わせて言う。水銀燈と金糸雀は首を傾げてアリスを見た。アリスは微笑む。

「シャウというお菓子よ」

そう言つて、前世で言うところのシュークリームレシピを紹介した。金糸雀が顔を輝かせた。水銀燈は呆れる。

「美味しそうかしら！ 早く食べたいかしら！」

「まったく、お母様。こんなタイミングで言うことでもないですわ」

アリスは笑う。

「ごめんなさいね。今思いついたの」

舌を出して、ウインクするアリス。水銀燈はため息をついた。金糸雀はお菓子の甘さを想像しているのか、嬉しそうである。

のろしが上がった。敵の兵が叫び声を上げる。

「それじゃあ、はじめるわ。『リトルレギオン』?100」

多数の魔法陣がアリスの周りに展開される。虹色の魔力光。そこから武装した上海や蓬萊が続々と出てくる。計600体の人形。アリスはこれで足りるだろうと判断した。

「水銀燈は、相手の隙を突きなさい。金糸雀は敵の攪乱。手加減は無用。全員……殺しなさい」

「はい、お母様」

二人は返事をし、空へと舞い上がる。前線はアリスが抑え、水銀燈と金糸雀が遊撃。二人は空から死を撒き散らす。

戦いが始まった。

敵の剣戟を上海が盾で受け止め、蓬萊が槍で追い払う。下がった兵士は空の脅威を忘れていて、水銀燈の燃える羽根を大量に浴び、静かになる。

後方からは遠距離の魔法が準備されているが、金糸雀がバイオリンを弾けば、音の攻撃を避け、その間にリトルレギオンが目の前に来る。

敵の兵は減っていく。撤退する向きもあるが、人形が回り込んで、潰していく。逃げ道は空けてあるが、実質逃げられないのと同じ。決着は敵が降伏するまで続く。

アリスは拍子抜けした。シュトウラが呼んだのだから、もう少し強い兵がいると思っただけに、なんとも言えない。これではアリス達の実力すら測れないのではないか。

アリスが後方を見る。しかし、そこには驚くシュトウラの兵士。これがこの時代の騎士の実力なのか、それとも、アリス達が強くなりすぎたのか。

アリスは一つ疑問が生まれた。

第十話 戦場から

シュトウラの王城に戻る。シュトウラの兵からは、化け物を見るような目を向けられているが、無視した。

敵は殲滅した。ひとり残らず殺した。逃げようとした兵ですら、慈悲を与えなかった。降伏した兵も殺した。死体は焼いた。それが戦場の全てだった。

伝令の兵から、シュトウラ王が呼んでいると言われ、書斎への廊下を進んでいく。水銀燈スイギントウと金糸雀カナリアも一緒だ。おまけとして、案内役のシュトウラの騎士が先頭を進んでいる。消えればいいと思う。

シュトウラ王とは、シュトウラに来たときに挨拶をした。おそらく戦闘の感想でも訊かれるのかもしれない。アリスの感想は、思ったよりも弱かった、だ。そう言う。

「お母様、大丈夫ですか？」

水銀燈が心配そうに顔を覗く。アリスは首を傾げた。

「その……怖い顔をしていましたので……」

水銀燈が言う。金糸雀を見ると、怯えているようであった。アリスは瞳目した。

アリスは廊下の途中で止まる。目を閉じた。案内の兵がうろんげな表情でアリスを振り返った。

アリスは両の手で顔を思いつきり叩いた。廊下に乾いた音が響いた。水銀燈や金糸雀だけでなく、案内の騎士も目を丸くした。それがこっけいに思えて、アリスは笑顔になった。

「ごめんなさいね。心配させて。もう大丈夫よ」

アリスは歩き出した。両頬に赤い手形をつけて。

シュトウラ王はアリスに訊いた。なぜ降参した兵まで殺したのか、と。それに対するアリスの回答は、敵兵を倒すことすなわち殲滅すること、と言った。ついでに、時間の短縮、とも言った。シュトウラ王

は黙った。側近の者が飛び回る蠅のごとく騒いでいたが、アリスは無視した。有益なものは何もないだろう。

「それよりも、私は自国のことが心配です。帰らせてもらっても、よろしいでしょうか？」

アリスの言葉に、待て、と言うシュトゥラ王。何を言われるのかアリスは首を傾げていたが、意外なことを言われた。

少し、手合わせを、してもらえないかと。

庭に出た。雪が一面覆っている。降っていた雪は止んでいた。

シュトゥラ王は構えてこちらを見ている。アリスは普段のまま自然体で、人形を召喚する。虹色の魔法陣。シュトゥラ王は目を丸くした。アリスは聖王家と関係がないことを説明した。シュトゥラ王は、眉を寄せていたが、頷いた。

「本当に、怪我、させてもいいのですか？」

構わぬ、とシュトゥラ王。アリスは軽く息を吐き、言う。

『リトルレギオン』

六体の人形がシュトゥラ王へ向かう。シュトゥラ王は構えを変えた。人形へ飛び込む。握った拳を人形へ。上海は盾を構える。盾に拳が炸裂。あ、と言う間に、上海は砕けた。盾は無事。アリスは内部破壊の技か、と分析した。人形達を下がらせる。

第11話 原型

これが霸王流となる武術の原型かと、アリスは思った。六体の人形は残り二体を残して、破壊された。想定外のことだった。

この程度か、とシュトウラ王が挑発してくる。アリスは考える。武術や武人としての勘は、アリスをまさる。シュトウラという国を率いるだけの実力はある。

それでも、戦いというのは、弱点を突いてこそだ。

武術の多くが、近接戦闘に特化している。遠距離は想定していないことが多々。原作での霸王流は敵の魔力弾を投げ返すという遠距離技を披露していたが、それも結局は限定的なもの。魔力弾を使わずとも戦う方法は無限にある。

アリスは新しい人形を召喚したが、それら全てを下がらせた。シュトウラ王は眉をひそめた。アリスは左手の平から大量の魔力糸まりよくしを出す。虹色の魔力糸。それが一齐にシュトウラ王へ向かう。

蜂の集団のように襲う糸。シュトウラ王は躲すか、弾く。

上手だ、とアリスは思う。大量の糸の先端を瞬時に見極めて避ける。また、魔力を帯びた手や足で払う。初見であるはずだが、直接触れることをしない。糸の粘性が効かない。

しかし、とアリスは右手を向ける。右手からは既に糸が垂れていた。

シュトウラ王が気づいたときには、魔力糸は脚に巻き付いていた。アリスが右手を引く。シュトウラ王は脚を取られ吊上げられる。しかし、王は冷静だ。天井を足場に、中空へ蹴りを入れる。魔力を帯びた蹴り。魔力糸は散った。

シュトウラ王は天井を蹴る。真っ直ぐアリスへ。アリスは魔力糸の束で防御。シュトウラ王の拳は阻まれる。アリスは糸を操作する。王が地面に着く前に全身を糸で縛る。王は空中で半回転。威力が足りず、糸は軽く離れただけ。しかし、その間に足を地面に着ける。踏み込む。王はアリスの目の前に。

アリスは体をひねる。横を拳が飛ぶ。シュトウラ王の回し蹴り。腕でガード。魔力糸で補強したため、骨折は免れた。腕がしびれた。シュトウラ王の連撃。アリスは上海を壁にする。

『アーティフルサクリフアイス』

上海が爆発。シュトウラ王の視界を覆う。王は拳で煙を払う。そこには距離をとったアリスが複数の人形を準備させていた。

『首吊り蓬莱人形』

砲撃がシュトウラ王を襲う。間一髪で避ける王。弾幕はまだある。一つずつ避けながら、アリスへ近づく。しかし、アリスは糸を垂らす。シュトウラ王は魔力糸に足を取られる。再び散らそうと思うが、弾幕が襲い、それもできない。あつという間に、シュトウラ王は簀巻きになった。

「指を一つ動かすだけで、あなたの首をはねることができます」

アリスはそう言って、王を見る。

王は、降参した。

第12話 謝罪

場所をシュトゥウラ王の書斎へと変わった。スイギントウ水銀燈とカナリア金糸雀は控えの部屋で待機だ。

シュトゥウラ王から謝罪があつた。ガレアの実力を疑っていたらしい。アリスは違和感を覚えた。

「ガレアは確かに軍事同盟を結んでいますますが、どちらかと言うと、後方支援として期待されていたように思いますが」

アリスが訊くと、シュトゥウラは頷いた。

どうやらガレアの役割自体が変わったわけではなく、噂からガレアの実力を知りたくなつたと言う。噂というのは、アリスが15年前にベルカ聖王家の軍を殲滅したことだ。同盟相手が強ければ強いほうが良い。けれども、弱かつた場合はまた戦略が変わってくる。そこでガレアの最高戦力であるアリスの実力を知りたかつたようだ。

アリスは釈然としない。同盟締結の意図がズレているように思つた。シュトゥウラ王は申し訳なきそうに訳を話した。

「反対勢力……ですか」

シュトゥウラ内部で、政に難癖をつける者が出てきたらしい。今まではなかつたことらしいが、その勢力から同盟に疑問が出てきたと言う。

ガレアは後方支援だけで、シュトゥウラが直接戦闘では割りに合わないという意見。国防は自国が行うが、ガレアが弱ければシュトゥウラがガレアの戦に巻き込まれ、シュトゥウラにとつてあまり益がないのは、という意見。同盟前は出なかつたことが最近では頻繁に上がってくると言う。

アリスはあごに手を置いた。

「……今回の意見を言い出したのは、どういった役職の人ですか？」
シュトゥウラの内政に関わる質問だが、シュトゥウラ王は快く教えてくれた。

今回のアリスをシュトゥウラ援軍に同行させたのは、ガレアでの交渉を主に行う人物らしい。怪しいところは何も無い。アリスが最高戦

力であるということを感じているわけではないから、ガレアに近い人物なら知っていることだろうし、実力を知りたいというのは同盟国の役人なら納得できる。

アリスは考えたが、違和感は拭えなかった。何かがおかしい。そう思えるのだが、それが何かまでは特定できない。

頭の整理をする。

シュトウラはガレアの実力を知りたい。それは今回の件で解決。問題は実力を知りたいという意見が同盟後に出たことだ。同盟前ならわからない訳でもない。相手と同盟してよいのかどうかの判断ができる。議論があまりされずに同盟をむすんだのは、おそらくベルカ聖王家との対立を考えてのことだと思う。だから、今時になってそう言った議論が湧いたのかもしれない。おかしいことではない。おかしいことではないのだが、アリスは違和感を残したままだった。

いや、違和感ではないのかもしれない。それは、勘とでも言うような感覚。不穏なものをアリスは感じたのだ。

アリスはガレアに急いで帰ろうと思った。杞憂で済めば、良いのだが。

第13話 帰国

帰りの道中、アリスはシュトウラで覚えた嫌な予感を忘れることができなかつた。アリスは軍を引き連れて帰らなければならぬことに、面倒臭さを感じた。放つたらかしにもできないことだが、他の人間が率いてもいい気がする。それでも、兵をまとめる騎士から同行するように強く言われた。逆らう理由もないため、アリスはやむなく一緒にいた。

水銀燈スイギントウと金糸雀カナリリアは、アリスの表情を伺っていた。アリスは二人の悲しそうな表情に困った。水銀燈が口を開く。

「お母様。お母様はなぜそんなに焦っているのですか？」

アリスは口を開きかけて、口を閉じた。

勘、直感、第六感。そう呼ばれるものをどう説明すればよいのか、アリスにはわからなかつた。ただ窓へ視線を移すことしかできない。外は雪の平原から湿った黒い森へと変わっていた。ガレアの首都、イクス達が待つ所まであと少し。

ガレアの王城は未だあの頃の屋敷であつた。シュトウラとは大違いである。新しく作り変えるような案が出ているが、イクスが全て却下している。民との距離ができるのは嫌だ、ということだ。

「お母様！」

王城へ帰ると、雪華綺晶キラキシヨウがアリスへと駆け寄る。焦っているような表情。アリスは目を細めた。

「イクス様が！ イクス様が！」

「っ！ 案内して」

アリスの声が響く。

イクスは生体ポットに入れられていた。緑の液体。発光する背景。SFと間違いそうな光景。イクスの書斎の地下。隠し扉からしか入れない場所。アリスは入るのはこれで二回目だ。

雪華綺晶によると、イクスは突然倒れたそうだ。医者の話によると、人造人間として未完成であるため、身体に不調をきたしたのだからということだった。今までそんなことはなかったし、予想もされてなかったことだ。アリスがシュトウラへ出発して、日を跨がずに起こった事らしい。

「なんで、誰も連絡してこなかったのよ!？」

ローゼンメイデン 薔薇乙女に怒鳴るアリス。スイセイセキ 翠星石は蒼星石の陰に隠れ、蒼星石は翠星石を落ち着かせる。ヒナイチゴ 雛苺は泣き出し、雪華綺晶はどうして良いのかわからない様子だった。アリスが怒ることはそうそうない。

シンク 真紅が申し訳なさそうに言う。

「連絡しようと思ったのですが、宰相様がお止めになって……」

アリスは踵を返した。地下の階段を上る。水銀燈が慌てる。

「お母様！ どちらへ!？」

アリスは水銀燈の呼びかけを無視した。

第14話 宰相

アリスは宰相の家へ入った。表の兵は弾き飛ばした。無断での正面突破である。屋敷の兵が出てくるが、アリスはお構いなしに叫ぶ。「宰相はどこ!?!」

二階から扉が開く音がする。階段から宰相が現れた。

これはこれは、アリス殿。どうかしましたかな?

そう言う宰相。余裕の表情でアリスを見下ろす。アリスはイクスの容態となぜ連絡を入れなかったのか詰問する。宰相はとぼけた顔で、当然でしょう、と言った。

宰相が説明するには、アリスにシュトゥラの件をなんの心配もなく終わらせてほしかった、と言う。シュトゥラとの同盟関係はガレアにとって重要。そのシュトゥラの要求を反故にしたくなかった。アリスにイクスが倒れたことを言えば、任務そっちのけでアリスは帰ってくるかとわかっていた。だから、連絡しなかった。

アリスは怒りを抑えるため、目を閉じる。宰相の言い分は何も間違っていない。確かに連絡を入れればアリスはイクスの方へ向かっただろう。けれども、宰相の言い方はアリスの感に触るものだった。

アリスは目を開けた。

「シュトゥラとの件。私を同行させるように謀ったのは、あなたかしら?」

宰相は、なんのことかさっぱり、という表情を作る。予想通りの受け答えであった。アリスは仮説を述べた。

「あなたは、イクスを兵器にしたい。しかし、そこに私が邪魔だった。だから、私を遠ざけて、私がない間に、イクスの改造を進めていた。違いかしら?」

一瞬余裕の顔が崩れた宰相。しかし、それもわずかで宰相は元通り余裕の顔で、何を言っているのかさっぱり、と言った。証拠も根拠もないのなら、アリスの仮説は机上の空論だ。宰相はそれがわかってるのだろう。アリスは舌打ちをした。アリスは、邪魔したわ、と言ってその場を後にする。後ろで宰相が何かを言うが、無視した。証拠

を、集めなければ、とアリスは思った。宰相が背後で笑った気がしたが、それも気づかなかつた振りをした。

アリスは戻つて、薔薇乙女ローゼンメイデンに指示を出す。金糸雀カナリアと雪華綺晶キラキシヨウには、役人からの聞き取り、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキには、イクスの部屋の管理・調査、水銀燈スイギントウと真紅シンクには、宰相の見張り、雛苺ヒナイチゴには、イクスが起きたらアリスを呼ぶ、それぞれに役割を与えた。

アリスは雛苺とともにイクスの書齋へと向かつた。廊下は静かであつた。

第15話 書齋

イクスの書齋の扉を開けようとすると、中から物音が聴こえた。アリスは目を細める。扉を開け放った。散らかった部屋。手に何かを持った男。役人の格好をしている。

「ここはあなたが入れるような場所ではないわ。何をしていたのかしら？」

男は窓へ走る。アリスは魔力糸を伸ばす。窓を破ろうとした男を既で捕えた。男の手から袋が落ちる。

アリスはその袋を拾って、開けた。中は茶葉が入っている。匂いを嗅ぐ。いつもイクスの書齋で飲んでいる茶葉だ。アリスは男を見て、次に一緒に来たヒナイチゴ雛苺に茶葉を渡した。

「雛苺、これをスイセイセキ翠星石とソウセイセキ蒼星石の所に持って行って。あの二人なら植物に詳しいわ。この茶葉に毒が含まれていないか、訊いてきてくれなにかしら」

雛苺はアリスを見て、茶葉を見て、男を見た。男は雛苺を睨む。雛苺は軽い悲鳴を上げた。

「は、はいなの〜〜！」

雛苺は泣き出しそうなのを我慢しながら書齋を出た。

アリスは男に向かう。

「あなた、誰に命令されたの？」

男は答えない。アリスは魔力糸の縮める。糸は男を強く縛る。男は呻く。

「あなた、誰に命令されたの？」

アリスはもう一度同じ質問をした。男は何も喋らない。同じく糸を締めた。男の呻く声。

「あなた、誰に命令されたの？」

男はそれでも答えない。アリスは糸を引っ張る。男は廊下へ投げ出された。壁へ激突。うづくまる男。

「あなた、誰に命令されたの？」

男はアリスを見る。怯える男。アリスは男が答えるまで尋問する

気だ。首は縛っていない。声は出せるはず。手加減はしない。

「あなた、誰に命令されたの？」

男は折れた。

男はシュトウラとの交渉をする役人、交渉官の部下であった。件の行動はその交渉官に言われ、行ったこと。茶葉に何が入っているかは、わからないという。アリスは嘘をついていないか、何度も拷問した。手に入れた情報は交渉官が怪しいこと。

シュトウラでも、そのような話を聞いた。確か、アリスをシュトウラへ同行させるべきだとシュトウラ王に進言したのが、シュトウラ側のガレアとの交渉官。嫌な予感的中している。

そのタイミングで雛苺が戻ってきた。

「どうだった？」

「はいなの！ お母様の言うとおり、むみむしゅーの毒の植物が入っていたらしいの！」

アリスは、やはり、と臍を噛んだ。イクスは人造人間の副作用として倒れたのではなく、毒で倒れたのだ。

誰が毒の茶葉をイクスに渡したのか。交渉官がしたのだろうか。それとも、宰相か。

とにかく、アリスはイクスを完成させようとしている研究を止めなければならぬ、と思った。

第16話 改造

イクスのもとへ来た。生体ポットの操作をしようとする。研究員達が出てきて止めるが、アリスは弾いた。雛^{ヒナ}のバラのツルで拘束した。

アリスはキーボードをたたく。研究員ほどではないが、操作はできるし、実験も理解できている。イクスを開放する術がある。

そこに階段から足音。イクス改造の研究の主任研究者が現れた。

生体ポットを開けたぐらいではイクス様は目覚めませんよ、と言う。アリスは、わかっている、と答える。

「イクスが眠っているのは毒のせい。解毒剤を作れば起きるわ。その前に改造される方が、イクスのためにならないわ」

わかっていない、と主任が言う。アリスはキーを叩きながら、研究者の話を聞く。

あの毒自体が改造に必要なのですよ、と言った。アリスはカツと血が上った。魔力弾を主任に叩きつける。主任は壁に並んだ生体ポットを割り、壁に激突した。

「……どういふこと？」

アリスが手を止めた。研究者は笑っている。研究者は説明しだした。

あの毒はイクスのDNAに作用し、身体を作り変えると言う。すでに毒を摂取したことでイクスは改造されだしたのだ。あとは、完成するのを待つ以外、イクスが目覚めることはない。

アリスは目を閉じた。

この研究者が言うことが、正しいという保証はどこにもない。同時に、この研究者の言うことが正しくないという保証もどこにもない。この言葉を言われただけで、呪いのようにアリスは動けなくなった。

アリスは目を開けた。魔力糸を出す。研究者に巻き付く。

「真実を吐け」

アリスは口調もかなぐり捨てて言う。昔の、前世の口調になっているが、アリスは気がついていない。研究者は笑っている。糸をきつく

縛る。声が上擦る。それでも、笑い続ける研究者。

「殺すぞ」

アリスはより一層きつく締める。研究者は、殺されても言わないよ、と言う。アリスは見せしめに、倒れている研究員の首を糸ではねた。血が飛ぶ。雛苺の叫び声が出た。アリスは血をかぶる。それでも、主任研究者は笑ったまま。

研究者が笑いながら言う。

我々は最高の兵器を作りたい、と。そのためには命も惜しくない、と。お前は陛下が大事だから私達の誰かは活かすはず、と。その時点で我々の勝ちだ、と。

アリスは歯軋りした。アリスより弱いのに、アリスは勝てない。アリスは強いのに、負けた。アリスは何か他にないだろうか、と考えるが、いい案は浮かばない。時間だけが経つ。

雛苺が裾を引っ張る。アリスが雛苺を見る。雛苺は泣き出しそうであった。

アリスは折れた。

第17話 破滅への道

アリスは何もできなかった。

研究員を開放すれば、研究室から追い出されたアリスと雛苺^{ヒナイチゴ}。今は書齋にいる。閉まった隠し扉を見つめるが、無力感だけがアリスにのしかかった。雛苺^{ヒナイチゴ}はどうすればいいかわからない。

「お母様」

いつまでそうしていたのか、開けっ放しの書齋の扉から雪華綺晶^{キラキンヨウ}が入ってきた。役人からの聴き取り調査の結果を報告しに来たのだ。雪華綺晶は他人の精神に干渉することができる。魔力が高いほど抵抗されるが、役人程度なら秘密を聞き出すことは簡単だろう。

調査の結果は、役人のほとんどが宰相派と言える者達で、イクスの改造に賛同していた。

アリスは崩れ落ちた。なぜそんなことに今まで気が付かなかつたのだろうか。そればかりが頭の中をめぐる。政治にあまりにも無頓着過ぎたのが原因だろうか。

雪華綺晶は説明を続ける。

役人の多くがベルカ聖王家に対して不信感を持っていた。十年以上経つたとはいえ、裏切られたのを根に持っている人が多い。

アリスだって聖王家が嫌いだ。イクスを殺そうとした。その気持ちは共感できる。できはするが、それで戦が終わるわけでも、貧困がなくなるわけでも、空が青くなるわけでもない。不信感の中でも、平和という形のないものを維持するために、前世の国々は努力していた。もちろんそれで戦争がなくなったわけでも、貧困が根絶したわけでもないが、世界大戦は終わり、空も青かった。

アリスは、イクスに会いたくなつた。とてつもない孤独感を味わつた。一人の友人も救うことができない自分を呪つた。

「お母様……」

雪華綺晶が泣いている。なぜ泣いているのか、アリスにはわからない。雛苺も泣いている。なぜ泣いているのか、アリスにはわからない。

「お母様、泣かないでください。お母様が悲しんでいると、私達まで悲しくなります」

雪華綺晶はそう言つて、アリスの側でうずくまった。

「お母様。お母様が笑顔なら、ヒナも頑張れるから……泣かないで」
雛苺もそう言い、アリスにすがりつく。

アリスは両手で顔を覆つた。手に液体がかかる。そんなのは、気のせいだ、と無視した。無視したところで、事實は変わらないが、認めるところでも、また事實は変わらない。

「お母様！」

水銀燈スイギントウが開けっ放しの扉から飛び込んできた。いつの間にか雛苺も雪華綺晶もない。アリスは無気力のまま呆然と中空を眺めていただけだった。

「お母様、雛苺から聞きましたわ。しっかりしてください！」

なるほど、とアリスは思った。雛苺がいなわけはそういうことだったのか。

「水銀燈」

アリスは言う。

「水銀燈、私は、私達は、なんのために、ここにいるのかしらね……」
水銀燈は憔悴したアリスになんと答えればいいのかわからなかった。

しかし、声はかけられた。

「アリスさんらしくありませんね」

扉へと顔を向けると、古明地こめいじこいしが立っていた。異世界調査から帰ってきたのだ。

第18話 友人

古明地こめいじこいしがアリスに近づく。アリスはうつむいているだけ。こいしはアリスの側でしゃがみ込む。

「なんのためとか、生きる目的とか、存在する理由とか。そんなのなに決まってるじゃないですか」

「こ、こいし様」

水銀燈スイギントウが止めようとする。こいしが手に平を水銀燈に向けて、静止させた。

「なんのためとか、生きる目的とか、存在する理由とか、そんな途方もなくくだらないことで、アリスさんは、ここにいるわけではないでしょ?」

こいしは続ける。

「あなたは、あなたがやりたいことをするために、ここにいるって、自分で言ってたじゃないですか。……アリスさんの中で答えがあるのなら、なんのためとか、生きる目的とか、そんなテンプレ的な悩みで、悩まないでくださいよ。テンプレなのは神様転生系作品の導入だけで、私はお腹いっぱいですよ」

こいしはため息をつく。

「何が起きたか、私には、さくくつぱり、わからないですけどね。それでも、アリスさんが先程言った悩みは、あなたが悩む必要のないものですよ。アリスさんは、アリスさんのしたいことをする。諦めてしまいうのは、それはしたいことができないとかじゃないでしょ? できないと思っただからです」

アリスの目に光が戻っていく。アリスはそれを感じた。それでも、まだ突っかかりが残っている。アリスはこいしを見上げる。

こいしはアリスが顔を向けてきたので、にっぱりと笑った。

「さて、ここでへこたれている暇があるのかどうか。私は、ないと思います。アリスさんがやりたいことって多いでしょ? アリスさんは欲張りさんですからね。さてさて、座ってないで立つ立つ!」

こいしはアリスの腕を引っ張って立たせる。アリスは思った以上

にこいしの力が強いことに驚いた。

「さてと、説明してください。私でも手伝えることがあるかどうかわかりませんので」

アリスが涙を拭く。ちよつと赤いかもしれないが、アリスは気にせず、こいしに今までのことを説明しだした。

なるほど、とこいし。

「つまり、イクスちやんを改造人間にしたい宰相一派。対するは、イクスちやんの気持ちを尊重したいアリス一派。果たして、どちらが政権の座につけるのか、ということですね」

「ま、まあ、そういうこと、ね……？」

アリスは戸惑いながらも頷く。こいしは相変わらずこいしであった。アリスは、フツと笑う。こいしはにっこり笑った。

「アリスさん。アリスさんは、そうやって余裕そうに笑っているのが似合っていますよ。どんなときでもそうやって笑っている方が、周りが安心します」

アリスは、ハツとなって、水銀燈を見た。水銀燈はにっこり笑った。アリスは反省した。

「あとで、ヒナイチゴ雛苺とキラキンヨウ雪華綺晶にも謝らないとね」

こいしが指を鳴らす。

「さてと、反省はあとです。今は宰相派の勢力をどう、削ぎ落とすかが、問題ですよ」

「そうね。それとイクスの改造を止める方法も探さないといけないわ」

アリスは考える。研究資料は研究室にある。そこにある論文・ノート・メモ等を読めれば、イクスの改造と毒がどのような関係があるのかがわかる。それがわかれば、次にやるべきことも見ていくるかもし

れない。

「こいしは、宰相側の弱みを調べてくれる？ 調査は得意でしょ？」

カナリア金糸雀と雪華綺晶を使ってもらってもいいわ」

「了解です！ アリスさんは？」

アリスは、書斎の閉まっている隠し扉を見た。

「私は、もう一度研究室に行くわ」

第19話 研究メモ

アリスが研究室に再び来て最初にやったことは、研究員達の拘束だ。その後、水銀燈スイギントウと一緒に研究室を漁る。出てきた大量の紙類に書かれていることを読む。しかし、わからない。

アリスは紙を収納し、場所を図書館へ移すことにした。あそこならわからないことでも調べられる。水銀燈に増援を頼み、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキとが来て、紙を読み、わからないところを本で調べ、徹夜を繰り返し、一つわかったことがある。

「この毒、解毒剤がないー!」

机に叩きつけるアリス。ビクツとなる翠星石に気が付き、落ち着きを取り戻す。

「ごめんなさい、翠星石」

「いえ、ですが、解毒剤がないのですか?」

翠星石の質問にアリスは頷く。どうすればいいのかわからない。

「解毒剤ではなく、症状を抑えるものはあるらしいのだけど、この力カ
リオって言う物質」

翠星石が覗くが、数式やら専門用語やらで、目を回した。アリスは苦笑い。翠星石はバツの悪そうな顔をした。

「進展はありましたか、お母様」

本を抱えた蒼星石がやって来て訊く。アリスは首を振る。

「力カリオって言う物質さえわかれば、解毒剤っていうほどではない
けど、症状は抑えられるらしいのだけど、どういった物質かわからない
の」

「力カリオ? どこかで聞いたことが……」

「本当!?!」

蒼星石が頷く。ちよつと待つてください、と持ってきた本を漁る。

「先程本を持ってくるときに見たような気がします」

「私も手伝うわ」

そう言つて、手を伸ばそうとすると、不安定だった本の山が崩れる。持ってきた本が巻き込まれて、混ざる。

「……本の置き方は、考えないといけないわね」

アリスは反省した。水銀燈が音を聞きつけて、やってくる。

「どうかしましたか！ お母様!？」

「あ、水銀燈。いやその」

アリスが水銀燈に説明しようとしたとき、翠星石が叫び。何事、と思うと、翠星石が飛んできた。

「ありましたあゝ カカリオ！」

アリスは目の色を変えて、飛びつく。そこにはこう書かれていた。

”カカリオ。主に山で採れる鉱物。なめると甘い味がする”

カカリオの化学組成や性質、色々と書かれていたが、アリスは甘い鉱物ということに目が行った。顔を上げる。翠星石も同じことを考えていたらしい。

「チエクですう〜〜！」

そう。アリスが作ったお菓子。そのお菓子の砂糖代わりとして入っていたもの。それがカカリオだったのだ。

これはこいしの要望で探した資源だ。アリスは涙が出る思いだった。

第20話 お礼

三日後。イクスは目が覚めた。アリスは歓喜した。

あれから忙しかった。生体ポットから出したイクス。もちろん経口摂取はできないため、イクスの血をとって、それにカカリオを溶かして、イクスの体内に直接注射した。

それからバイタルは安定していたが、目が覚めないことに、アリスはオロオロとしていた。論文を読めばこれで毒の効力を抑えることができる。完全な解決とはならないが、問題を先送りにできる。その間に解決すればいい。

そんなことを考えていどきに、イクスは目が覚めた。

「また、助けられたのですね」

アリスから説明を受けたイクスは、申し訳なさそうに言った。アリスは首を振る。

「記憶喪失で心細かった私を、快く助けてくれることに比べたら、どうってことないわ」

アリスの言葉に、イクスは頬をかいた、

「こいしもありがとうございます」

イクスが古明地^{こめいじ}こいしに礼を言う。こいしはいつもながらなんでもないような表情で、どういたしまして、と言った。

今回アリスは、こいしに助けられた。精神的な助けもそうだが、その後の働きも素晴らしかった。

まず、宰相と交渉官。イクスを毒殺しようとした証拠をこいしの能力、”無意識を操る程度の能力”と”物理透過”で隈なく調べた結果見つかって、二人を追放した。その他にも、役人の弱みとか暗いこととかを探し出し、脅し、あるものは追放、あるものは左遷し、あるものは味方につけた。研究者も追放して信頼の置ける人物を探し出してくれた。

こいしはこれを三日で終わらせたのだから、優秀すぎる。味方で良かったと思うと同時に、感謝の念が尽きない。

「こいしには今回、本当に助けられたわね。普段も異世界調査で助け

てもらっているのに、どうやって恩返ししたらいいのか、分からないわ」

アリスが言う。こいしは、きよとんとした顔で答える。

「そんなのいらないよ」

「そうはいかないわ」

「いや、いらないよ。私だって、突然知らない世界に投げ込まれたときに、アリスさんが快く助けてくれたじゃないですか。それに比べたら、なんてことないですよ」

アリスは面食らった。こいしはいたずらな笑顔を見せる。アリスはため息をついた。

「わかったわ。でも、何か助けてほしいことがあったら、言うのよ？」

私ができることなら何でもやるから」

「え？ 何でもするって言った？」

「……………変態的なことでなければ、ね」

なんだ、と残念がるこいし。ベッドのイクスがアリスの袖を引っ張る。アリスはイクスに顔を向けた。

「アリスですよ。困ったことがあれば、私に言ってくださいね。私のできることがあれば、何でもしますから」

アリスもイクスもこいしも笑った。

第一章第五節 古代ベルカーガレア王国篇 ――丁―
プロローグ 翠星石

最近のアリスは、忙しい。図書館に入り浸るようになったし、研究者ともよく意見交換したり、政治にも関わってきたりしているため、やるが増えたのだ。

スイセイセキ
翠星石はそれが不満であった。

寂しいわけではない。アリスがやっていることは重要なことだ。イクスのために生体関係の研究をしているし、前回のような宰相が謀ることがあつてはならないし、色々と大変なのだ。

大事なことだと理解しているが、不満は不満であった。別に寂しいわけではない。それでも寂しがらる姉妹がいる。例えば雛苺とか、と翠星石は思う。

「翠星石、どうかしたのかい？」

翠星石はビクツとした。ローゼンメイデン 薔薇乙女の双子の妹、ソウセイセキ 蒼星石がいきなり後ろから声をかけてきたからだ。

「もう！ 驚いたですう！ 蒼星石！ 後ろから急に話しかけるのは、禁止ですう！」

蒼星石は肩をすくめて、了承した。

「それで、どうかしたのかい？」

「ど、どうもしてないですう！ どうかしていても、蒼星石にだけは教えないですう！」

蒼星石が目線を下げる。

「どうしても、教えてくれないのかい？」

ウツ、となる翠星石。蒼星石が悲しそうに見えるのだ。蒼星石はいつも通りクールな顔のままなのだが、翠星石には捨てられた子犬のように見える。折れた。

翠星石は、折れた。

「なるほど、お母様が最近構ってくれなくて、寂しい、と」

「そ、そんなこと言っていないですよ！ 勝手にセリフを変えないでほしいですよ!!」

「ごめんごめん、と笑う蒼星石。絶対に反省していないだろう、と翠星石は思うのだが、許してしまう自分が憎い、とも感じている。

蒼星石は考える素振りをして、翠星石に言う。

「なら、お母様に直談判、してみてもどうだい？」

「じ、直談判、ですか？」

「そうしよう、と言って、移動しだす蒼星石。驚いて、翠星石は蒼星石についていく。

「ちよつと、蒼星石！ どこに行こうとしてるんですか!？」

「どこって、お母様のところだよ」

振り向いて言う蒼星石。翠星石は嫌な予感がした。

「何しに行くんですか？」

何を当たり前のことを訊くんだ、とでも言いたげな表情をする蒼星石。

「もちろん、お母様に直談判しに行くんだよ。最近僕達に構ってくれないから、構ってほしいって」

翠星石は嫌な予感があつた。慌てる。

「そ、それはいけないですよ！ お母様は忙しいのですよ！ 迷惑かけてはいけません！」

「お母様のことだから、迷惑には思わないよ」

蒼星石が歩みを再開する。翠星石は慌ててついていく。

「で、でも、ですね。お母様に、負担のなるようなことはしたくないですよ」

「負担になるかどうかは、訊いてみないとわからないよ」

翠星石が言い淀んでいると、廊下の角から真紅シンクと雛苺ヒナイチゴが現れた。

「ねえ、二人とも。お母様の居場所、わからないかい？」

第一話 噂

アリスは、紅茶のカップを置いた。食器の鳴る音がした。

場所はイクスの書斎。イクスとアリス、そして古明地こいしと魂魄妖夢ようむがいた。上海がこいしのカップに白茶を入れている。

妖夢が頷いた。

「なるほど、噂の真偽はわかりました。イクスさんは大事はないのですね？」

妖夢が来た理由は、噂の真偽の確認。

噂というのは、ガレアの王、イクスヴェリアが再び改造を受けていると言うもの。ベルカ聖王家領でその噂が流れている。

妖夢は聖王家領で暮らしている。時々こうしてガレアに来て情報を提供してくれる。一度ガレアで暮らさないか、と誘ったが、生活基盤が出来上がっているのなら、強要する理由もない。

「はい、私はなんともありません。ご心配ありがとうございます」

イクスが笑顔を妖夢に向ける。妖夢は胸をなでおろした。

イクスの改造は途中で止まった。普段からチェックつまりカカリオを摂取することで毒を抑制しているものと思われる。何かしらの切っ掛けがない限りは、能力が発動することもないと考えられた。

それでも、わからないことが多い。論文を精査したところ不備がいくつか見つかった。なぜカカリオがイクスの改造を促進する毒を抑制するのか、わからない。そのためアリスは図書館にこもることが多くなった。

「しかし、どうします？ アリスさんや。噂の件は」

こいしが訊く。アリスは考える。

「正直、全て嘘、と言うわけでもないのが苦しいわね」

その場四人が困った顔をした。

ガレア王国はベルカ聖王家と協商関係にあるが、友好かどうかで言うとうと、そうではない。互いに生きるための選択肢であり、そこに好意的な感情はない。

ガレアはイクスの改造をこれ以上行わない、と公言していた。前回

の宰相の行いはこちらが一方的にその約束を無視した形になる。自分で言つといて、自分が守らないのなら、信頼は失墜する。本意ではなかったとはいえ、そうなる。

「聖王家には、しっかりとした説明をしないといけませんね」

イクスが言う。アリスは頷く。こいしが手を挙げる。

「シユトウラとか、ダールグリユン家とか、にはどう説明するんですか？」

シユトウラとダールグリユン家とは三国同盟の関係にあり、好感度もそこそこある。聖王家よりは接しやすい。とはいえ、説明は必要だろう。

アリスがそう言うと、こいしは頭をぐるぐる回し始めて、めんどくさい、と一言。

「仕方ないわよ。国って、めんどくさい事だらけだもの」

アリスが言つて、イクスが苦笑い。妖夢は感心する。

「でも、政治ができるというのは、すごいですよ」

妖夢が褒めるがアリスは肩をすくめる。

「すごいわいよ。だって、ほとんどはチート……こいしの能力で秘密を探ったり、私の人形達に監視させたり……能力にものを言わせた政治よ」

「いえ、それでもすごいですよ。私なんて、前世を含めて剣ばかりの人生でしたから」

そういえば、とこいし。

「出会う前のみんなの話って、聞いたことなかったよね」

第二話 前世

そう言えば、そうだとアリスは思う。古明地こめいじこいしが続ける。

「イクスちゃんは、この世界で暮らしてたんだよね」

「はい、一応これでも70歳になりますね」

「おばあちゃんだ」

「……こいしさんは、前世？ ほどのくらい生きたのですか？」

笑顔のイクスの質問に、こいしはよそ目をした。

「ひ・み・つ♡」

「あら、そしたら私も秘密にしようかしら」

「アリスさんは、記憶を失っていますよね？」

妖夢が言う。アリスは、バレたわね、と茶目つ気を出した。その場が和む。魂魄妖夢こんぱくようむが続ける。

「私は一応、90年以上生きましたね」

「お、もしかしてこの中で最年長じゃないの？」

「妖夢も、おばあちゃんですね」

イクスの言葉に妖夢は笑いながらカップの中身を啜る。中身は緑茶。前世のとは味も香りも違うが、色は同じだ。

「まあ、90年も生きて、取り柄が刀一本というのも、恥ずかしい限りですが」

「そんなことないと思うわ。一つのことには専念した人生というのもかっこいいわ」

アリスが褒めると、妖夢は照れた。

「その……刀に憧れたのが、漫画の主人公が切っ掛けというのは、なんとも恥ずかしいのですが……」

「それでもないよ〜」

こいしが気楽に言う。妖夢は、そうですね？ と首を傾げ眉根を寄せる。

「ついでに、どんな漫画？」

『『るろうに剣心』ですね』

アリスとこいしは納得する。イクスだけ話についていけない。妖

夢はそれに気がついて、補足する

「まあ、物語の主人公に憧れるのはいつの時代でもありますね。こいさんの前世はどんな人生でしたか？」

こいしは、うーん、と悩んで、笑った。

「あまりいい思い出はないかな？ 黙秘します」

とぼけたような感じで言うが、少し悲しさが見えた。その場は、前世の話をやめた。アリスが言う。

「前世と言えば、転生者は何人こっちに來ているのか、わかるかしら？」

こいしと妖夢は顔を見合わせたか、首を振った。

「神様、何人送られるのか言ってなかったな〜」

「そうですね。他にも送られていたら、力強い味方になってくれたら嬉しいのですが……」

アリス達は、フランの事を思い出した。妖夢とイクスは実物を見ていないが、話は聞いている。そう言えば、とイクスが口を挟む。

「転生者は必ず三つ能力を与えられるんですね？ フランは、どんな能力を与えられていたのでしょうか？」

アリスは首を振って、わからないわ、と言った。

「能力を使っていたかどうかどうかもわからなかったわね。こいしの能力で消えてしまったから、永遠に謎のままよ」

重い空気が戻って來た。妖夢がそれを断ち切る。

「前から思っていた疑問なんですけど……言ってもいいですか？」

妖夢の確認にアリスが頷く。

「私達の能力って、どういう基準で選ばれるんでしょうか？」

第三話 選別

確かに、考えたことなかった、とアリスは思った。

「能力もそうですけど、私達自身がどうして選ばれたかもわかりませんね」

魂魄妖夢こんぱくようむが言う。古明地こめいじこいしが腕組みする。

「意外と……理由なんて、なかったり？」

「それは……あの神ならありえますね」

妖夢がげつそりして言う。イクスは目を丸くする。

「そんなに適当な人なんですか？」

「人というか、神だけどねー」

こいしが訂正する。アリスは考える。

「適当な、というか、時間がなくて慌ててる感じがしたわ」

「そっかー、アリスさんは神器を持ってるから、連絡取れるんだったね」

神器は神が渡したものだ。これを持っていると神と連絡が取れる……はず。深い夢でないと連絡が取れないらしい。アリスも一度それで神と通信したが、それ以降はない。おそらくだが、深い夢というのがそう簡単に見えるものではないのだろう。もしくは夢の時間があまりにも短かったのか、とアリスは思っている。

アリスはため息をつく。

「そもそも、なんで私以外に神器を持っている人がいないのか……とこのも気になるわね」

確かに、とその場の全員が頷く。

「何かしら天界の掟とか制限があるのでしようか？」

妖夢の意見に、アリスは顔をしかめた。

「神様転生ものなら、よくある内容だけど……これは現実よ？ 天界というのがあるのかもわからないし」

「星の意志とか？ 確かに考えるには、勇気いるよね。世界の秘密を知ってしまったら……って言うのは、創作物ではよくあったけど、現実を知ってしまうとどうなるのか……」

こいしの発言でイクスは疑問を口に出した。

「その、さっきから、物語や創作物の話がよく出てくるのですが、皆さんの前世というのは一体……?」

なんと言うセンチティブな質問だろうか、とアリスは思った。どこまで話していいのか、わからない。この世界が創作物になっていると知ったとき、イクスはどんな顔をするのだろうか、と。

「だって、私達の世界では、この世界は創作物の一つなんだよ」

アリスと妖夢がこいしを見た。こいしは何でもないように説明をする。『魔法少女リリカルなのは』というアニメがあり、この世界は、その創作物の世界だと神が言っていたこと。アリス達はこの世界が原作と呼ぶ世界に似ていると知っていたこと。そして、その原作の未来を知っているということ。全部言った。ついでに、能力が創作物由来のことも言った。

「そういう訳で、物語や創作物が重要って話でした〜」

アリスはゆっくりとイクスを見た。

「なるほど、そういうことだったんですね」

につこりと笑うイクス。アリスは訊く。

「お、驚かないの?」

イクスは首を傾げる。

「何がですか? この世界がアリス達の世界では物語ということがですか? それはもちろん驚きましたよ」

「な、なんだか、私が想像したような、その、シヨックは?」

「シヨックもありましたよ。ですが、それだけです」

アリスは目を剥く。妖夢もどうすればいいのかわかっていないような表情。イクスはそんな二人に呆れる。

「二人ともなんですか? もう少しこいしを見習ってくださいよ」

こいしは白茶とチエクと前世で言うシュークリームであるシャウを楽しんでいた。名前を呼ばれて首を傾げる。頬にクリームをつけていた。

第四話 考察

「そんなことより、私はアリスの考察が聞きたいです」

イクスが楽しげに言う。

「アリスの考察は聞いていて、ためになりますから」

アリスは大事なことを流された気になった。しかし、訊くタイミングを失ってしまったので、妖夢を見る。妖夢も困ったような顔だ。イクスが呆れる。

「もう！ この世界が物語だからといって、この世界に生きていることには代わりはないんですよ？ 私は私ですし、アリスはアリス、妖夢は妖夢、こいしはこいしです。そこに差はありません」

「そうだよ二人とも。そもそも原作通りに物事が進むとは限らないし、イクスちゃんが原作を知ったからと言って、イクスちゃんの行動は変わらないと思うよ」

アリスは合点した。

「……そうね。私達がいる時点で原作は変わる。この物語はすでに現実。未来は変わる。それがわかっていたら、この世界が物語だろうがそうでなからうが、一つの哲学的な考察と何も変わらないわね……わかっていたつもりでも、原作に引きずられていたわ」

妖夢はわかったようなわからないような顔をした。アリスは妖夢の混乱を無視して、話を変えることにした。

「ご期待に応えて、話を能力の選別に戻すわね」

待つてました、と言わんばかりにこいしが拍手する。イクスも釣られて小さく手を叩く。妖夢はまだ考えている。

「能力三つと言われているけど、実際は共通の能力が私達には備わっているわ」

何かわかるかしら、とアリス。こいしが手を挙げる。

「はい！ 先生！ わかりません！」

正直でよろしい、と苦笑いのアリス。

「答えは、翻訳よ」

アリスは説明する。

『魔法少女リリカルなのは』には古代ベルカ語というのがあり。この世界の、この時代の言語だ。日本語とは違うのは原作でも表現されている。それなのに、アリス達転生者は日本語を使う要領で古代ベルカ語を話している。古代ベルカ語を話しているという実感はない。

「原理はどうなっているかわからないけど、翻訳魔法を使っていないにも関わらず、会話や読み書きができる。これは共通の転生特典と言ってもいいわね」

アリスは三人を見た。妖夢は、諦めて話を聞くに徹している。こいしは難しそうに首をひねっていた。イクスだけがついていけているようだ。

「共通の転生特典があるということは、他の特典にも何かしら共通の目的かルールがあると思うわ」

「共通の目的、ですか？」

イクスが首を傾げる。アリスは頷く。

「翻訳が、その世界で適切に暮らす、という目的で付けられている、と考えられるから、他の特典も何かしらの目的で付けられた、と考えられる」

「そ、それが本当だとして、では、他の目的やルールってなんですか？」妖夢が訊く。アリスが片目をつぶった。

「全部はわからないわ。ただ、一つだけ確かなものがあるわ。神が私達に達成してほしい目的」

「あ、もしかして、剣の破壊ですか？」

イクスが言う。アリスは、正解、と指を鳴らした。

「剣を破壊できる能力が少なくとも一つあるはず。それか、能力の組み合わせで、剣を破壊することができるのか」

例えば、とアリスは補足する。

「私の、『戦姫絶唱シンフォギア』のキャロル・マールステーンハイムの錬金術は、対象を分解することができる。フランドール・スカーレットの”ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”は、対象を破壊できる。この二つは明らかに剣を破壊できると思うわ」

こいしが首をひねる。

「じゃあ、私や妖夢さんののは？ これと言って破壊できそうな能力は見当たらないよ？」

そうね、とアリスは言葉を一度切る。

「自信はないけど……こいしのは、『東京ESP』漆葉リンカの”物理透過”で、物質透過中に能力を解除すれば透過されている物質に穴が空いて破壊できる。妖夢のは、魂魄妖夢の武器”楼観剣”か”白楼剣”のどちらかが、神の言っていた剣を斬れる……と思う」

「なるほど、一応説明をつけようと思えばつけれるわけですね。可能性はありますね。一度試してみる価値はあります」

妖夢が納得してそう言うと、扉がノックされた。

第五話 直訴

イクスがノックされたドアに、どうぞ、と言う。扉が開くと、翠星石スイセイセキが蒼星石ソウセイセキに連れられて、書斎に入ってきた。

「あら、二人とも、どうしたのかしら？」

アリスが訊く。翠星石は蒼星石の陰に隠れている。蒼星石は呆れている。

「お母様。翠星石がお母様に話したいことがあるそうです」

蒼星石がそう言う。翠星石は驚いて蒼星石を見る。アリスは首を傾げた。

蒼星石は翠星石を自分の陰から出して、前に押しやる。翠星石は抵抗虚しく、こちらを見ているアリスと目があつた。ワナワナと震える翠星石。何か言おうと口をパクパクさせている。

「やっぱ無理ですう~~~~!!」

そう言つて、翠星石は蒼星石を振り切つて、書斎から飛び出た。蒼星石は反応が間に合わず、翠星石の背に呼びかけるが、足は動かなかった。廊下に出たはいいが、翠星石の姿はすでに見えなくなつて、諦めて書斎に入る。

「お母様、申し訳ありません。お見苦しいところを見せてしまつて」

謝る蒼星石。アリスは、別にいいのだけど、と扉の方を見る。

「翠星石は何を言いに来たの？」

蒼星石は、はい、と言つて説明する。最近アリスが忙しくて構つてくれないこと。忙しいのはわかるが寂しいこと。たまにはドール達にも構つてほしいこと。等々。

「アリスさんは、人気だね〜。よ！ モテ男！」

こいしが囁すが、アリスは無視して、反省する。

「確かに、最近は構つてあげれなかつたわね」

「アリスは最近、私のために色々としてくださっていますよね。たまには休んでいいのですよ？」

「休んではいるわ。今だつて、休みたいなものですよ？」

「それはそうかもしれませんが……」

イクスが言い淀んで、翠星石が出ていった扉を見た。アリスは肩をすくめた。

「大丈夫よ。私が気をつければいいだけだから。イクスが気に病む必要はないわ」

アリスは蒼星石を呼ぶ。蒼星石は首を傾げた。アリスは両手を広げて、微笑む。

「さあ、蒼星石。来なさい」

蒼星石はアリスの意図を理解し、モジモジした。アリスは、笑みを深めて、さあ、と催促する。蒼星石はためらいながらも、ゆつくりと飛びながら、アリスの腕へと収まった。アリスは蒼星石を抱きしめる。

「蒼星石を膝に乗せるのは、久しぶりね」

「は、はい。まだ歩けない頃には何度か……」

こいしは呆れた。

「アリスさんや、モテるのが嬉しいのはわかりますけどね。こっちのこと忘れてませんか？」

アリスがこいしを無視して、蒼星石に構おうとした。蒼星石は焦る。

「えっと、お母様達は、一体何の話をしていたのですか？」

第六話 考察Ⅱ

「あら？ なんの話をしていたかしら？」

アリスがイクスに訊く。イクスは微笑む。

「転生特典の話ですね。剣を破壊できる目的があると言うところまで話しましたよ」

ああ、と得心したアリス。アリスはお菓子をとって蒼星石ソウセイセキに渡す。蒼星石は恥ずかしそうに受け取った。

「そうね。剣を破壊する能力がないと、神の目的に沿わないわ。けれど、確実ではない。これは私の仮説だから」

「いえ、参考になります」

魂魄妖夢こんぱくようむが言う。はいはい！ と古明地こめいじこいしが手を挙げた。

「でも、転生者は複数人いるんだよ？ 剣を破壊できるのは誰か一人で良くないの？」

「いえ。確かに全員が持つ必要はないわ。けれど、複数人が剣を破壊できる必要があるわ」

「それはどうしてですか？」

イクスが首を傾げる。蒼星石はチェクを少しずつ食べる。こいしがチェクを掴んで頬張る。妖夢は紅茶を飲んだ。

アリスは頷く。

「剣の能力よ」

こいしと妖夢が顔をしかめた。イクスが首を傾げる。

「剣の能力というと、神をも斬れる、ということですか？」

「いえ、もう一つの方。人に取り憑くってことよ。もし、剣を破壊できるのが一人で、その一人が剣に取り憑かれたら、どうやって剣を破壊すればいいのかわからないわ」

イクスは納得した顔をした。こいしはチェクを口に詰めて、モグモグしている。妖夢が口を開けた。

「なら、転生者を複数人送ったのは、一人が取り憑かれた場合も対処できるということですね」

「おそらくね。ただそれだけだと、二人で十分な気もするわ。もしか

したら、剣は複数人に取り憑けるのかもしれないわね。でも、そうなる、逆に複数人送るのは悪手ね」

「剣が取り憑ける数は限度がある……とかでしようか？」

「そうね。そうになると、転生者の数はその数の2倍以上ということになるわね。私とこいしと妖夢とフランで四人。ちょうど偶数ね」

「その考えが正しいのなら、剣が操れるのは、最低でも二人。……フランさんがいなくなったのは痛手ですね」

アリスは複雑そうな顔で、そうね、と頷いた。こいしは口の中に入れたものを飲み込んだ。

「でも、フランちゃん、聞く耳持つてなさそうだったよ？ いきなり攻撃してきたし」

アリスはハツとする。

「フランは……もしかしたら、剣に取り憑かれていた？」

その場が戦慄したものになった。妖夢があごに手を当てた。

「その可能性はあります。そうすると、剣はどこにあったんですか？」

アリスは考える。

「……まだ、仮説だけど、フランの手元に剣がない。それでいて、フランが剣に取り憑かれていたとすると、剣は遠隔で対象に取り憑ける、もしくは、誰かが剣を持っていた？」

「つまり、他にも転生者がいて、その人も剣に取り憑かっていた可能性がある、ということね」

イクスが乗り出して言う。アリスは頷く。妖夢は渋面した。こいしは両手を挙げて、お手上げのポーズをした。

第七話 考察Ⅲ

「もしそれが本当としたら、転生者はもう一人いることになるわね」
アリスが言う。

「ただ、仮説に仮説を重ねた話だから、信憑性はないわ」

「そうですね。剣が複数人に取り憑けるというのも、フランが取り憑かれたというのも、仮説。そもそも転生者が複数の理由は、違うものも考えられます」

魂魄妖夢こんぱくようむが補足する。アリスは頷いた。イクスはのどが乾いたのか、紅茶を飲む。古明地こめいじこいしは先程一気に飲んでカップの中身が空であった。上海がこいしのカップに白茶を入れる。

「そうだねー。もしかしたら、複数送ったのは、一人よりも多いほうが良いって思っただけかもしれないしね。あ、でも、それだと、転生者めちやくちや送るね」

「おそろくですけど、転生者はそんなに多くはないと思うわ」

なぜですか、とイクスが訊く。アリスはカップを持ちながら言う。「神は言ったわ。あまりこの世界に干渉できないって。だから、転生という世界に干渉するような行動は比較的できないと思うわ。神との通信ですら難しいんですもの」

アリスは紅茶を飲む。こいしは腕をポンと叩く。

「そっかー。そう言えばそうだね。なら、アリスさんだけが神と通信できる神器を持っていたのは、干渉を最小限にするため？」

「そうね。だけどそうすると、もう一人は神器を持つていることになるわ。神器を持っていての人が剣に憑依されるかもしれないからね」

「……フランさんか、もう一人の転生者か」

「フランが何かを持っている感じは……ああ、あの変な杖があったわ。あの杖、フランが消えてから、見てないわね」

フランが消えたあとには、衣服しか残っていなかった。アリスはそれを思い出し、目を細める。蒼星石ソウセイセキが顔を上げた。アリスと目が合う。アリスは微笑んだ。

イクスが口を開く。

「アリスの神器も普段は出ていませんから、フランの神器が見つからないというのは別に不思議ではありません」

「でも、フランちゃんが神器を持っていなかったら……他の転生者の存在がちらつくね〜」

こいしが言う。妖夢は天井を見上げた。

「とりあえず、他にも転生者がいると思っていたほうがいいですかね？」

アリスは考える。

「《悲観論で備え、楽観論で行動せよ》だったかしら？」

「あ、知ってる！ 確か『緋弾のアリア』の武偵憲章！」

こいしの言葉に頷くアリス。

「これに習って、悲観論で考えると、他の転生者は全て、私達に敵対する、と想定することになるわね」

「たとえば、その数が私達よりも多かったとしても、対処できるように備えておく……ということですね」

妖夢が確認する。アリスは頷いて、カップを持つ。こいしは腕を組み、イクスは眉根を寄せた。

第八話 南部

「でも、それだと際限がありません」

イクスが言う。古明地こめいじこいしと魂魄妖夢こんぱくようむが領く。アリスは肩をすくめた。

「確かに、仮説ばかりで確かな証拠がないのは、心許ないわね……」

そう言っつてその場が沈黙した。こいしがチエクを頬張る音がする。アリスは蒼星石ソウセイセキに紅茶を渡す。蒼星石は恥ずかしそうに受け取る。

妖夢が沈黙を破る。

「そう言えば、証拠かどうかはわからないのですが、最近ベルカの南部で力をつけている国があります」

妖夢が話すには、ベルカ聖王家領南部で争いが激化しているらしい。小国しかないが、そのうちの一国が他の国を潰していつていると言う。

「今までは、そこまで有名ではなかったのですが、ここ最近の快進撃は、説明がつけられませぬね」

「その国に、転生者がいると?」

「その可能性はあります」

アリスに返す妖夢。アリスは考える。妖夢が続ける。

「もちろん、原作でもこの時代は兵器開発が激しく、それで成り上がる国もある、と考えられますが……」

「調べる価値は、あるってことね」

妖夢が領く。アリスはこいしを見た。こいしは頬にもものを詰め込んで、リスみたいになっていた。

「こいし、頼めるかしら?」

こいしは、首をブンブンと縦に振る。アリスは呆れた。イクスが、そう言えば、と口を開く。

「原作では、何も起きなかったのですか?」

アリスと妖夢とこいしが顔を合わせる。アリスがイクスへ向く。

「この時期は、不明なことが多いわね。イクスが生きた時代、という他はなんの情報もないわね」

「そういう意味では、この時代はあまり原作が当てにならないですね」
妖夢がため息をつく。こいしが頬の中のを飲み込んで、首を傾げる。

「あれ？ 他になかったっけ？ 例えば、闇の書とか」

「アリスと妖夢が首を傾げた。イクスはギョツとした。」

「闇の書って、あの闇の書ですよね!! 禁書中の禁書ですよ!!」

「こいし、どういふことかしら？ 確かに闇の書は古代ベルカ時代の遺産ということになっているけど、この時代での闇の書関係の事件は聞いたことがないわ」

「アリスが訊く。」

「でも、闇の書って、乱世でも暴れてたんでしょ？ 乱世って、今の時代だよ」

「アリスは目を細める。妖夢はあごに手を置く。イクスは喉を鳴らした。妖夢が訊く。」

「ということは、闇の書が、近々目覚める、ということですか？」

「こいしが頷く。アリスがイクスに訊く。」

「イクス、前回闇の書が覚醒したのは、いつ頃かしら？」

「えっと、50年ほど前です。異世界で覚醒して、一つの世界が滅びました。確か聖王家が管理していた土地なのでかなり騒がれた記憶があります」

「アリスは考える。妖夢が言う。」

「期間は十分開いていますね。すでに宿主を探し終わっている時期かもしれません」

「可能性は、あるわね……」

第九話 マリアージュ

「まあ、ここに考えても仕方ないわね」

アリスは蒼星石ソウセイセキを抱え直す。蒼星石は借りてきた猫状態を維持していた。

「とりあえず、こいしに偵察しにいつてもらうしかないわね」

「あ、私もついていきます。南部には私の家もありますので」

妖夢が言う。アリスは頷く。

「お願いね。私も行けばいいのだけれど……」

「アリスさんは、イクスさんのことがありますから、仕方ありませんよ」

イクスが慌てた。

「アリス、私のことはあまり気にしないでいいですよ」

「そうもいかないわよ。もしマリアージュが誕生したら、イクスではコントロールできないのよ。ガレアの民を危険に晒すかもしれないわ」

「それは、前も聞きましたが……」

イクスが縮こまる。

マリアージュ作成の技術は研究論文でもしっかりと記載があった。マリアージュは死体の兵器で、体を自在に変化できる。腕を剣や斧、大砲に変化でき、負けると知るや、身体を燃焼剤に変えて爆発する。そして、一番厄介なのが、その増殖能力。

イクスがマリアージュのコアを生成できるのだが、その生成条件は死体がイクスの側にあること。イクスの近くに死体があれば、コアが勝手に生成され、イクスの中から排出される。それが死体へと勝手に宿り、マリアージュが誕生する。原作で知った内容よりも厄介だ。

「他の転生者のことも気になるけど、一番大事なのはイクスよ。私がやりたいことはイクスの助けになること」

アリスは宣言する。こいしも頷く。

「私もアリスさんやイクスちゃんが大事だから、アリスさんの意見は大賛成」

「私も、知り合いが困っているのなら、助けたいと思います」
妖夢もそう言う。イクスは困ったように微笑むのだった。

「そういえば、妖夢は今日ここに泊まるのよね」

アリスが訊く。妖夢は頷く。それなら、とアリスは立ち上がる。蒼星石を下ろす。

「私が部屋まで案内するわね」

そう言って、書斎のドアを開けると、翠星石スイセイセキがいた。聞き耳を立てていたようだ。扉が開いて慌てている。アリスは首を傾げた。

「どうしたの、翠星石？」

「お、お母様！ いや、その、えつと……」

アリスは先程の蒼星石の言葉を思い出して、微笑む。アリスはしやがんで、翠星石の両脇に手を通す。翠星石が、ギョツとするが抵抗はしない。アリスはそのまま、翠星石を腕に抱えた。翠星石は恥ずかしそうにしている。アリスが翠星石と顔を合わせる。翠星石は顔をそむけた。そむけた先に、蒼星石がいた。ニコリ、と翠星石に笑いかける。翠星石は真っ赤になって、顔を覆うのだった。

第十話 徹夜

古明地こめいじこいしと魂魄妖夢こんぱくようむがベルカ聖王家領南部へと調査に旅立つてから一ヶ月。アリスは図書館にいた。かれこれ二週間徹夜をして資料を探っていた。翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキの訴えも忘れて。

人は寝ずにいると生命活動を維持できないと言う。最大で11日、平均して7日間寝ずにいると意識が勝手にブラックアウトするが、アリスは平気であった。東方projectのアリス・マーガトロイドの能力だ。夜になれば寝る習慣だが、図書館は光を通さない。夜か昼かわからない。

「お母様、少しはお休みになつてはどうでしょうか？」

水銀燈スイギントウが心配と言う。アリスは集中していた。水銀燈の言葉が耳に入らない。水銀燈は何度目かになる諦めを覚えた。持ってきた本を机に置き、アリスが読み終わった本を抱える。

アリスとしては無理をしているわけではない。ただ、友人を助けたいという気持ちと、知的好奇心から、つい夢中になってしまうのだ。

図書館の扉が開かれる。水銀燈が扉を見ると、イクスがいた。

「イクス様？ どうしてこちらに？」

水銀燈がイクスへ近づく。イクスはアリスを見て、状況を理解して呆れた顔をした。

「アリスはまだあのままなんですか？」

水銀燈は頷く。イクスはため息をつく。

「お茶でも、一緒に飲みたいと思つたのですが、私のために調べているの邪魔はできませんね」

水銀燈は首を振る。

「いいえ、イクス様。イクス様だけが、お母様を止めることができませぬ。私達の言葉なんて、お母様には届かないのです。お願いです。お母様を止めてください。このままでは、お母様は人間を辞めてしまひそうで……怖いです」

水銀燈の訴えに、イクスは考え事をして、頷いた。

「アリス」

イクスが呼ぶ。アリスは無反応。イクスはため息をついて、ページを捲ろうとしたアリスの手を掴んだ。ようやく驚いてアリスは顔を上げた。

「あら？ イクス？ どうかしたのかしら？」

「どうかしたじゃありませんよ。もう二週間も引きこもっているんですよ！ そろそろ休憩にしましょう！」

アリスはイクスが最初何を言っているのかわからなかった。イクスは今日の日付を教えると、アリスは驚き、水銀燈に確認する。水銀燈は頷くのであった。

「まあ、重要な会議や書類はありませんでしたので、政の方は心配しなくても大丈夫ですが、アリス自身の心配をしてください」

アリスはバツの悪そうな顔をした。自分から決めたルールをこんなにも簡単に破ってしまったのは、恥ずかしい。アリスは本をそのままにして、立ち上がった。

その時、警報のための鐘が鳴った。激しく、何度も。

第11話 敵襲

「お母様！ 敵襲です！」

図書館は教会の地下にある。アリスが教会を出ると、雪華綺晶クラキシヨウが飛んできた。水銀燈スイギントウが敵の情報を訊く。雪華綺晶は、まだ来ていません、と答える。

「敵は南東の空から数騎！ 国境付近を哨戒中の騎士から連絡がありました！」

「騎士の方々は、大丈夫なのですか？」

イクスが訊く。雪華綺晶は眉根を寄せ、首を振る。イクスは瞑目した。アリスが口を開く。

「あどどのくらい？」

「数分後には」

かなり速い。アリスは敵がかなり魔力量・魔力出力量共に恵まれていると認識した。アリスはイクスを見た。イクスは目を開けていた。アリスと目を合わせ、頷く。四人は移動する。

「他の娘ドール達は？」

水銀燈が訊く。雪華綺晶が答えた。

カナリアカナリア、シンクシンク、金糸雀カナリヤ、真紅は先行、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキは民衆の避難誘導、雛苺ヒナイチゴはお昼寝中で、起きない。

「雪華綺晶は雛苺を叩き起こしなさい。その後は二人でイクスの護衛。水銀燈は私と一緒に敵の下へ行くわ」

アリスはそう言って、屋敷の中庭に出る。水銀燈とともに空へと飛んでいった。雪華綺晶はその背に、気をつけて、と投げつける。イクスは胸の前で手を握るのであった。

『金糸雀！ 金糸雀！』

アリスが念話で、金糸雀を呼ぶ。すぐに応答があった。すでに戦闘中であった。屋敷から充分離れた。アリスは空中で止まり、人形を召喚する。水銀燈はアリスの護衛。

『金糸雀！ 敵の人数、特徴！』

『敵は三人かしら、二人が騎士、一人が守護獣。全員黒い鎧を着ているかしら！』

『リトルレギオンズ』？3』

アリスは上海・蓬萊を召喚した。18体の武装した人形が現れる。アリスは人形を上空と地上へと送る。

『金糸雀と真紅は後退。上下から蓬萊の砲撃を喰らわせるわ』

了解、との返答で、アリスは遙か先の空を見た。

間もなく、姿が見えた。点だが、金糸雀の黄色と真紅の赤が見える。その後ろから鈍色の鎧の女騎士二人に守護獣が一体。

『蓬萊人形』

コマンドを口にする。敵に向けて、空から地上から光の帯が伸びる。奇襲が命中した。爆発音とともに煙で敵の状況が不明になる。並みの兵士ならこれでやられている。しかし、アリスは樂觀視できなかった。

煙が晴れると、三人は上空にいた。

『カートリッジロード』！』

アリスは眉をしかめた。

『飛竜一閃』

敵の騎士の剣が延びる。地上にやった6体の人形が、全滅した。

第12話 ヴオルケンリッター

「失敗ね」

アリスは上空の6体の人形を引き寄せた。アリスは敵の容姿に見覚えがあった。『魔法少女リリカルなのは』の第二期『魔法少女リリカルなのはA's』にでてきた闇の書の守護騎士プログラム、ヴォルケンリッター。地上の人形6体を一撃で全滅させたヴォルケンリッターのリーダー、烈火の将、剣の騎士シグナム。小柄だがオールラウンダーな紅の鉄騎、鉄槌の騎士ヴィータ。筋肉隆々でケモミミな蒼き狼、盾の守護獣ザフィーラ。今は見えないがもう一人参謀格の、風の癒し手、湖の騎士シヤマル。三人とも見慣れない鎧姿。このときはまだあの騎士服ではなかったのだったとアリスは思った。

彼女たち三人はこちらを警戒している。アリスは拡声魔法を使う。「ここはガレアの領空です。これ以上の進軍は敵対行動だとして、それなりの備えがあります。引き返さない」

こんなことは言わなくてもいい。目の前の敵はガレアの兵を殺した。イクスが悲しんだ。アリスの敵だ。敵は撃墜されても、文句は言えど、反論はできない。

アリスのセリフで引き返す。そんな生半可な気持ちで攻めてきてはいないだろう。アリスが定型文を述べた理由は、ただ白黒ハッキリさせるため。敵が敵だと、双方陣営に知らしめるため。

ヴィータが動いた。鉄球8個を作り出す。

『カートリッジロード』！ 『Schwalbeフリーゲン』！
誘導弾がアリス達へと向かう。ヴィータがハンマーを構え突っ込んでくる。

「真紅、鉄槌の相手を。水銀燈は守護獣を。金糸雀は二人の支援をお願い」

三人は頷いた。

アリスは人形を使って、誘導弾を撃ち落としていく。ヴィータが攻撃範囲に来た。

『T・dlichschlaeg』！

ヴィータがアリスに突っ込む。真紅が体当たり。金糸雀の音響攻撃で、三人は離れる。水銀燈はザフィーラへと向かう。アリスとシグナムは睨み合うだけで動かない。

シグナムが剣を構える。アリスは口を開く。

「烈火の将、剣の騎士、シグナム……かしら」

「！……私の名を知っているのか」

「あなただけではないわ。あっちは紅の鉄騎、鉄槌の騎士、ヴィータ。向こうは蒼き狼、盾の守護獣、ザフィーラ。そして、見えないけど、風の癒やし手、湖の騎士、シャマル。闇の書の守護騎士プログラム」

「……」

シグナムは目を細め、警戒する。アリスは肩をすくめる。

「闇の書はシャマルが持っているのかしら？ それとも闇の書の主が……」

「『カートリッジロード』！」

シグナムが高速移動。アリスの目の前に。アリスは動けない。

「『紫電一閃』！」

アリスは真つ二つになった。驚くシグナム。真つ二つになったアリスは口端を釣り上げた。

「『アーティフルサクリファイス』」

アリスは爆発した。

第13話 人形遣いアリス

シグナムが爆炎からでてきた。五体満足だが、鎧が溶けかかっている。

「自爆か……」

『トリップワイヤー』

顔を歪めるシグナム。魔法コマンドを告げるアリスの声。人形達はせわしなく動く。シグナムの周りに魔法でできた糸が現れる。糸は自由自在に敵へ巻き付く。シグナムは囚われた。

アリスが上空からゆっくりと降りてくる。

「どういふことだ」

シグナムの質問。目はアリスを睨んでいる。アリスは冷たい目でシグナムを見下ろす。

「難しい話ではないわ。私達の主は未だ図書館から出ていないですよ。今頃本でも読んでいるんじゃないかしら？」

シグナムは黙る。アリスは告げる。

「それじゃ、さようなら。『ドールズウォー』」

ダイヤモンドカッターのようにドール達が回転する。手は武器。シグナムの防御壁と拮抗する。激しい音。シグナムの魔法壁は砕けた。人形の武器がシグナムの身体を切り刻む。バラバラになったシグナム。彼女ははプログラム体。死体は残らず、ポリゴンとして消えた。

「シグナムー！」

ヴィータが叫ぶが、真紅シンクの蹴りが飛ぶ。ヴィータは苛ついている。

「邪魔なんだよ！ 『カートトリッジロード』！」

『Raketenhammer』

鉄槌のフォルムが変わる。ロケット状。着火する。真紅と金糸雀カナリアの間をすり抜け、アリスへ。アリスは面白くなさそうに構える。

幾千もの糸がヴィータへと迫るが、ヴィータは無視。ラケーテンハンマーの推進力で躲す。アリスへと肉薄する。

アリスは一撃目を避ける。ヴィータは回転して二撃目。アリスは

避けたが、三撃目が襲う。ヴィータの鉄槌がアリスの胸を貫く。アリスは爆発した。

ヴィータは無傷。爆発の威力を利用して、離れる。あたりを見渡す。シグナムと同じ轍は踏まないらしい。煙は晴れない。

『ストロードールカミカゼ』

煙の中から数体の人形が飛び出す。ヴィータへ向かう。ヴィータは構える。藁人形達は弾幕を撒き散らす。しかし、ヴィータの予想に反して、ヴィータの上下左右を通り過ぎるだけ。弾幕を置き去りにして。ヴィータは気がついた。逃げ道がなくなっていることを。

『蓬萊人形』

煙が退く。人形数体の砲撃魔法がヴィータへと襲う。ヴィータは防御魔法で耐える。ヴィータの後ろ、金糸雀の音波が襲う。ヴィータは態勢を崩した。砲撃がヴィータを呑み込む。ヴィータは墜落した。意識を失ったのか、動かない。

「さて、残りは水銀燈スイギントウのほうね」

アリスが向くと、ザフィーラは降下していた。ヴィータの方へ向かっている。

第14話 Ⅱ

図書館のアリスは、冷めた紅茶を一気に飲み干し、ホッと一息つく。初めての試みを行った。それが一応の成功を収めているため、安心したのだ。

前回シウトウラまで遠征に行った時、ガレアを留守にした。もしその時ガレア国内が敵から襲撃にあった場合を考えると、国防に不安が残る案件となった。アリスはガレアの最高戦力であり、抑止力でもある。

今回遠隔での人形の操作と召喚を行い、戦闘にどれほど支障があるのかを実戦で試したのだ。敵がヴォルケンリッターとは思わなかったが、いい実験になった。敵一人の死亡、もう一人の行動不能、味方二体アリス人形の全損。問題が浮き彫りとなる結果となった。

自爆した人形は簡易的に作ったもの。ローザミステイカを入れず、遠隔から直接操作したのが悪かったのかもしれない。やはりローザミステイカを入れた、完全自律の人形が必要。それか、薔薇乙女ローゼンメイデンを強化させ、7人だけで防衛ができるようにしたほうが良いのか。

そう言えば、アニメ版だけのオリジナルのドールがいた。とアリスは思い出す。彼女を作って、数の上での戦力強化も良い。『戦姫絶唱シンフォギア』の自動人形オートスコアラーを作っても良い。計12体の完全自律人形が防衛に付けば、大抵の敵は敵わないだろう。

12人か、とアリスは笑みを浮かべる。大家族になる。

アリスが新しい家族に心躍ろさせていると、翠星石スイセイセキから念話が届く。

『お母様!! 敵ですう!! 敵が市街を襲っていますう!!』

アリスは眉を寄せた。翠星石にはガレア市民の避難をさせている。攻撃を受けるような場所にいない。その直後、図書館を振動が襲う。

アリスは立ち上がる。先程まで魔力反応は見られなかった。しかし、強力な魔力が地上で感じられる。ヴォルケンリッタースイギントウは水銀燈達スイギントウが食い止めている。遠い地平の先だ。攻撃を受けるような距離ではない。現れていないシャマルは後方戦力だ。戦えないわけではない。

が、一人で敵地に奇襲として飛び込んでくるとは考えにくい。

「翠星石！ 敵は何人!? 特徴は!?」

「三人ですう！ えっと、特徴というか一人は金髪の鎧で、もう一人は傘を持ってますう……その二人は知らないのですけど……」

「もう一人は!?!」

アリスは図書館を飛び出す。アリスは嫌な勘が働いた。地上に出る。教会のステンドグラスが曇っている。

「妖夢様が、最後の一人ですう」

翠星石の涙声が聞こえた。

第15話 裏切り

市街は阿鼻叫喚の有様。血の匂いがする。人だったものが、石畳を赤色で染めていた。

アリスは眉をしかめながら、イクスには見せられないな、と思った。念話で雪華綺晶キラキシヨウにイクスが外へ出ないように注意した。

水銀燈達スイギントウには、二人のとどめを刺すように言っつて、アリスの人形を回収した。移動しながら上海と蓬萊を召喚した。

避難場所へ行く。血の密度が増えた。その場にいたのは翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキ。戦闘職でない二人だが、ガレアの民の盾として銀の如雨露と鉄を構えている。しかし、ガレアの民で生き残りはわずか。いや、その命さえもまもなく消えそうな重症者のみ。

報告の通り、血塗れの魂魄妖夢こんぱくようむが敵として君臨していた。報告を聞いたアリスは耳を疑っていたが、目も疑う羽目になった。衝撃とは、このことを指すのだろう。

「お母様!!」

翠星石と蒼星石がアリスに気がつく。アリスは妖夢から目を離さない。

「妖夢。これはどういうことかしら? 説明をお願いできないかしら?」

アリスが訊く。妖夢はアリスを認める。刀をアリスへと向けた。話を聞く気はないらしい。アリスは人形を構える。

「『シーカードールズ』」

人形から光線が広範囲へ散らばる。妖夢の頭上を超える。光線は範囲を狭め、妖夢に迫る。妖夢は前へ出る。

「『ストロードールカミカゼ』」

弾幕を撒き散らす藁人形。妖夢の脇を通り抜ける。妖夢は弾幕に囲まれ、前へと走るしかない。

「『トリツプワイヤー』」

アリスは人形を操る。人形の糸は実体を持ち、妖夢へと絡みつく。アリスの目の前へと迫った妖夢は刀ごと魔力糸で拘束され、身動きが

取れなくなった。簡単に拘束できたことにアリスは眉根を寄せる。

アリスは妖夢の顔を覗く。目に光がない。呼びかけても応えなかったのは、意識がなかったためだろう。まるで操り人形のような有様だ。

「あら？ 捕まるのが存外早かったわね」

アリスは声のした方を向く。そこには、ヴォルケンリッターの参謀シヤマルと、東方projectのキャラクターがいた。転生者だ。

「八雲紫……」

アリスは目を細める。八雲紫は肩をすくめた。

「そう警戒しないでほしいわ。私はあなたと争うためにここに来たわけではないのよ」

『『デヴィリーライトレイ』』

アリスがコマンドを唱える。光線が八雲紫に注ぐ。八雲紫は境界を操った。空間の裂け目。大量の目が覗く。アリスの魔法はすべて境界へと消えた。そして、裂け目は閉じた。

「あなたの攻撃は意味をなさないわ」

「……そう、みたいね」

「話を聞く気にはなつたかしら？」

アリスは臍を噛んだ。

第16話 境界

「あなたが妖夢を操っているのかしら?」

アリスは八雲紫やくもゆかりに訊く。

「私が、というよりも、この剣が、と言ったほうがいいかしらね」

そう言つて、空間の裂け目を作り出し、一振りの剣を見せる八雲紫。「これは、多分予想がついていると思うけれど、あの神が壊せと言つていた剣よ。神をも殺せる剣。名前がないから不便ね。神滅剣シンメツケンとでも言いましたよか」

八雲紫が話すには、この剣の能力。人を操る力。それで、魂魄妖夢こんぱくようむを操っていると言う。

アリスは妖夢を見た。アリスの魔力糸で雁字搦めに拘束されたままの妖夢の目には、光が映っていない。これが操られている状態らしい。

アリスは八雲紫に向き直った。

「それで、あなたの狙いは何かしら?」

「簡単よ。神を殺すことよ」

「それで?」

「あなたに協力してほしいのよ」

アリスはため息をついた。

「私に協力を仰ぎたいなら、私を操ればいいじゃないの」

「残念。この剣が操れるのは二人まで。一人はこの子で、もう一人は、闇の書の主よ。これで定員オーバー」

アリスはシャマルを見た。シャマルは悔しそうに唇を噛んでいる。事実らしい。そうとわかっていたらシグナム達を倒そうとは思わなかった。協力できたかもしれない。

「あら、それはいいことを聞いたわね。つまり、私を操る術がないと」「そうね。それに、協力してほしいことは操っている状態ではできないのよ」

八雲紫が大きなため息をつく。妖夢を見れば自我がないことがわかる。意識がないとできないこととは。アリスは首を傾げる。

「それは何かしら?」

「神器を出してほしいのよ」

「神器? 『Grimoire of Alice』のこと?」

八雲紫は頷く。

「それは、神とこちらを繋ぐ道具。神を殺すには、まず神の下へ行くのが先よ」

「つまり、『Grimoire of Alice』があれば、神の下へ行けるということ?」

「正確には、神器と、私の、八雲紫の能力”境界を操る程度の能力”で、神のいる世界と私達がいる世界の境界をいじる。そうして、神の下へと行けるわ。おそらく、ね」

「なるほどね。つまり、あなたの能力は境界を認識できない限り、発動ができない、ということかしら?」

八雲紫は感心するように笑った。

「そうよ。その通り。よくわかったわね」

アリスはその件については無視した。

「つまり、先程の攻撃。何かしらの境界を認識していたということね。何かしら?」

「それはね、私にとって”近い”か”遠い”かの境界を認識してたのよ。だから、これ以上遠くには隙間を開けないわ」

アリスは目を細めた。ああ、と八雲紫が付け加える。

「もちろん、境界を認識できるものがあれば、遠くの地点で隙間を開けるわ。何かしらの境界を認識さえすればいいのだから」

第17話 交渉

「それで、協力はしてくれるかしら？」

八雲紫が訊く。アリスは、魂魄妖夢を見た。

「彼女を解放、つまり、操るのを止めたら、考えてもいいわよ」

八雲紫はニヤリと笑った。そして、いいでしょう、と言って、剣、神滅剣シメツケンに手をかぎす。妖夢から力がなくなった。糸が切れた人形のように。アリスの糸に絡まって動けなかったのが、意識を失って動けなくなったに変わった。まぶたは閉じられた。アリスが確認する。優しい規則的な寝息が聞こえた。

アリスは八雲紫に目を向ける。

「金輪際、妖夢は操らない。そう約束できるかしら？」

「それはあなたの働き次第ね」

アリスはため息をついた。そして、『Grimoire of Alice』を召喚した。翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキが驚く。

「お母様、よろしいのですか？」

蒼星石が訊く。アリスは肩をすくめた。

「私にとって、神はそれほど重要ではないわ。転生させてもらったことに感謝はしているけど、妖夢の方が大事。申し訳ないけどね」

そうだ、とアリスは八雲紫に言う。

「ついでに、闇の書の主も解放してほしいわね」

シャマルが目を丸くした。八雲紫は笑みを深めた。そして、それもあなたの働き次第ね、と言った。

アリスは肩をすくめた。本を魔力糸で縛って、八雲紫の下へと届ける。八雲紫はシャマルへと合図する。シャマルが前へ出て、本を受け取って、魔力の糸は解かれた。シャマルは本を八雲紫へと渡した。「さて、これが本物かどうか、確認させてもらうわね」

八雲紫はそう言って、神滅剣を隙間から抜き出す。そして、剣を本に当てる。八雲紫は目を閉じた。アリスはその一連の動作を見ているだけしかできなかった。

しばらく八雲紫はそうしていた。アリスは息を鼻から吸った。血

の香りが刺す。目が覚めた妖夢は、果たしてこの光景を見てどう思うだろうか。操られていたとはいえ、正義を信じている彼女にとつてシヨックは避けられないだろう。もしかしたら、目覚めなければよかったと思うだろうか。そうであるのなら、アリスは恨まれても仕方ない。まあ、妖夢に限ってそういうことはないだろう。これ以上人を殺めることを嫌っただろう。だから、アリスの選択は間違っていない。そう、アリスは思つて、自分を安心させていた。

八雲紫が顔を上げた。

「確認したわ」

「そう、ならとつとここから立ち去ってほしいわ。そして、もう二度と顔を見せないでほしい」

八雲紫が困った顔をする。

「それは私もそうしたいのだけれど」

「それなら、さっさとしなさい。それでも私、怒っているのよ」

アリスは言う。八雲紫は、しかし、ため息をついた。

「私もあなたから無用なヘイトをもらいたくないわ。この神器が本物であればね」

アリスは八雲紫の言葉の意味を理解するのに、時間がかかった。

第18話 決裂

「どう言うこと？ アリスはそう口に出した。八雲紫は困ったように言う。」

「つまり、この本。『Grimoire of Alice』だったかしら？ は、神器ではなかった、ということよ」

「で、でも、神はそれが神器だと言ったわ。深い眠りになれば、会話もできたのよ」

「それはいつ頃の話かしら？」

八雲紫の質問にアリスは嫌な汗を脇下を感じた。最近神と話ができている。かれこれ二十年ほどは神に会っていない。それをたどどしく八雲紫に説明した。翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキは心配そうに話の流れを見守った。

「なるほど」

八雲紫が顎に手を当てた。

「つまり、神は逃げた、ということね」

アリスは頭の中が混乱していた。八雲紫がアリスのそんな様子を嗅ぎとったのか、説明をする。

「神器というのは、神とつながった物。神とのつながりが切れたら、それは神器ではないわ。この本は神器だったかもしれないけど、今はもう神器ではないわ」

アリスは何を言えばいいのかわからなかった。ただ一番気になることがある。八雲紫の説明はどうでもいい。頭の中でそれを言葉としてまとめるのに時間がかかった。

「それじゃあ、交渉は？」

やっと出た言葉。震える声。八雲紫の返事を聞きたくない。嫌な予感がする。それでも、聞くしかない。

八雲紫は微笑んだ。

「もちろん、決裂よ」

ザン、と音がした。魂魄妖夢こんぱくようむが刀を振り回した。アリスは魔力糸を緩めていたのだ。拘束する必要なしとして。妖夢が糸を斬った。

あ、とアリスが思った。その隙に、妖夢が眼前に迫っていた。横一文字。妖夢の刀がアリスを斬る。アリスは咄嗟に後ろへ跳んだ。腹が斬られた。着地して、膝をつく。傷口を抑える。じわりじわりと血が出る。深い。毛細血管ではない、静脈のどれかか。手を退ける。手の血は暗い赤。傷はパツクリ。

アリスは妖夢を見上げる。妖夢はアリスを見下ろしていた。八雲紫が口を挟む。

「さて、本物の神器がない。一応訊くけど、神器の場所はわかるかしら？」

「わかるわけ、ないでしょ……」

「しかし、それを確認するすべは、私にはない訳よね」

八雲紫が言う。八雲紫の言うことは、つまりアリスが本物を持っていてそれを隠しているのではないのか、ということ。アリスは本物を出した。確かに出したはず。それを証明することなど、不可能ではないか。悪魔の証明という。

「しかし、一つだけ、私があるから真実を聞き出す方法があるわ」

アリスは怪訝な顔をする。八雲紫は笑う。八雲紫は右を向いた。屋敷のある方角だ。アリスもまた右を向く。屋敷へ続く道がある。そして、その奥から、イクスを抱えた古明地こいしがやってきていた。

第19話 知る権利

アリスは、頭が真っ白になった。イクスが泣いている。なぜか？
古明地こめいじこいしがイクスを運んできた。なぜか？ アリスには自問しても自答できない。

「こいし……なんで、イクスをここへ連れてきたの？ 雛苺ヒナイチゴと雪華綺晶キラキシヨウがいたでしょ？ あの娘達は？」

こいしはアリスを見ている。目が合っている。目に光がある。こいしは自分の意志でそこに立っていた。こいしが口を開ける。

「アリスさん。賢いアリスさんなら、想像できているんじゃないんですか？」

アリスはすぐさま雛苺と雪華綺晶の反応を探った。屋敷。教会。図書館。範囲を広げて、街の隅々まで。そして、見つけた。ローザミステイカの残滓。二人の成れの果て。

ローザミステイカさえ無事であれば、身体はいくらでも治すことができる。逆に、ローザミステイカに傷一つでも付いていれば修復は困難だ。

雛苺のローザミステイカは傷だらけ。完全には碎けていないが、記憶は取り戻せないだろう。雪華綺晶のローザミステイカは完全に崩壊していた。破片を集めて治しても、同じ人格を持った個性として蘇ることは不可能だろう。

アリスはその事実を知って、こいしを見た。

「あなたが、やったの？」

こいしは頷く。アリスは現実感のない脳みそになった。空虚感が襲う。それでも、血は流れ続けている。傷は開いたままだ。

「なぜ……」

アリスの口から疑問がこぼれた。それをこいしは、拾う。

「アリスさん、神は、私達をおもちやにしているんです」

こいしは、言う。事後報告をする役人のような口調で、感情の一切ないような声で。

「八雲紫さんの特典の一つ。『スレイヤーズ』に登場するアイテム、

クレアバイブル
異世界黙示録。この世界のありとあらゆる知識が記されている書物。
そこには真実が書かれていました。神は人の運命を操作できる、とい
うこと。つまり、私達の運命は、神に一任されているんです。私達が
どう生きどう死ぬか。前世で私達が死んだのは、神が決めたことで、
神が救わなかった命です」

「ちよつと待つて！ それは敵の言うことよ！ それを信じたという
の!？」

アリスはカツとなった。責めた。こいしはそれを受け止め、どこま
でも冷静に首を振った。

「信じているわけではないです。でも、その可能性はある。そう思っ
たんです。だから、それを確かめたくなった。私はどうしてあんな人
生を送って、どうしてあんな死に方をしたのか。それが神のせいなの
かどうか。もし神のせいなら、どうしてそんなことをしたのか。私に
は知る権利があると思いませんか」

アリスは絶句した。そんなことで、と口に出かかったが、止めた。
アリスはこいしの前世を知らない。こいしがどう生きどう死んだか。
それがわからない以上、アリスに発言をする資格があるかどうか、ア
リスにはわからなかった。アリスには、前世の記憶がない。それも後
ろめたさを感じさせた。

第20話 覚醒

「さて、アリスさん？　これがわかるでしょうか？」

そう言つて古明地こいしが一本の注射器を取り出した。中には液体が入っている。すでに注射の準備はできている。アリスにはそう見えた。

「注射器ね」

「中身ですよ。ヒントは、イクスちゃんです」

アリスはわからなかった。しかし、嫌な予感だけがあった。そして、その感覚を辿れば自ずと注射器の中身が予想できる。

「毒」

「そう！　毒です！　これは、イクスちゃんを改造するために必要な毒です！　チエクで抑えていた毒です。さて、それをイクスちゃんにもう一度大量に注射すれば……どうなると思いますか？」

答えは簡単だ。イクスは死体という死体をマリアージュ、死体兵器へと変え、世界を炎の渦に飲み込むだろう。原作の通りに。

こいしが続ける。

「さて、アリスさん。これをイクスちゃんに注射されたくなければ、本物の神器の在り処を教えてほしいです」

古明地こいしは、悟り妖怪だ。人の心が読める妖怪だ。しかし、その能力が失われている類の妖怪だ。東方Projectでの設定ではそうだ。そして、古明地こいしの能力を受け継いだ彼女も相手の心が読めない。姉の古明地さとりであったなら、心を読む能力を行使できたのかもしれない。そうすれば、アリスが嘘をついていないことをわかってもらえただろう。現実はその逆をいっただけだ。

「私は、嘘をついていない……」

「私は、本気ですよ」

アリスに何ができると言うのだろうか。アリスは決定された運命のルール上を進んでいるトロツコのような気持ちになった。そうきつと、そんな気持ち。

それでも、こいしならそんなことはしない、と思つて口を閉ざした。

アリスが黙っていると、こいしは、あからさまなため息をついた。そして、注射針をイクスに刺した。イクスは、あつ、と言って声を出した。液体がイクスの中に入っていった。その間イクスは泣き止まなかった。アリスはイクスが泣く理由がわからなかった。ただイクスが泣くと、アリスも悲しくなる。それだけで辛い。

イクスは、黄金の魔力光に包まれた。膨大なエネルギーは周辺を覆い、転がっている死体へと収束する。イクスの望まないイクスの王国が誕生しようとしていた。そして、イクスの望んだ王国は、崩壊の序章を奏でた。黄金の魔力コア。それらが死体へと収まっていく。アリスは何もできない。見ているだけ。翠星石スイセイセキや蒼星石ソウセイセキの声が聞こえた気がしたが、アリスはそれをどこか遠くの出来事のように感じた。

不死の軍団は、あっけなくできてしまった。

第一章第六節 古代ベルカーガレア滅亡篇 — 前 —
プロローグ 破滅

空は汚らしい赤黒い雲で覆われていた。ベルカ世界の住人は、空の青さを知らない。星の輝きを知らない。イクスもそれは例外ではないし、アリスもベルカの青空を見たことがなかった。

戦乱の大地。血は石畳を覆い、死体は起き上がる。黄金色に輝くマリアージュのコアは実体化し、冥府の炎王へと跪く。イクスヴェリアは泣いて、アリスは見ることにしかできない。

古明地こめいじこいしはイクスを地面に置いた。何かをイクスに話しかけていた。イクスイクスはこいしを見る。アリスからはこいしの表情が見えなかった。話し終えると、こいしは消えた。”無意識を操る程度の能力”でその場にいる人間の認識外へと移動したのだ。

八雲紫やくもゆかりは微笑んでいた。

「ねえ、アリス。あなたは今どんな気持ち？」

アリスは、八雲紫の表情に戸惑った。八雲紫は神器が必要でなかったのか。まるで神器などどうでも良くて、人を馬鹿にするのが目的であるかのような表情。神を殺すという名目も、神に問いただきたいこいしとは違って、八雲紫には理由があるのかどうか。神を殺すというのは形式だけなのではないか。アリスには、そう思われた。

八雲紫はそれだけ聞くと、空間に隙間を、空間の裂け目を作った。シャマルと魂魄妖夢こんぱくようむを連れて、八雲紫は隙間へと入る。

「ああ、それとこれは返しておくわね」

そう言つて八雲紫は『Grimoire of Alice』を投げ捨てた。アリスと八雲紫の間に本が落ちた。アリスが顔を上げると、八雲紫はいなくなっていた。

その場にはアリスとイクスと翠星石スイセイセイキと蒼星石ソウセイセイキと、死体の兵がいるだけであった。

「イクス」

アリスが呼ぶ。イクスは顔を上げる。アリスが立ち上がる。傷は

いつの間にか塞がっていた。衣服が汚れ、血の湿り気が気持ち悪い。アリスはイクスへと近づく。しかし、マリアーヂュが道を塞ぐ。

《止まりなさい。イクスへは近づけさせない》

「うるさい、どけ！ 『ドールズウオー』！」

12体の人形がマリアーヂュを引き裂く。マリアーヂュの液化化。爆炎。バリアで守るアリス。人形は碎ける。アリスはイクスへと進む。

マリアーヂュは次々と出てくる。アリスはその度に人形を召喚して、撃退。爆炎。破碎。破片がアリスの頬を割く。血。それでもイクスへと進む。

「お母様！」

翠星石が、アリスの袖を引っ張る。

「お母様！ 周りを見てください！ すでに囲まれています!!」

アリスは気づいていた。住民はすべて死んでいた。生き残ったものはいない。その全てがマリアーヂュとなっている。まるで、ゾンビの街だ。バイオハザード並みの。兵器へと改造された死体。シユルシユルという機械の駆動音。黄金のバイザー。どれをとっても不気味。だが、それでもイクスへとアリスは進む。

第一話 別離

「アリス」

イクスの声。アリスはイクスへの歩みを止める。マリアージユがこちらへ警戒を示している。手を斧や刀、槍に変えて。

「アリス」

イクスがもう一度アリスを呼ぶ。

「ここから立ち去りなさい」

「何を……」

アリスが疑問を口にするのできなかった。イクスの目は真剣であった。涙の跡は残るが、その顔は何かを覚悟しているものであった。

「アリス、ここから立ち去って、闇の書の主を討ちなさい」

闇の書の……、とアリスは呟く。イクスが頷く。マリアージユの機械音が煩い。

「闇の書は、危ない。世界が滅亡するほどに……。闇の書の主を討てば、簡単にはこの世界は滅びないでしょう」

「でも、ガレアはどうなるの!? イクスがそのままなら、ガレアはっ！」

「アリス」

イクスがアリスをなだめる。アリスは黙る。

「ガレアが滅んでも、シュトウラが、ダールグリウンが、ベルカ聖王家が残ります。ですが、この世界が滅べば、青空を見ることができません」

アリスは気づく。イクスはガレアの民の死を、その責任を全て一人で背負うつもりだと。それがイクスの望みであり、イクスの覚悟だ。そこにはアリスの気持ちなどない。

アリスはそれが悔しかった。たまらなく悔しかった。しかし、合理的に判断すれば、イクスのマリアージユを全滅させるのには時間がかかる。アリスがアリスの人形の軍団を全て出したとしても殲滅するのに時間がかかる。その間に闇の書が完成してしまっっては、どうしよ

うもない。ベルカ世界は滅びるだけだ。イクスだけ連れ去ることができればよいが、マリアージュはイクスを、自らの主をどこまでも追う。ただ被害が拡大するだけだ。

「イクス……」

「アリス。私は大丈夫です。また、会いましょう」

マリアージュがアリスを襲う。蒼星石が間に入って鋏でマリアージュを切り伏せる。翠星石がアリスを引っ張って後退させる。アリスはなすがままに、イクスを見続けることしかできなかった。

このとき、ガレア王国は滅びたと言っても過言ではない。救うべき民は死に、守るべき土地は焼け、君臨すべき王も暴走した。マリアージュは、イクスヴェリアは、国を殺していった。原作『魔法少女リリカルなのはX』^{イクス}では、そのことだけが歴史として語られ、悪逆非道の王として認識されたのだろう。イクスは、冥府の炎王イクスヴェリアとして、その名を刻む。

アリスは泣いていた。そんな歴史は認めない。絶対そんなことはさせないと決意した。燃える街を出た。翠星石と蒼星石に連れられて、アリスは街に背を向けた。

第二話 亡命

アリスはシュトウラへと亡命した。途中ヒナイチゴ雛苺とキラキシヨウ雪華綺晶のローザミステイカを回収した。水銀燈スイギントウ、金糸雀カナリア、真紅シンクとも合流した。シュトウラ王は深刻な表情で迎え入れた。

アリスはシュトウラ王に注意を促した。マリアージュの性能を伝えた。死体兵器で死体があれば永遠に増殖する。身体を変形することができ、腕を剣や斧、大砲などに変えられる。身体を液体燃料に変え、自爆することも可能。

やくもゆかり八雲紫についても言った。神や転生、原作については伏せたが、テロ組織のリーダーとして説明した。境界を操る能力を持ち、少人数とはいえ他人を操れるシメツケン神滅剣の話をした。闇の書の主とアリスの友人こんぱくようむ魂魄妖夢が操られていることを言った。古明地こめいじこいしが裏切ったことも言った。

これらのことをダールグリウン家やベルカ聖王家にも伝えるべきだ、と進言した。

説明が終わると、シュトウラ王は黙った。窓の外ではシュトウラの雪は溶け、地面の泥が見える。

シュトウラ王が口を開いた。

殺しても、よいのか？

アリスは詰まった。イクスや妖夢、こいしのことを言っているのだろう。アリスは目を閉じ、目を開いた。

「ガレアの王イクスヴェリアは簡単には死にません。ただし、大質量の攻撃を加えればマリアージュのコアを作る機能は一時停止になると思います。魂魄妖夢は神滅剣さえなければ味方に戻りますので、殺すよりは八雲紫をどうにかする方を優先したほうがいいでしょう。古明地こいしは……………」

アリスは口を閉じた。シュトウラ王を見つめている。シュトウラ王も睨むようにアリスを見ている。アリスは口を開いた。

「古明地こいしは、殺すべきです」

よいのか？ 友人なのだろうか？

「裏切った理由がわかりません。生かすメリットもデメリットも不明です。ですが、敵なら殺すメリットはあります。殺すべきです」

シュトウラ王は黙った。アリスも黙った。その場に二人しかいないとアリスは思っていたが、どうやら壁際にシュトウラの家臣が並んでいた。背後には薔薇乙女ローゼンメイデンが控えている。アリスは瞑目した。

よかろう。殺すかどうかはお主に任す。我々は防衛戦に徹し、マリアージュの拡大を阻止するだけにしよう。ダールグリユンと聖王家には我々が伝えておく。闇の書とイクスヴェリアについては、お主が解決せよ。

アリスは驚いた。アリスに全ての負担を強いるように見える。それでも、シュトウラ王は打って出るタイプの王だ。このような決断はらしくない。

アリスは思い至った。シュトウラ王の配慮に感謝して、アリスは頭を垂れた。

第三話 修復の見込み

アリスはシュトウラで部屋を与えられた。夜も過ぎた頃で、一時休憩の場だ。アリスは使う気は一切なかったが、腰を落ち着けさせる必要があった。焦っても何もならないことはわかっている。それでもアリスにはやらなければならぬことがある。アリスは部屋に入る。

「翠星石、蒼星石。雛苺と雪華綺晶を」

アリスの命令に、頷く二人。二人から輝きが舞い、桃色と白色の光の玉が出てきた。雛苺と雪華綺晶のローザミステイカだ。

アリスはそれを受け取る。

「一応修復はしたのですが……」

「やはり完全修復は不可能だと思います」

翠星石と蒼星石が言う。彼女たちは支援系の魔法が得意だ。メンタルの回復や魔力の復元が薔薇乙女の中で一番上手だ。その彼女たちが不可能だと言うのなら、アリスでも完全には直せない。

発見時、雛苺のローザミステイカは割れているだけだったが、雪華綺晶のローザミステイカは砕けていた。傷がついているだけで記憶を失う。壊れていたのでは、修復しても人格が変わる可能性があった。同じ雛苺と雪華綺晶は戻らないと覚悟したほうが良い。

アリスは瞑目した。

修復にはどれだけ時間がかかるかわからない。おそらくローザミステイカを直す時間は、ローザミステイカをイチから作るのと同じぐらい時間がかかるだろう。作り直しても同じローザミステイカを作れるとは限らない。同一の人格に戻せる可能性のある修復という作業を選ぶべきだ。

気持ちが悪く焦らす。直すのはいつでもやれる。さきに闇の書とマリージュをどうにかしないといけない。

アリスは目を開いて、薔薇乙女達に目を向けた。

「雛苺と雪華綺晶はしばらくこのままね。翠星石と蒼星石は引き続き、雛苺と雪華綺晶のローザミステイカを保護。水銀燈、金糸雀、真紅はシュトウラの戦闘に加わり、前線の維持。全員シュトウラで待機」

「お母様！」

水銀燈が抗議の声を上げるが、アリスは水銀燈を睨む。

「この決定に変更はないわ。いい？ この命令は絶対よ」

シユトウラ王にはこのことを言った。その時も彼女たちから驚きの声が上がった。しかし、アリスは全部自分一人で解決する気だった。

アリスは、フツと軽く息を吐いた。

「大丈夫よ。私はまた戻ってくるわ。戦略も戦術も作戦もあるわ。今まで何もしてこなかったわけではないのだから」

アリスがそう言う。それでも彼女たちの顔に不安が消えることはなかった。そして、それに関してはアリスも諦めていた。

「それじゃ、私に行くわ」

そう言って、部屋を出るのであった。

第四話 本拠地

敵はベルカ聖王家領南部の国のどこか。アリスはそう結論づけた。以前魂魄妖夢こんぱくようむが言っていた最近勢いがある国。古明地こめいじこいしともにも捜査に行ってもらった国だ。その途中で、彼女たちはああなつた。

おそらく勢いがあったのは、ヴォルケンリッターがいたからだろう。戦力として申し分ない。そこに八雲紫やくもむかりが目をつけた。捨て駒として、闇の書の主というよりもヴォルケンリッターを欲しがったのだろう。ヴォルケンリッターを正面から陽動に使い、自分たちは他のところから侵入した。

ガレアの民を殺したのは、イクスを覚醒させたあと、マリアージュを増産するためだろう。

しかし、目的はわからない。八雲紫の目的が不明だ。

こいしは神に問いただすことが目的、八雲紫は神を殺すことが目的、と言っていた。神を殺すには神の居場所へ行くのが先というのもわかる。しかし、それとマリアージュを増産させることが結びつかない。

アリスは霧の中にいる感覚を味わっている。合理的な説明ができない。アリスが気がついていないだけで、何かしらの繋がりがあるのかもしれない。もしくは八雲紫の単なる気まぐれという可能性もある。何にしる話をする必要がある。

ベルカ聖王家領南部あたりについたアリス。ここまで一日が経過していた。手持ちの地図を見るが、現在地が正確にわからない。どこかで道を訊く必要性が出てきた。

地上を見下ろすと、村が見えた。アリスはあそこで道を訊くことにした。アリスは地上へと下りる。

村に下り立ったアリス。寒村。人の気配はない。もしかしたら誰もいないかもしれない、とアリスは思った。

近くの家の戸を叩く。何の反応もない。静けさだけが響く。

隣の家まで行く。その扉を叩く。誰もいない。静かだ。

アリスはまだ見ていない家々の方へ向いて、誰かいませんか、と大声を出した。声だけがこだまする。

アリスは誰もいないと判断した。戦乱の世の中だ。食べるものがない、人は都市へと流れる。そうして誰も住まなくなった村というのがこの時代のベルカには多くあった。

アリスは空へと舞い戻ろうとしたとき、そのの、と声がかかった。不意打ち。アリスは距離を取る。アリスの背後にいつの間にか檻を着た女性がいた。引きこもることが多いとはいえ、アリスは戦闘経験がある。簡単に背後を取られるのは異常だった。

「ちよつと、そこまで驚かなくてもいいんじゃないか？ せつかく親切で声をかけたというのに」

その女性には敵意がなかった。アリスは目を細めただけで、警戒は解いた。

第五話 寒村

少女はフードを目深に被っていて、顔が見えない。服の上から襪樓のローブを着ているらしく、ゴワゴワとしていそうであった。そして、特異なのは、周りに複数のお面が浮かんでいること。アリスは既知感を覚えた。

「お前は どうしてこんな誰もいないようなところにいるんだ？」

少女が尋ねる。アリスはまばたきをした。

「それは、あなたにも言えることではないのでしょうか？」

できるだけ丁寧な質問で返すアリス。敵意がないとはいえ、怪しいのは事実。少女は何でもないのであるように答えた。

「私はここに住んでいるからな」

「ここに？」

アリスが聞き返し、寒村を見渡す。寂れた村だ。好き好んで住みたがる人もいないだろう。つまり、訳有か、とアリスは予想を立てた。

「それで？ どうしてここに来たんだ？」

少女が訊く。アリスは道を尋ねに来た、と言い国名を告げた。

「そこは……ちよつと知らないな……」

少女はしばらく考えてそう言った。見るからに俗世と関わりがなさそうな風貌だ。変なものも浮かんでいることだし普通には暮らせないだろう。アリスは最初から期待はしていなかったが、それでもどうしようかと迷った。近くに村でも見つけないといけない。

「あ、そうだ！」

少女が叫ぶ。アリスはビクリとした。

「あ、すまん。ちよつと思ひ出したことがあってな」

「お、思ひ出したことですか……」

「私に同居人がいるんだ。そいつが知ってるかもしれない。あいつ、世界中を飛んで回ったって言うから、きっと知ってるはずだ」

少女がそう言い、アリスの手を握る。アリスはギョツとする。

「それじゃ、行こっか」

そう言って駆け出す少女。アリスは引つ張られて後を追う。アリ

スは慌てる。

「あ、あの！」

「ん？ なんだ？」

「引っ張られても、困ります！」

「ん？ ああ、すまない」

そう言つて、少女は止まり手を放す。

「いやはや、ついつい友達感覚で……こういうところが同居人に嫌われるゆえんなのだよ」

はあ、とアリス。少女は眉をひそめて、アリスの顔を見る。アリスは、今度はなんだ、と身構える。

「お前、なんだか顔が強張っているぞ？ まるでこれから戦場に行く新兵のようだ」

アリスは、言われたとおりだ、と思つた。これから戦場に行く。間違つてはいない。アリスも強張っているのだろう。それもそうだ。闇の書の主の下には、八雲紫やくもむかりが待っている。東方Projectのキャラクターが住む幻想郷。その幻想郷で最強の一角、それが八雲紫だ。更にそこには、魂魄妖夢こんぱくようむと古明地こいしこめいじがいる。策があるとはいえ、強敵だ。緊張して当たり前だ。

「いけないな、いけないぞ！ どんなどきでも余裕の笑顔！ これが成功の秘訣だ」

そう言う少女。アリスはなんだかおかしくなつた。初めてあつた人にアドバイスされている。別にお金を払って占い屋に並んでいるわけでもないというのに。緊張した肩が楽になつた。

第六話 同居人

「ありがとう。あなたのおかげで肩の荷が下りたわ」

「それは良かった!」

うんうん、と嬉しそうに頷く少女。顔は隠れているが、感情がハッキリとわかる。

「それじゃ、私の、いや、私達の家案内する」

そう言つて、少女は先導した。アリスは追従する。

そういえば、と前に行く少女が訊く。

「お前の名前は? 訊いていなかったと思つてな」

アリスは、アリス、と言つた。

「あなたは?」

「私? 私は、名乗るような名前は持ち合わせておりやんせん。まあ、あえて呼びたいつて言うんなら、ココロ、とでも呼んでください」

急に時代劇調の言い方になるココロ。アリスはそんな彼女を気に入っている自分に気がついて、微笑んだ。これから戦場というのに、イクスが苦しんでいるというのに。笑つていいのだろうか。

そう、イクス。アリスはまた顔を真面目なものに変えた。ここで遊んでいる暇はない。さつきと道を訊いて、向かわなければならぬ。「あ、また真面目な顔しているな? さつきも言ったが、そんな心の余裕がない人は、失敗するぞ。ケアレミスミスする。笑つたほうが成功するぞ。まあ、無理強いはしないけどな」

アリスはココロに対して申し訳なくなつたが、それでも苦しんでいる人がいるのに、余裕の笑顔なんてできない。アリスはそう思った。

ココロに連れられて、一つの家屋の前に来た。

「すまんな。うちの同居人、警戒心が強いから、牙むくかもしれない。無視していいからな」

その同居人に道を訊くのに、無視をするとはどういうことだろうか。アリスは少し混乱した。

「とりあえず、入ってもいいか確認取ってくる」

そう言つてココロは家屋へ入った。

アリスがその家屋を見ると、他の家と同じようにボロボロであった。よくこんな場所で二人暮らせるものだ、と思い待っていると、ココロが扉から顔だけを出した。

「アリス、待ったか？」

「いえ、待つてはないわ。それで、入ってもいいのかしら？」

アリスが訊く。ココロは頷いて、戸を大きく開き、アリスを迎え入れる。

家の中は外見と違って、ホコリ臭さもカビ臭さもなく、比較的清潔であった。そのまま、リビングと思われる場所を通り、奥の部屋へと行く。部屋は閉まっていた。

ココロがその部屋の戸を叩く。

「入るぞ」

ココロは返事も待たずに、扉を開けた。カビ臭さが鼻をついた。そこだけ部屋の掃除が行き届いていないらしい。

アリスは奥へと進み、驚く。

「まったく、返事を聞いてから開けなさいって言ってるでしょ」

「すまんすまん。こいつがさつき言ってた、道を尋ねに来た人だ」

ココロがベッドにいる同居人に謝る。しかし、アリスはそれどころではなかった。

「フランドール・スカーレットっ！」

そこにいたのは、20年ほど前にアリスが、殺したはずの転生者、フランドール・スカーレットその人がいたのだ。

第七話 再会

「フランドール……スカーレット」

フランはベッドの上で本を読んでいた。アリスが臨戦態勢をとる。名前を呼ばれたフランが顔を上げ、目を見開く。

「もしかして、お姉さんじゃないですか。……あ、それともお兄さん？」

お互いが瞳孔を開いた。アリスは、目の前の人物が確かにフランだと認識した。フランはアリスを睨めつけていた。アリスは構える。フランは不敵な笑み。一触即発の雰囲気。しかし、ココロは呑気に首を傾げた。

「なに？ 二人とも知り合いか？ なら、話は早いな。早速だが、フラン、アリスに道を教えてくれ」

そう言うココロ。出鼻をくじかれたアリス。フランは呆れた。その場の緊張が霧散したと、アリスは感じた。

フランが言う。

「なんで私がそんなことしないといけないのよ」

「なに？ しかし、アリスのこと知ってるんだろ？」

「知っているからと言って、その間柄が好いものとは限らないでしょ」「なに、悪いのか？」

ココロがアリスに訊く。アリスは黙って頷く。フランがため息をつく。

「あ、ああ……お姉さん。私はもう戦う気はないわよ」

「それを信じられるとでも？ あなたはガレアの民を殺したのよ」

フランは顔を歪めた。

「それは……私のせいじゃないわよ。こいつのせいよ!!」

そう言つて、フランはココロを指差す。ココロは首を傾げる。

「もしかして、フランが操られている時の話か？」

アリスは混乱した。話が読めない。どう対応していいのかわからない。そんなアリスの状況を悟ったのか、フランは一つ咳払いをした。

「あ、ああ。ここにいる全員、転生者だから。それ前提で話すわね」

「え？」

アリスとココロは顔を見合わせた。フランは続ける。

「お姉さん、彼女は秦はたのころ。私が最初に出会った転生者。ころ、彼女はアリス・マーガトロイド。前にも言ったけど、東方projectって言うジャンル？ のキャラクターに転生した人よ」

ころころが納得して、フードをとった。桃色長髪の無表情美少女。それと同時に、フードに隠れていたお面が飛び出して、ころころの周りをフヨフヨと漂った。アリスは混乱を抑えて、フランを見る。

「どういうことなのか、説明してくれるかしら？」

「今からするわよ」

そう言っつて、フランはベッドの上であぐらをかいて、腕を組む。

「さて、どこから話していけばいいのやら。最初つからのほうがいいかしら？ それとも要点だけ教えたほうがいいかしら？」

「要点だけで。急いでいるから」

「オツケー。転生者の一人に八雲紫やくもゆかりがいるのは知っているかしら？」

フランの問いにアリスは頷く。

「八雲紫があの剣を持っているのは？」

「知っているわ。彼女は神滅剣シンメツケンと呼んでいたわ」

なるほど、とフラン。ころころは話に入れずに、物置のように黙って、様子をうかがっていた。

「なら話は早いわね。八雲紫が神滅剣で私を操った。私は半分抵抗した。結果、私暴走。以上が、私があなたに敵対してしまった理由よ」

第八話 事情

「それじゃあ、何かしら？ あなたは操られていた、と言うの？」

フランは頷く。アリスは目を細めた。

「嘘ね。私は友人を操られたけど、まるで意志を感じなかったわ。しかし、あのときのあなたからはハッキリと意志が感じられたわ」

「だから、半分抵抗したって言ったでしょ？」

抵抗、とアリスが口の中で反復する。フランは大きく頷いた。こころは関係のない踊りをしている。話を聞いているのだろうか。

フランが続ける。

「神滅剣シメツケンが人を操る方法には、二つあるわ」

そう言つて、指を小指と薬指二本を立てるフラン。

「一つは、神滅剣を用いて、相手を屈服させたとき。力での屈服ね。具体的には神滅剣を腹に刺すらしいわ。このとき、相手は完全に心を封印されて、操り人形みたいになるわ。ハイライトが消えるわね。メリットは剣に従順になること。デメリットはいちいち指示しないと動かないこと」

指を一つ折る。小指だけが立っている。

「二つ目は、神滅剣の出す液体を相手に飲ませること。その液体を飲んで直近で抱いた感情を爆発させるわ。感情操作とか洗脳とでも言うのかしら？ これは、抵抗もできるし、飲んだ液体の量によっては全く効かないこともあるわ。メリットは指示無しで行動できること。デメリットは剣に従順にならない可能性があることね」

「つまり、あなたは後者の方で操られ、人々を殺したと？」

フランはテキトウな感じで頷いた。アリスは目を閉じた。

「なぜあなたはそんなにも神滅剣について詳しいのかしら？」

「神滅剣と話したから」

アリスは瞠目した。剣と対話するとはどういうことだろうか。フランはつまらなそうに補足して説明する。

「神滅剣は喋れるのよ。例えるのなら、人類に敵対的なインテリジェントデバイスよ。なぜ話してくれたかは不明だけど、嘘はついてなき

そうだったわ」

アリスは納得した。アリスは訊く。

「でも、今のあなたは剣に操られているように見えないわね。あなたは どうやって剣からの操作を免れているの？」

「一度死んだから」

アリスはこめかみを抑えた。秦^{はたの}こころは掃き掃除をしている。アリスは気楽そうな彼女が羨ましかった。

「えつと……死んだのになぜ、そこにいるのかしら？」

「そんなこと私に訊かれてもしようがないじゃない」

アリスは頭痛がしてきた。フランは肩をすくめた。

「本当に何も知らないわ。お姉さんに殺されたあと、あの場でもう一度目が覚めたの。そしたら、剣の束縛？ まあ操られなくなった、というわけよ。まあ、これで納得できるとは、私も思っていないわ。だって、証明できないんだもん。もしかしたら死んでなかったかもしれないけど、それだと神滅剣の洗脳？ が効いているはずよ。だから、死んで生き返って、リセットされた？ と私は思っているわ」

アリスは考える。フランの言っていることは、信じがたい。死んだものが生き返る。そう言えば、アリスも大怪我を負っても、いつの間にか治っていることがある。神の転生特典は他にもまだあるの、かもしれない。

第九話 協力

「わかったわ。あなたを信じましょう」

アリスは言った。フランは笑った。

「信じるという言葉は信じていないことの裏返しって聞いたことがあるわ」

アリスは否定しない。フランの座っているベッドへと近づく。

「それで、話は終わったか？」

部屋掃除が終わったのか、はたの秦ころろが訊く。ゴミが片付けられている。それでも部屋は埃っぽい。

アリスはベッドの端に腰掛けた。フランは眉をひそめた。

「フランドール。あなたは八雲紫を恨んでないかしら？」

フランは訝しげにアリスを見た。アリスは続けた。

「もしそうなら、手を貸してくれるかしら？ 私友人が八雲紫に操られているの」

「マジか！ それはヤバイ！ フラン、助けよう！」

アリスの言葉にころろが叫ぶ。アリスはありがたく思ったが、フランの態度は冷たい。

「なぜ私がお姉さんの手伝いをしないとイケないのよ」

フランは不満そうだ。アリスは説明する。

「あなたが八雲紫を恨んでいるのなら、八雲紫に仕返しができるわよ」
なるほど、とフラン。

「敵の敵は味方ってことね」

アリスは頷く。フランはため息をついた。

「さっきも言ったけど、私はお姉さんの敵ではないわ。でもね、味方でもない」

アリスは頷く。フランは鼻を鳴らす。

「慣れ合う気はないわ。あいつへの復讐は私一人でやるわ」

「つまり、あなたは八雲紫に恨み、復讐心を持っている、ということね」

「まあ、剣の洗脳で人を殺してしまったからね。犯さなくてもいい犯罪を行ったのは、気に食わないわ」

なら、とアリス。

「私があなただを手伝ってあげるわ」

フランが嫌な顔をした。アリスはそれを無視した。

「私の目標は、八雲紫が操っている闇の書の主を殺す、または闇の書の破壊よ」

「闇の書って何だ？」

「こころが質問する。フランが口を開く。

「とりあえず、世界を破壊するヤバイもの」

「それはヤバイな！」

東方projectの秦こころのイメージと違って、とアリスは思ったが、それがこころの性格なのだろう。表情が一切動かないところは原作通りであるので、余計に目立つ。いや、ある意味では原作と同じように表情豊かなポーカーフェイスなのだが、違和感がある。もちろんアリスはそのことを口にしない。フランがアリスに質問する。

「それで、なんで闇の書？ 暴走しても他の世界に逃げればいいじゃない？」

「この世界を守るためよ」

アリスは言う。フランはつまらなそうな顔をした。アリスが続ける。

「それで？ フランドール。協力してくれるかしら？」

第十話 方向

「断るわ」

フランの答えは簡潔だった。アリスはそこに拒絶を感じた。これ以上の交渉は意味がない。

「わかったわ。それじゃ、道案内だけでもしてくれないかしら？」

そう言って、立ち上がるアリス。フランは首を振った。

「嫌よ。ここから出たくないわ」

「フラン、そう言わずに道案内ぐらいしたらどうだ？」

はたの 秦こころが言う。アリスは、いいわ、と断る。

「嫌なら無理強いはしないわ。方角さえ教えてもらえれば、一人で行けるわ」

「でも……」

こころが眉根を寄せる。フランはホツとした感じだった。

「地図があれば、現在地もサービスで教えてあげるわ」

アリスは地図を出してフランに渡した。フランはベッドの端まで這って行き、机の上のペンをとる。こころは納得のいかないように腕組をしていた。無表情で。

フランが地図を見て、書き込みをする。部屋は静かになった。

「はいっ！ できたわ」

そう言ってフランはアリスに地図を返す。アリスは地図を受け取る。現在地と思われる場所に四角の印がついていた。印からは目的場所への矢印が引いてある。

「その印がこの家の場所よ。途中でわからなくなっても方向がわかるように描いたわ」

そう言って、フランは壁を指した。目的場所の国の方向だ。アリスはそれを頭に叩き込んだ。

アリスが礼を言う。フランはテキトウな感じで返事した。アリスは、邪魔したわね、と部屋を出ようとする。

「ちよつと待った！」

こころが叫んだ。

「私も行く」

アリスはキョトンとし、フランは、え？ とこぼれた。こころは得意そうに続ける。

「私もアリスと共に戦う！」

アリスは混乱した。

「えっと、なんでかしら？ あなたにメリットがない気がするのだけど」

こころはムスツとした。

「メリットとかデメリットとか関係ない！ 私が手伝いたいから手伝う。それでいいじゃないか！」

アリスはまばたきをした。こころの発言に感謝した。フランは面白くなさそうだった。

「ちよつと。あなたが行ったあとの食事は誰が作るのよ？」

「私は出掛ける。お前は残る。つまり、そう言うことだ」

面倒臭いわ、とフラン。知らないな、とこころ。二人の間で喧嘩の徴候が見られて、アリスが慌てる。

「こころ、別にいいのよ？ 無理に来てもらわなくても……」

「アリス！」

こころがアリスを責めるように叫ぶ。

「アリス。これは私が行きたいから行く。そこに利害も損得もない。私は行きたいから行く。フランは行きたくないから行かない。はつきりしてるじゃないか」

アリスはこころの優しさを見て、心の中で感謝した。

第11話 道中

結局アリスは秦^{はたの}こころと一緒に飛び出た。フランは家に残った。苦々しい顔をしてアリスを見送った。

「でも、本当に良かったのかしら？」

「何が？」

空を飛びながらアリスの質問にこころは無表情で訊き返す。アリスはそこにこころの不動の意志が見て取れて、これ以上の質問は野暮だと思った。空中を能面がこころの周りを飛び回っている。

アリスは敵の戦力について語った。魂魄^{こんぱく}妖夢^{ようむ}と古明地^{こめいじ}こいしの能力、ヴォルケンリッターの数、八雲^{やぐも}紫^{ゆかり}の能力の考察。作戦についてなど。

「つまり、上手くやれば闇の書の主を殺せる、ってことだな」

「こころがトーンを落として言った。アリスは気づく。」

「人を殺したことは？」

「もちろん、ない。前世も今も」

「もちろん、と答えられたことに、アリスは納得を示した。」

前世で人殺しは重罪だ。アリスは記憶を失っているからそのあたりの常識が薄い。知識としてのみそれを知る。こころは前世を引き摺っている、とアリスは思った。

「この世界で前世の常識は通用しない。この時代なら尚更だ。」

「覚悟はしておいたほうがいいわ」

アリスはこころに言った。こころが力む。二人は黙った。

空はどこまでも汚らしい赤黒い雲で覆われていた。

「アリスは、人殺ししたことあるのか？」

アリスは、こころに顔を向けた。こころは無表情。アリスは顔を前に戻して、ええ、と言った。

「何人も」

「初めて人を殺した時、罪の意識は感じたか？」

アリスはなんとも言えない顔をした。

「わからないわ。それどころじゃなかったから」

アリスが思い出すのは、”Grimoire of Alice”
”を使ってベルカ聖王家の軍兵士を蹂躪したことだ。”Grimoire of Alice”は強力な魔法が使える代わりに酷い頭痛という副作用がある。どうしてそんなものがあるのかは不明だが、そういうものだ、と理解するしかない。そのおかげで殺しの罪悪感をあまり感じなくて良かった、のかもしれない。

そんなことを説明するアリス。こころは無表情で聞く。ちゃんと理解しているのか不安であった。

「前世の記憶がないのも、理由かもしれないわね」

アリスはそんなことも言った。

「記憶がないのか？」

「ええ、ちよつとね」

黄金鍊成と記憶の消却で力をするという『戦姫絶唱シンフォギア』のキャロル・マールス・デインハイムの能力を説明した。

「前世の記憶だけ忘れて、能力や原作の知識は残っているって不思議だな」

たしかにそうだ、とアリスは思ったが、思考を中断した。目的の敵陣が見えてきたからだ。

第12話 闇の書

西洋の城。街。しかし、人気はない。死に絶えたようだ。見下ろす限り、ゴーストタウンのようだった。

それでも魔力反応をアリスは感じた。秦^{はたの}ここも同じことを思ったのか、首をひねる。

「なんで人の気配が少ないんだ？ 城なのに、兵士とかいないのか？」
「おそらく闇の書の餌食になって亡くなっただと思っわ」

闇の書は、リンカーコアを喰う。正確には他人のリンカーコアを蒐集して、その人間の魔力資質、能力、使っていた魔法をそっくりそのままコピーできる。そうやってリンカーコアを蒐集して、蒐集したりリンカーコアの大きさに応じた量のページが埋まる。最後は666ページ全てが埋まり、主を本の中に取り込み、封印が解かれた魔獣のように世界を滅ぼす。

原作を知らないところにアリスが説明した。ここは嫌な顔をした。

「悪趣味だな。リンカーコアを蒐集させて、主を殺し、結局世界を破滅させる。守護騎士達はそれを知らない」

「本来は主と共に旅する魔導書だったのが、悪意ある改変を受けて今の姿になった、というのが原作での説明ね」

ここは沈黙した。無表情だが、怒っているのがわかる。

「それで？ 敵は強いんだろ？ どうやって侵入するんだ？」

ここらの質問にアリスは巨大な魔法陣を出した。人形を召喚する。
『ゴリアテ人形』

2. 9メートルの大男が名前の由来だが、それを超えるほどの大きさ。両手に巨大な剣。ゴリアテ人形が動く。城へと突撃。剣をクロスにした。斬撃。城は崩壊した。

ここは無表情だったが、お面がすべて静止した。

「……………アリスはもう少し賢いと思っただけど、結構脳筋だな」
アリスは無視して、降りるわよ、と下降した。ここもまばたきをして、続いた。

城は瓦礫と化した。

アリスはこれで八雲紫を倒せると思っていた。古明地こいしも倒れないだろう。物理透過の能力があるからだ。魂魄妖夢や闇の書の主は操られているから上手く行けば逃げれずに生き埋めになるかもしれない。まあ、楽観的な考えだとアリスは思っていた。

「酷いじゃない？ アリス」

八雲紫が瓦礫の山に現れた。隙間に入って攻撃を免れたのだ。側にはシャマルと闇の書の主と思われる少年が立っていた。目に生氣はない。幼い少年を力づくで屈して操る。酷い仕打ちだ。その前にその少年が国の戦力として徴兵されていた、というのもこの時代ならではだ。

そして、アリスはその少年を殺そうとしている。少年にとっては、不幸だったとしか言うことができないが、アリスは非情にもイクスのことしか気遣っていなかった。

こころは、無表情だが、怒りのお面が激しい動きを見せていた。

第13話 神殺しの計画

八雲紫は余裕の表情。アリスは睨む。やくもゆかり 秦はたのこころは無表情。お面は移り変わり動き回っている。

アリスが一步前に出た。

「八雲紫、闇の書の主を渡してもらおうかしら？」

シヤマルが少年を隠す。八雲紫が口を開く。

「藪から棒ね。そちらのお嬢さんの紹介もしていないじゃない」

こころを見る八雲紫。アリスは無視して続ける。

「闇の書は危険よ。闇の書の主は殺すべき。この世界の存続のためにも。逆にあなたが闇の書を保持する意図が読めないわ」

シヤマルがアリスを睨む。闇の書の主はヴォルケンリッターに好かれていたらしい。シヤマルの反応は、アリスの殺すべきという台詞へのものだった。

アリスは気にしない。八雲紫も笑って流す。

「私？ 私が闇の書の主を所持している理由ね……あなたと再交渉したかったからよ」

アリスは目を細める。

「神器ならいいわ。それは言ったはずよ」

「なるほどね。それは本当らしいわね。あの娘を暴走させたのに、その主張を続けるというのは、そういうことね」

アリスは歯を食いしばった。イクスが望まぬ戦を強要されたのは、こいつのせいだ。今すぐにも飛びかかって八つ裂きにして謝つても傷つけ、死体になっても傷めつけない。しかし、それではイクスの願いを遂行できない。闇の書の主に闇の書のページを埋められたら、世界が滅ぶ。ヴォルケンリッターが全滅しても、八雲紫がいればページは埋められるだろう。

「まあまあ、そう睨まないで。あなたと敵対する気はあまりないわ」

どの口が、とアリスは思ったが黙って、先を促す。

「私はね、アリス。あなたを味方にしたいのよ」

アリスは黙っている。こころのお面が止まった。八雲紫は続ける。

「私はね、神を殺すという目的があるわ。そして、神を殺すには神に会わなくてはいけない。ここまではわかるかしら？」

アリスは目で頷く。こころもお面を回した。

「神に会うには、こちらから出向くか、向こうから来るか。どちらかでしょう？ それで、こちらから行くことができないのなら、こっちに来てもらおう、と思ってるね」

「神は言ってたわ。あまり世界に干渉できないって。神がこちらに来るとは思えないわ」

アリスが言う。八雲紫は笑みを深くした。

「たしかに、私の異世界黙字録クレアバイブルにも、そう書いているわ」

それなら、と言いかけるアリスに八雲紫は被せた。

「それと同時に、こうも書かれているわ。世界の緊急時に姿を現す、とも」

アリスは考えた。こころは首を傾げている。

「なるほどね。でも、その世界とは、一つだけでも、ということかしら、それとも全ての次元世界、ということかしら？」

「一つだけでも、出てくれるそうよ。別に世界を救うためでも、人々を救済するでもなく、ただ見るためだけに……。神が来るのなら、今度は神を殺せる戦力を整えないといけないわ。それが転生者よ」

第14話 秦（しん）

八雲紫は、転生者が神を殺す戦力になると言う。アリスは疑問を呈した。

「転生者だけで、神を殺せるのかしら？」

「転生者に与えられる特典、転生特典はね、神の力を分割したものだ。魂魄妖夢は神の身体能力、古明地こいしは神の認識操作、私の場合は空間能力で、アリスは生命の誕生、秦（しん）は感情操作」

「少し待ってくれるかしら」

アリスは考えが追いつかない。転生特典が神の力を分割したものであるというのがよくわからない。

「神は23もの能力を持っているわ。そのうち21を転生者7人に分けているの。今の神は力がないに等しいわ。だって、ほぼ全部の力を7人に渡してあるのだから」

八雲紫は続ける。

「もちろん全く力がないわけではないわ。残り2の能力は今でも使える。ただ、強力なものが使えない、ということよ。力を分割しちゃったから」

アリスは理解した。こころはわかっているように首を傾げた。八雲紫は微笑む。アリスが口を開く。

「今の神は本来の力の半分も威力が出せない、ということね」

八雲紫は頷いた。アリスは八雲紫の意図がわかった。神に会うには世界を滅ぼす必要があり、神を殺すには転生者を味方につければ達成できる。

「しかし、私はあなたに協力する気はないわ。これであなたの企みは潰れたことになるわよ」

「そんなやつは操ればいい、それだけよ」

「こころは？　こころ、あなたもあいつの味方はしないわよね？」

「あら？　それはこころの意志次第よ。記憶のないあなたには関係のない話よ。神は運命を操る。私達の死も神のせいなのよ」

アリスがこころに訊く。八雲紫がそれを諫める。その場の注目が

こころへと注がれた。こころはそれに戸惑っている様子だ。話が変わったからだ。

「まあ、神様がどうのこうのというのはなんとなくわかったけど……、率直に言うよとだな」

こころは腕を組んで話す。

「私には、さっぱりわからない内容だな」

こころは無表情で、開き直ったことを言った。八雲紫は眉をひそめる。

「あなたは神のせいで死んだのよ？ それを憎いとは思わないのかしら？」

「私にはそれがわからないって言ったんだ」

「私の能力の一つに世界の真理を知るすべがあるわ。それが何よりも証明になると思うのだけれど」

「いや、そういうことじゃなくて……えっと、神様のせいで死んだのかどうかは別によくって、誰かに殺されたとしても、私としてはそいつを憎めるかどうかかわからないって言うことなんだ」

八雲紫は侮蔑した顔を向けた。

「偽善ね。自分の心を偽る行為だわ。あなただって本来は神を恨んでいるはずでしょ？」

「偽善……というのがよくわからないが、まあ、そうなのかもしれない。そうじゃないのかもしれない。正直わからない。私は昔から自分の感情というのがよくわからない。だから、私は神様を憎いかどうか判断できない。それよりもアリスが困っているのなら、アリスの協力をする。敵対するお前とは、協力できない」

第15話 古代禁忌遺産

「残念ね」

やくもゆかり
八雲紫が言った。

「まあ、他にも方法があるから、別にいいのだけでも」

八雲紫は不敵な笑みを見せる。アリスは眉をひそめた。

「神滅剣シメツケンが操れるのは二人まででしょ？ 私とこころ、そして妖夢ようむを入れて三人は操らないといけないわ。転生者全員を神殺しに向かわせることは不可能。それがわからないのかしら？」

アリスが挑発する。八雲紫は涼し気な顔を維持していた。それが、アリスには不気味であった。

「たしかに、二人までね。神滅剣が人を操る方法は二つあってその片方が二人まで。もう片方は何人でもオツケーだけど、抵抗されたり、抗体ができたりするから、あまり意味ないのよね。だから、実質二人まで」

それはフランから聞いた情報とも一致している。それなのに八雲紫の余裕顔が崩れない。八雲紫が続ける。

「全く持って、神滅剣では対処できないわね。更に、私の能力でも他人を操る能力はないわ」

でもね、と八雲紫はなめるようにアリスと秦はたのこころを眺めた。

「私には、異世界クレアバイブル黙示録があるわ。この世界のありとあらゆる知識が収められている、アイテムが」

アリスは気がついた。『魔法少女リリカルなのは』世界には古代禁忌遺産ロストロギアという高度な技術や道具が存在することを。その中に、人を操るものがあってもおかしくはない。

八雲紫が笑った。

「思い至ったようね。あなたの考えが私のと同じかはわからないわ。でも安心していいわ。今その手段は手元がない。いずれ手に入るのは確実でも、今なければ仕方がないわね」

そう言つて、息を吐き出す八雲紫。

「そう言えば、あなた。知っているかしら？」

アリスは身構えた。

「私達って、どういう存在か」

八雲紫が話を変えた、とアリスは思った。なぜこんな話と思ったが、八雲紫がアリスの回答を待つような顔をしている。隙間を出して、隙間に腰を掛け、待つ構えだ。

「質問の意図がわからないわ」

アリスは応えた。八雲紫は肩をすくめる。

「別に難しいことを聞いているわけではないわ。この世界で私達転生者は、どういった扱いなのかってことよ」

「それは、神が神滅剣を壊すために遣わした転生者、ってことかしら？」

八雲紫は首を横に振った。

「それはどちらかというと、神の視点よ。神が遣わしたって言うのは、たしかに間違いじゃないけど、私が言いたいのは、この世界で、私達を言い表す言葉よ」

アリスは考えて、首を振った。

八雲紫はつまらなそうに告げた。

「異世界黙示録クレーバイブルによれば、私達は、神が作り上げた、古代禁忌遺産ロストロギアということよ。つまり、私達はただの発明品よ。殺されて、神の都合で、転生されて、そして、モノ扱いよ。……滑稽じゃないかしら？」

第16話 くだらない話

「それがどうかしたのかしら?」

八雲紫やくもゆかりの説明を聞いて、アリスはそう言った。八雲紫は眉をひそめた。アリスは続ける。

「私にとって、そんなことはどうでもいいわ。第一、私達が死んだのが神のせいだろうがなんだろうが、関係ないわ。死んだなら死んだ。それだけよ。それ以上でもそれ以下でもない。それで恨んだとして、その憎しみが正当なものだとして、死んだことには変わりがないわ。私達はそれを受け入れるしかないのよ」

八雲紫は啞然としていた。穴が空くほどアリスを見た。アリスは八雲紫の変化に訝しんだ。八雲紫の目が充血していた。歯を食いしばっている。目玉が飛び出てくるんじゃないかと思うほど迫力があつた。

「記憶なしが! 知ったような口をきくな!!」

八雲紫が吠える。

「お前のようなやつは、クソだ! クズだ! 人の心をわかっていない! 前世の記憶があるなら、神を呪う! 力があれば、神を殺す! せっかく命を与えられたんだ! この燃えたぎるような苦しみ、怒り、憎しみ、悔しみ、未練、憎悪、後悔、懺悔、無念、羨望、情熱、絶望、拒絶、期待、希望、殺意、怨恨! これらを抑えるのに、神を殺さずにいられるか!!」

八雲紫は一気に言った。息を切らす。表情は、顔が変わるほど。それほど感情を爆発させるようなことをアリスは言ってしまったのだ。それに気がつくが、どこのあたりがいけなかったのかは、アリスにはわからなかった。秦はたのころとシヤマルも驚愕している。こころは、無表情のままだが、お面がそれを物語った。

八雲紫はジロリ、ジロリ、とアリスとところを睨めつける。

「このまま立ち去ろうかと思っていたけど……気が変わったわ。殺す! お前ら二人は殺してやる!! 『色と空の境界』!」

しまった! とアリスは思った。両脇をレーザー光がかすめる。

閉じるように光線がアリスに襲う。バリアで耐えるが、アリスは吹き飛ばされた。

アリスは起き上がれない。こころの方へ目をやると、同じように倒れている。

一瞬のことであつた。なんの対応もできずに、アリスとこころは倒れた。

『どうしたの？ これでお終い？ もっと楽しませなさい。』人間と妖怪の境界』

八雲紫が消えた。大玉がアリスを囲む。粒弾が流れてくる。アリスは叱責して、足を立たせる。粒弾を避ける。耐久スペルだから、避け続けければ、時間切れが来る。

しかし、最初の不意打ちが重く、粒弾に何度も当たる。服がどんどんボロボロになる。

アリスは再び倒れた。

第17話 妖怪の賢者

アリスも秦はたのこころも倒れた。消えた八雲紫やくもゆかりが現れた。弾幕は消えた。

「これで終わりかしら？ まったくつまらないわね」

アリスは立てない。八雲紫は近づく。こころが立ち上がった。

「あら？ あなたはまだ余力があるのね」

八雲紫が立ち止まって、言う。こころは宙空から薙刀を取り出した。

「まあな、何もせずにやられるのは癪だからな！」

こころは孤面を被った。八雲紫に突撃。

八雲紫は笑う。

『八雲紫の神隠し』

八雲紫が消えた。こころは八雲紫がいた場所を通り過ぎて止まり、あたりを見渡す。

「どこだ!？」

「(ん)よ」

こころは後ろから声を聞く。薙刀を振り回して、その場から離れる。後ろを見たが八雲紫はいない。代わりとばかりに、弾幕が飛んできく。こころは薙刀で全て叩き落とした。アリスはそれを見ていることしかできない。

離れて、こころが周り伺う。

「(ん)ろー！ 上よー！」

アリスが叫ぶ。こころは上へ構えた。

『憂き世は憂しの小車』！

こころのスペル。三つのお面がグルグル回る。そして、上空へ舞い上がった。そこへ八雲紫が現れる。同時に八雲紫へ直撃。八雲紫が仰け反る。こころはガッツポーズした。

「……」

八雲紫は驚いて口を開けなかった。こころはアリスに礼を言った。アリスはよろよろとだが、瓦礫と化して残った城壁に寄り添い、立つ

た。

「ちよつと、油断していたようね。でもね、次は殺すわ。『深弾幕結界――夢幻泡影――』」

八雲紫が消える。耐久スペル。こちらから攻撃ができない。向こうは高みの見物。それでも時間制限がついているのが、耐久スペル。弾幕がこころの周りに配置されていく。こころは、薙刀を構える。周りの弾幕が配置完了。動き出す。こころは迫る弾幕を切伏せ、弾き、安全圏を作る。東方PROJECT弾幕シューティングゲーム『東方永夜抄』ではパターンを覚えて対応する技。こころはそれを知らない。安全圏が狭まっていく。

アリスは、無理だ、と思った。八雲紫のスペルカード『深弾幕結界――夢幻泡影――』は、ルール上最強の技として恐れられている。パターンがあるため忍耐力と集中力さえあればクリアはできるが、実践となると、話が変わってくる。

こころの薙刀の動きが速くなる。しかし、間に合わない。ついに安全圏は崩壊。こころは弾幕の流砂に飲み込まれていった。

「どうかしら？」

アリスの横に八雲紫が現れ、言った。

「これが現実よ。あの子はもう戦えないわ。次はあなたよ」
アリスは歯噛みした。

第18話 接戦

「それでは、次はあなたね」

八雲紫が言う。アリスはやつと立てた状態で、八雲紫を睨むしかできない。八雲紫は笑う。

「まだ諦めていない表情。でもね、あなたの仲間はその弾幕の渦の中よ。もしかしたら、もう死んでいるかもしれないわね」

八雲紫が秦はたのころがにいる弾幕結界を見る。しかし、眉をひそめた。「おかしいわね。まだスペルが発動している。倒れたら解除されるようにしてあったのに」

時間が過ぎた。耐久スペルの時間が終わった。弾幕が晴れる。そこにはころが立っていた。

八雲紫だけでなく、アリスも驚いた。

「なぜ、そこに平然と立っているのかしら？」

八雲紫の質問に、ころは喜びのお面をして、ドヤ顔でもしているような雰囲気です張った。

「なに、私も転生者だ。転生特典の一つを使ったまでだ」

八雲紫は目を細めた。

『飛光虫ネスト』

隙間から光弾が高速で打ち出される。ころはそれを避けない。光弾がころの前で消え失せた。

「AMF。Anti Magic Link—Fieldね」

八雲紫が言った。

「ん、なんだかそんな感じの能力だったな。原作はえっと……魔法とか先生とか、葱がどうたらとかだったか……」

『魔法先生ネギま』の神楽坂明日菜、またの名をアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア。彼女の能力であるマジックキャンセル完全魔法無効化かしら」

ころの台詞からアリスは能力の予測をした。ころは、そうそれ、と首をブンブン頷く。八雲紫は余裕の表情。

「それならそれで戦う方法はあるわ。『ぶらり廃駅下車の旅』」

隙間が大きく展開された。ガタンゴトンという音。こころは首を傾げる。奥から二つの光る目が向かってくる。

「こころ！ 避けなさい！ 電車よ！」

隙間から電車が飛び出てきた。こころは余裕を持って回避する。今度は道路標識の矢がこころを襲う。隙間から飛び出す無数の標識。止まれ、駐車禁止、進入禁止。丸やら三角やらがこころへ向かう。こころは、避け、薙刀で払い、防戦。このままでは体力の限界が来る。

アリスはこころに來た理由である闇の書の主を探した。二人の戦闘で見失ったのだ。こころが八雲紫を引き受けている間に、闇の書の主を殺しておく必要がある。

アリスは人形を展開した。上空へと人形をやる。空から探すのだ。次の瞬間、偵察隊が全員斬られた。アリスは既視感に横へと飛んだ。後ろの壁が斬れた。

魂魄妖夢こんぱくようむがいた。

「出しぬこころとしても無駄よ」

八雲紫が神滅劍シメツケンを隙間から出して、威嚇している。アリスは齒噛みした。

第19話 身代わり人形

アリスは魂魄妖夢、秦こんぱくは八雲紫と対峙している。闇の書の主をアリスはこのタイミングで見つけた。シャマルに守られている。妖夢に睨まれていては殺しに行けない。それに、未だに見えない古明地こめいじこいしを警戒しないといけない。接戦とはいえ、戦略的に不利であった。

「このままではジリ貧ね」

光のない目をした妖夢を警戒しながら、アリスはつぶやいた。せめてもう一人いればいいのに、と思った。

『『レーヴアティン』！』

炎の巨剣が振り下ろされた。あたりは炎の海となった。アリスは目の前の光景があつという間に変わったことに、頭が対応できない。こころは上空へと退避して、悪態をつく。

「フラン！ 私まで巻き込むな！」

こころが叫んだ先を見ると、フランがいた。アリスはなぜ、思ったが、答えは彼女の口から出た。

「こころ、お腹空いたわ。早く終わらせて帰って来なさい」

「いや、どう考えてもこの状況で帰れるわけ無いだろ!？」

はあー、とフランは大きなため息をついた。アリスは八雲紫を見た。八雲紫はフランへと気を取られている。妖夢は指示されないと動けない。この間に闇の書の主を殺す。

アリスは走った。シャマルが気がつく。

『『ドールズウオー』！』

回転しながら武器を回す人形12体が闇の書の主とシャマルへ向かう。シャマルは防御魔法を展開する。人形と魔法が拮抗する。アリスは近づく。

『『蓬莱人形』！』

砲撃魔法がシャマルへと延びる。ゴリ押しである。シャマルは防御魔法を強化させたようだ。耐えている。

『『リターンイナニメトネス』！』

拮抗していた人形全部が大爆発する。地面が抉れ、シヤマルと闇の書の主がはじき出された。

(いける！)

と思つたとき、妖夢がアリスの横にいた。妖夢の剣戟。アリスは真つ二つになつた。

「油断大敵ね」

八雲紫が笑う。こころがアリスの名を呼ぶ。アリスは崩れ落ちた。「闇の書の主を消されたら、神を呼べないわ。あいつを殺せなくとも、本当に神が来るのかどうかを実証する必要がある。それを邪魔されたくはないわ」

こころが八雲紫を睨む。

「よくもアリスを！」

飛びかかろうとするこころをフランは抑える。こころは暴れる。

「フラン！ 放せ！」

「落ち着きなさいよ。よく見なさい」

「何を見るといふのだ!？」

フランが冷静に言う。

「闇の書の主は死んだわ」

フランの台詞に八雲紫は目を見開く。闇の書の主を探す。その場にアリスがいて、アリスの人形が武器を少年に突き刺していた。数体で、数力所に。

アリスは八雲紫と視線を合わせる。

「私の勝ちね」

第20話 埋葬

血塗れの少年を、アリスはできるだけ優しく寝かせた。刺し傷が深い。心臓を一突き。生きていないだろう。苦しみなく、死んでいたら良いのだが。

戦いの終わった瓦礫の城を見ながら、アリスは思った。

闇の書の主を殺された後、シャマルは消えて、闇の書は次の主を求めてどこかへ行った。八雲紫はここに留まる理由もなくなって、隙間から魂魄妖夢とともに立ち去った。すでに違う世界にいるのかもしれない。妖夢は相変わらず目に光がなかった。

「おーい！ アリスー！」

秦はたのころが呼ぶ。アリスが振り向くと、フランとともに食料を抱えてやってきた。この国に残った食料を探していたのだ。フランがお腹空いた、と駄々をこねたので、こころがここで料理を作ることになったのだ。

「アリス。アリスは料理作れるか？」

アリスは頷いた。こころはアリスの足元の少年の死体に気がつく。それから静かに近づいて来た。

「その子は……ここで埋葬するの？」

「ええ」

「穏やかな……顔しているな」

「……………ええ」

フランが近くに荷物をおろした。

「まったく辛気臭いわね。この世界で人が死ぬのは日常でしょうが」

アリスは頷いたまま、それから沈黙した。フランは面倒臭そうに思っ、袋の中のリンゴみたいな果物を取り出し、齧った。

味は酸っぱかったそうだ。

少年は埋葬された。目印となる枯れ木の下に埋めた。

「それで、アリスはこの後、どうするんだ？」

「こころが訊く。」

「ガレアに戻るわ。今度はイクスを助けに行かないと行けない」

「アリスは言った。こころが腕組みして考える。」

「アリス、それに私がついていっても大丈夫だろうか？」

「え、とアリスが驚く。フランが抗議する。」

「ちよつと！ それじゃ私のご飯はどうなるのよ！」

「別にお前は料理できない訳ではないだろ？ 自分でやれ」

「愕然とするフラン。アリスはこころに尋ねる。」

「でも、本当にいいの？」

「困っているんだろ？ 同じ転生者のよしみとして手伝いたい。友達なんだろ？ その娘は」

「アリスは頷いた。こころがいれば心強い。実力は十分だし、話していて、気持ちが落ち着く。」

「こころがフランへと振り向く。」

「というわけで、私はアリスについていくことになった。お前はどうか？」

「屈んで地面に”の”の字を書いて、私拗ねてます、と言ってるかのような態度でフランはそっぽを向いた。こころの質問に答ええない。こころはため息をついた。」

「こころはアリスに振り返った。」

「なあ、アリス。こいつも連れて行っちゃいけないか？」

「はあ!? なんで私がお姉さんについていけないといけないのよ!? 意味わかんない！」

「アリスが答える前にフランが拒絶した。こころは訊く。」

「なんでだ？ どうしてアリスと一緒に行くのがそんなに嫌いなんだ？」

「こころの質問にフランは黙った。アリスを凝視する。アリスはたじろぐ。こころは首を傾げる。」

「どうしたんだ？」

「ちよつと、お姉さん、もしくはお兄さんに聞きたいのだけれど……………」

アリスは首を傾げた。

エピローグ 質問

フランからの質問にアリスは窮した。

「もし、あなたの好きなイクスヴェリアと今日助けてもらったこのころと、どちらか一方を殺さないといけないとしたら、どっちを選ぶかしら?」

「……それは、どちらとも殺さない、という答えではだめかしら」

フランは頷く。秦^{はたの}ころはギョツとした。

「フラン! なんてこと訊いてんだ!」

「こころは黙ってなさい」

フランはアリスを睨んでいる。アリスもフランから目を放さない。こころは間に立って、オロオロしていた。

「正直な話をする、イクスを優先するわ」

フランの視線が強くなった。

「やっぱりね……」

「いやいや! 今日会ったばかりのやつより、今まで一緒に暮らしてた人の方が大事だろ? お前の質問は意味がない」

フランは首を振って、こころの意見を否定した。

「そもそもこの質問に正解はないわ。それはお姉さんも気がついてたでしょ?」

アリスは頷く。こころは首を傾げて、フランが続ける。

「正解がない質問というのは、その人間の個性、価値観、思想を表すわ。選択すらできないなら、その人間は優柔不断だが、心優しい人間。こころを選んだ場合は助けてもらった義理を返すということだから、冷酷だがきちんとしたルールがある人間。そして、原作キャラであるイクスヴェリアを選んだということは、自分本位で私心を大事にする人間、ということよ」

アリスが黙った。こころが眉をひそめた。

「必ずしもそうとは限らないだろ?」

「あなたは人を殺したことがないからそう言えるのよ。人を殺したら、人の死がより近くなる。死が近くなれば、今の質問に生半可なこ

とは言えない」

そう言われたら、何も返せないところ。こころは人を殺したことがない。アリスは目を伏せた。

「そうなのかもしれないわね。私は自分のことばかり考えているわ。正確には、イクスをどう助けるかしか考えていないわ。私にとってイクスは、友であり、家族であり、……恩人よ」

フランは頬を引くつかさせた。アリスは続ける。

「でもね、イクスを優先するのは事実でも、こころに恩返しをしたいというのは本当よ。でも、それを言ったところでこころよりもイクスを優先させる、と言わないのは誠実ではないわ。だから、私はイクスを選んだの」

フランは沈黙した。こころは首をひねった。アリスはフランを見つめている。

フランはため息をついた。

「そう……それは失礼したわね。私の早とちりだったわ。あなたは信頼における人だったようね。……私もお姉さんに同行するわ」

こころのお面が華やいだ。しかし、とフランが言う。

「お姉さんを認めただけではないわ。そこるところは忘れないでほしいわね」

アリスは頷いた。

アリスは心強い味方を手に入れた。

第一章第七節 古代ベルカーガレア滅亡篇 ―後―
プロローグ 大軍

アリス、フラン、秦^{はたの}ころは上空を飛んでいた。ガレア上空を跨いで、シュトウラへと行く。そこで共同接戦を張って、マリアージュを殲滅させる。マリアージュを殲滅させたあと、イクスには死体に近づけさせず、毒を中和させる鉱物を与える。イクスの身体を元あるものへと治さなければならぬ。暴走しないような、そして、マリアージュを生み出さない、イクスヴェリアという普通の少女に。それがアリスの願いであった。

空は相変わらず、赤黒い。朝の薄気味悪さを感じた。

「おい……あれは何だ？」

ところがアリスに訊く。ガレアに入る前だ。アリスも驚いて、上空で止まってしまった。

地面が動いている。波打っていると言っても過言ではない。黄金がチラチラと見える。死屍の群れ、マリアージュであった。

「こんなに増えているなんて……」

想定外である。アリスはわずか三日程度でマリアージュがここま
で増えるとは思わなかった。あのほぼ全てがガレアの民だろうか。
近くの小国も飲み込んだのかもしれない。そうでなければあの数は
説明がつかない。

「シュトウラへ早く行きましょう」

アリスはそう言っ、再び前へと飛ぶ。フランとここもアリスに
続く。

シュトウラとガレアの国境の森は燃えていた。マリアージュが

人々を殺している。堪らず、こころが助けに突撃したが、敵が多く、誰一人として助けることができなかつた。こころの無表情が深くなつた。

「お母様！」

シュトウラの王城に近づくと、真紅シメツクが迎えに来てくれた。時刻は昼に迫っていた。

アリスはフラン達を軽く説明して、現状を訊いた。真紅はシュトウラの要塞がいくつか落とされたことを説明した。生存者はほぼゼロ。アリスは瞑目した。

「シュトウラ王はいるかしら？」

「いえ、シュトウラ王は前線に行つてます。私達薔薇乙女ローゼンメイデンは王城を任されたのだわ」

アリスは頷く。

「私達はそちらに行くわ。引き続き、王城の守護をお願い」

真紅は、わかりました、と言つた。フランが抗議する。

「お腹空いたわ！ 休ませよ！」

アリスとしてはすぐにも助けに入りたかつた。シュトウラ王とも作戦について話したいことがあつた。

「なら、私だけでも行くわ」

こころがギョツとする。

「三日も寝ずにいただろ!?! 私達は途中途中で休憩を入れていたが、お前はずつと起きていたじゃないか!」

「私は大丈夫なのよ」

アリスは、アリス・マーガトロイドの能力をこころに伝えた。こころは首を振つた。

「それでも、もとは人間だろ? それなら、今ここで休むべきだ」

「いえ、行くわ」

そう言つて、アリスは飛び立つ。こころの声が聞こえたが、アリス

は無視した。

第一話 要塞

ガレア国境付近の要塞に着いたアリス。後方に小高い山がある砦。シュトゥラ王は要塞周辺に土塁と空堀を作る作業を見ていた。

「シュトゥラ王」

アリスがシュトゥラ王のもとへ行く。シュトゥラ王はアリスに気がついた。アリスが傳く。

ガレアのか。よい、面をあげよ。ここは戦場だ。余も一人の兵として扱ってもらおう

アリスは顔を上げた。

「闇の書の主を、討ちました。あとは、マリアージュを殲滅させるだけです」

そう言つて、経緯を話した。八雲紫やくもゆかりのこと、フランや秦はたのころのこと、など。シュトゥラ王は黙つて聞いた。

アリスが話し終えると、シュトゥラ王が口を開いた。

ガレア顧問よ。この防衛、どう思う？

アリスはシュトゥラ王のしている建設現場を見た。魔法を使つての作業。攻撃魔法で堀を作り、転移魔法で土砂を積み上げる。突貫工事としても様になっている。それがこの要塞の周囲に張り巡らされている。

「どう、というの？」

アリスが訊く。

マリアージュの大軍を防げるか？

アリスは口を閉ざす。上空から見たマリアージュの軍団はこの兵の十倍以上はあった。兵法からすると、圧倒的な不利である。敵は不死の軍団。味方は死ぬ。このどこに活路を見出すことができるのだろうか。

民は城へと避難させているが、ここが陥落すれば逃げ場がなくなる。すでに戦いは分水嶺となつてしまった。よもやここまで進撃が速いとは……………

アリスも頷く。

「ガレアは豊かでした。民も多かったです。その数が全てマリアー
ジユとなったと考えると頂ければ……いえ、ガレア南部の国も幾つか滅
亡していると考えられますので、国何個分かの兵数が襲ってくる、と
いうことになります」

それほどか……。自国の民を殺してしまった罪悪感。ガレア国
王は、さぞ悔しかろう……

シュトウラ王は瞑目した。アリスはイクスのことを思った。今ど
こで何をして何を思っているのか。アリスには想像ができないが、快
いものでないことは理解できた。

「シュトウラ王、私とフラン、こころ、そして薔薇乙女ローゼンメイデンで上空からガレ
ア国王のもとへ行く許可をいただけませんか？」

そう言つて、アリスはイクスの状態について説明した。

イクスは中途半端に改造されている。マリアージユはイクスの制
約を受け付けていない。暴走状態にある。イクスは無限にマリアー
ジユのコアを作り、それを止めるには大規模で純粹な魔力を浴びさせ
ないと行けない。それでコア製造の機能は一時止まるだろう、と。

シュトウラ王は、考え、よかろう、と許可を出した。

第二話 失念

アリスはシュトウラ城に戻った。水銀燈スイギントウにフラン達の場所を訊き、厨房へと行く。

「すぐに出撃するわよ」

アリスはフランと秦はたのころに言った。フランはころが作った料理を食べている。血じゃなくてもいいらしい。ころは食べ終えたのか、真紅シンクとともに厨房の片付けをしていた。なぜか金糸雀カナリヤがフランを警戒して、扉の陰に隠れている。

フランはパンを齧って、もぐもぐと嫌そうな顔をした。

「あのね、私はお姉さんの家来じゃないのよ？」

口の中のものを飲み込んで、フランは言った。アリスは言葉が詰まった。フランが続ける。

「第一、私は休憩中なのよ？ そんなときに言われると苛つくわ」

「そうだな。それに、作戦はどうするんだ？ 私達は何も聞いてないぞ」

ころが片付け終わって、話に加わる。アリスは失念していた。イクスばかりに気を取られていて、肝心の作戦を考えていなかった。周りのことも頭に入ってなかった。

フランが呆れた。

「まさか、無策である大軍に飛び込もうと言い出さないでしょうね」

「ごめんなさい……何も考えていなかったわ」

アリスは謝罪した。フランはため息をつく。ころがフランをなだめる。

「まあまあ、出撃前で良かったじゃないか。アリス、アリスも休憩したらどうだ？ 聞いたぞ、ここの一月休みという休みをとってないんだろ？ 十分な休憩なくして、いい作戦もたてれないだろ？」

アリスは恥じた。ころに言われて、休憩をすることにした。水銀燈が紅茶を入れる準備を助けた。優秀な従者然としていたが、顔は無理する母親に落ち着いてもらおうと、穏やかな笑みをたたえていた。アリスは申し訳なく思った。

「ところで、そこのお前は どうしてそんなところに隠れているんだ？」
「こころが扉の陰にいた金糸雀に言った。金糸雀は肩を跳ね上げ、こちらを覗く。フランを見ていた。アリスは合点した。」

「金糸雀。フランはもう敵ではないわ。こちらにいらっしやい」
「……………お、お母様がそう言うのなら」

金糸雀が身体を扉から出した。テーブルへと近づく。フランがグリンツと首を向け、金糸雀を睨んだ。金糸雀は、ワツと言ってもとの扉へと戻った。こころとアリスがフランに意味有りげな視線を投げ、フランは素知らぬ顔でパンを齧った。

「お母様」

蒼星石^{ソウセイセキ}が厨房に入ってきた。翠星石^{スイセイセキ}も蒼星石の後ろで顔を出している。アリスの手持ちの戦力が揃った。

第三話 作戦

「それで、どうするのよ？ 作戦」

スイギントウ水銀燈が入れた紅茶を飲みながら、フランが訊いた。吸血菌があつて飲みにくそうであつた。アリスが頷く。

「そうね……とりあえず、シュトウラ側の兵は前線の防衛をすることが決まっているわ。イクスの処遇は私に一任してもらっている」

はたの秦こころが無表情で驚く。お面が入れ替わる。

「よくシュトウラの王様が許したな」

良き王なのよ、とアリス。フランはカップを置いて、鼻息を出す。

「責任を全部お姉さんに押し付けたのよ」

「まあ、……そうとも言えなくもないけど、それでもこの城を休息に当ててくれたり、防衛に戦力を割け、とも強要されなかったわ」

アリスがフランに言った。どうかしら、とフランは言ったが、話を作戦に戻すように先を促した。アリスは頷いて続ける。

「責任問題は後で話しましょう。さて、私達の戦略的な目標はマリアージュの完全な殲滅。それを実現するにはイクスが持つマリアージュのコア無限生成器官の停止が重要。ここまではいいかしら？」

アリスが見渡す。異論はなさそうだ。続けた。

「それで、生成器官の停止方法は、大規模かつ純粹魔力ダメージをイクスに与えれば良いと考えられるわ。マリアージュのコア生成器官はそれで停止すると思われる」

「確実ではないのね？」

フランが確認した。アリスは頷く。

「しかし、それ以外にいい方法はないわ」

「他にはどんな方法が考えられるんだ？」

こころが訊く。

「マリアージュのコアが生成されるのは、一定範囲内に死体がある時。だから、死体がイクスの近くにない状態を作ればいいの。けれど、今現在は戦乱よ。死体がない場所なんて考えにくいわ」

「突然襲撃にあつて、死体ができてマリアージュが発生というのも面

倒ね。ただでさえマリアーヂュがイナゴの大群のようにいるのだから、移動されると困るわ」

アリスが続ける。

「実際、今イクスはマリアーヂュに連れ回されていると思われるわ」

「そりゃそうだ。コアは死体が近くにないと生成されないのなら、死体を持ってくるか、死体のもとに行くかの二択しかないものね」

そう言えば、とフランが続ける。

「具体的には、どのくらいの範囲にいれば、マリアーヂュのコアが生成されるのかしら？」

「そうね……イクスの目が届く距離。つまり、イクスを中心に半径3〜4 kmの円の中に死体があれば、その死体はマリアーヂュになるわ」

「まあ、妥当な長さね」

フランがおどけて言った。こころは話がわかっていないのか、お面が暇そうに空中を漂っている。金系雀が口を開く。

「お母様、一つ質問が」

「何かしら金系雀？」

アリスが首を傾げる。金系雀はフランをチラリと見て言った。

「この方達と作戦を実行しないとイケないのかしら？」

「それはどういう意味かしら？」

フランが金系雀に目をやる。睨んでいるわけではないが、金系雀はそれだけで萎縮した。アリスはため息をついた。

第四話 昨日の敵

金糸雀は目の前で水銀燈スイギントウを倒された経験がある。フランによって。だからか、金糸雀のフランに対する視線は敵対的とまでいかないものの、好ましいものではなかった。「そもそも実力がわからないかしら。それなのに背中を預けられるのかしら?」

金糸雀が言う。真紅シンクも頷く。

「金糸雀の言うとおりなのだわ。実力がわからない以上、同じ部隊をともにするのは危険だわ」

金糸雀と真紅の意見も一理あると、アリスは思った。

「そうね。……フランとこころはどう思う?」

アリスはフランと秦はたのこころに訊く。こころは頷いた。

「部隊を分けるんだろ? 別にいいんじゃないか? 連携が取れないのなら同じように戦えないだろうしな」

こころは好意的だ。

「フランは?」

アリスがフランに訊く。フランは考え事をしていて。アリスに指されて、顔を上げた。

「私は別にいいわ。戦術が限定されるけど、仕方ないわね」

それでも、とフランは金糸雀を見る。金糸雀は構える。

「な、何かしら?」

「……いえ、できるならそれぞれの手札を見せたほうがいいと思ったのよ。昨日の敵は今日の味方、ではないけど、これから必要になるのは信頼だと思うわ。敵を知り、己を知れば百戦危うからず」

アリスが驚く。こころが狐のお面を真面目腐った様子で被った。フランが続ける。

「でも、私はまだあなた達のことを信頼していないわ。自分の実力を話す気にはなれない」

「そ、そんなのこっちもかしら! なんでお前なんか私達のことを話さないと行けないのかしら!」

「金糸雀、お客様に失礼よ」

金糸雀をたしなめたのは、水銀燈だった。でも、と反論しようとする金糸雀に強い視線を送った。金糸雀は黙った。

「決定するのは、お母様よ」

アリスは違和感を覚えた。いつの間にか彼女たちと何かしらの距離ができている気がした。

アリスは心に過ぎったそれを勘違いとして、奥に仕舞い込んだ。

「お母様、どうしますか？」

水銀燈の質問に、アリスは考える。

フラン達とはこれからも仲間として関わっていきたい。それならこちらの手札を言ったほうが良いだろう。しかし、敵にその情報が流れる可能性もある。例えば、八雲紫やくもゆかりに操られたとき。

アリスはフランに訊いた。

「一つ訊きたいのだけど」

「何かしら？」

「神滅剣シンメツケンは操った相手の記憶を聞き出すことはできるのかしら？」

「……………できるわね」

フランの返事を聞いて、アリスは信頼は当分の間築けないと思った。

第五話 戦術

「とにかく、戦術としてはどんなのが考えられるか。今はそれが大事でしょ?」

フランがバツが悪そうに言った。フランも信頼が築けないことに気がついたのだろう。話を変えた。

アリスは考えて、言った。

「空から行って、イクスががいる場所へダイレクトに魔法を放つ」
「単純ね」

アリスの言葉にフランが言う。しかし、とアリスは続ける。

「障害が二つあるわ」

アリスが厨房を見渡す。全員がアリスに注目している。

「二つ目は、そもそもイクスがどこにいるのか」

「前線だろ? さつき言ってたじゃないか」

「こころが首を傾げる。アリスは首を振った。」

「正確な場所よ。大規模な魔法を当てるには、的がどこにあるのか
しっかり把握しておく必要があるわ」

「それもそうだ、とこころが頷く。」

「次に二つ目は、周辺のマリアージュに魔法を邪魔される可能性よ」

「例えば?」

フランが訊く。

「大規模魔法を準備中に攻撃されることが一つ。それと、大規模魔法を放ったあと、壁としてイクスに届かない可能性が二つ」

「前者は誰かが護衛に付けばいい。後者は誰かが周辺のマリアージュだけでも殲滅する必要がある」

「こころが対策をまとめる。アリスもフランも頷いた。」

「つまり、三つのグループに分けるのがいいかしら?」

カナリア金糸雀が言う。スイセイセキ翠星石は話が難しいのか、暇そうにしている。

ソウセイセキ蒼星石は真面目に聞いていた。

「いえ、正確には二つ。一つ目が大規模魔法を準備及び術者の護衛。
二つ目がマリアージュを片付ける人達ね。イクスの場所は全員で探

せばいいわ」

「それなら私は二つ目のほうがいいわ」

アリスの言葉にフランが言った。アリスは咳払いをした。

「フランと私は大規模魔法を準備するわ」

「なんでよ？ 私、純粹魔力の魔法なんて使えないわよ？」

アリスの発言に異議を唱えるフラン。アリスは頷いた。

「私も純粹魔力の魔法は使えないわ」

「意味ないじゃん!? どうするのよ!? それが使えないと、そもそも
の計画がパーじゃない!?!」

フランが叫ぶ。アリスは、心配ない、と言う。

「何が心配ないのよ？ 手は打ってあるの？」

アリスは頷く。

「純粹魔力の魔法は、原作『魔法少女リリカルなのは』で言うところの
”非殺傷設定”よ。これに対して私達が普段使っている魔法は”物
理破壊設定”と言うわ」

アリスが言う。フランが頷く。

「それはなんとなくわかっていたわ。でも、原作では簡単に切り替え
ができてたじゃない」

「あれはおそらくデバイス、つまり魔法の杖のおかげよ。術者の補助
をデバイスがしているから”非殺傷設定”と”物理破壊設定”の切
り替えが楽であったと思われるわ」

対して、とアリスが区切る。

「今現在、私達には設定切り替え補助の道具がない。つまり、私達だけ
で切り替えをしないといけないのよ」

第六話 非殺傷設定

「具体案はあるわけ？」

フランが訊く。”非殺傷設定”と”物理破壊設定”の切り替えが容易でないというのは、アリスのもったいぶる言い方からフランは予想できていた。

アリスは頷いて、説明を続ける。

”物理破壊設定”である私達の魔法を、”非殺傷設定”にする方法はわかっているわ。ただ、時間がかかるのよ」

ここで手が拳がった。秦^{はたの}ころが首をひねっている。

”非殺傷設定”と”物理破壊設定”って言うのは何だ？」

こころは原作を知らない。アリスはここで一旦整理する必要があると思った。

”非殺傷設定”は純粹魔力だけで魔法を打ち出す技術のこと。純粹魔力だけだから魔法が当たっても対象の物理的な破壊は起こらない。つまり、生物は死なないということから、”非殺傷設定”と呼ばれているわ」

フランが続ける。

「対して、”物理破壊設定”は純粹魔力ではないわ。魔力を全て物理エネルギーに変換していて、ものを破壊するのに適している。”非殺傷設定”ではものを破壊するどころか、ものに弾かれる。だから、さつきも言ったけどマリアージュが壁になったら攻撃が届かない」

「正確には、弾かれるじゃなくて、減衰する、と言ったほうがいいわ。こころが納得したように頷いて、そしてやはり首をひねる。

「それなら、”非殺傷設定”っていらんじゃないか？」

今度はアリスとフランが首を傾げる。こころが慌てて説明する。

「だって、”非殺傷設定”はものを透過できないんだろ？ ものを通り過ぎる前に減衰されて、壁の向こう側までたどり着けない。それなら敵が壁に隠れたとき、”物理破壊設定”しか意味がないことになる。これだと”非殺傷設定”の必要性がわからない」

アリスは理解した。

「こころの意見は敵を倒すという目的においては、”物理破壊設定”だけがあればいい、ということね。たしかに、敵を倒す目的なら、そうだけど、敵を殺さずに無力化するということにおいては、”非殺傷設定”が必要だわ」

「まあつまり、それしか能がない、技術とも言えるけどね」

フランが補足した。こころはなんだか腑に落ちないという姿勢をとった。顔は無表情である。

「何かしら引つかかるところがあるのなら、遠慮なく言つて」

アリスが言う。こころは考えて、言つた。

「私としては、まだ何かしら用途があつても良いような気がしてな……。まあ、それだけといえればそれだけなのだが……」

「生け捕りにするのは大事よ。その後情報を聞き出す必要があるときわね」

フランがそう言う。

「つまり、生け捕りにする以外の有効な用途はないわけだな？ よくそんな技術が生まれたな」

こころの言葉にアリスは相槌を打つた。

「私の予想では、デバイスを動かす仕組みに”非殺傷設定”の魔法が使われていると思うわ。生け捕り以外でも使われていると思うの」

第七話 デバイス

「デバイスに？」

フランが首を傾げた。秦^{はこの}ころも同様だった。アリスは頷く。
「デバイスの仕組みを理解しているわけではないけど、原作『魔法少女リリカルなのは』の知識から判断すると、幾つか、気になる部分があるわ」

そう言つて、アリスは指を一本のばした。

「一つは、変身衣装^{バリアンジャケット}。魔法少女もので言うところの、変身後の恰好。その時に、着ている衣服を収納し、そして収納されていた変身衣装^{バリアンジャケット}が出てくる。その時に物質と魔力の変換が起きていると考えられる」

アリスが二本目の指を立てる。

「次に、非殺傷設定。これはさつき言ったわね」

アリスが三本目を立てる。

「三つ目は、カートリッジ。カートリッジとは、筒状の物体で、魔力をためておけるの。ちょうど銃弾の火薬のように」

アリスはこころを見て、説明した。こころは頷いて、先を促す。

「このカートリッジなんだけど、……なぜ物理的なエネルギーではなく、魔力で貯める必要があったのか」

「？ どういうこと？」

フランが訊く。アリスは頷く。

「別に物理的なエネルギーで、例えば、電気や核エネルギーをためることもできたはずでしょ？ ここまで高度な技術があるのだから。そっちの方が”物理破壊設定”の魔法を使うとき、効率がいいわ」

”非殺傷設定”に関しては、非効率だろ？」

「そうね。けど、『魔法少女リリカルなのは』の原作時空で、”非殺傷設定”の魔法は、今で言うところの《未来》でよく使われているわ。この戦乱期では、”物理破壊設定”の魔法が主流。それなら、そっちに合わせたほうが何かと便利じゃない？ 実際地球の技術で電気が使われているから、不可能ではないはずよ」

フランとこころが黙った。二人はアリスの続きの言葉を待った。

アリスは、一つ呼吸を整えて、語る。

「おそらく、魔法を補助する道具、デバイス。それを制御するのに、物理的なエネルギーではなく、純粹魔力を使っていた。つまり、”非殺傷設定”の魔法でしか、デバイス制御ができなかった、と考えられないかしら？」

「なるほどね。つまり、魔法を使うにはデバイスが必要。そのデバイスを制御するには、”非殺傷設定”の魔法でないといけない。だから、”非殺傷設定”の魔法が発達した……と言いたいわけね」

アリスは頷いた。こころは話についていくのを諦めて、紅茶を飲みながら、カナリア金糸雀のおでこを注視していた。金糸雀はこころの視線を無視している。

第八話 切り替え

「話が逸れたわね」

と、アリス。

「つまり、デバイスが”非殺傷設定”の魔法でできている、ということはおいておいて。今回の作戦に戻るわね」

フランも秦はたのこころも頷く。薔薇乙女ローゼンメイデンも何も言わない。アリスは続ける。

「話をまとめるわね。まず、イクスの場所を探す」

「その後、周辺のマリアージュを殲滅、大規模純粹魔法の準備」

「そして、それをイクスに放つ」

アリス、フラン、こころの順で言う。こころは頷いて、あたかも話を聞いてましたよ、という風を装っていた。

「そして、問題は大規模な純粹魔法の魔法をどう準備するか、ということね」

フランが目を細めてアリスを見る。アリスは頷く。

「本来、”非殺傷設定”の魔法を使うには、デバイスの補助が必要。しかし、デバイスはない。それを改善するには、”非殺傷設定”の魔法を使わないといけないわ」

「もうすでに矛盾があるように聞こえるのだけど？」

フランがため息をついて、言った。アリスは困ったような顔をした。

「ここからは少し複雑になるけど、いいかしら？」

「良いも悪いも、言わなければ話にならないわ。言いなさい。それから判断するわ」

フランの言葉にアリスは頷く。水銀燈スイギントウがこころのカップに紅茶を注いだ。こころはお礼を言って受け取る。表情はないが、お面に疲れが見える。

”非殺傷設定”の魔法には、大きく分けて、二つあるわ」

そう言つて、アリスは両手を広げる。

「二つ目が、攻撃魔法。原作『魔法少女リリカルなのは』においてはこ

都合主義に感じる技術ね」

アリスは右手を振って、話した。次に、左手を振って、話し出す。「二つ目は、非攻撃魔法。つまり、補助魔法全般ね。回復魔法や結界魔法、防御魔法などよ。もちろん、デバイス制御の魔法もこっちに含まれるわ」

アリスが全員の顔を見渡す。みんながついていけているか確認したのだ。こころは背筋を伸ばして、あたかも理解しているかのように頷いた。アリスは続ける。

「問題になるのは、一つ目。攻撃魔法は、本来は”物理破壊設定”の魔法なの」

フランが納得した。

「ああ、つまり、その攻撃魔法を”物理破壊設定”から”非殺傷設定”に変更するのが、難しいのね。それがデバイス補助が必要と」

そのとおりよ、とアリス。

「私達は原作『魔法少女リリカルなのは』でデバイスの補助によって省略されていた、部分を自力でやらないといけない、ということよ」

こころが、なるほどな、と頷いて訊く。

「つまり、簡単に言おうと、どういうことなんだ？」

「つまり、魔法の詠唱が長くなって、魔法陣が複雑になるのよ」

フランが言う。

第九話 役割分担

「魔法陣は……まさか、手描きとか言うんじゃないでしょうね？」

フランがアリスに半眼を向ける。アリスは、肩をすくめた。

「残念ながら、手描きのほうがいいわ。理由は、詠唱も魔法陣も魔法の発動も全部私がやると、処理が間に合わないわ。一応、人形に搭載した演算システムを全て繋いでも、成功率は30%くらいね」

「ついでに、その人形は何体いるんだ？」

秦はたのこころの質問に、アリスは、1万、と答えた。

「よくそれだけ人形が作れるわね。それも半自律なんですよ？ それともこいつらのように完全自律なのかしら？」

アリスはフランの推測に舌を巻く。たしかに、東方PROJECTのアリス・マーガトロイドの人形は全てが半自律だ。アリス・マーガトロイドは完全自律の人形を作ろうとしていた。そして、水銀燈達、薔薇乙女は見るからに完全自律。そこから判断したのだろう。

「それについては、秘匿するわ」

フラン達を信頼しないわけではない。神滅剣シンメツケンに操られた者が八雲やくも紫ゆかりに全てをバラすかもしれない。なるべく、言わない方が良い。

フランは、賢い選択ね、と言った。こころが手を上げる。

「具体的な役割は、どうするんだ？」

「そうね……私が詠唱、魔法の発動はフランにお願いするわ。フランは魔法発動まで魔法陣の中に入れてもらう必要があるから、それまでは攻撃はなしね」

アリスがフランを見る。フランは頷く。アリスは続ける。

「水銀燈スイギントウと金糸雀カナリヤがマリアージュの殲滅スイセイセキ。翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキは私とフラン、魔法陣の護衛。真紅シンクとこころは殲滅班と護衛班の補助……どうかしら？」

アリスはこころに確認を取る。任せておけ、とこころは胸を張る。

「以上が具体的な役割分担ね」

「一ついいかしら？」

フランが手を挙げる。アリスが、何かしら、と訊く。

「私は、魔法陣の中で、詠唱が終わるまで、じっとしている、ってことよね」

「ええ」

「その間に、魔法陣から出たり、魔法を使ったりしたらどうなるのかしら？」

フランの質問に、アリスは頷く。

「魔法陣の中で動くくらいならいいけど、詠唱が終わるまで魔法は厳禁。魔法陣から出るのもいけないわ。もしそれを破ったら」

「破ったら？」

アリスはため息をついた。

「最初から詠唱をし直さないとはいけないわ。詠唱最初らへんならやり直してもそこまで影響はない。けど、最後らへんでやり直しは痛いわね」

「ここにいるメンバーの体力が保たないと？ 詠唱はどのくらいかかるの？」

フランが訊く。アリスは答えた。

「二週間」

第十話 前線

夜明けとともに、アリス達はマリアージュの迫る前線の砦へと辿り着いた。相変わらず、空は赤黒い汚い色をしていた。

アリスはこの砦にいるシュトゥラ王へ計画の詳細を説明した。シュトゥラ王は前線の防衛に専念することを約束した。作戦は敵の襲撃に伴って行われる。アリスは御前を離れた。

作戦はシュトゥラ王も参加することになった。と言っても、砦の防衛をすることに変わりはない。

作戦の変更は砦の後方、小高い山に、気づいたフランが、「あそこに魔法陣を準備すればいいじゃない」と言ったことが始まりだ。

マリアージュはガレア方面から来る。要塞でマリアージュを防ぎながら、後方でイクスのコア無限生成器官を止める準備を進める。

有無を言わず、フランの『レーヴァテイン』が炸裂。山頂は平らになった。アリスも秦^{はたの}こころもシュトゥラ王でさえ、呆気にとられた。白い岩盤が剥き出しになった山。その山頂に、前もって魔法陣を描いた。複雑な模様。魔法陣が完成したのは、マリアージュの予想到達時刻の一週間前。いい感じであった。

「今から私は呪文を唱えるわ。みんなは所定の位置で待機。フランもいいわね」

アリスが言う。尋ねられたフランは魔法陣の上に行く前に、一頻り辺りを見回した。魔法陣の周りには、フランが削った山の岩が石となって散らばっている。

「ねえ、お姉さん。魔法陣の上に大量の石を置いてもいいかしら？」

フランが訊く。アリスは首を傾げた。

「別にいいわよ。魔法陣それ自体を消さなければ大丈夫よ」

「そう、なら周りの石ころ集めるわね」

そう言って飛び出す。こころも首を傾げる。マリアージュが来れば、こころは前線に行く。今はそばにいた。

「フラン、その石はなんに使うんだ？」

「そりゃ、もちろん。攻撃のためよ。魔法陣の中じゃ、魔法を使っちゃ

いけないなら。小石をぶつけるまでよ」

フランの小石拾いは、翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキに任せて、フランは大人しく魔法陣の中央に座った。アリスが呪文を唱え始めた。これから一週間、二人はここに釘付けになる。アリスは必要ないが、フランの食事は岩から送られる。睡眠も毛布を与えられた。

フランは食事も睡眠も一人で取る。アリスは不眠不休かつ食事もしない。しなくていいとは聞いているが、それでもフランは違和感を覚えていた。罪悪感と言ってもいい。まあ、役割分担のときにしっかりと話をしたため、これが最適だとは理解しているが、それでも、フランはモヤモヤしたものを抱えていた。

第11話 詠唱

アリスが一週間、詠唱しっぱなし、ということとは、アリスはその間喋らないということだ。流石のフランも話し相手がいなければ、堪える。自ずと護衛組である翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキが目止まる。

「……悪いわね、石を運んでもらって」

翠星石と蒼星石は、フランの攻撃手段となる投石をフランの下へ運んでいた。翠星石はまったくだといった感じの態度を取る。

「そうですね！ 本当なら翠星石達は今頃のんびりと紅茶を飲んでいたらいいですよ」

「いや、流石に紅茶はここで飲めないでしょ」
フランが突っ込む。翠星石が、不貞腐れてそっぽを向いた。

「すまない。翠星石はただ人見知りをするとツンツンする癖があつてね」

蒼星石が言う。翠星石は、違うですよ、と蒼星石を非難する。フランは、原作と同じだな、と思った。

「ところで、フラン様は」
「様付はやめて。呼び捨てでいいわ」

蒼星石は言い換える。
「フランは私達の元となった原作についてどのくらい知っているんだ？」

フランはまばたきをした。

「ローゼンメイデンのこと？ まあ、ある程度は知っているわよ。なんでそんなこと訊きたがるのよ？」

蒼星石は口籠る。チラリとアリスの方を見る。アリスは詠唱に集中していて聞いていない。蒼星石は口を開く。

「私は、それにちゃんとなれているだろうか？」

フランは質問の意図がわからなかった。蒼星石が付け加える。

「私は、お母様にそれを期待されて誕生したと思っっている。だから、原作の蒼星石に成れているのか気になって……」

フランは嫌な顔をした。

「何よそれ？ 嫌なこと考えているのね」

「い、嫌なこと？」

フランは頷く。

「たしかに、あなたを作ったのはお姉さんかもしれないわ。でもね、だからと言って、お姉さんの期待を叶えるためにあなたが産まれたわけではないでしょ？」

蒼星石は首を傾げた。フランが苛立たしげに頭を搔く。

「つまり、あなたは自分で考えて行動できるんでしょう？ それなら自分の好きなように生きればいいじゃない、ってことよ」

「でも、私はお母様の期待に沿いたいんだ」

蒼星石が毅然として言う。

「それじゃ、お姉さんはあなたに原作の蒼星石と同じ振る舞いをしなさいって言ったの？」

蒼星石は言い淀む。フランは鼻息を出す。

「あなたはあなたの人生を歩んだほうがいいわ。お姉さんは全知全能の神じゃないのよ？ あなたが盲信したらお姉さん、間違うわ」

でも、と続けようとする蒼星石。翠星石が呆れる。

「蒼星石。蒼星石は頭が固いですう！ お母様は蒼星石にそうやってほしくないって気が付かないのですか？」

蒼星石は黙った。フランと翠星石は顔を見合わせて、ため息をついた。

第12話 古明地こいしは裏切者なのか？

蒼星石^{ソウセイセキ}が反論を言おうとしたとき、砦の方から激しい鐘が鳴った。敵襲の合図だった。マリアージュは一週間後の到着予測だったはず。伝令兵が山にやってきた。鐘はマリアージュの接近を意味していた。

フランが立ち上がる。砦の方を見た。砦の向こう、森の方角、木々の間から蠢く死体の波。フランは舌打ちをした。

「お姉さん、マリアージュよ！ どうするの!? まだ詠唱し始めたばかりじゃない。一週間も保つのかしら?」

計画では、マリアージュがここまで早く到着できるとは予想されていなかった。アリスは詠唱を止めない。フランはそこに継続の意志を見て取った。

フランはため息をついて、腰を落とした。彼女たちはここで座るのが役目である。マリアージュはここにいない秦^{はたの}ころ達が食い止めるだろう。

アリスは片目を上げてフランを見た。詠唱は止めない。

合戦の音がする。あの中にはころや他の薔薇^{ローゼンメイデン}乙女が戦っている。

フランは居心地が悪そうに、身体を前後に揺らしていた。翠星石^{スイセイセキ}が呆れた声を出す。

「こうやって見ると、フランはあまり怖くないのですう。金糸雀^{カナリア}が怯える理由がわからないのですう」

フランは渋面した。
「そりゃ、怯えるでしょ……」

フランは金糸雀の目の前で水銀燈^{スイギントウ}を壊した。怖がられても、仕方ないと思っている。原因が神滅剣^{シンメツケン}にあるとはいえ、少し、悲しく思っている。

「しかたないでしょう? だって、フランちゃんは殺人鬼ですから」

フランにとっては聞きなれない声が聞こえた。振り向くと、古明地^{こめいじ}こいしがいた。

「……いつからそこに?」

臨戦態勢になる翠星石と蒼星石。フランは近くの石の山に手を伸ばす。アリスはじつとして詠唱を続けている。

こいしは笑った。

「今来たところですよ」

「何しに来たのよ？」

「そつちこそ何をしているのですか？ アリスさんはなんだかじつとしてますし……」

「はっ！ あなたに言うわけないでしょ？ さっさとここから立ち去りなさい。裏切者はここに来る資格はないわ」

裏切者、という言葉に、こいしが反応するのをフランは見逃さなかった。フランは目を細めた。

「こいし、正気に戻るんだ」

「そ、そうですよ！ こいしがあの神滅剣シンメツケンに操られているのは、予想がつくですよ！」

蒼星石と翠星石が言う。作戦会議のあと、こいしが裏切るはずはないと意見を出したものがいる。フランはその可能性を排除していたが、長い間関わってきた者にとっては、その可能性にすぎりたくなるものである。

こいしは笑った。

「へえ、そういう風になってるんだ」

第13話 洗脳

フランは古明地こめいじこいしの反応に戸惑った。見るからに冷静だった。だから、神滅剣シンメツケンの洗脳にかかっていないのではと思ってしまう。「そうですね。……そうですね。私はあの剣に心を奪われています、と言って本当にそうなのかを確かめる手段はあなた達にはないでしょう？ なら、考えても無駄ですよ」

こんなセリフを吐く奴が、果たして洗脳されているのだろうか。理性的だ。それとも、それを含めて洗脳されている状態なのか？

翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキも戸惑っている。そりゃそうだ。洗脳されていると思って、いや、信じて戦いに望んだのだ。それが、洗脳されていないとなると、心の支えが揺らぐ。迷いが生じる。

それでも、呪文がブレることはない。アリスは不動に座って、呪文を唱え続けている。フラン達を信じて。

「それがどうしたのかしら？」

「〜♪……………」

こいしが鼻歌を止める。

「精神的な揺さぶりね？ 何が狙いなのかはわからないけど、よくもまあ、かつての仲間を裏切れたものね」

「あら？ 私は洗脳されていることになっていませんでしたっけ？」

こいしはそう言う。フランは呆れる。

「どっちでもいいわ。正直、私達の目的はマリアーヂュを殲滅すること……………あなたに付き合うことではないわ」

「……………」
こいしは不気味に笑っている。しかし、それはすぐに止んだ。こいしは無表情になった。

「仲良しなつよしごっこは嫌いだっただの」

こいしの敬語が剥がれた。フランは、目を細める。

「それが理由？」

「どうでもいいでしょ？ あなた達はマリアーヂュを殲滅したい。私はそんなあなた達を殲滅したい」

フランも翠星石も蒼星石も臨戦態勢をする。こいしは優雅に佇んでいる。

『夢枕にご先祖総立ち！』

柱のような弾幕がアリスめがけて飛ぶ。その間に、蒼星石が割って入る。ハサミを取り出した。アンティーク調のハサミ。それを弾幕に掲げると、蒼いオーラにアリス共々覆われて、弾幕を弾く。

蒼星石は結界魔法が得意なのだ。

フランが石を投げた。こいしはそれを軽く避ける。

『弾幕パラノイア』

こいしの次のスペルカード。丸い光球がフランへと広がっていく。ゆっくりと。だが、呪文まだ完成していない。フランはその場を動けない。迎え撃つしかない。小石の山から石を腕に持ち、投擲。弾幕を一つずつ潰していく。

その間に翠星石がこいしの背後に回って、如雨露を向ける。

「スイドリーム。行くのですよ」

そう言つて、如雨露を傾ける。細い糸のような魔力球の列がこいしへと注がれる。

こいしは振り向き、目を細めた。

爆発が伴った。

第14話 時間稼ぎ

古明地こいしこめいじに翠星石スイセイセキの弾幕が直撃した。魔法陣は魔力で強固にできているため、心配はいらぬ。煙でこいしの様子が見えない。フランと翠星石と蒼星石ソウセイセキは構えを解かない。アリスは詠唱を続けている。

『イドの解放』！』

「っ！ 来るわ!!」

煙を破って、こいしのハート型弾幕が全方位へと飛ぶ。翠星石は危なげに避ける。蒼星石はアリスを背後にバリアを展開して耐える。フランは手持ちの石で魔法弾を撃ち落とす。攻撃が激しい。受け身にならざる負えない。

フランが被弾した。投石が間に合わない。次々と弾幕を受ける。吹き飛ばされそうになるのを、こらえる。ここから弾かれてしまえば、アリスは詠唱を最初からやり直さなくてはならない。反撃したくても、魔力を使えば同じこと。戦える翠星石と蒼星石では、こいしの相手は荷が重すぎる。

弾幕が止まる。フランは、膝をついた。翠星石と蒼星石は？ と思っている様子。蒼星石もアリスを守るために、だいぶ消耗している。このあと、次の波が来るというのに。

『スーパーエゴ』

こいしの声が無情に聴こえる。放ったハート型弾幕が戻ってくるかのように、こいしへと集まる。不思議な魔法だ。一度分散した魔力を今度は収束させている。

原作『魔法少女リリカルなのは』での高町なのはが使った収束砲とは違う。散らばった魔力素をその場で魔力球にしてから、集める。フラン達からすれば、背後から弾幕が襲ってくるのだ。対処の仕方がない。

案の定、翠星石は墜落。蒼星石はアリスを守って、動けない。フランは、耐える。

~~~~~

「で？ もう終わり？」

こいしがそう言い放ったときには、フランも翠星石も蒼星石も地面に倒れ伏していた。アリスは立っているが呪文を止めない。アリスが諦めていないのに、フランが勝手に諦めるわけにもいかなかった。

(いや、もちろん、そんな義理はないのだけれど)

マリアージュがこの世界の住民を殺し尽くしたとしても、フランには関係のないことだ。フランは、自分さえ生きていればいいと思っっている。マリアージュを食い止めている秦はたのこころのことを思い出す。こころに巻き込まれる形でアリスの味方をするようになったが、一人逃げ出してもいい。いや、やられたままなのは癪なので、こいしに極大の『レーヴァテイン』を叩き込んでからその場を去ってもいい。マリアージュだって、イクスを殺せば収まるのだから、こんな回りくどいことをしなくてもいい。イクスを救いたがために、純粹大規模魔力を叩き込む。そうすれば、イクスのマリアージュのコアを生成する器官が止まる。つまり、アリスのわがままで。

フランは、こいしが近づくのを感じた。

## 第15話 勧誘

「ねえ、フランちゃん」

古明地こいしが尋ねる。

「どうしてフランちゃんはアリスの味方をするの？」

フランが先程考えたことだ。アリスに味方する理由は特にない。強いて言うなら、あの神滅剣シンメツケンに洗脳されたのが悔しいと言うのはある。でも、それだつて今アリスに協力する理由になるのだろうか。

「ないよね？」

こいしが断定する。

「ならば、もう諦めたら？　あなただつて、本当は実力を出せずに終るのは嫌でしょ？」

確かに、ここで諦めてもいい。イクス一人の命と大勢の命、どちらが大事か。それはアリスもわかっているだろう。純粹魔力、つまり非殺傷設定。非殺傷設定を持つデバイスを我々が持っていないし、持っていたとしても大規模に扱うには無理がある。デバイスが逝かれる。だから、こんな回りくどい魔法陣や長い呪文を使って非殺傷魔法を実現させるのだ。

アリスはわがままで。自分一人は後ろの方で、ドールに守られながら呪文を唱えている。フランは、やることは魔力の提供と魔法の発動だけでいいが、敵が来たら何もできない。一応投擲用の石を集めたが、あまり意味をなしていない。

理不尽だ。なぜフランは、苦勞しなければならぬのか？　義理もないし、借りもないし、手伝う理由がない。

諦めよう。

そうしてフランは、立ち上がった。

「諦めるのは……まだよ」

こいしが余裕の顔を崩した。フランが石を投げる。こいしは首を少し傾けて避ける。こいしは面倒くさそうな顔をした。

「どうして？　理由、ないんでしょ？」

「理由？　理由ならあるわ」

フランがない胸を張った。

「私が納得しないわ！ 諦める？ ええ、その判断は私が納得しない」  
フランがこいしを指す。

「いい？ 私は私が納得すればいいの。理由がなからうが、理由があるうが、納得さえすれば、私は動くわ」

逆に、と続ける。

「納得していなかったら、たとえ自分の意思で考えたとしても、行動しないわ」

こいしは帽子を目深に被る。

「それが他人に納得させられているとしても？」

「それが洗脳されていて、誘導させられていても、私が私として納得しているのならね。そして、その可能性があるとしても、可能性として理解しているのなら、それで納得しているのなら、私は行動する。だから、お姉さんに…………アリスに協力する！」

こいしが黙った。フランとこいしは向き合っている。翠星石と蒼星石も立ち上がる。ソウセイセキ

「そう…………でも残念ね。私はあなた達が一日以上ここにいなければならぬことを知っているわ。それまで魔力無しで私を止められるのかしら？ ……………ああ、正確にはお人形さん達は使えるのね」

「その必要性はなくなったわ」

えっ、と全員が振り向く。アリスが詠唱を唱えていない。

「フラン！ 早く！ イクスを助けて！」

疑問が残るが、フランは、頷いた。

『『レーヴァテイン』！』

こいしは呆然としていたが我に返った。しかし遅い。

フランが災厄の剣を振り回した。こいしはそれに吞まれる。フランの魔法は遠くの平原まで見える。

合図があった。輝く紅い光。真紅シメツクの光だ。イクスの場所を示している。

フランは迷わずに、極大魔法を放つ。たやすく災厄の杖は、平原へと降り立った。

## 第16話 処遇

フランの『レーヴァテイン』はイクスへと命中した。非殺傷の魔法はイクスを貫いた。イクスのコア生成は停止した。マリアージュは量産され得ない。

フランは片膝をついた。そして、油断なく古明地こめいじこいしを見た。『レーヴァテイン』をなんとかかわしたこいしは驚いたままアリスを見ている。

「アリス……何をしたの?」

アリスは、次々と人形を召喚していく。その間、目の前に倒れている蒼星石ソウセイセキを抱きかかえた。

「一応、最終手段として残しておいたのよ。私も転生してから人形を作っていただけじゃないのよ?」

こいしは人形に囲まれていた。翠星石スイセイセキを回収し終わったアリス。アリスは、フランの側へとやってきた。

「フラン、大丈夫?」

なんとかね、とフランはおどけて言った。

「で? どうやったのよ? 私達も時間短縮できるなんて聞いてないわ」

フランが口を尖らせて訊く。アリスは、目を伏せて微笑む。

「何かをするには対価が必要。時間と呪文を省略するにもね……………」  
キャロル・マールス・デインハイムの錬金術よ」

アリスの解説が続く。つまり、思い出を消却して非殺傷設定を完成させたのだ。ただし、今回はランダムに思い出を消したりしたわけではない。転生してから、今日までコピーアンドペーストして、思い出を蓄積していたのだ。原作『戦姫絶唱シンフォギア』のキャロルも似たようなことをしていたため、できるだろうと思っただけで言えなかった。ざっと十年分の思い出。それを一気に消却した。

「なんというか、ご都合主義というか……………」

フランが呆れる。アリスは首を振った。

「ご都合主義ではないわ。だって、今は使える思い出のストックがも

うないわ。もう一度同じことはできない。魔法が一回でイクスに当たらなければ、私達はバッドエンドを迎えるしかなかったわ。それに準備だって、詠唱しながらだと難しいのよ？」

だからこいしが現れて時間がかかった訳か、とフラン。アリスはこいしが現れてから、思い出を消却しようかと判断したらしい。早い判断だった。

さてと、とアリスがこいしに話しかける。

「こいし。単刀直入に訊くわ……なぜ裏切ったの？」

アリスは冷静を保とうとする。イクスを、ガレアの民を、ひどい目に合わせたのは、八雲紫と神滅剣だ。それでも、イクスに直接“毒”を注射したのはこいしだ。その“毒”がイクスのコア生成能力を活性化させて、多くの民を殺し死体兵器“マリアージュ”にした。元凶はこいしだ。

それと同時に、一緒に歩んできた仲でもある。転生してから初めてあった他の転生者でもある。助けられたこともある。こいしがいなければ、ガレアの政治は悪徳宰相に乗っ取られたままであっただろう。こいしの働きは多くのガレア国民を救ったはず。そして、アリスも救われた。

洗脳されていれば、それで良かった。神滅剣に洗脳されていれば、それを解く方法を探せばよかった。しかし、裏切ったとなると、そうはいかない。そのところをはっきりさせる必要があった。

アリスはこいしの返事を待つ。



## 第17話 対話

古明地こめいじこいしはゆつくりと周りを見渡す。人形の兵隊があたりを囲んでいる。アリスの人形だ。アリスもいるし、フランもいる。逃げるのは難しい。

こいしがアリスに向き直る。

「私は洗脳されています………と言うのは往生際が悪いですね」

フランは頷く。アリスはそのままこいしを見つめている。

「まあ、別にアリスさん達には恨みも何もありませんよ………ただ、過去の私が許さなかっただけ」

「過去………」

「そう……過去。いわゆる、前世、だよ」

「………よかったら、聞かせてくれるかしら？」

アリスができるだけやさしく訊く。こいしは首を横に振った。

「今、言ったとしても………私が裏切った事実は変わらないよ。………ガレアの人達は温かかった。私も好きだったなあ………あの雰囲気」

こいしが悲しそうに言う。反省するように帽子を頭からとって、両手で胸に抱いた。

「どうして、イクスちゃんに酷いことをしたか………理由はわかってるわ。これは私の意思で、私のわがまま」

「こいし、今なら戻れるとは言わないわ。けど、でも、反省できるし、償うことはできると思うの」

こいしは首を横に振った。それから黙った。アリスは、ため息をついた。

「せめて、あなたが八雲紫やくもむかりに味方をしているのか、それとも神滅剣シメツケンの味方なのか、はたまた別の勢力の味方なのか………聞かせてくれるかしら？」

「………私は私の意思でここにいる。そして、イクスちゃんに注射をうったのも私の意思で、八雲紫と神滅剣は関係ないわ。他の勢力もいるのかどうか知らないし」

「そう……私達とは、一緒に行動できない？」

できない、とこいし。アリスは短く、そう、とつぶやく。

「こいし、ごめんなさいね。あなたをそのまま放っておくことはできないわ。どんな理由があろうとも、私達の味方でないのなら、殺すしかないわ。次も私達に害をなさないとは限らないのだから」

「うん、いいよ。私も自分が何やらかすのかわからない。ある意味自暴自棄になってたのかな？ そこらへんは私もわからない。でも、人を殺したんだ。多くの人を……現代日本なら死刑、だね」

沈黙が支配する。ボロボロの翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキは何を言っているかわからない顔をしている。アリスは冷酷に表情を保っている。

「アリス？ 私が殺そうか？ 私ならこいつにそこまで思えないし」

「いや、私がやるわ。これは私達の問題だから」

人形の兵が上下左右から構えている。こいしは逃げれない。そもそも逃げようとしない。

こいしの周りを赤い糸が張り巡らされる。こいしは動かない。

『『デビリーライトレイ』』

アリスがスペルカードを唱えた。糸を伝って、レーザーがこいしに降り注ぐ。

こいしは死んだ。

## 第18話 親友

古明地こめいじこいしは死んだ。肉片すら残らず、消えた。アリス達の前に二度と現れることはないだろう。

アリスは黙っていた。フランはどう声掛けしていいのかわからなかった。翠星石スイセイセキと蒼星石ソウセイセキは悲しそうな顔をしていた。

「……………行きましょう。ここで時間を潰している暇はないわ」

アリスがフラン達の顔を見渡す。フランは頷く。

「そうね。マリアージュが新しく生成されることはないかもしれないけど、まだ無数にマリアージュがいるものね」

フランのセリフにフランを含め4人が前線を見た。

小規模な爆発が続いている。マリアージュが自爆しているのだ。戦い、倒され、弾ける。マリアージュは人を道連れに行動する。秦はたのころや他の薔薇乙女ローゼンメイデン、シュトウラの騎士達が戦線を維持しているが、疲労が濃ゆい。助けに行くべきだ。

そして、何よりイクスがまだ救出されていない。

フランはアリスを見た。アリスは頷く。

「イクスは私が助け出すわ。今は意識を失っているはず。フラン達はマリアージュの殲滅に行ってほしいわ」

「一人で大丈夫かしら？」

「ええ、平気よ。イクスを救出したあとは、そっちを手伝うわ」

アリスがひと呼吸入れた。目をつぶって言う。

「ごめんなさい。私のわがままに突き合わせてしまって」

フランが目を細めた。

「それはイクスを助けたいということに対してかしら？」

「そうよ。イクスを殺せば、マリアージュは止められる。そんな簡単な手段があるのに、イクスを助けたいっていう私のわがままに付き合わせてしまって」

「それは少し違うんじゃないかしら？」

フランが怒りを飲み込むような声を出す。

「たしかに最初は原作キャラクターだから助けるのかと思ったけど、

それが大切な人なら話は別よ」

「……………もし私が嘘を吐いていたら？」

「あら？　嘘を吐いているのかしら？」

「いえ、吐いてないわ」

なら問題はないわ、フランは背中の翼を広げる。

「それよりもここで問答を繰り返すよりも、戦ったほうがいいわ。手遅れになる人が出ないように……………」

先に行ってるわ、とフランは前線へ飛び立った。アリスは動けないでいた。

翠星石と蒼星石がアリスの前に出る。

「お母様、私達もお姉様たちが心配なので、行きますね」

「怪我也回復もすませてあるので、準備万端ですう」

アリスが返事をする前に二人はフランに続くように飛んで行った。

アリスは振り返る。

こいしが立っていた場所を見る。黒く汚れていた。こいしの影だ。影しか残っていない。

アリスは自分がしたことを確認してから、マリアージュの軍団の中へと向かった。

もう一人の親友のもとへと。

## 第19話 人形 vs 人形

アリスは空中で人形を展開した。人形達が構える。眼下は無数のマリアージュ。死体の人形達である。

『グランギニョル座の怪人』

人形から無数の弾幕が飛び散る。アリスを中心に高密度の魔力弾。アリスの最強のスペルカード。

マリアージュは胸を穿たれ、頭をなくし、炎に包まれていく。

「イクス！」

イクスの姿が見えた。アリスはマリアージュの波に突っ込む。砲弾が飛ぶ。アリスは避ける。マリアージュ達が群れをなし、イクスを連れ去られまいと、蜂の巣のような有様になる。

『「デヴィリーライトレイ」！』

光線がアリスを阻むものを焼き尽くす。アリスは地面についた。

「イクス！ イクス！」

あと少しでイクスに手が伸びる。

マリアージュの声。独特な機械音。"イクスは渡さない"

マリアージュがアリスの背中に飛びかかる。上海人形がそれを斬り伏せる。人形の防波堤でアリスは守られている。しかし、それもいつまで保つかわからない。

まるで亡者の群れ。蜘蛛の糸に釣り上げられる罪人。

アリスの脚にマリアージュの腕が絡みついた。下半身が吹き飛びながらも、イクスを渡すまいと邪魔をする。

自爆。

咄嗟に魔力を流して、ダメージを軽減させる。右脚が爛れている。それでも、アリスは進む。

マリアージュが腕に張り付くも、無視して進む。

「イクス！ イクス！ イクス！」

やっとの思いでイクスの元へたどり着いた。イクスは、ぐったりと身体力を抜いて、横たわっていた。息はしている。脈もある。

アリスはイクスを抱えて、空へと舞い上がった。

『蓬萊人形』『上海人形』

砲撃魔法がマリアージュの群れを蹂躪する。飛び上がり、跳ね上がり、マリアージュは自らの燃料で自滅する。

アリスは城へと戻る。まだ、マリアージュの群れは片付いていないが、先にイクスを安全な場所へと連れて行きたかった。

雨の匂いがした。空は赤い黒雲。アリスの頬に雫が落ちる。雨はあつという間に土砂降りへと変わる。マリアージュの火もそろそろと鎮火していく。まるで、これで事件は終わりとも言うかのように、冷たく激しく降る。

マリアージュ殲滅作戦は無事終わった。死者はこの作戦だけで千人ほどで規模の割には少ない。しかし、マリアージュが殺した人数を考えると、方は軽く越しているだろう。

アリスは作戦が終わると、ずっとイクスの側にいた。イクスは未だに目覚めない。まるで死んでいるかのようにぐっすりだ。このまま起きないのではないのか、と思えるほど。

しかし、希望はある。

原作ではイクスは何度か眠りから覚めている。

アリスとイクスが話し合う日も遠くはないだろう。

それまでに、ベルカの世界を青空で埋め尽くそう。

アリスはイクスの髪を梳きながら、微笑むのだった。

## 第20話 冬景色

窓に目をやると赤い曇に覆われている、冬景色の城下町が見えた。シュトウラの雪は湿気が多い。雪かきに励んでいる老若男女が蟻のように動き回っている。

扉が叩かれた。返事をする、扉が開けられる。水銀燈スイギントウがティーンセツトを載せて、給仕台を押し入ってきた。

「お母様、お茶をお持ちしました」

「ありがとうございます、水銀燈」

短いやり取りの後、アリスの後ろに控えていた、上海人形と蓬莱人形が水銀燈に代わり給仕をする。水銀燈はベッドを見た。

「お母様。イクス様の様子はいかがですか？」

ベッドに寝ているのはイクスである。この部屋はイクスのためにシュトウラ王が設えた。アリスは何も言っていないのに、当たり前のように準備してくれた。人民に人気の理由がよくわかる。

アリスはイクスを見てから、口を開いた。

「そうね。……ゆったりと寝ているわ。雛鳥が親鳥に見守られながら寝るように」

上海と蓬莱が小テーブルにティーカップを並べていく。アリスは二人にも礼を言って、一口啜る。ほんのり温かく飲みやすい、シュトウラ産の茶葉の味がする。前世では紅茶と言ったら暖かい地域をイメージするが、ベルカでは寒い地方でも有名な茶葉がある。

あれから一年経った。イクスは未だに目が覚めない。しかし、アリスは何も焦ることはしなかった。原作の話にはなるが、イクスは何度か目覚めたと表記されていた。自分達、転生者の影響がどのくらい原作に響いてくるのかはわからないが、イクスは目覚めると、アリスは確信していた。

アリスはシュトウラの軍事顧問になっていた。シュトウラ王としての希望であったが、アリスは積極的にこの世界に関わろうと決めていた。イクスが望んだベルカの青空を、次に目覚めたイクスに見せてあげたい。その想いがあった、アリスは進んで戦いの道へと赴いた。



それでも戦乱の赤い雲は晴れない。背後に八雲紫がいるのかもしれない。姿は見せないが、時々そう思うような出来事がある。また、二刀流の女剣士が出る、と風の噂でも知った。おそらく魂魄妖夢だろう。彼女の洗脳もどうにか解きたい。

「せめてフラン達がベルカに留まってくれたら良かったのだけれど……」

「フラン様もこの様も他世界へと行かれましたからね……」

フランは理由を言わなかった。おそらく原作に介入するかどうかで悩んでいるのだろう。原作で覚えがない世界へと飛び立った。

秦こころは腐れ縁だからと言ってフランに付いていった。

この二人に再開できる日は来るのだろうか。

いや、きつとまた会えるだろう。アリスは確信していた。

「この世界が平和になったら、二人を探して、招待するのでもいいかもしれないわね」

いい考えです、と水銀燈が微笑む。

アリスは窓の外を見た。赤い空は晴れる様子がない。それでも、人々の努力があれば、やってやれないこともないだろう。そう思うのだった。

## エピソードグ 八雲紫

ガレアは滅んだ。短い期間繁栄して、花火のように散った。まるでベルカ世界の終焉を予期するかのように。

原作通り、という言葉があるが、正しくそのとおりにことが運ぶだろう。それは未来の決定事項だからだ。神はそうのように世界を創った。過去も未来も。

私達が自由にできるのは、現在だけ。私は現在という名の自由度をもつて、神に反逆する者だ。

名前は、八雲紫。前世の名は捨てた。

~~~~~

八雲紫は同志を探していた。まだ出会っていない転生者は一人。数は少ないが、他の転生者と同じく、有能な能力を持っていることは、八雲紫には分かっていた。

それに、転生者にこだわる必要もなかった。原作に出ている人物を仲間に加えてもいい。原作に出ていない優秀な人物も大勢いるだろう。八雲紫にはそれを調べる方法があった。

転生特典”異世界黙示録”。

この転生特典さえあれば、神を殺すことなど、造作もない。

「紫様」

八雲紫を呼び止めるのは、金色のふさふさした尻尾を振りまく使い魔、八雲藍。同じ東方のキャラクターの名前を宿しているのは、八雲

紫がただそう名付けただけで、転生者ではない。八雲紫の使い魔だ。「どうしたの藍？」

八雲紫が振り向いて尋ねる。ここは隙間、世界の境界に位置する場所。原作『魔法少女リリカルなのは』では次元航行船が移動する空間だ。色や模様はない、目視では何もとらえることができない空間。アニメでは、油のような色合いが移っていたが、今この場は『東方project』でいうところの八雲紫の空間、隙間の目がずらりと並んでいる。

「魂魄妖夢がまた勝手に飛び出しました」「そう」

魂魄妖夢は神滅剣の洗脳にかかっている。洗脳と言っても、正しくは洗脳と少し違う。自我を抑えつけることで、神滅剣の話す言葉に耳を傾けてしまう、ただそれだけ。それも個人差や状況によって洗脳の強弱が変わる。まったくもって融通の利かない能力だ。

魂魄妖夢の自我はほとんど沈んでいるはずだが、残っている自我が抵抗を見せ、時々八雲紫の思惑とは違う動きをする。それでも、大きな目線に立てば、些細な行動なので特別な行動は起こさない。

「妖夢は放っておきなさい。どうせ戻ってくるでしょう」

八雲藍は、傳く。それよりも、と八雲紫は八雲藍を見る。

「もう一人の転生者は見つからないのかしら？」

「も、申し訳ありません」

「まあ、手掛かりは異世界黙示録くらいしかないし、仕方ないわね」

八雲紫の転生特典異世界黙示録も弱点がある。現在のことは一切わからないのだ。原作ではそんな設定がなかったと思うのだが、この世界で適用されたゆえなのか、使い勝手があまりよろしくない。

「まあ、いいわ。藍、下がりなさい」

八雲藍は傳いで、消える。八雲紫は手に持っていた扇子で隙間を作り出す。外の世界が見える。そこには、七色の魔女がドールたちに囲まれている姿があった。

「さて、この娘はどのように踊ってくれるのかしら」

愉しみね、と八雲紫は笑う。

第一章第八節 古代ベルカーベルカ滅亡篇 ―上― プロローグ 聖王同盟

聖王家に赴いたアリスは眉をひそめた。話が違う、と。

「こちらがわざわざ来た理由は、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトを護衛するためです。それは先月から話を通していたはずですが………もう出発した？」

聖王家側の外交官は止まらない汗を拭きながら謝るだけで、何の解決策も提示しなかった。

こいつに言っても仕方ない、とアリスは殺気を引つ込める。外交官が荒い息をする。少しやりすぎたか、と思い、首を振る。

下っ端では話ができない。

「あなたの上司は？ 上司を呼んでください」

「本当にすみませんが、ここはどうか！ おかえりいただけられないでしょうか！」

頭を下げる外交官。疲れがのぞく表情で言われると、アリスはひかざるを得なかった。

聖王連合の国々は聖王家を盟主とした同盟関係の下、成り立っている。それがどうだ。聖王家は他の国を下に見すぎている。アリスはそんな感想を抱かざるを得なかった。

アリスは、王宮の廊下を歩く。ちよつと荒々しいかもしれないが、これ以上舐められてはシュトウラ王国の国益が減る。

《雪華綺晶、聞こえるかしら？》

念話で雪華綺晶に繋ぐ。すぐに返答があつた。

《どうかされましたか？》

《そつちにオリヴィエが向かったわ》

事の顛末を話して、オリヴィエを出迎える準備をするように命じた。雪華綺晶は他の薔薇乙女ローゼンメイデンに伝えると言ってチャンネルを切った。雪華綺晶は、一度リンカーコアを砕かれている。奇跡的に直ったとはいえ、性格が変わってしまった。どちらかと言うと、狂気に満ちている。

それでも遠距離通信の際には雪華綺晶を頼らざるを得ない。雪華綺晶は精神体となって、人間の集合無意識へとアクセスができる。そうやって遠距離でも会話ができるのは、雪華綺晶だけだ。本体はシュトゥラにある。

もう一人、リンカーコアを破壊された雛苺は臆病な性格になった。いつも部屋に籠もるようになり、出るときも姉妹の誰かがいないとパニックを起こす。

違う方向に思考が逸れたので、聖王家の態度を思い出す。考えないといけないことが多い。

聖王連合は、5年前に結成された。シュトゥラやダーリユグリーン家も同盟している。イクスが眠ってから千年は過ぎた。情勢も大きく変わった。

まさか敵対していた聖王家と同盟するとは思わなかった、とはアリスの口癖である。千年も経っていて、姿容姿が変わらないアリスをベルカ世界では、魔女、と呼んだ。

原作では、この聖王連合が戦争を終わらせる。それはベルカ世界崩壊を伴って。

アリスはそれを止めたい。その一助として、オリヴィエという少女をシュトゥラに呼んだのだし、聖王家とのパイプも作ったのだ。

それがどうして、あんな仕打ちになったのか、わからない。

アリスは外へ出て、空を見上げる。

空は相変わらず赤色の雲に覆われていた。

イクスの願いをいつ叶えることができるのだろうか。